山手樹一郎長編時代小説全集＝66

放れ鷹日記

他二編

春陽堂

山手樹一郎長編時代小説全集＝66

放れ鷹日記

他二編

春陽堂

作品案内

文芸評論家　石井富士弥

常識の世界では考えられないようなどんなことでも、小説でなら実現できる。例えば、厳重な看視に守られた雲の上の御殿の中へ、もっとも下っ端の人間を潜り込ませることも作者の腕次第。江戸時代、高貴な方の病気は、直接肌にはふれられず、糸をひいて恭しく診察したくらいだが、それさえもその柔肌を堂々ともみ療治させてしまうこともまた不可能ではない。

というわけで、ここに主君の姉君、上州高崎藩に再婚しながら、その夫にまで死別された薄幸のお美世の方を、お家安泰のため毒殺せよという非情な密命をおびた骨接ぎが特技で、お人よしの軽輩侍峰村鷹之助、あるまじきことにこの奥方と恋におちいる。この辺りの山手版『春琴抄』ともいうべき濃密な愛欲の激しさが圧巻だが、この不倫な関係も常に心優しく大衆の心を代弁する作者は、もの悲しくも奥方の死によって償わせ、江戸娘お光の登場で明るく鷹之助を更生させる。

これに、芸者小妻をめぐって小気味よい江戸巷談にまとめた一品料理編「紫忠兵衛」を収併！

放れ鷹日記　他二編

山手樹一郎長編時代小説全集＝66

春陽堂

春陽堂●430円
0193-200466-3066

放れ鷹日記 他一編

山手樹一郎長編時代小説全集 66

春陽堂

放れ鷹日記 他一編
山手樹一郎長編時代小説全集 66
春陽堂

放れ鷹日記

他二編

山手樹一郎長編時代小説全集

66

春陽堂

●編集／解説
尾崎秀樹

●巻末付録執筆者
井口朝生
一条明
伊藤文八郎
風巻紘一
木屋進
郡順史
多勢尚一郎
竹村篤
中村豊秀
永岡慶之助
*松永義弘
水野泰治
*本巻執筆者

目次

放れ鷹（だか）日記……一
紫忠兵衛……二七

放れ鷹（だか）日記

宿命の日の記

1

峰村鷹之助には鳶というあだながあった。柄が大きくて童顔で、人がよくてのっそりしていて、およそ鷹が持っているような鋭いところはどこにもない。鳶之助でたくさんだというところからきているのだろう。

もう一つは、彼は古河の土肥家の家来で、三十石二人扶持徒士組に属する微禄者峰村平左衛門のせがれに生まれ、主君には無論のこと、重役たちに対しても直接に口はきけない身分だし、途中で家中の上級武士に出会った場合は、正式には土下座をしなければならない。そんな軽輩の分際で、鷹之助などという名前をつけるのは分にすぎると、上士の子弟たちの間には反感さえ持っている者もあった。

他人の名前に反感を持つなぞということはずいぶんお節介な話だが、鷹之助の場合には多少理由があるにはあったようだ。

亡父の平左衛門は温厚な人柄だったが、頭の働きは相当鋭いほうで、よく先の見える人だった。その点、鷹之助はいまだに亡父を尊敬し、誇りに思っている。

平左衛門は、今日の時勢では、微禄者はどうあせってみたところで生涯微禄者からうかびあがることはまず不可能なことだと若いころすでに見ぬいていて、江戸勤番の三年間、同輩たちはそれぞれ武術や学問の修業から、中には道楽修業にまで走る者さえあったが、亡父はひそかに両国の名倉へ入門して骨つぎの修業をした。

これは人助けにもなることだし、微禄者はなにか内職でもしなければ俸禄だけではほとんど生活がなり立たない。貧はいちばん人間を卑屈

にするという考えから、そんなことを思いついたというのである。

だから、国へかえってからの平左衛門は、城下町の人々から骨つぎの先生と呼ばれるようになり、それだけの手腕もあったのだろうが、その温厚な人柄を敬慕されて、いつか多少の蓄財さえできるようになった。

しかも、一度左のひじがひどく脱臼して苦しんでいるのを根気よく治療してやったのが縁となって、奥仕えの中臈高枝を身分違いではあったが妻にむかえ、鷹之助という子供まで得た。鷹は母の名の高に音が通じるので、父が一も二もなくつけてくれた名なのである。

しかし、平左衛門のそういう幸運は、いわば骨つぎという特殊技能から生じてきているので、家中の狭量な俗人たちからはかなり白眼視されていたのも事実だった。

その一面、心ある人たちは、その幸運が必ずしも骨つぎという内職からきているものではなく、平左衛門の重厚な人柄によるものだとして、父を高く買ってくれる者もまたすくなくはなかったようである。

父の組頭役で百五十石取りの吉川伝右衛門は、特に父の識見才腕を信頼して、一生親友の交わりを結んだ一人だった。その深い交遊の裏には、公私ともに父の進言を大いに徳としたことが何度もあったらしく、伝右衛門は娘の初枝をぜひ鷹之助とめあわせようと自分から望んで、初枝が八歳、鷹之助が十三のとき許婚の約束を結んだほどだった。

その父平左衛門は、鷹之助が二十の時、まだこれからという年の四十五歳であっけなく病没した。日ごろあまり健康でなかったおなじ年の母の高枝は、父を失ってからすっかり気おちして、半年足らずで父のあとを追っていった。

そのころからおなじ年ごろの若侍たちの鷹之助に対する風当たりが急に強くなり出したのである。つまり、父平左衛門に対する妙な反感が

せがれへ代がわりをしたことになるのだろう。

鷹之助はずっと父の内職の助手をつとめていたから、もう一人前の骨つぎの若先生になっていたし、考えてみると、組頭役の娘を嫁にするという幸運に恵まれてもいる。しかも、その初枝は今年十五になって、ひどく美人になる相がはっきりとそなわってきた。人に羨望される条件は、亡父なみに持っていたわけなのである。

——まあ遠慮なくいくらでもうらやましがってくれ。

鷹之助は人の陰口や悪口など少しも気にならなかった。むしろ、あいついで父と母を失った打撃のほうがはるかに深刻で大きかった。

幸い、当時江戸の蘭方の大家といわれていた戸村蘭石が、古河へ三年の約束で招聘されてきて、家中の子弟に蘭学の講義をさずけるかたわら、医師として城下町の病家を引きうけ、親しく診療にもあたってくれることとなった。

鷹之助は別に医者になるつもりはないが、両親を失った悲嘆を新しい知識欲でまぎらせてやろうと思い立ち、自分から蘭石の学僕を買って出て、はじめて西洋流の学問というものに触れてみた。

それは、医術にしても、天文地文殖産のことにしても、まったくすばらしい新知識の世界で、鷹之助の若い血はたちまちこれに熱中して、しばらく我をさえ忘れていた。そして、この戸村蘭石によって鷹之助の魂は大きく啓発され、人間としてもかなり成長してきたのである。

伝右衛門はそういう鷹之助の若い情熱を非常に愛し、来年は初枝も十六になるし、ぜひ両親の一周忌がすんだら祝言の式をあげさせようと、鷹之助にもいい、自分もそれをたのしみにしているようだった。

が、その翌年の秋、伝右衛門は惜しくも中風で倒れ、初枝との祝言はそのまま翌年に余儀なく延期されることになった。

そして、初枝が十七、鷹之助が二十二の夏、伝右衛門はついに死去したので、祝言はまた翌年に持ち越されることになった。

鷹之助は、初枝はもう自分の妻ときまっているのだから、祝言はそういそぐこともなかろうと、その点は至極のんきにかまえていた。その年、戸村蘭石は約束の三年がすぎたので江戸へ帰り、鷹之助の蘭学はいささか中途半端になりはしたが、それだけに後は独学の腹をきめていたし、内職の骨つぎのほうもあいかわらずいそがしいので、世事には自然うとくなるきらいがあるにはあった。

加うるに初枝の美貌はようやく娘盛りを迎えて、家中のうわさの的になってきたので、

「鷹さん、おもしろくないうわさがある。吉川の伝之助はこのごろしきりに前岡重役のせがれと意気投合しているっていうぜ」

従弟の杉田源吉がわざわざそう注意してくれたのもそのころのことだった。

伝之助は初枝の兄で、父の没後百五十石徒士組頭吉川の家督を無事についでいたが、かなり才気走ったところがあり、腕自慢で、前から骨つぎの鷹之助をよろこばない風がないではなかった。

それが古河でも名門の重役前岡頼母のせがれ英之進に取り入っているというのは、無論、他日なにかにつけて手を引っぱってもらおうという野心があるからで、そのこと自体は多少とも出世欲のある人間の世渡りとしてだれしも心がけることだから、そう非難さるべきことではないと思う。

それを源吉がわざわざ耳に入れてくれたのは、英之進は初枝の美貌をねらっているぞという意味が含まれているのだろう。

が、初枝が鷹之助の嫁になるということはもう家中に知れわたっている事実なのだし、それを理由なくして破棄したうえ前岡家と縁を結ぶようなことがあれば、もらった前岡家も、やった吉川家も武士にあるまじき行為として一蒲か

らもののわらいにされる。到底常識では考えられないことなので、

「ありがとう。しかし、祝言は来年の秋とちゃんときまっているんだから、まさか吉川だって変なまねはできないだろう」

と、鷹之助はあまり気にもしなかった。

だいいち、たとえ兄の伝之助がどう考えたところで、初枝が承知しないはずだと、鷹之助は安心していたのである。

そして、その翌年の夏、やがて伝右衛門の一周忌が近くなったころ、こんどは吉川家の親戚の者が仲に立って、

「親の喪は三年が正式なので、どうせここまでのびのびになってしまったのだから、いっそ三回忌がすんでからにしたいと初枝がいい出したんだが、どんなもんだろうな」

という話を持ってきた。

「初枝さんの希望なら、わしのほうはそれでもかまいません」

親の喪のことだから、それは困るということもできないのだ。

「実は、娘というものは妙なことを気にするもんでな、そんなことをいって、おまえ、来年は女の厄年になるぞとわしがいうと、それはかまわない、それより、はじめは峰村の親どもの喪で祝言がのびた、こんどはこっちの父親の喪でのばしている、二度あることは三度というし、こっちにはまだ母親もいることだから、三度目を今のうちにのばしておかないと、もし母親になにかあってはいやだと、急にそんなことをいい出してな」

そういうわけを聞いてみると、相手は娘のことだからああそうかと鷹之助にもすなおにうなずける。

それに、なんとなく不幸につきまとわれているような祝言なので、無理はしないほうがいいという気もした。

こうして二人の祝言はまた一年のびて、その年も暮れ、鷹之助が二十四、初枝が十九の春をむかえた。

その正月早々、松がとれてまもなく、鷹之助にとって思いもかけない運命の日がおとずれたのである。

2

その夜、鷹之助は目付役佐藤喜兵衛から、至急屋敷のほうへ出向くようにという中間のむかえをうけた。

目付役は藩士の落ち度をさがして糺明するのが役目だから、このふいの呼び出しはあまり気持ちがよくない。が、鷹之助は品行方正のほうで、別にしかられるような落ち度はしていないはずだから、何事だろうと不審に思いながら、さっそく目付役の私宅へ出向いてみた。

客間へ案内されると、それを待ちかねていたように老体の喜兵衛が出てきて、

「夜中御苦労だったな」

と、自分のほうから声をかけてくれた。

「お呼び出しにより、さっそく参上いたしました。どういう御用でございましょうか」

「実は、今日、江戸の上屋敷から峰村鷹之助を火急に出府させるようにという密命がとどいた。気の毒だが、明朝早々に立って、江戸へ急行してくれ」

「明朝でございますか」

あまりにも足もとから鳥が立つような話なので、鷹之助はぼかんとして、もう一度聞きかえしてみる。

「うむ、明朝だ。無論、密命だから家人にも行く先は口外してはならん」

「上屋敷へまいればよろしいのですね」

「そうだ。着いたら江戸家老瀬川将監さまの私宅へその旨をすぐ報告させろと申してきている」

「委細かしこまりましてございます」

藩命ではとにかく承知するほかはない。

「心得のために、なにかうけたまわっておけることはございませんでしょうか」
「それは、江戸へ出てからの用件のことか」
「はい」
「およその見当でもついていれば、日ごろ実直なおまえのことだから教えておいてやりたい。が、正直なところ、わしにも皆目見当がつかぬ」
老目付役はちらっと気の毒そうな顔をするのだ。本当に見当がつかないらしい。
「しかしな、鷹之助、江戸、国かけて多くの家来たちの中から、とにかくおまえをというお名ざしなのだ。そのめがねにかなったことだけは、侍の面目だと考えてさしつかえないと思う。何事もお家のためだ。まあひとつ働いてみてくれ」
「よくあいわかりました。それでは、明朝出立いたします」
「それがよい。十分体に気をつけてな」
鷹之助は目付役の屋敷を辞して表へ出た。十日ばかりの月が鋭く凍てついたような寒い晩である。
密命というからには、どうも危険がともなう仕事のような気がしてくる。すると、明日江戸へ立てば当分国へは帰れないのではあるまいか。鷹之助の気持ちはなんとなく沈んできた。
——今年の祝言が、また来年にのびるようなことになるんじゃないかな。
そんな予感がしてきてしようがない。
組屋敷の柵門を入ると、正面に組頭吉川の屋敷があって、その左右に五軒一棟の徒士長屋が縦に二側ずつ並んでいる。鷹之助の家は左の二側目の角になっていた。
吉川の門の前を通る時、寄って一目初枝に会い、それとなく別れを告げていこうかと思いつき、急に胸が甘くうずき出したが、思いかえしてそのまま門前を通りすぎてしまった。
たとえ会ってみたところで、明日のことは一切口外を禁じられているのだし、伝右衛門の存生中はよく招かれて、親戚同様に行き来をしていた屋敷だが、せがれの伝之助の代になってからは当主があまりいい顔をしないので、用でもないかぎり自然足が遠のいていた。夜中ふいにたずねていって、おばさまと呼んでいる未亡人のほうはまあいいとしても、仲に立って初枝が余計な気をもむようではかわいそうだと、つい気が重くなってしまったのである。
それに、江戸の御用というのも、こっちが取越苦労をするほど重大なことではなく、案外四、五日で帰ってこられるかもしれないじゃないかと、そんな気もしたのだ。が、その一方では、胸の中で、
「初枝さん、おれが帰ってくるまで無事でいてくれよなあ」
と、ちゃんと別れのあいさつをしている。
初枝をわが妻と心に植えつけられてからすでに十年あまりになる。しかも、いま初枝はその兄がこの祝言をなんとなくよろこんでいないという苦しい立場に立っているのだ。正直にいって、鷹之助は未練などというなまやさしい気持ちではなく、その夜は切ないほどつらい寂しい感傷に胸が痛まずにはいられなかった。
こうして、とうとう吉川の門はたたかなかったが、人間には万一ということがあるから、留守宅の始末だけはつけておかなくてはならない。家には母が峰村へ嫁にくる時ついてきた勝という老婢と、定造という若い下男がいる。
鷹之助は右の一側目のお長屋の五軒目に住んでいる従弟の杉田源吉をたずね、この男にはかくす必要もないから、今夜のことを一通り打ちあけて、万一の場合は勝と定造のことをたのむと、ただ一言それだけをたのんでおいた。それで一切の意味が通じる仲なのである。
「そうか、承知した。後のことは心配しないで、とにかく行ってくるがいい」
口外してはならないことを口外しているのだから、別れの酒を一献くみかわすなどというのんきなことはしていられない。話は二人だけの

問の密談で、妻女には別れのあいさつさえひかえて、鷹之助は早々に家へ帰ってきた。

ばあやにも下男にも、明日早立ちをしてちょっと江戸へ行ってくると告げただけで、無論くわしいことはなにもいわなかった。

「おれ、お供をしなくていいんかね」

若い定造はそれを聞いて、それには及ばないんだというと、そうかねといってそれですんだが、生まれた時からそばにいておしめの世話までしてきた老婢の勝は、こっちの顔色や様子でただの旅ではないことがなんとなくわかってしまうのだろう。

「若だんな、こんどはぜひこれを身につけていってくださいね」

翌朝立ちがけに、仏壇の中から母の形身の守り袋を出してきてわたした。

この中には、守り札ほどの赤銅の板に精巧な金の観世音像がはめこんであり、裏に細字で観音経が刻んであるなかなか豪華な逸品で、母が御殿をさがる時、奥方さまからちょうだいして、ずっと身につけていたといういわくつきの守り袋なのである。

鷹之助も母の没後しばらくそれを肌守りにしていたが、戸村について蘭学をはじめてから、迷信は学問のじゃまだという戸村の説を聞き、それ以来黙って仏壇の中へかくしておいたのだ。勝はちゃんとそれを知っていたらしい。

「そうだったな、おふくろさまについていってもらえば安心だからな」

鷹之助はすなおにそれをうけとって、胴巻きの中へしまった。お中﨟さまだった母は、子供心にも美しいなあと思ったことが何度もある。そういう母の姿をその時ちらっとまぶたにおもいうかべて、

「ばあや、いつまでも長生きをしてくれなくちゃ困るぜ」

と、ついそんな言葉になって出た。

「長生きしますとも。ばあやは若だんなの赤ちゃんを見ないうちは死にやしません」

初枝の祝言がのびのびになっているのをいちばん気にしているのは勝だったのだ。

「よし、来年はぜひお嫁さんに赤ん坊を産んでもらうことにしよう」

「そのつもりで、若だんな、御用がすんだら早く帰ってきてくださいよ」

「心配するな、飛んで帰ってくる」

なにを考えていたのか、勝はそっと涙をふいていた。

鷹之助は定造が用意してくれた小田原ぢょうちんをさげて組屋敷を出発した。いやでも吉川の家の前を通る。まだ七ツ（四時）前だから、さえかえる暁の星空の下にどこもしいんと寝しずまっていた。

——行ってくるよ、初枝さん。

すでに運命の旅へ男の第一歩を踏み出しているのだから、そこにはもう昨夜のような感傷はなかった。あるのは、早く無事に役目を果たして初枝を安心させてやろうという若々しい希望と、強い愛情だけだった。

古河から江戸へは十六里あまり、普通の道中なら今日は八里歩いて粕壁泊まりでいいのだが、こんどはそうはいかない。七ツ立ちにして急行すれば、おそくも今夜初更のころには西ノ丸下の上屋敷へ入れるのである。

「鷹さん——」

城下町へ出ると、ふいにそこの物陰からわらじがけの源吉が声をかけて肩をならべてきた。

「どうしたんだ。どこへ行くんだ、源さん」

「なあに、中田まで送っていこうと思ってね」

「すまんなあ、この寒いのにわざわざ」

源吉はそれっきり城下町を出外れるまでほとんど口数はきかなかった。その体つきにどこか緊張したものを感じる。

おかしいなあと鷹之助は思った。

3

「鷹さん、蘭学つまり西洋流の学問の考え方は、物をもととして理をきわめあるいは組み立てていくから、世の中にふしぎというものはない、たしかそういう理屈だったな」

源吉がいきなりそんな風に切り出してきたのは、やがて城下町を出外れてからであった。

「まあそういうことになる」

「早い話が、火のないところに煙はたたぬで、煙が立ったところには必ず火のもとがあるわけだな」

「そのとおりだ」

「その筆法でいくとだな、いま鷹さんが密命をうけて古河を立ってきた事実を煙とすれば、そのもとに必ず火があるわけだろう」

「それは無論ある。この火のもとは江戸だ」

「いや、そいつは少し遠すぎる。火のもとは古河にあるんだ」

「どうして――」

「今日は西洋流の学問の考え方でずばりと物で割り切っていくからな、そのつもりで聞いてくれ」

「よし、聞こう」

「ゆうべ鷹さんの話を聞いてから、おれはすぐ城下町へ出かけてみたんだ。いいかね。すると、案の定、いつもの料亭で、前岡の英と吉川の伝がいっしょに一杯やっていた」

「なるほど」

「鷹さんは吉川の初枝さんと、去年の秋、祝言をするはずだった。その前に両方の喪がかさなって一年ずつのびたのは、親の喪だからしようがない。その一周忌がすんだ去年、親の喪は三年が正式だから三回忌までのばしてくれというのは、だれが聞いたってこの祝言を実現させたくない口実としか考えられない。すでに二年ものびている祝言なんだから、当人はもとより親兄弟だって一日も早く祝言をすませて安心したいのが人情というものなんだ」

「伝之助さんにそういう気持ちのあるのは、わしにもわかっている」

「しかし、こんどの延期は初枝さんの希望なんだろう」

「兄は自分の希望を妹に押しつけることができやしないか、源さん」

「娘に愛情があれば、その愛情は違った形でも男に通じてくるはずだ。娘の愛情を火とすれば、煙が立たないはずはないじゃないか」

「よし、それで――」

「日本流の考え方では、許婚の約束は理由なくて取り消すわけにはいかない。しかし、相手方がいなくなってしまえば、これは自然消滅だからな」

「そう考えるのは少し考えすぎじゃないかね」

「うむ、おれはたしかに多少悪意にとりすぎていた点はある。英之進はよく吉川の家へ出入りしているし、その目的もわかっている。どうしても鷹さんがじゃまなんだとおれは見ていた。そこへゆうべの話なんで、城下町をさぐってみると、英の字と伝の字が落ちあっている。ひょっとすると今朝があぶないとまで勘ぐったんだ。鷹さんがけがをして江戸へ行けなくなっただけでも、許婚の約束を取り消す理由は楽にこしらえられるからな」

「なんだ、源さんはそれで今朝わざわざ見送りに出てきてくれたのか」

その情義だけは、さすがにじいんと胸へこたえるものがある。

「しかし、こいつは少しおれの考えすぎだったようだ」

源吉は苦わらいをしながら、

「すると、俗っぽいおれ流の考え方でいくと、江戸の密命というのは、たぶん鷹さんが当分古河へ帰れない仕事なんだろう。ひょっとすると命がけという仕事かもしれない。それだけは、鷹さん、覚悟していってくれ」

と、きっぱりいいきる。
「ありがとう。それはもうちゃんと覚悟してきているんだ」
「いいか、鷹さん、負けちゃいけねえぜ。たとえどんなことがあっても、死んじゃいけねえ。許婚を踏みにじられて、命まで落とすなんてな あ、あんまりこけすぎる。鷹さんは少し人のよすぎるところがあるから、おれははっきりいっておきたかったんだ。こんなばからしいことで死んじゃいけねえ。きっと生きていてくれよな、鷹さん。古河にばかり日は照りゃあしねえ」
「ありがとう、よくわかった。おれは死にやしない。まあ見ていてくれ」
鷹之助は思わず目頭が熱くなってきた。
古河から中田へ一里半、源吉は房川戸の渡しまで送ってきて、鷹之助が明け六ツ（六時）の一番舟に乗りこむのを見とどけてから古河へ引きかえしていった。
——初枝まで本当にそんな気持ちでいるんだろうか。
一人になってから鷹之助は何度も考えてみた。源吉の誠意は胸に痛いほどよくわかるが、初枝のことだけはどうも思いすごしのような気がしてしようがない。
そういえば、こんどの江戸の密命を英之進や伝之助の策動だと見るのも、少しふにおちないところがある。前岡は重役のせがれにちがいはないが、まだ江戸の御用部屋を動かすほどの力はないはずだ。
——源吉はわしを気の毒だと思うあまり、つい独断に走りすぎるんじゃないかな。
しかし、源吉が指摘していたように、親の三回忌を口実にしてもう一年祝言を延期した事実、英之進がよく吉川の家へ入りこんでいることは人のうわさにもなっていることだし、そこに何か割り切れないものはたしかにあるにはある。
ことに、女の愛情という火のもとがあれば、その火は必ず煙を立てないはずはないという源

吉の言葉は、それをただ娘のつつましさだとばかり取っていたこっちのうかつさを鋭くついているような気もしてくる。
そして、鷹之助は思った。迷い出してはきりがない。一切は事実で割り切っていくほかはないのだ。まず当面の江戸の用から片づける。その上で、初枝の気持ちは初枝に直接聞いて始末をつける、今ここでいたずらに迷っているのは愚だと気づいたのである。
その夜、予定どおり宵の口に西ノ丸下の上屋敷へ入った鷹之助は、老目付役にいわれてきたとおり、ただちに江戸家老瀬川将監の私宅の玄関先へ行って、ただいま到着のあいさつをした。
一度奥へ入った取り次ぎの小侍はまもなく玄関へ引きかえしてきて、
「御苦労です。明朝四ツ（十時）までに、そのままの姿で、徒士組頭山浦孫兵衛どののお宅へ出向くようとのことでございます」
と、家老の言葉を伝える。
鷹之助は自分を白紙にして、とにかくいいつけられたとおりにすることにした。いくら考えてもわからないことをあれこれと思い迷ってみたところで芯が疲れるばかりだと、度胸をすえてしまったのだ。
翌朝、昨日の旅支度のまま山浦家の玄関をたずねると、
「おお、来たか。わしについてきなさい。むだ口は一切きいてはならんぞ」
孫兵衛はそう念を押してから、先に立って表玄関のほうへ案内していく。
玄関の間のわきに徒士組が詰めているたまりの間がある。そこへ行くのかと思っていると、そっちへはあがらずに、玄関わきの木戸を入って庭のほうへまわっていくようだ。
無論、口どめをされているから、どこへ行くのですかと聞くわけにはいかない。
やがて、つれていかれたのは、中奥の庭の梅林の中にある四阿だった。ここの梅はもう三分

ほど花を開いている。
「ここで待っていてくれ」
孫兵衛はそこから引きかえしていった。
それにしても、えらいところへ引っぱりこまれたものだと思う。徒士組は屋敷の警衛を受け持っているから、夜は役目でここまでまわってくることはあるが、ふだんはめったに入れない庭なのである。
——さあ、なんとでもしてくれ。おれは金輪際驚かねえことにしているんだ。
腹の中でそんな啖呵をきりながら、しかし、こう意外なことばかりつづくと、鷹之助は妙に自分が自分でなくなってくるようなおかしな気持ちである。
風のないおだやかな日で、どこかでうぐいすが鳴いていた。
まもなく江戸家老瀬川将監がゆっくりと一人で四阿へ近づいてきた。五十年配の下ぶくれのした血色のいい温顔だが、その実、才気縦横の怖い政治家だといわれている人物なのである。
鷹之助がそこへひざまずいておじぎをしながら迎えていると、
「もうよい、まあそこへ掛けなさい」
将監は鷹揚にそういって床几にかけ、卓の向こうを指さしてみせる。
身分からいえばそんな対等の席へつける柄ではないのだが、
「それではお言葉に甘えまして」
と、今日は特別なお呼び出しなのだから、鷹之助は遠慮をしないことにした。

4

「そちが平左衛門のせがれ峰村鷹之助か」
「はい」
「そちも骨つぎができるのか」
「見ようまねようでございます」
「戸村蘭石にしばらくついたそうだが、蘭方はどうだな」
「ほんの初歩でございます」
「すると、医者もできるにはできるのだな」
「骨つぎのついでによく相談をうけることがあるものですから」
「そうか、なるほどそうだろうな」
家老の目にちらっと微笑がうかぶ。
相手がものやわらかで、頭から威圧するというような風は少しもないので、話しているうちに鷹之助はそう身分の差を感じなくなってきた。
大体、鷹之助は日ごろ骨つぎで多くの人に接しているし、その時はこっちが先生なのだから、そんなに人おじをしない習慣が身についているのだ。
「実はな、鷹之助、こんどぜひそちに診断をしてきてもらいたい患家があってな」
将監がさりげなく切り出してきた。
来たなと思ったから、鷹之助は用心して無言で後の言葉を待つ。
「これは殿さまの御意から出た、特にその方にという大切な役目である」
将監は言葉を切って、じっと鷹之助の顔を見る。
殿さまが国もとの軽輩の名などいちいちおぼえているはずはないから、特にその方にというのは家老の舌刀だろうが、主命とあっては事の善悪にかかわらず絶対に引きうけなければならないのが侍の約束になっているのだ。
「大切なお役目にお見出しにあずかり、身にすぎたる面目にございます」
鷹之助が慎んで頭をさげると、家老はそれを待っていたように軽くうなずいて、
「さすがに平左衛門のせがれだな」
と、亡父の名を口にした。
すると、家老は亡父平左衛門の人柄を知っていたことになる。本当だろうかと、鷹之助は思わずひそかに目をみはった。
「患家はな、上州高崎だ。そう申したら、なに

「うむ、河内守さまは高崎で亡くなられた。お美世の方さまは前のお方にも死別されているので、虫が知らせたとでもいうか、河内守さまの御発病を非常に心配されてな、わざわざ江戸から高崎まで御看護に出向かれていたのだ。そのかいもなく河内守さまに先立たれてしまったので、御悲嘆も大きい。三回忌がすむまで当地で回向がしたいからという御希望で、ずっと高崎にとどまっていられる。まあ、下世話にいう後家性とでもいうのかな」

「なにかお美世の方さまがお体でも悪くされたのでしょうか」

「そちを内密にここへ呼んだのはそのことだ。そのつもりで、歯に衣をきせずにいうから、しかと聞いてくれ、よいな」

「はい」

「お美世さまは切り下げ髪になられてから、いよいよお美しいそうだ。高崎は当家とおなじで、毎年八月においとまになり、十二月に参覲され

か思いあたることがあるだろう、鷹之助」

「はあ」

至極あいまいな返事になったのは、別に思いあたることはなにもないからだ。

「お美世の方さまはよほど不運なお生まれとみえてな、殿さまにはお姉上のことだけにたいそう御心痛なされておられる」

家老の顔色が急に暗くなってきた。

あっと鷹之助は思い出した。

当主の姉に当たるお美世の方は、四年前に二十五で上州高崎の藩主松井家へ再婚している。初婚の人に二十のとき死別して、それからずっと里方へ出もどりになっていたのだが、非常に美人だったので、先方から懇望されて再婚されたのだ。

その二度目の夫にも縁が薄く、明けておとし二十七の夏、死別しているのである。

「お美世の方さまはいま高崎にお暮らしなのでございますか」

る。新当主新六郎さまは先君の御舎弟で、去年の八月はじめて国入りをされた。つまり、お美世さまは兄嫁ということになるのだが、新当主はその兄嫁の美貌に心ひかれて、その執心の度がだんだん激しくなる。煩悩というやつは怖いものだ。しかも、相手は後家だしな、新六郎さまは度々お美世さまの別邸へふいに押しかけていって、しまいには手ごめにもしかねない煩悩ぶりを見せる。お美世さまはせめて三回忌がすむまではと、それを口実にしてなんとか今年は、いや、明けて去年は身をまもってきた。しかし、今年八月のおいとまで高崎にいては、口実にした先君の三回忌もすむことだし、どうされてしまうかわからない。なんとか考えてくれるようにと、乳母のお以勢から先日密使がまいってな、それが殿さまの御心痛の種になったわけだ」

「こちらへお方さまをお引き取りになる、そういうわけにはいかないのでしょうか」

「それはだめなようだ。お美世さまは別邸へ監禁同様にされているらしい。つまり、御当主のいいつけで別邸は厳重に監視されているということだ」

「なるほど――」

「当家はそちも知ってのとおり老中が出る名誉の家柄だ。殿さまの御心痛はそこにある。万一、お美世さまの身に不名誉な間違いでもあると、すくなくとも殿さま御一代はその望みがなくなるのだ。わかるか、鷹之助」

「はい」

「先方では、どうしても煩悩をとげようと執心している。絶対に離婚はゆるすまい、いや、先君の墓が高崎にあるのだから、一生高崎で墓守りすべきだと主張されれば、江戸へ帰ることさえできぬことになる。とすれば、お美世さまが煩悩の手をのがれる道はただ一つ、先君の跡を追ってもらうほかはない」

将監はずばりといいきって、冷静そのものの

ような顔をしているのである。
鷹之助はあっと息をのんでしまった。
「一つには、鷹之助、人の体というものは必ずしも心のままにはならぬものだ。あさましいと心では思っても、体のほうが負ける、お美世さまにはその心配はないとは、だれにもいいきれぬことだ。下世話にいえば、お美世さまもやがて三十、三十後家はとおせぬのが普通だ。あいにく女には身ごもるという自然の約束が体にある」
鷹之助はただ目をみはるばかりだ。
「去年はどうにかやっと身をのがれたとはいっても、それはあたりの者が取りつくろっているので、どうにも身をのがれきれなかった事実が一度か二度なかったとはいいきれまい。意地の悪いことをいうようだが、そういうことはなるべく取りつくろっておきたいのが人情なのだ。しかし、事実は取りつくろえても、月重なれば女体はかくしきれぬ。心を鬼にしなければならぬ理由がここにもあるのだ」
「はい」
「率直にいおう。そちの役目は、これから高崎へまいってお美世さまの別邸へまぎれこみ、新六郎さまがこの八月においとま帰国をする前に、御本人にも、あたりの者にも絶対に感づかれないように、お美世さまに眠り薬を一服のませてきてもらいたいのだ」
「眠り薬でございますか」
鷹之助はかっと頭へ血がのぼってくるのが自分でもはっきりとわかった。
「うむ、これだ。この中に入っている」
将監はふところから小さな紙袋を取り出して、無造作に卓の上へおいた。
「それは眠り薬なのでございますな」
鷹之助はまだ手を出そうともせずに、念をおすように聞いた。
「眠り薬だとわしははっきり申している」
家老の顔色は普通で、その声音にも特別なものはなにも感じられない。

「これを服すると苦しむ、さようなことはございませんか」
「そんなことは決してない。そちは蘭方を心得ているのだろう」
「はい、ほんの初歩でございます」
「人間風邪をひけばだれでも薬はのむ。ただ、この薬は、そちの見ているまえで、病人、つまりお美世さまにのませてくれ。眠るところまでは見とどけなくともよいが、のむところはしかと見とどけなければならん」
家老は薬の与えかたまで教えているようだ。
鷹之助は家老の冷静な視線に負けて、思わず目を卓の上の白い紙袋へ逃げている。
たしかに眠り薬でしょうなとは、もう念はおしかねる。また、そんなことは何度聞いてもおなじことなのだ。要するに、この眠り薬は安らかに眠ったまま息が絶える眠り薬で、与える分量によっては、ただある時間を眠るだけですむ、蘭方では手術の場合これを利用して、はたして成功するかどうか目下研究中だと戸村蘭石から聞いたことがある。
眠って痛みをとめることができれば、人間の体を切り開いて病源をとりのぞくことができる。まるで夢のような話だと、そのとき鷹之助はただそれだけのことに聞き流していた。
いま目の前にある眠り薬はそれにちがいないのだ。分量をあやまると死ぬ、その致死の分量を持った眠り薬なのだろう。
この薬袋をうけとればお美世さまを殺さなくてはならない。
しかし、これをことわれば自分がここで切られることになる。
そして、たとえ自分がここで切られてもお美世さまの命は助かるわけではなく、ほかの者にこの役がまわっていくだけの話だ。
鷹之助はじっとりとわきの下へ冷や汗を感じてくる。
将監は別に返事をうながそうともせず、ゆっ

くりと鷹之助が口をひらくのを待っている。
——これはやっぱりたいした人物だ。
鷹之助はすっかり圧倒されてしまったような気持ちで、
「御家老さま、一つだけおうかがいしたいことがございます」
と、必死に顔をあげた。
「なにかな」
「あちらへまいりまして、お美世の方さまにお目にかかり、万一無事に当家へもどられる才覚が手前につきましたら、もう一度ここへ御家老さまに相談をしに帰ってきてもよろしいでしょうか」
その道が絶対にないともいいきれないと鷹之助は思いついたのである。
「うむ、そういう道があればな」
気のせいか将監の目がちらっと輝いたようだ。
「それをおゆるしいただけるのでしたら、鷹之助これよりただちに高崎へ出立いたします」
鷹之助はきっぱりといって、卓の上の薬袋を取り、中をあらためようともせず内ふところの胴巻きの中へおさめた。
その時その胴巻きの中に入れてある母の形見の守り袋に手がふれたのを、鷹之助はちゃんと意識している。
こうして、ついにこれが鷹之助の宿命の日になってしまったのである。

下郎奉公記

1

峰村鷹之助が国もとを立った時の旅装のまま西ノ丸下の主家の上屋敷の門を出たのは、その日の昼少し前の時刻であった。
——こいつ、えらいことになったぞ。
鷹之助はしばらくぼうぜんとして足を運んで

いただけである。考えることがあまりにもたくさんありすぎて、なにから考えていいのか見当がつかない。我ながらすっかり度を失っているのだ。
そのくせ、頭の中は火の車のようにごうっと音を立てて回転しながら、あらゆる思考の断片が稲妻のように明滅していく。
なによりもびっくりしているのは、いきなり主君の顔を見て、その主君から声をかけられたことだ。
家老瀬川将監は鷹之助が使命を納得して、秘薬を胴巻きの中へおさめると、
「中木戸まで見送ってつかわそう」
と、先に立って梅林の四阿を出た。
どこかで鳴いているうぐいすの声を耳にしながら、鷹之助はぼんやり家老のあとからついていった。
将監は梅林の外れに四ツ目垣で囲ってある茶室の庭の外を通りながらふっと立ちどまって、
「殿さま、よいお天気でございます」
と、垣根の中へ小腰をかがめた。
思わず顔をあげてそっちを見ると、そこに一人で立っていた若い主君が、ちょうどこっちを見ている目とぶつかってしまったので、鷹之助はあっとそこへひざまずいていた。
「将監、これが平左衛門のせがれか」
主君は将監に聞く。
「さようでございます」
「母は高枝であったな」
「はい。高枝のうみました鷹之助でございます」
若い主君の口から父の名と母の名が出た。鷹之助は感激せずにはいられない。
「鷹之助、苦しゅうない、面をあげよ」
「はい」
鷹之助は顔をあげて、もう一度主君の目を見あげた。
「この度は大儀である。なにぶんたのみおくぞ」
そういう主君の目に、気のせいか沈んだ深い

色がはっきりと感じられて、
「はい」
鷹之助はまたしても胸を打たれながらおじぎをしていた。
主君はそのまま茶室のほうへもどっていったようである。
「まいろうかな」
将監はゆっくりと中木戸のほうへ歩き出す。
「そちの母の高枝はな、御先代さま奥方のお気に入りであった。いまの御当主さまが生まれてまもなく、お抱き申しあげて奥方さまのお供をした時、あやまって廊下でころんでな、朋輩のだれかにそねまれてわざとすそを踏まれたのだというわさもあったが、とにかくそのとき必死に若君をかばって、左のひじをひどく痛めながらも、幸い若君だけはことなきを得た。この話、母から耳にしたことがあるか」
「いいえ、初耳でございます」
鷹之助にとって今日は意外な話ばかり聞かされる日であった。
「そうか、初耳か。そうかもしれぬな。その時もそちの母はすべてを自分の落ち度にして、だれの名も口にしなかったほどのしっかり者であったからな」
家老は感慨深げにいってから、
「つまり、そのひじの療治にあたったのがちょうど勤番で出府中のそちの父平左衛門で、それが縁となっていっしょになったわけだ。御当主さまは子供のころ母君からその話を度々聞いておられるそうで、今日は特にそちをごらんになりたかったのだろうと思われる」
と、道々話してくれた。
家老の話にそうそがあるとは思われないが、いわゆる君命重からずんば臣これをかろんずの筆法で、意外なところでいきなり当主に目通りさせられたのは家老の深謀だったにちがいない。
それにしても、主君が母高枝の名を忘れずにいてくれるということは、徴祿者育ちの鷹之助にとってやっぱり大きな感激だった。それだけに、こんどの使命は侍として絶対に果たさなければならない主君直々の君命ということになってくるのである。
が、その君命は、主君の姉であるお美世の方をひそかに殺してこいという、人として忍びない残酷きわまるいいつけなのだ。
——おれにそんなことができるだろうか。
鷹之助はいまさらのように愕然とせずにはいられない。
一体、どうしてお美世の方はそんな風にして殺されなければならないのだろう。
高崎の当主新六郎が兄嫁に邪恋を抱き、未亡人お美世の方は当然手ごめにされる運命のもとにいる。万一、不倫の子を身ごもって、それが世間に知れるようにでもなると、里方の老中の家柄に傷がつく。だから殺してこいと家老はいう。
あるいはもう不倫の子を身ごもっているかもしれない心配さえあるのだと家老は心配している。
男と女の不倫の恋はどこにもありがちなことで、これはしようがないことなのだ。大名の家にはそのために多くの家来がついているのだから、子供さえできなければいくらも世間へ知らさずにすむ手はある。たとえ不幸にして身ごもったとしても、その時は医者の手でおろしてもらうという非常手段だってないわけではない。
それを、そういう心配があるから事前に未亡人のほうを殺すというのは、どう考えても残酷すぎはしないだろうか。
むしろ、そういう心配があるくらいなら、今のうちにどんな手を打ってでもお美世の方を里方へ取りもどす、そのほうが本当なのだ。
そういえば、さっき自分が家老にこれを提言した時、それができればなあと嘆ずるようにいっていた。
——すると、お美世の方はもう身ごもってい

ると家老は断定しているのかもしれないな。
それだと問題はまた別になる。
とにかく、お美世の方に会ってみないことにはどう考えようもないし、またいくら考えてもしようがないということになってきそうだ。
ここで鷹之助のまぶたにうかんでいたまだ見ぬお美世の方の美しい切り下げ髪の漫然とした絵姿が、突然はっきりとした初枝の顔にかわってきた。
わが愛する許婚の初枝も、今年は十九の春をむかえたはずである。元旦に登城の帰りに年頭のあいさつに寄ると、玄関先まで出てきた盛装の初枝はもうすっかり女の姿になりきっていた。
——はてな、初枝もことによるともう英之進の子を身ごもっているんじゃないかな。
お美世の方の連想がそんなところに行って、鷹之助はどきりとした。思わず立ちどまりそうになったくらいである。
そういえば、口紅の色がひどくあざやかすぎたようだ。生来の美貌がいよいよ冷たくさえて、白粉の濃い顔がいくぶん面やつれを感じさせたし、ぱっちりとした目にも底意地の強さは光っていたが、いきいきとしたつやには乏しかった。
——風邪気かもしれないな。
人のいい鷹之助はそう思って、母親がいっしょだったから、母親とあいさつをかわして、許婚とはろくに口もきかずに玄関を辞してきた。
父親の伝右衛門が生きていたころは、必ず奥へ通されて、夜になるまで酒の相手をさせられたものだった。ふっとそんなことを考えて、なにか心寂しい気はしたが、人を疑うということはきらいなほうなので、いやなことはすぐ忘れるようにしていた。
しかし、今から考えると、あれはどうも身もちになった女の顔のような気がする。
それは昨日従弟の源吉もいっていたとおり、英之進には初枝を身もちにする機会は十分あったはずだ。

たはずだ。
——すると、わしがじゃまになる。前岡にとっても、吉川にとっても、それは家名にもかかわる問題になってくるんだからな。
だから、前岡重役が江戸からこんどの人選を送ってきた時、一も二もなくわしを選んだのだと鷹之助は考えざるをえない。
鷹之助の頭の中の火の車は、風にあおられたようにうずをまきはじめた。
しかし、その火のうずはまもなくしずまってきた。
こんどの大役の人選は、母高枝を知っている家老と主君との間で、はじめから鷹之助をという話になっていたのかもしれないと気がついたからである。
あるいは峰村鷹之助の名が国もとからあげられて、おお、あれがいた、あれならいちばん適任者だということになったとしても、今となっては結果はおなじことである。
正直にいえば、こうなってはもう許婚どころの問題ではなく、自分の命にかかわる問題になってきているのだ。
万一、この大役をうまく果たしてきたとしても、そういう秘密を持っている家来はやみに葬っておくほうがお家のためと考えるのが藩政にたずさわっている者の常識で、ましてこんどは主殺しの下手人になるのだから、どっちへころんでも到底命はないものと覚悟をきめなければならない。
考えてみると、侍というものはだれしも一つ間違えば切腹という残酷な宿命をしょわされているものだと鷹之助はそう気がついて、なにか肌寒いものを感じてきたころ、すでに加賀家の赤門の前を通りすぎ、やがて本郷追分へかかろうとしていた。

2

江戸から上州高崎へは二十六里あまりの道の

りである。正月十一日に江戸を立った鷹之助は、十四日の昼すぎごろ高崎の城下へ入った。

高崎の城下町は通りぬけ三十町あまり、人家二千五百軒余を数える。上州では一、二を争う繁盛の地である。

荒町一丁目に荒木屋という旅籠屋があって、ここの主人荒木屋太平は城内へ人足小者を入れる人入れ稼業を兼ねていた。

この荒木屋が古河藩とどういう関係になっているのかわからないが、鷹之助が将監にいわれてきたとおり、主人太平に会って、

「わしは江戸からきた骨つぎで、峰村高助という者です」

と名を告げると、もう六十近いいかにも田舎の庄屋さまといった感じの太平老人は、じろりとこっちの顔を見てから、

「そうかね、おまえさんは中間奉公がしたいんだそうだね」

と、なに食わぬ顔にかえっていった。

「はい、なにぶんよろしくお願いします」

「その身なりじゃいけないね。さっそくばあさんになおさせよう。おまえさんは今日からうちのばあさんの甥っ子で、江戸で道楽をしたんで勘当されてきた。稼業は骨つぎの修業中で、名倉の玄関番、わかったね」

「はい」

「返事はへいのほうがいいよ。まあ、うちの人足部屋で半月ほどごろごろしていてごらん。見ようまねようということがあるからね」

「へい、よろしくたのみます」

鷹之助は骨つぎの先生で始終町人を相手にしていたから、そのくらいの芝居心は身についている。

太平老人の家内はおせきといって、まだ四十そこそこのあかぬけのした姥桜で、口も八丁手も八丁といった大あねごのようだった。

「高さん、おまえいい体をしているねえ。いくつなの」

「明けて二十四です」

「本当にいくらか骨つぎできるの」

「少しぐらいできます」

「按摩のほうはどうなの」

「筋ぐらいはわかります、おなじ道ですから」

「むやみにお腰元なんかもみたがっちゃだめだよ。地娘はすぐ本気になるからねえ。子供でもできるとそれこそ大変だから」

「おせき、つまらねえ口をきくんじゃねえ。そんな高助さんとは違うんだ」

そばで太平老人が苦わらいをしていた。

「そうら、いい中間さんができあがったわ。親分、この子はやっぱり娘っ子に騒がれそうですねえ」

おせきは自分の手でこしらえあげた鷹之助の中間姿をながめて、いかにも満足そうにわらいながらいっていた。

頭を奴髷にして、お仕着せきせられて座ると、鷹之助は自分でもすっかり中間になったような気がしてくるから妙なものだと思った。

「高の字――」

「へい」

「いい中間にはなったが、まだその目がいけないよ。利口すぎるんだ。もっとあほうの気持ちにならなくちゃいけねえ。つまり、人間がもっとよごれるように心がけるんだね」

「へい、これから精々そう心がけます」

さすがに親分はだけのことがあると鷹之助は感心した。

荒木屋の裏に大部屋と呼ばれる広い土間のついた人足部屋があって、そこにいつでも臨時雇いに出られるように、中間、人足がすくない時でも十四、五人はごろごろしている。中間と人足とでは年季(修業)の入れ方がちがうのだが、こういうところへころげこんでくるような連中はほとんど渡り者なので、どっちへでも融通のきくやつが多いようだ。

彼らは暇さえあればくちをやっている。い

つもふところはぴいぴいしている連中だから、ほんの小銭があっちへ行ったりこっちへ行ったりするだけのことなのだが、それでもやっている間中は血眼になって、中にはお仕着せまで張ってしまうことがある。それまで取られて素っ裸になると、太平かおせきのところへ泣きつきに行って、日当の前借をしてくるのだ。

鷹之助はできるだけよごれて早く中間らしくなる必要があるので、彼らとばくちもやったし、いっしょに酒をのんで冗談口をたたきあうようにもした。

彼らは比較的鷹之助が銭に不自由をしていないと見ると、たちまち兄貴兄貴と立てて、みんなでたかろうとかかってきた。

「兄貴、おめえはここのあねごの甥っ子だってなあ」

「うむ、あねごは叔母さんだ」

「じゃ、いいうしろ盾があるんじゃねえか。早くこんな稼業から足を洗ったほうがいいぜ。大部屋の人間なんてなあ、ろくな死に方をしねえほうが多いんだぜ」

口先だけにもせよ、中にはそんな意見をしてくれる者があるかと思うと、

「なあに、こじきを三日やるとやめられねえとおんなじでな、この世界へ入ってみると、こんなのんきでおもしろい世界はありゃしねえ。裸で銭をかせいで、銭のあるうちは飲んで、打って、買って、その土地がいやになりゃぷいと好きな土地へどこへでも飛んでいける。だからよう、上州女にあきたら信州へ行って信州女と寝りゃいいんだし、所かわると女かわるで、うまくそこの地娘にでもほれられてみろ、とんだおたのしみができるというものなんだからな」

と、打つ銭をさえろくに持っていないで、そうすすめてくれる者もある。

とにかく、大部屋でしばらく患って寝つき、こいつとてもなおらない病気だとみると、みんなでその病人を担いで、めでたでたの若松さまよを合唱しながら散々胴上げにして、しまいにどすんと下へ落とす。それでたいていはめでたく極楽往生するんだと、そんな残酷なことを平気でわらい話にしているのだから、これは大変な世界だと、鷹之助はびっくりもし、あきれもさせられた。

「高さん、おまえ財布のひもだけはしっかりしめておかないと、あいつらに裸にされちまうよ」

おせきは叔母御ぶってそれを始終やかましく注意してくれた。

この姥桜の妙に色っぽい叔母御はまた、

「おまえさんはどうしても年増にかわいがられるほうだなあ」

と、よくそんな意見もしてくれた。

「大丈夫だよ、叔母さん、おれはこれでそのほうは堅いほうなんだ」

「だめさ。年増は小娘とちがって脂っこいからね、高さんのようなうぶな男を見るとかわいくてたまらなくなるのさ、けど、人のおかみさんだけはおよしよ、後が怖いからね」

「中間さんをかわいがりたくなるような、そんな物好きな年増もいないだろう」

「それがあるんだから怖いのさ。あたしだってもう少し年が若けりゃほっちゃおかないんだけれど」

いきなり二の腕をあざがつくほどぎゅっとつねられたことがある。これは大変な叔母御だと、鷹之助はびっくりした。

その時以来、この叔母御は鷹之助にとって始終ふところをたかろうとねらっている大部屋の連中よりもっとやっかいなものになった。

「高さん、おまえよごれる修業をしているんだろう。あたしが一度よごしてあげようか」

無論、太平の留守の夜だったが、大部屋の裏の暗い空き地に待ち伏せしていて、この時はふいにうしろから肩を抱きすくめられていた。

「叔母御、からかっちゃいけねえや」

「あたしは本気だよ。憎らしい」

こんどは右の耳たぶへかみついて、その口もほおも火のように熱く、熟れたような白粉のにおいさえさせていた。

「ふ、ふ、堅くなっているよ、この子。なんにもしやしないから、だれにもいうんじゃないよ」

これでもこの姥桜は、若い男のむせっぽいにおいをかいで、しばらく胸乳を背中へこすりつけていただけで気がすんだらしく、そんなことを耳もとへささやいてそっと裏口から家へ引きかえしていった。

——困ったなあ。太平はいつまでおれを大部屋へおくつもりなんだろう。

鷹之助はようやくそれが心配になってきた。

太平とはまだ本当のことはなにも話しあっていない。そんなことをしなくとも、こっちがすっかり中間風によごれてくればそのうちに目的の屋敷へ送りこんでくれるだろうし、いよいよ屋敷へ送りこまれたとなればいやでも罪な仕事にかからなければならないのだから、むしろ一日も長くここの大部屋にいたほうがいいと、そんなのんきなことさえ考えていたのだ。

が、こうおせき叔母御が脂っこくなってきては、いつこっちの自制心がぐらつきだすか、そうそうは自信が持てなくなってくる。悪いことには、おせきは鉄火な商売女あがりだけに、人の前と二人きりの時との二つの顔を実にあざやかに使いわけてみせて、男の浮気心へ食い入るすごい手くだをあらいざらい身につけている。

それが、こっちが当惑すればするほどおもしろがって、

「だれにもわからないようにすればいいんだろう、坊や」

と、日増した大胆になり、その実、自分でも浮気と本気の区別がつかなくなってきたような素振りさえ見え出してくるので、体の自由を縛られている若い鷹之助には、このままでは到底逃げきれそうもない。

そのどたん場まで追いつめられそうになった時、ある朝いいあんばいに、

「高の字、今日はおれといっしょに行きな」

と、太平に家をつれ出される日がきたのである。

3

それは鷹之助が荒木屋の大部屋へやっかいになってからちょうど十一日目の朝で、ここは古河などより少し寒い土地のようだから、梅の花がようやく盛りになろうとしている季節だった。

「行く先はなあ、高の字、切り髪屋敷だ」

手まわりの物をふろしき包みにして、それをぶらさげて太平の後から荒木屋を出ると、しばらく歩いてから太平が振りかえってそう告げた。

「へい」

鷹之助はおとなしく頭をさげただけである。無論、切り髪屋敷というのがどこにあって、だれが住んでいるところか知らない。が、切り髪というからには後家のことで、清泉院さまと呼ばれているお美世の方の屋敷なのだろうとすぐ想像はつく。想像はついても、それを清泉院さまのお屋敷ですかと気軽に聞きかえすことは、役目がら慎まなくてはならないのだ。

また、そんなことを聞かなくても、太平はそれをちゃんと知っているはずなのである。

それにしても、鷹之助は高崎へきてから、だれかの口からお美世の方のうわさぐらいは出はしないかとずいぶん注意していた。しかし、そんなうわさはだれの口からもついぞ一度も聞いたことがない。

当主が切り髪姿の兄嫁を追いまわして度々その隠居屋敷へ押しかけるという事実は、うわさとしてもかなり人の好奇心をそそる種類のものなのだから、もう相当城下町へひろまっているのではないか。お城にあったことというものは町へ知れるはずもないのに、それが家来たちの

まだ知らないことまでふしぎとすぐ城下町へ知れていく、江戸でさえそれが通例なのだ。だから、お美世の方の場合も、そんなうわさが全然城下にないとすると、家老たちが江戸で心配していたことはなにかの間違いではないかと、今はそんな気さえしている鷹之助なのである。

いちばんおかしいのは、すくなくとも太平は鷹之助がなにかの使命を持って切り髪屋敷へ入りこむ古河の隠密だということだけはちゃんと知っているはずだ。

すると、夫婦の間のことだから、おせきも鷹之助が古河の家来だということぐらいは聞いているのが普通だと見ていい。

そのおせきの口からさえ、お美世の方のことは一言も出ていない。

実は、昨夜はおせきとの悪ふざけが、とうとうもう一歩というあぶないところまで進んでいた。

おせきが鷹之助を襲うのは必ず大部屋の裏の空き地で、太平の留守の宵闇のころときまっていた。鷹之助は夜食だけは毎晩荒木屋の台所へ食いに行くことにしている。大部屋の飯はたくあんだけでおかずはない。おかずは各自が身銭を切って自分で買うことになっているのだ。しかし、そんなことをしているやつはほとんど一人もなかった。みんなたくあんですませている。

だから、鷹之助は荒木屋の台所へ通うことにしていたのだが、二日ばかりしてそれをやめて、外で晩飯をすませた。おせきの待ち伏せが怖かったからだ。

すると、昨日、おせきと昼間顔が合った時、

「高さん、おまえどうしてそうあたしを逃げるの。承知しないから」

と、火のような目でにらみつけられた。

おせきはこのごろなんとなく常軌を逸しかけているので、この姥桜を怒らせて、万一太平に変なことでもたきつけられると、こっちの仕事にどんな狂いが出てこないともかぎらない。こ

っちにはその弱みがあるから、昨夜は待ち伏せを承知の上で荒木屋の台所へ出かけた。

案の定、その帰りに、空き地のやみで例によってうしろからおせきにぴたりと背中へ張りつかれてしまったのである。決して前からいどみかかられないのは、できるだけ自分の年を男に見せまいとする、これもこの女の狡智な手くだのうちなのだろう。

「高さん、おまえどうしてもあたしがいやなの」

ふれてきたほおが火のように燃えて、その時も男心をそそるような白粉のにおいをさせていた。

「だって、叔母御、親分に悪いや」

「だからさ、親分に知れなけりゃいいんだろう。だれも知らない二人だけのことにしておくのさ。それならいいだろう」

「そんなことできるかなあ」

「できるさ、そんなことはあたしにまかせておけばいいんだ。あたしはねえ、高さん、なにもこの年をして、おまえと夫婦になりたいの、どこかへ逃げようのと、そんな無理をおまえに押しつけようというんじゃないんだよ。あたしはどうしたのか、おまえがかわいくてかわいくて、気が狂いそうなのさ。自分でもわけがわからない。どうしても一度おまえとよごれてみたい。わらわれたってなんだってかまわない。死んだっていいと思っているんだもの。ねえ、どうしてもおまえさんあたしがいやかい」

「いやじゃないが、怖いんだ」

「だから、高さんを困らせるようなことはしないっていってるじゃないか。あたしは高さんのためにならいつでもわらって死ねるんだよ。こんなにあたしが思いつめているのに、あんまり邪険にするんなら、あたしはおまえさんの仕事のじゃまをしてやるから」

「叔母御、それを口にしちゃいけない」

「あら、ごめんね、もういわない。口が腐ったって、そのことは二度といいません。だから、

うむといっておくれよ、高さん、あたしがかわいそうだと思ってさ」
「うむ」
「いやな子、そんな返事ってあるかしら。でも、本当にうむなの、高さん」
「うむ」
「困ったねえ、まさかこの子を物置へつれこむわけにはいかないし、——こうしよう、あすかあさって、あたしがいいところへつれていく。きっといっしょにくるんだよ」
「大丈夫なところなんだろうな」
「あたしがそんな危ないところへあんたをつれていくもんかね。うれしいな、やっと、この子、うむといってくれた」
もうしょうがないじゃないかと思ったとたん、おせきはこっちの顔を自分のほうへ手でねじむけて、はじめてくちびるにかみついてきたのである。
こういうおせきだから、無論こっちからお美世の方のことを聞けばあらいざらいしゃべってくれたにちがいない。
それにしても、あぶないところだった。今日という日がもう一足おそいと、太平老人の顔をまともに見られなくなっていたかもしれないと、鷹之助もそれだけはほっとした気持ちだった。
「なあ、高の字——」
「へい」
「おまえにゃ別にいっておくこともないが、向こうへ行ったらなるべくみんなにかわいがられることだぜ」
「きっとそう気をつけます」
「あんまりでしゃばってもいけないが、口より体を先に動かして人の分まで働いてやる、そうすりゃ自然とみんながかわいがってくれるようになる」
「へい」
「おれのいっておくことはまあそれだけだ」

「ありがとうございます。きっとお言葉をまもります」
ひょっとしておせきのことがなにか出るかなと思ったが、幸い太平老人はまだなんにも気がついてはいないようだった。というより、おせきの狡智はまだだれにも自分のしっぽをつかませるようなことはしていなかったのだろう。
そのおせきの邪恋も、去る者はうとくで、こうして別れてしまえばやがて熱がさめてくる。悪夢は今日かぎり自分も忘れようと、鷹之助は道々はっきりと心に誓った。

4

切り髪屋敷は頼政神社を中にはさんでお城の南にあった。
鷹之助はまだ会う折がないが、ここはたしかに清泉院お美世の方の隠居屋敷であることに間違いない。
ここの大部屋には中間が十二人いて、中の二人は小頭をつとめている。一人は丑蔵、一人は子之助といい、その下に中間が五人ずついて、二組みにわかれている。鷹之助は丑蔵組だった。
部屋頭の藤兵衛は別にお長屋をもらっている。
中間の仕事は、一組みは門衛の下につき、一組みは屋敷内の掃除、走り使い、雑用につく。門番組は夜は夜まわりをやらなくてはならない。
このほかに屋敷には足軽が五人いて、門衛にも、玄関番にも、雑用にも、すべて中間の上に立って指図することになっている。
切り髪屋敷の用人は丸山万右衛門という老人で、その下に士分の者が四人つき、御用部屋で働いている。
これらの人たちはみんなそれぞれ屋敷うちに住まいがあるが、後家屋敷のことだから御用部屋の者も足軽たちもほとんど老人ばかりで、若い人は一人もいない。また、ここにはそう大していそがしい仕事もないのだ。

しかし、夜になると毎晩城内から徒士組の侍の中でも働きざかりといった年配の者が五人ずつ交替で詰めてきて、宿直をすることになっている。夜分は物騒だからという名目になっているのだが、この辺にどうやら将監が心配していた監視づきという事実がありそうだなと鷹之助には思えた。

奥は無論、お美世の方を主人として、老女お以勢の下に腰元が五人、これに端女が何人かいるそうで、大名の奥はどこでもそうであるように、ここも男禁制の女の世界だ。表と奥の間には庭にまで塀の仕切りがあって、一切男は入れない。

ただし、夜分の夜まわりだけは、内木戸から入って奥庭のすみずみまで厳重にまわることになっているが、これは五ツ半（九時）から明け六ツ（六時）前までのことだから、奥の雨戸はどこもしまっていて、女中たちの部屋の様子をのぞくことさえできなかった。

ここの大部屋の連中はさすがに荒木屋のそれとはちがって、部屋頭の目が光っているから表向きはみんななかなか行儀がいい。しかし、一足部屋へ入れば、ばくちをやることと、ばかっ話に興じ、すぐけんか面になって悪態のつきっこから殴りあい組み打ちになり、勝ったほうがその日から兄貴風を吹かせるのも、ふところは年中びいびいしているところまで、すべて荒木屋の大部屋とあまり変わりはない。

ここでも鷹之助はいつも小銭を持っているので、兄貴兄貴とこばかにされながらよくたかられた。しかも、体つきが堂々しているわりにおとなしくて、決してけんかはしないし、人の分までまめに働くから、敵は一人も作らない。どっちかといえば、すぐにみんなから調法がられ、親しまれるようにもなったが、どういうものかここの連中はあまり奥のうわさをしないのだ。

もっとも、鷹之助は太平老人にここの大部屋へつれてこられた翌日、用人丸山万右衛門に御

用部屋の廊下先へ呼び出されて、一通り身元をきかれている。

「おまえは高助というのか」

万右衛門老人はもう六十をいくつか出ている年配だが、切り髪屋敷をまかされている人だけに、鋭い目をしたいかにも古武士といったおもかげのある人物だった。

「へい、高助といいますんで」

鷹之助はぽかんと老人の顔を見あげる。

「高とはどんな字を書くんだな」

「高い山から谷底見ればの高です」

「いくつになるのだ」

「取って二十四で、五月生まれです」

「荒木屋の女房の甥っ子だそうだな」

「へい」

「名倉の下男をしていたというが、いくらか骨つぎを習ったのか」

「腕がぬけたのぐらいはなおせます」

「すると、按摩もいくらかはできるはずだろう」

「へい」

「どんな道楽をして勘当されたんだ」

「女道楽です。いいえ、商売女に少しだまされたです」

「なんといってだまされたんだ」

「へい」

照れたように黙ってわらっていると、

「正直にいってみなさい。恥ずかしがることはない」

と、万右衛門老用人はしかるようにいった。

「死ぬほどかわいくてかわいくてとだまされました」

「それでせっせと通ったわけか」

「へい」

「死ぬほどかわいい男に金をつかわせるはずはなかろう。以後は気をつけなさい。まじめに奉公するんだぞ」

「へい、そうします」

老用人の聞き方には、たぶんにこっちの人間

を試しているようなところがあった。
そのくらいだから、口さがない下郎にはなるべく奥の用をさせないことにしているのか、あるいはいちいち口どめがしてあるのか、鷹之助としてはうっかりこっちから奥のことを聞きたがるのはしばらく用心して、その時のくるのを待ってみるほかはなかった。
ここへきて五日目に、意外にもおせきが手みやげを持って突然たずねてきた。
まだ昼少し前のことで、相棒の宇之吉と玄関前の草むしりをさせられていると、
「高の字、叔母御が会いにきて大部屋で待っているから、ちょいと行ってこい」
と、小頭の丑蔵が呼びにきてくれた。
「へい」
鷹之助はどきりとして、とうとう呼び出しにきたかと、当惑しながら大部屋へ行ってみた。
おせきはだれもいない大部屋の土間の上がり框にきちんとした身なりで腰かけて待っていた。その日は白粉はつけていなかったが、年よりはずっと若く見える姥桜である。
「叔母御、どうかしたんかね」
こっちはわざと手にどろをつけたまま土間へ入って、女の前へ行って立つと、
「高さん、おまえとうとう逃げちまったんだねえ」
と、おせきは熱ぼったい目をからんできながら小声でいった。
「親分のいいつけだもの、逃げたんじゃねえです」
「うまくいってるよ、おまえさん本当はここへきてほっとしているんだろう」
「そんなこともないけど」
「うそをおつきよ。ちゃんと顔にそう書いてある。いくらおまえさんが逃げようったって、あたしは逃がしはしないんだからね」
「逃げやしないっていうのに――」
「そんなら、ここへきて腰かけたらどうなのさ」

「手を洗ってこなくちゃ」
「どうせあたしもおまえもよごれるんだから、それでいいじゃないか」
冗談のようにいいながらかっと目に情熱をたぎらせているので、
「ここじゃだめだ、叔母御」
鷹之助は思わず顔が赤くなってくる。
「ふ、ふ、ばかだよ。いくらわたしがのぼせていたって、ここじゃだめなぐらいは知っている。子守娘じゃあるまいし」
急にとろんとした顔になってわらいながら、
「かわいいなあ。どうしておまえさんはこんなにかわいい男なんだろう。いいかえ、高さん、あたしはまだ決してあきらめているんじゃないんだからね。それどころか、いつおまえを引っぱり出してやろうかと、毎晩そればっかし考えているんだから」
と、こっちの目から目を離そうとしない。
「叔母御、ここへきたこと、親分に知れてもいいのか」
「悪いったって知れちまうさ。あたしはちゃんと表門から入ってきたんだもの。殺されたってかまやしないんだよ」
「困ったなあ。たのむから死なないでくれよ」
「本当かい、高さん」
「本当さあ。おれだって叔母御が好きなんだ。死んでもらいたくなんかあるもんか」
「うれしいよ、高さん」
おせきはいきなり立って、はじめて正面から飛びついてくるなりくちびるへかみついてきた。
が、さすがにあっという間に飛びのいて、いそいで元のところへ腰をおろして、
「ああ、うれしかった。――高さん、本当のことをいおうか」
と、うれしそうにいう。
「うむ、聞かせてくれ」
「本当はね、おまえ今日は高の字のところへ顔

を出してやれ、それでないと甥っ子にならねえと親分にいいつけられて、ああそうかと思って出てきたのさ。殺されやしないから、心配しなくたっていいんだよ」

あっと鷹之助はあいた口がふさがらない気持ちだった。

「ふ、ふ、安心したの」

「うむ」

「あたしのこと、忘れちゃいやだよ。もう無理なことはいわないけれど、でもあたしはおまえさんが好きでたまらないんだ。死ぬまでにきっと一度はよごれてくれなくちゃ」

「うむ」

「またうむか。うむしか返事を知らないんだね、この子は」

「恥ずかしいんだ」

「まだ坊やだもんね。あたしはこれから部屋頭さんのところへ顔を出して、かわいい甥っ子のことをよくたのんで帰るから、体だけは大事にしておくれよ。わかった」

「うむ、わかった」

鷹之助は目がうるんできそうになって困った。他人から、しかも女から、こんなひたむきな愛情をかけられたのははじめてである。

こっちはいずれない命だろうと腹をきめているだけに、一度はこの女とよごれてもいいと、その時はじめて本気になってそんなことを考えていた。

それにしても、おせきという女は鷹之助にとってまったくふしぎな女であった。

夜まわり記

1

切り髪屋敷の夜の門限は五ツ（八時）ときめられているが、しかし屋敷うちの者は五ツ半（九時）ごろまで黙認されていて、門をたたけばいつでも中からくぐりをあけてやっていいことになっていた。

奥庭の夜まわりは四ツ（十時）にはじまって、九ツ（十二時）、八ツ（二時）、七ツ（四時）の四回、一人がちょうちんを持ち、一人が拍子木を鳴らして中木戸から入り、中間二人でずっと奥のほうまでひとまわりしてくることになっている。

中木戸の外に番小屋があって、毎晩交替で足軽一人、中間四人が詰め、奥の夜まわりはここから出ることになっていた。

峰村鷹之助の高助がこの夜まわりに出されるようになったのは切り髪屋敷の中間部屋へ入りこんでから半月ほどたってからで、相棒はここへきてからいつも組んで新参者を引きまわしてくれている宇之吉だった。

宇之吉は高崎在の百姓のせがれだというから、いわゆる土地っ子である。十八の時やっぱり荒木屋太平の手から城内の中間に住みこんだとかで、年五両ほどの給金を十一年ためれば五十両になる、五十両たまったら小商いでもはじめる気で中間奉公を選んだのだという。

そして、今年ですでに五年目に入っているが、金はまだ一文もたまっていないそうで、

「なあに、さいころですった金は、いまにさいころで取りかえしてみせる。これでも上州っ子だからね、まあ見ていなよ」

と、当人はもういっぱし下郎根性に染まってきているようだ。

こずるくて、鼻っぱしが強くて、腕力も相当なものらしいが、しかし鷹之助だけにははじめから親切だった。荒木屋のあねごの甥っ子だとわかっている上に、こっちから宇之さん宇之さんと立てて、小銭を貸しても決して催促はしないから、人の前では兄貴風を吹かせている一面、内心では頭があがらないという気持ちもあるのだろう。

「高の字、おめえは名倉の玄関番をやっていた

って話だが、どうして途中でやめちまったんだ。惜しいじゃねえか」

二人っきりでそんな話の出たことがある。

「宇之さんの前だが、女でしくじってしまったんだ」

「おかしいなあ。おめえの叔母御は散々男を手玉にとって、今でこそ荒木屋のあねごでおさまっているが、どうして、何人男を殺してきたかわからねえすごい女なんだって話だぜ。その甥っ子が女でしくじるなんて、とんだおわらい草じゃねえか」

「いくら叔母と甥だって、この道ばかりは教えてくださいというわけにはいかないからね」

「そういえばまあそんなもんだが、一体おめえどんな女に引っかかったんだ」

「いい女だったぜ。お初といって、おれより二つ年上なんだ」

「年上とくると、情が深いからな。素人女か」

「いや、商売女なんだ。名倉の近くに薬研堀というところがあって、そこは白粉くさい女の巣なんだ。はじめお初は道でころんだとかで、足の筋の療治に名倉へ通ってきて、おれが親切にしてやったもんだから、ぜひ一度遊びにこいっていうんだ」

「ただで遊ばしてくれたのか」

「いや、ただじゃなかったけれど、とても大切にしてくれるんだ。そばにつきっきりでね」

「あそこはどうなんだ」

「その度に泣くのさ、どうしておまえさんこうかわいいんだろうって」

「けっ、それが商売女の手よ。叔母御に聞いてみろってんだ」

「やっぱり手かねえ。おれはとうとう不義理な借金ができてしまって、名倉を破門されてね、お初のところへ相談に行ったら、若い男二、三人に表へ引っぱり出されて袋だたきにされていた、そのならず者のうちの一人がお初の悪ひもだったんだそうだ」

「そうれ見ねえ。高の字はまだ商売女をよろこばせるっていう柄じゃねえや」

「叔母御にもそういわれたよ。おまえなんか子守っ子といちゃついているのがちょうどいいんだって、頭ごなしさ」

「そうだろうとも。商売女の悪ひもになるなあ、ちょいと年季がかかるんだ。そのうちにおれがひとつ仕込んでやってもいいぜ」

宇之吉は自分はもう一人前だというような顔をしてそんなことをいっていたが、それからこっち、ある意味ではなんとなくこっちを甘い男あつかいにして、二人きりの時はどんなばかっ話でも口にできるようになった。

しかし、鷹之助はまだ用心深く、奥のうわさ話は聞いてみようともしなかった。こっちから聞かなくても、そのうちに宇之吉の口からなにか出るだろうと、それを心待ちにしていたのだ。

「宇之さん、御殿女中は張り形ってものを使うっていうが、本当かなあ」

一度だけそんな誘いをかけてみたが、

「そりゃ張り形だってすりこ木だって使うだろう」

と、宇之吉はにやりとわらいながらすぐ話題をかえていた。

その用心深さから見ても、奥の清泉院お美世の方の身辺になにか秘密があることだけはたしかなようである。

が、宇之吉でさえそうなのだから、ほかの中間たちの口からは奥の女たちのうわさらしいことは一言も出たことがない。

二月も末になって、この土地もすっかり春めいてきた。

鷹之助はまだお美世の方のうわさ話ひとつ聞けないのだから、遠くからその姿をかいま見る機会など無論あろうはずもなかった。

——こんなことで、はたして八月までにうまくお美世の方に近づける機会がくるだろうか。

役目そのものはなんとも気のすすまない残酷

な仕事ではあるが、しかし、こうしてその目的物に近づく可能性が容易につかめないとなると、さすがに鷹之助もしだいに当惑してきた。

ただ機会を待っていたのではだめだとなれば、その機会を自分の手で作りださなければならないので、その手がかりをどこへ求めればいいのか、実はそれさえちょっと見当がつかない。

いや、たった一つこれはと思う手段がないことはない。それはこんなに表と奥との出入りの厳重な切り髪屋敷から、老女お以勢の密書がとにかくだれにも知れずに江戸の古河藩邸へとどいていることだ。

おそらく、その密書はお以勢からだれかの手を経て荒木屋太平の手へ入り、荒木屋から江戸へ送られたのだろう。そのだれかは奥の端女にちがいあるまい。あるいは荒木屋から入っている中間かもしれぬ。おせきにそのだれかをさぐってもらって、そのだれかの口から自分がここへ中間に入りこんでいることを一言老女の耳へいれさえすれば、道は自然につくはずである。

問題なのは、おせきをそこまで利用するには、一度どうしてもおせきとよごれてやらなければならない。いや、ある程度までこっちからおせきに打ち込んでいって、これなら大丈夫というところまで女心を見とどけてからでないと、うっかりこっちの仕事は打ちあけるわけにはいかないのだ。

場合によっては、おせきにも死んでもらわなくてはならなくなる。

——それでは男としてあまりにも能がなさすぎるからなあ。

だいいち、鷹之助にはとても色じかけなどという器用なまねはできそうもないのだ。

その夜も、鷹之助は四ツ（十時）の夜まわりに、相棒の宇之吉といっしょに中木戸の番小屋を出発した。

鷹之助がちょうちんを持って一足先に立ち、後から宇之吉が拍子木を持ってつづく。

ちょん、ちょん。

拍子木は十足に一回ぐらいの割で軽く二つずつ鳴らすのである。

中木戸を入って奥庭をまっすぐ西へ向かって進むと、建物は廊下が鍵形になって、一棟ずつ北へ遠のいていくから、三棟目のお美世の方の寝所は梅林を隔ててかなり向こうになる。もうすっかり雨戸がしまっているから、ほかげひとつもれてはいない。

その梅林のつきるあたりに離れの茶室が一棟建っていて、そのあたりから道を北へとり、遠まわりに寝所の裏がわへ出て、中仕切りの塀のあたりまで行って、今きた道をもう一度引きかえしてくるのである。

晦日に近いから月のない晩で、夜空に春の星がうるんでいた。少し風があって、その風がなんとなく肌になまぬるいようなおぼろ夜である。

「宇之さん、奥じゃ真夏でも宵の口からああして雨戸をみんなしめきってしまうんかね」

鷹之助は向こうの夜空に黒々とそびえている寝所の屋根をながめながら、それとなく宇之吉に話しかけてみた。

「宵の口のことなんかおれは知らねえな」

宇之吉は、ちょん、ちょんと拍子木を鳴らしながら、木で鼻をくくったようにべもなくいう。

「ああ、そうか——。じゃ、宇之さんもまだ一度もお方さまの顔を拝んだことはないんかね」

鷹之助はそらっとぼけて、もう一押し押していく。

宇之吉は返事をしない。

2

花を終わってすっかり若葉になった梅林の下の小道は暗かった。

また黙殺かなと、足もとの黄ばんだちょうちんの光を味気なく目で追いながら歩いていると、宇之吉はちょんちょんと拍子木を打って、

「おれはなあ、高の字、おめえの叔母御から、あの子をたのみますよ宇之さんとくれぐれもたのまれているから教えてやったんだぜ」

ちょん、ちょんと鳴る拍子木の音がひどく恩にきせているようだ。

「すんません、どうも――」

「あの子は女にのろいから心配だって叔母御はいっていたっけ」

「まさか、それほどでもないんだ」

そういえば、この男は今夜町へ出ていって、門限がすぎてから帰ってきたが、今夜おせきに会ってきたのかなと、鷹之助がそんなことを考えていると、ふ、ふと、宇之吉はひとりわらいをもらしながら、

「高の字、ここだけの話だぜ、いいか」

ちょん、ちょんと拍子木で念を押す。

「へい、どうしたんだね、兄貴」

「荒木屋おやじはなあ、高の字、もうあれがきかねえんだとよ」

「高の字、おめえここでうっかりそんな口をきくとすぐお払い箱だぜ」

と、うしろからふっと脅かすような声で浴びせかけてきた。

「えっ、どうしてなんだ、兄貴」

「この屋敷じゃ、だれも奥のうわさは口にしねえことになっているんだ。別にうわさをするなとはいいつけられていねえんだが、そんなことをいっているのが耳に入ると、すぐお城の大部屋へやられちまうか、お払い箱にされちまう、よくおぼえときな」

宇之吉は冷たい声でたしなめる。

「すんません、兄貴。これから気をつけます」

鷹之助はいそいで神妙にあやまりながら、

「そうか――。道理でだれも奥の話をしないと思った」

と、ひとりごとのようにつぶやく。

小道は茶室の庭の垣根の前へ出て、鷹之助はそこから右へ曲がった。

「あれって――」

「ばかだなあ。あれってあれのことじゃねえか。あのおやじ、あんまり若い時から道楽をやりすぎたんで、このごろすっかりきかなくなっちまったんだそうだ」

「へええ」

鷹之助はなにかきょとんとした気持ちである。

「いいか、本当に内緒だぜ」

「うむ、いいとも」

「たまらねえのはおめえの叔母御さ。いちばんそれのわかってくる年だもんな。体中が燃えて、気が狂いそうになるんだとよ」

宇之吉はにやにやとわらっているようである。

「本当かあ、兄貴」

はてなと、鷹之助は変な気がしてくる。

「本当さあ。宇之さん、ここをぎゅっとつかんでくれって、おれの手を胸へ持っていくのよう。それがすばらしいお乳なんだ。ぎゅうっとつかんでやると、もっときつくという御注文でね、あそこは女の急所だからな、そんなに力を入れりゃ気絶しちゃわあね。しようがねえから納屋へ引っぱっていってな、おれだって男だからね、まあ据え膳てやつだ。あの子には黙っていておくれよと、何度も念を押していたぜ」

いかにも満足そうな拍子木が、ちょん、ちょんと鳴る。

――そうか、やっぱり体に負けてしまったか。

そういう因果なきっかけは自分が誘い出したような気がして、鷹之助はなにかものがなしい気持ちになってくる。

いってみれば、それは無知な人間の弱さというか、もろさというか、よくないことだとわかっていながら、一度燃えあがった女体は到底男を求めずにはいられなかったのだろう。

「高の字、これだけは本当に内緒だぜ。いくら叔母御だって気恥ずかしいだろうからな、知ら

ん顔をしていてやるんだぜ。とてもおめえに知れるのを気にしているんだ」

「うむ、きっと知らん顔をしている。もし親分に知れると大変だからな」

「なあに、そこはおれがうまくやらあな。おめえの前だけれど、叔母御の体はほんとに気ちがいのように燃えてやがった」

宇之吉はまたしてもにやにやしながら、

「大きな声じゃいえねえが、気ちがいのようになるなあなにも叔母御だけじゃありゃしねえ。ここのお方さまだって、本当はそれなんだぜ、高の字」

と、いつの間にか肩をならべてくる。

道はもう帰りになっていた。

「お方さまもか、兄貴」

鷹之助はぎくりとして聞き耳を立てる。

「お方さまだってやがて三十後家だからな。体が燃えてくると、やっぱり男にお乳をつかんでもらいたくなるんだろうが、ここじゃそういうわけにゃいかねえや。だから、時々気鬱になって、物差しで腰元をひっぱたくこともあるんだとよう」

「ふうむ、おどろいたなあ」

「だから、男はめったに奥へ入れねえのさ、間違いがおこっちゃ大変だからな。まさか叔母御のようなわけにゃいかねえやね」

「そりゃそうだな」

「こいつはうそか本当か知らねえけれど、前の殿さまは腎虚ってやつで死んだそうだ。つまり、あれがあんまりすばらしいんで、おまえを後に残したくない。ほかの男にはだれにもおまえをやりたくないって、死ぬまで手をつかんで放そうとしねえ。だから、奥方はまだ殿さまの息のあるうちに髪を切ってこのとおりだというと、その髪を抱いて安心して死んだという話なんだ」

「それだけ夫婦の情ってやつが深かったわけなんだな」

「なあに、やっぱりあれがよすぎたのさ。一生

後家でおれの墓をまもらせろっていう遺言でね、おまけにすばらしいべっぴんときているんだから無理もないやね」

「けど、子供はできなかったんだろう」

「だからよう、それが腹ん中へ落ちつけねえほど殿さまのほうが激しかったのよ」

宇之吉はちょんちょんと思わず拍子木の手に力が入っている。

「ふうむ、そんなものかなあ」

「ところが、こんどの殿さまは前の殿さまの御舎弟さまなんだが、そいつをちゃんと聞いているからたまらねえやね。去年はじめてお国入りをすると、何度も押しかけてきてね、夢中になってくどきはじめた。奥方にすりゃ死んだ殿さまに固くいいわたされているんで、それも怖いし、世間体もある。それで、せめて三回忌がすむまではと、それを盾にとってどうにか去年はことわりとおした、殿さまもそうまでいわれると、そこはおれたちと違うから、家来たちの手前もあり、無理にねじ伏せるというわけにはいかねえ。じゃ、三回忌がすんだらきっとだぞと約束をして、暮れに出府した。その留守にだれかに空き巣をねらわれちゃ大変だし、ひょっとしてお方さまに逃げ出されても悔しい。なにしろ、そのすばらしいやつを一度自分のものにしないうちは死んでも死にきれないっていう御執心なのでね、わしの留守中決して男は見せるな、厳重に警戒しろっていういいつけなんだそうだ」

「それでどうなんだろう、殿さまはこの八月にまた江戸からおかえりになるんだろう」

「さあ、どうなるかなあ。こんどは奥方だってそろそろ体が燃え出している時分だし、相手は殿さまなんだからなあ、そうそうは逃げきれないんじゃないかな」

「ああ、わかった。それがあるから、兄貴、ここじゃおれたちの口をこわがるんだね」

「まあそういうことになるんさ。おれたちじゃあるめえし、殿さまが兄嫁のあそこがいいって

聞いたから後家になるのを待っていたようにすぐねらうなんて話は、城下町へ知れたってあんまりみっともいいことじゃないやね。沽券にもかかわる話だもんな」

「そうだとも――。奥方はおれの叔母御なんかよりもまだずっと若い体なんだろう。もし子供でもできたら、それこそ大変なことになっちまうだろうしな」

鷹之助はついでにもう一歩突っこんで下郎の口うらをひいてみる。

「そりゃ奥方にすりゃそいつがやっぱりいちばん怖いだろう。だから、時々気鬱になるほど体が燃えてきても、おめえの叔母御なんかと違って、そう気やすく男をよろこばせるってわけにもいかねえのさ。つまり、宝の持ち腐れってわけで、考えてみりゃもったいない話さ」

「御家老さんたちはどう考えているんだろうな、兄貴。まさかそんなことを知らずにいるはずはないんだろう」

「知っているとも。けど、こいつばかりは、まさか面と向かってそれはいけませんともいえねえ。といって、前の殿さまがきっとおれの墓守りをさせろ、ほかの男にわたしちゃならねえという堅い遺言があるんで、いまのうちにお里方へかえしてしまうというわけにもいかねえ。みんなはらはらして見ているんじゃねえかな。もっとも、いざとなりゃ医者がついているから、そこはまたなんとでもなるだろうけれどね」

「なあるほどねえ」

「いいか、高の字、こんなことだれにもいうんじゃねえぞ。おれは叔母御にあの子のことをたのむとといわれているんで、ついつまらねえことまでしゃべっちまったんだけど、こんなことがだれかに知れて、部屋頭の耳へでも入ってみろ、二人とも首が素っ飛ぶかもしれねえんだ。わかってるだろうな」

宇之吉はちょいと心配になってきたようだ。

「おれは大丈夫だ、そんなおっかねえことをだれが人なんかに口にするもんか。けど、兄貴、おれの叔母御のあれはどうだったんだ」

鷹之助はわらいながらわざとそんなことを口にする。

「悪かあなかったぜ。なにしろ、夜も眠れねえほど燃えていたところだからな、まるで炎天のどろ沼へ足を突っこんでかきまわすようなあんばいでね、すっかり夢中になってよう、恥ずかしいからあの子にだけは内緒だよといいながら、しがみついてなかなか放そうとしねえんだ。おれさまのお道具だって、これで相当なもんさ」

若い宇之吉は思わぬおせきとの情事に内心有頂天になってついロが軽くなってしまったのだろうが、それでも最後まで拍子木を打つことだけは感心に忘れてはいなかった。

3

お美世の方についての宇之吉の話は、なんとなく聞きかじっていることを自分流に相当でっちあげているのだろうから、どこまで信用していいかわからない。しかし、従弟の源吉のいいぐさではないが、火のないところに煙は立たないで、そこになにがしかの事実があることも否めないだろう。

とにかく、江戸の瀬川将監が心配していたことは決して杞憂ではなかったことと、奥へ近づくことがここではいかに難しいかというこの二つだけは、宇之吉の話で鷹之助にもいっそうはっきりとしてきた。

そして、姥桜のおせきが自分の代用品として宇之吉とそんな仲になってしまったとすると、そのおせきを利用して奥へ近づくという手段はもうあきらめるほかはない。

――一体どうしたもんかなあ。

鷹之助はいよいよ途方にくれてきた。

その半面、たとえ奥へ近づいてみても、お美世の方を無事に里方へ出もどりにすることはほとんど不可能に近い上に、こんど藩主が帰国す

れば、到底その迫害から身をまもることは難しいとわかってみると、鷹之助としてはもう江戸からいいつけられてきた残酷な仕事を実行する以外に手段はないのだから、できれば奥へ近づきたくない、ついそんな一寸のがれの気持ちも働いてくる。

が、運命というやつはなんとも皮肉なものだった。こっちがなるべく奥へ近づきたくないと考え出すと、まるでそれを追いつめるように、ふいにそういう機会を作ってくれる。

それは三月に入って、やがて花の季節に間もないうららかな春日和の八ツ（二時）近くであった。

その日、珍しく姥桜のおせきが部屋頭のところへ用があってきた帰りだといって、鷹之助はこの前の時のようにだれもいない大部屋の土間へ呼ばれて、二人きりで会った。

「高さん、おまえもう宇之からなにか聞いているんだろう」

あいかわらず若造りのおせきは、鷹之助の顔を見るなり聞いた。顔はわらっているが、熱ぼったい目がまともにこっちを見すえながら、なにか挑戦しているようである。

「いきなり、なんのことだ、叔母御」

鷹之助はわざとそらっとぼけて聞いた。

「あたしはやっぱりおまえが好きなんだ。それは好きなんてもんじゃない。本当なんだよ、高さん。けれど、だめなのさ。高さんはあたしなんかよりずっと高いところにいる男なんだもの。一度でいいからよごれてみたいと思ったんだけれど、そういう胸の火がつい宇之に手を出してしまったのさ。勘弁してくれる、高さん」

それは面はゆいなどというなまやさしい顔ではなかった。素っ裸になってなにかを求めている、そんな必死な燃えるような目つきだった。

「叔母御、それは勘弁するのしないのという問題じゃないだろう。後で困りゃしないのか。いや、なにか困っているのか、叔母御」

「おまえ、それを本当に心配してくれるのかい」

「うむ、心配する。おれは叔母御に困ってもらいたくないんだ。おれの力でできることならなんでもする」

「本当かい、高さん」

「本当だ。おれはいまでも叔母御は本当の叔母御だと思っている」

「それ聞いて安心したわ。あたしはこんなこと高さんにはいうまいと思ったんだけれど、後で、なあんだあんな女だったのかと思われたくなかった。そりゃこんなだらしのない女にゃ違いないけれど、真実は高さんが好きで好きでたまらない女なんだっていうことを知っていてもらいたかった」

「そんなことはちゃんとわかっている。けど、大丈夫なんか、叔母御」

「大丈夫さ。あたしは自分のことはちゃんと自分で始末する、そんな心配はしてくれなくたっていいから、心の中であんな女だったかなんて思っちゃいやだよ」

「そんなこと思うもんか」

「うれしいなあ。これであたしは死ぬまで高さんのことを考えながら死ねる」

「叔母御、無分別なことをしちゃだめだぜ」

「いいえ、これは話さ。この年をして、無分別なことなんかするもんか。高さんとならしたかもしれないけれどね」

おせきは冗談のようにわらってみせてから、

「じゃ、今日はこれで帰りますからね。どうなの、なんにも不自由しているものはないかえ」

「うむ、ない」

「憎らしいよ、おまえって男は、いつでもそんな風にあっさりしているんだから」

さすがにその日は口を吸いにこようとはせず、思いきったように戸口のほうへ出ていく。

「叔母御、門まで送っていこう」

叔母と甥っ子なのだから、つれ立って門のところまで送っていっても、だれもおかしな目で

見る者はない。

「ふ、ふ、高さんとこうして歩けるなんて、考えてもみなかったよ」

おせきはとても満足そうだった。

そんな女の明るい顔を見ていると、——今になって宇之をいくらか持てあましているんじゃないかと、多少気にしていた心配も消えて、

——めったなことでしっぽを出すような女じゃないんだから。

と、鷹之助は安心しておせきと別れた。

そして、表玄関のほうへ引きかえしてくる途中で、

「高の字、御用人さまがお呼びだぜ。中木戸の番小屋の前においでなさるんだ。早く行ってくんな」

と、小頭の丑蔵の迎えをうけたのである。

「へい」

鷹之助はどきりとしながら駆け出した。

老用人丸山万右衛門はこの屋敷ではいちばん偉い人で、中間などにはほとんど用はない。鷹之助もここへ住み込んだ翌日、御用部屋の廊下先へ呼び出されて、一通り身もとを聞かれて以来、まだ一度も口をきいたことはない。

その老用人が名ざしで自分を呼んでいるというのだから、

——ひょっとすると、なにか露見したかな。

と、とっさに考えるのはまずそれだったが、しかし、それなら中木戸の番小屋の前に待っているというのが解せない。

そんなところで下郎に小言をいうような軽々しい人ではないのだ。

なるほど、老用人は番小屋の前で足軽の一人を相手になにか立ち話をしていた。

「御用人さま、高助まいりましてございます」

鷹之助がそこへ行ってひざまずくと、

「おお、まいったか。ちょいとわしについてきてくれ」

老用人は気軽にいって、さっさとそこの中木戸をあけ、先に立って奥庭へ入っていく。

——はてな。

夜まわりではもう慣れているが、こんな真っ昼間の奥庭へ入るのははじめてだ。昼間奥へ勝手に出入りできるのはこの老用人ひとりだとわかっているだけに、鷹之助はいよいよ緊張せずにはいられない。

見ると、いまの足軽がていねいに小腰をかがめてこっちを見送っていた。

4

「高助、その方は多少骨つぎの心得があると申したな」

老用人はいつも夜まわりのとき通る道をずんずん奥へ進みながら、ふっと振りかえって聞く。

「へい、少しぐらいならわかるです」

「庭下駄をはいてな、ころんだ拍子に、右足の甲の筋を踏みちがえたらしいのだ。わかるか」

「右足の捻挫でございますな。それくらいならわかるです」

「療治ができるか」

「できますです」

おそらくだれか女中がころんで右足を捻挫したのだろう。女はよくそういう捻挫をしたがるものなのだ。

そんな用で呼ばれたのなら心配することはない。こっちはそれを稼業にしていたのだと思ったとたん、鷹之助はほっとして、まさかこんなことで奥へ入れるとは考えてもみなかったなあと、まったく意外な気がして、

——そうだ、この機会をのがしてはならない。

急に胸が希望にふくらみかけてきたが、待てよ、この機会をうまくつかめば、いやでも残酷な仕事につづいていくぞと気がついて、たちまちその希望のよろこびは色あせようとする。

しかし、なにもできずにぐずぐずと気の重い日を送っているより、いっそお美世の方に近づいてじかにぶつかってみたほうが、そこにまた

意外な活路が発見できるかもしれないじゃないかと、鷹之助はすぐまたもう一度思いかえして、

——この機会は、やっぱりむだにしてはならない。

と度胸をきめた。

「高助、しかと申しわたしておくがな」

「はい」

「これから奥で見たり聞いたりすることは、決して人に口外してはならんぞ」

「はい」

「急場のことで、どうも素人の手にはおえぬ。これが命にかかわる病気というのなら医者を呼ぶほかはないんだが、奥のことはその手つづきがやっかいでな、まあ、その方の手でなおるものなら、これに越したことはないんじゃ」

「たぶん、なおると思います」

「そうか——。その方は骨つぎは何年ぐらいけいこしているな」

「二年ぐらいです。三年やれば一人前なんですから、一人前に一年足りないだけです」

「すると、剣術のほうでいうと免許というところか」

「そうです。足の捻挫ぐらいは大丈夫です」

「よかろう。では、その免許の腕前で、ひとつ骨を折ってみてくれ。——ああ、骨を折ったんでは、免許の腕前では手に負えなくなるかな」

老用人の口からそんな冗談が出るのは、たかが捻挫だからという安心があるからだろう。

鷹之助はその軽口にはわざと乗らないことにした。まず口の堅い男という信用を得ておく必要があるからである。

それにしても、けが人は一体どこにいるのか、老用人はいつもの梅林の道をずんずん奥へ歩きつづける。夜と違って、寝所の廊下や白い障子が梅林の葉がくれにやや遠くはっきりと見えてきた。

どの座敷もぴったりと障子がしまっていて、人の姿は一つもない。しいんと静まりかえっているのが、うららかな春の日の中だけに、なんだか夢でも見ているような妙な気持ちだった。

やがて、行く手に竹垣でかこまれた例の離れの茶室が見え出してきた。そこの枝折り戸のところに紫矢絣の腰元が一人立って、じっとこっちを見ている。その色彩あざやかな腰元姿が、この屋敷ではふだんほとんど女を見かけないので、なにか絵のように美しく見えた。

けが人はあの腰元かなと見ていると、そうではなくて、その腰元はこっちが近づいていくとおじぎを一つしておいて、小走りに南の庭のほうへまわっていく。そっちにけが人が待っているのだろう。

まもなく、老用人の後について何気なくそっちの庭へまわっていった鷹之助は、どきりとして思わずそこへひざまずいていた。

すぐ目の前の廊下へ腰をおろしているのは、白羽二重の着物の上から黒縮緬の被布を羽織った高雅な婦人で、豊かな黒髪を切り髪にしているから、無論これが清泉院お美世の方にちがいない。

鷹之助は、あまりにも近々と、しかも突然その人の姿に出会って、あっと息をのまずにはいられなかった。

それにしても、青々としたまゆの下の張りのあるまなざし、薄桜色にふっくらとした面輪、少し端麗にととのいすぎたきらいはあるが、まったくすばらしい美貌の上に、白と黒だけの喪の装いにつつんだのびのびとした肢体のみずみずしさが、やがて三十に近い濃艶な肌をさえおもわせて、これでは当主が煩悩に狂いたくなるのも無理はないと鷹之助はすぐに思った。

いや、先代がこの夫人をだれにもやりたくないといって死んだ執念のほどもなるほどとうなずけるような気がする。

そばに老女と腰元が二人つきそっているが、鷹之助でさえそれがはっきりと目に入ったのは、少したってからのことだった。

「お方さま、これが名倉の心得がある屋敷の中間高助と申す者でございましてな、自分では免許皆伝の腕前だと自慢しております」

老用人がまことしやかに触れこんでくれる。けが人が安心して療治がうけられるようにという心づかいなのだろう。

お美世の方は黙ってうなずいて鷹之助のほうを見た。

「すぐおみせになりますか、お方さま」

お以勢らしい五十四、五とも見える年配の老女が、そばからお美世の方の顔色をうかがうようにして聞いた。

「痛い、乳母」

お美世の方は小娘のようにいって、ちらっとまゆをしかめてみせる。

「高助とやら、お方さまはお痛みが激しいようです。早くみておあげしますように。そなたは本当に免許皆伝なのでしょうね」

下郎だから一応腕を疑うというより、お以勢は一刻も早くお美世の方の痛みを楽にしてやりたい親心から、下郎の腕前が心配になるようだ。

「大丈夫です、お乳母さま」

鷹之助は思わず微笑していた。

「では、早く、少しでもお痛みを楽にしてさしあげてくれますように」

「はい」

鷹之助はすぐにお美世の方の足もとへ進んで、そこに両ひざを突いた。

お美世の方は両足をくつ脱ぎ石の上へおき、左足は足袋はだしだが、右足は脱いだ足袋の上にあって、かかとを浮かせるようにしている。ほれぼれとするような形のいいきれいな貴人の足で、そのかわりこういう足はあまり実用向きにはならない。

その白々とした足の表面外がわのほうがかなりはれて、足くびのほうまで少し色が変わっているようだ。浮かせている丸みのあるかかとに紅がさして、ふっとなめてみたいような衝動に

駆られてくる美しさだ。

こんなすばらしい足を見るのは生まれてはじめてだなあと鷹之助は思った。

お美世の方はそんな風にぶしつけな男の目で素足を見られるのはさすがに恥ずかしいらしく、ひざの上で組んだ行儀のいい両手がすっかりかたくなっているようである。

「お乳母さま、ちょいとお足にさわらせてもらってもよろしいですか」

鷹之助はいっしょになってお美世の方の足をのぞきこんでいるお以勢に聞いた。

「さわってみなければわからないの」

「わかりません。ここがこんなにはれて、色が変わっているでしょう。ころび方が悪かったんですね。足くびを捻挫しているかもしれません」

「おなおりになることは、きっとおなおりになるのでしょうね」

「それはなおります」

「お方さま、ほんの少しの御辛抱ですから、お足にさわってもよろしいでございましょう」

「そんなことをして、痛くはありませんか、乳母」

「大丈夫です。ほんのちょっとの御辛抱なんですから」

下郎の直答はゆるされないのだが、鷹之助はかまわずに自分で答えながら、もう痛いほうの足のすそから無造作に右手を差し入れて、お美世の方のすんなりと弾力のあるふくらっぱぎをぎゅうっとつかんでいた。

「あっ」

まさかそんなまねをされるとは夢にも思っていなかったらしく、お美世の方は軽く叫んで、体中をかたくしながら思わずそばにある乳母の肩につかまって、顔を火のように赤らめていた。

「ここがお痛みになるでしょう」

鷹之助はぎゅうっとふくらっぱぎをつかんで、少し右足をあげさせ、左手でかわいいかかとをそっと下から動かしてみる。

「痛いっ、高助」
お美世の方は泣くような声をあげながら、こんどこそ全身の筋肉を必死に縮めている。
「やっぱり足くびを捻挫しているんです。しかし、もう大丈夫です。なおることはきっとなおせますが、当分歩くのは無理でしょうね」
鷹之助はふくらっぱぎを上から下へ数回もみほぐすようにつかんでは放して、行ったりきたりさせる。
その度に無理をしている足の筋がほぐれてくるから、楽には楽なのだろう。いつの間にかかたくなっていたお美世の方の全身の力がゆるんできた。
「いくらかお楽でしょう」
鷹之助は顔を見ずに聞く。そのかわり、少しみだれたすそから白々とのぞかれるすばらしい脛の美しさがいやでも目に焼きつく。
お美世の方はもう観念したように黙って足を鷹之助にまかせながら、片手で乳母の肩へつかまってため息をついていた。
「お乳母さま、うどん粉と酢と、それからさらし木綿と、丼と箸と、鋏もいりますな。それだけを用意させてください」
鷹之助はそういいながら、やっとふくらっぱぎを放してゆっくり立ちあがり、
「お方さま、横になられたほうがお楽でしょう。御殿へお帰りになるのでしたら、戸板のほうがよろしいと思います」
と、こんどは美しい顔をまともに見ながら、つい下郎という身分を忘れていた。
黙ってうなずいてみせるお美世の方の顔は、まるで小娘のようなすなおな表情になっている。

治療がよい記

1

鷹之助は思いがけないきっかけからお美世の方に直接会えたばかりでなく、その足を自分の手でつかんでみる光栄をさえ得た。しかも、この光栄はお美世の方の捻挫がなおるまでつづくはずである。
——いよいよこれからだ。
鷹之助は希望にあふれてきた。そのこれからの仕事は、ことによるとお美世の方に一服盛らなければならない残酷な結末になるかもしれないのだが、ふしぎとその時はそれを忘れていた。というより、その前になにかお美世の方を生かす道がありそうな気がして、そっちへ大きく心が動いていたのである。
翌日は五ツ（八時）ごろもう迎えをうけて、例によって老用人丸山万右衛門につきそわれ、昨日とおなじように中木戸から奥庭へ向かった。
が、今日は離れの茶室へ行くのではなく、お美世の方は昨日すでに戸板で母屋の居間のほうへ運ばれているので、奥の庭先をまわってそっちへ行くのだ。
中間高助の鷹之助がそんなところを通るのは無論はじめてで、庭先はいつも夜まわりのとき通る梅林のふちまでずっと広い芝生になっているから、まだ朝のうちではあるし、見た目にとても明るくすがすがしかった。
「高助、お方さまはゆうべ足が痛まれて、よくおやすみになれなかったそうだ。大丈夫なのだろうな」
内木戸を入ると老用人は自分から鷹之助と肩をならべてきながら聞いた。この大丈夫かは、おまえで大丈夫かという意味なのだろう。
「大丈夫です。一日や二日は、あれだけ念入り

にくじけば、どうしてもずきずきするです」
　鷹之助はまっすぐ前を見て歩きながら答える。普通では決して入れない奥へきているのだから、あまりきょろきょろすると老用人に用心されるおそれがある。信用を失えば、二度とお美世の方に近づけなくなってしまうのだ。
「ふうむ、お方さまの捻挫は重いほうか」
「いいえ、もっと重ければ体を動かしても痛むです。お方さまのは中ぐらいで、本当ならそう大したことではないんですが、お方さまの足は実用向きにできていないからいけないんです」
「なるほど、たしかに実用向きの足ではないだろうな」
「普通なら足の甲だけですむところを、足首の筋まで痛めてしまったんで、ちょいとやっかいなんです」
「どうだ、まさかびっこにはならんだろうな」
「それは大丈夫です」
「どのくらいで歩けるようになるな」
「早ければ半月、おそくても二十日ぐらいで、人手を借りずに自分用だけは足せるようになるです」
「そうか。療治としては薬を塗っておくだけでいいのか」
「痛むうちはそれよりしようがないです。痛まなくなったら、足首を少しもみほぐさないと、びっこをひくようになるかもしれないです」
「びっこにしては困る。とにかく、当分念入りに療治にあたってみてくれ」
「へい」
　考えてみると、お美世の方も老用人も、こっちが取るに足らぬいってみれば虫けら同様の中間だから、かえって安心して貴人の体へ手をふれさせたのかもしれない。
　大体、大名の奥方だとか姫君は、病気の時でさえ医者に直接診察されるのをきらい、糸脈を用いる者のほうが多いのだ。糸を手首にまいて、医者はその一方の端をふすまのこっちでつかみ、それで脈を計る。一種の気休めみたいなもので、そんなことで脈がわかるはずはない。
　とにかく、お美世の方が黙って足をまかせてくれたのは、鷹之助にとって異例な幸運だったわけなのである。
「お乳母どの、高助を召しつれてまいった」
　老用人はいちばん奥の棟の障子のしめきってある廊下先に立って中へ声をかけた。
「御苦労さまでございます」
　腰元に障子を左右に開かせ、お以勢が敷居ぎわまできて老用人にあいさつをする。
「高助、さっそくお療治にかかりなさい」
「はい」
　お美世の方は十畳ばかりの座敷に絹布団をのべさせ、廊下のほうを足にして寝ていた。
「お早うございます」
　高助は廊下へ座っていねいにおじぎをしてから、すぐに布団のすそのほうへ行って座り、療治を手伝うために並んで座ったお以勢に、
「お乳母さま、お方さまはゆうべだいぶ痛まれた御様子ですか」
　と、気軽に聞いてみた。
「ゆうべはよくおやすみになれなかったようです」
　お以勢はそう答えながら、もう痛む足のほうの布団をそこだけそっとはぐってくれる。
　二人の腰元たちは控えの間へさがって座り、万右衛門老人は廊下へ座ってこっちの様子をじっと見ているようだ。
「今日はもうお足を動かしさえしなければ痛くなくなります」
　鷹之助はかまわず手をさしこんで、昨日とおなじようにぎゅうっとお美世の方の柔らかいふくらっぱぎをつかみにいった。
　お美世の方は軽く目をつむったままちらっと青いまゆを寄せて多少体をかたくしたようだが、昨日ほどのことはなかった。
「お痛みになりますか」

乳母が聞くと、かむりを振ってみせている。
すんなりと弾力のあるこの肉付きのなめらかな感触は、成熟しきった女盛りの肌をおもわせて、鷹之助はなにか胸が甘ずっぱくなってくる。
痛むほうの右のふくらっぱぎがすむと、こんどは左のふくらっぱぎをつかんでみた。
「痛いほうのお足をかばいすぎてもいけません。つまり、痛みはしないかと思ってそこへばかり気をつかっていると体中が凝ってきて、余計痛むような気がしてくるのです」
鷹之助はもっともらしい顔をしてそんな説明をしながら、ふくらっぱぎの甘い感触をちょいとたのしんでから患部の療治にかかった。
今日は自製の名倉特効薬を用意してきているから、酢とうどん粉の必要はない。その粉薬を水でよく溶いて練りあげておき、足の下へ油紙を敷いて、患部にまきつけてある白布をほどきはじめる。
「高助、なるべくお痛みにならないように気をつけてください」
「大丈夫です」
こっちは慣れているのでやることが手早いから、見ているお以勢ははらはらしているようだ。
布に塗って張っておいたうどん粉は、熱でもうからからに乾いている。これでは皮膚が突っ張ってぎごちなくなるから余計気になるわけだ。
足首のほうの布は、もう一度ふくらっぱぎをつかんで少し持ちあげるようにして、一気に下へはがしていく。
「痛い、乳母」
お美世の方は怒ったようにいって体をすくめた。
「ほんのしばらくの御辛抱です。すぐよくなるのですから」
鷹之助はきれいな足にいってきかせながら、こんどは親指をおさえ、甲に張ってある布をこれも一気にはぎとる。女体はまたぎくりとした

が、こっちはそう痛まなかったらしい。
足についたうどん粉を少しなでおとしてみると、足首のほうもいくらかはれはひいているようだが、まだかなり熱を持っている。
「だいぶよくなっております」
そんな気休めをもっともらしくいっておいて、新しい布に練り薬を塗り、一つは足首に、一つは甲のほうへぴたりと張って、こんどは足を持ちあげてもらわないと布がまきにくい。自分のひざを使うのがいちばん簡単なのだが、さすがにそれはできないので、座布団を借りて四つに折ってそれをふくらっぱぎの下へあてがい、足首のほうから器用にくるくると患部をすっかり布でまいていく。
見ている者にも、当人にも、有無をいうすきを与えないほどそれはあざやかな手さばきで、療治はたちまち終わった。
「たぶん、これでお楽になったと思います。夕方、塗り薬がすっかり乾いたようでしたら、いま手前がやりましたようにして、もう一度、張りかえてさしあげていただきます」
「御苦労でしたね」
「それから、これは御病気というわけではないのですから、お体をうしろから支えておあげして、寝たり起きたりなすっていられたほうが、お体も楽ですし、気もまぎれておよろしいかと思います」
療治にあたっている間は、中間という身分をうっかり忘れがちになっている鷹之助だった。
「高助、その方はなかなか手ぎわがいいようだな」
帰りがけに庭を引きかえしながら、万右衛門老人が感心したようにいった。
「へい、薬を練ったり、布をまきつけたりするのは、名倉では玄関番の仕事で、これでも年季が入っているのです」
鷹之助はわざとそんな自慢をしておいた。

2

ここの中間どもは、なるほど口が堅い者ばかり選んであるらしく、高助が奥から帰ってきても、なにしに呼ばれていったんだと聞く者は一人もなかった。相棒の宇之吉さえ、ただにやりとしてみせただけである。

それがかえってこっちに妙にうしろめたいような気持ちを起こさせないではなかったが、正直にいうと、鷹之助はもうそれどころではない心境になっていた。

——おれは少しおかしい。

鷹之助はお美世の方のふくらっぱぎの甘い濃厚な感触があまりにも手のひらにはっきりと残っていて、どうにも忘れかねるのだ。それは相手が清泉院さまだからもったいないという感じではなく、女盛りの熟れきった後家の肌として、鷹之助の男心に激しく焼きついてくるのだ。

お以勢はなるべく余計なところは男の目にふれさせまいとして、療治中絶えず丹念にお美世の方のすそを気にしてなおしていくし、鷹之助もまたできるだけ患部よりほかへは視線を移さないように心がけているのだが、痛い足をいじくりまわしているのだから、時として世にも美しい脚の上あたりまで、白々とした内股のあたりがちらっとこぼれて目に入る。

その時は平気なつもりだったのが、今になってそれがあざやかにまぶたにおもい浮かび、白縮緬がまつわりつくいきいきとした女のなまめかしい足となって男心をかき立ててくるのだ。

——当主が煩悩を起こすのも無理はない。

お美世の方の脂の乗りきった女体は、そのふっくらとした美貌とともに、男を悩殺せずにはおかないものがある。

鷹之助でさえあの女体を人のおもちゃにさせたくない、そんな大それた欲望を感じてくるのだ。

そして、困ったことになったなあときびしく反省しながらも、ほかのことは一切影が薄くなって、お美世の方の女体ばかりが目にちらついてくる。

いちばん悪いことは、あの女体はどうせわしの手で一服盛らなければならないのだし、そうなればこっちも生きてはいられない運命にあるのだというそういう逃げ道が鷹之助にあって、それがともすれば煩悩に結びつこうとしていることだった。

その日の夕方、鷹之助はまた奥からの迎えをうけた。

「高助、薬の張りかえはな、やっぱりお乳母どのではうまくいかぬそうだ」

道々老用人はそういって苦わらいをしていたが、鷹之助はたぶんそうだろうと思って、夕方になるのを心ひそかに待っていたのである。

「御用人さま、お足のほうはどんなあんばいなんでしょうね」

「うむ、だいぶお薬になられたそうだ。あれは名倉の薬とかいっていたな」

「へい、うどん粉と酢よりは、おんなじことでも酢くさいより増しかもしれないです」

「そうか、お方さまはよく効くようだと申して、よろこんでおられるそうだ。その方、あの粉薬は自分で作れるのか」

「作れるです」

「それなら安心だな」

万右衛門老人は鷹之助の腕をすっかり信用したらしく、その時は奥の廊下まで送ってきただけで、後で迎えにきてやるからといって、そこから用ありげに引きかえしていった。

「高助、度々御苦労ですね。さあ、おあがり」

今朝とおなじように、廊下の障子をすっかりあけ放して、お以勢も気さくに迎えてくれる。

「おじゃまいたしますです」

鷹之助は廊下へ座っていねいにおじぎをした。

お美世の方は床へ起きあがって、腰元に肩を

もませている。さえない気難しそうな顔をしているのは、血の道でもおこしているのだろう。房房とした切り髪で、青いまゆを少し寄せているふっくらとした面輪はいかにも悩ましそうで、男の目にはひどく色っぽく見える。

白羽二重の寝まき姿で、淡紅色のしごきをきちんと前で結び、そのしごきにしめつけられた双の胸乳がくっきりと豊かな丸みを見せているあたり、これはたしかに目の毒だと鷹之助は思った。それはそれとして、

「お肩がお凝りになるのですか」

鷹之助はそういいながら、いかにも気軽に立ちあがった。見ると、そこに療治のとき足の下へ敷く油紙が折っておいてある。それをとって、あっとお以勢や腰元が目をみはっている間に、お美世の方のうしろへまわり、まさか男がじかに布団の上へあがるわけにはいかないから、油紙をそこへ敷いて、腰元を押しのけるようにさっと両手を肩にかけていた。

むっちりと肉付きのいい肩だが、ひどく凝りがきてこちこちになっている。

「ああ、これはひどい。こんなに凝っていては頭痛がなさるでしょう」

二度、三度、五度と、両肩の筋を男の力でおろしはじめると、そのふいのぶしつけさをお以勢になじろうとしたお美世の方も、急所へくる療治の効果に体のほうがたちまち魅せられてしまったらしく、黙って目をつむってしまったようだ。

「そんなにお凝りになっているの」

お以勢もしようがないというようにそんなことを口にしている。

「あまりこれをほっておきますと御病気になります。だいいち、御自分がとてもお苦しいでしょう、お方さま」

鷹之助は無造作に話しかけながら、機を見て親指で凝った筋をおさえ、ぎゅうっと次第に力を入れていく。

「痛いっ、高助」

お美世の方は悲鳴をあげたが、しかし、それは決してふきげんな声ではないようだった。

「少し効きすぎましたか。そのかわり、すぐお楽になりますから」

数回丹念に指圧をくりかえしてから、こんどはじわじわともみほぐしていくと、お美世の方の白々とした首筋からほおへかけて、いつか紅を刷いたように血の気がさしてきた。肩で凝っていた血液があたたかく全身へ順当にまわり出したのである。女体はすっかり楽になってきたらしく、お美世の方はうっとりとした体つきになってうつらうつらしているようだ。

「今日はこれぐらいにしておいて、お足の療治にかかりましょう」

「もうやめるの」

とろんとしたように目をあいたお美世の方は、ちょいと不服そうである。

「あまり急にもみすぎましても、後でお体が疲れます。横になってごらんなさいませ。今夜はよくおやすみになれるはずです」

鷹之助は布団をおりて、敷いていた油紙を取りのけ、お美世の方のうなじに手をまわして、子供をあつかうようにそっと仰向けに寝かせてやる。

これは乳母か腰元のすることで、男のやることではない。というより、男は当然遠慮しなければならない仕事だ。が、その時の鷹之助はついなんの気もなく無造作にやってのけていたので、お以勢も口を出すすきがなかったようである。

むしろそれより、顔に血色が出てまだうっとりと目をつむっている安らいだお美世の方の様子にほっと安心したのだろう、

「お方さま、お楽になりましたようでございますね」

と、いそいそと肩のあたりまで掛け布団をかけてやっていた。

その間に鷹之助はさっさとすそのほうへまわって、足の療治の支度にかかる。
「お乳母さま、お方さまは昨日めまいがしておころびになったのですね」
鷹之助は粉薬を水で溶きながら、ふっと思いあたって聞いてみた。
「そうでしょうかねえ」
お以勢もすそのほうへ手伝いにまわってきながらちょっと顔を曇らせる。
「めまいは御持病なのですか」
「いいえ、そんなこともなかったのですけれど」
「時々按摩をとられるとよろしいのです。あまり肩をお凝らせになってはいけません」
水差しに水のなくなったのを目ざとく見ていて、腰元が水を取りに立つ。
「高助、そなたはどこの生まれなの」
控えの間にだれもいなくなると、お以勢が何気なさそうに聞いた。
体が楽になって、お美世の方は軽い眠りに誘われているようである。
「わしは古河です、お乳母さま」
鷹之助は箸で薬をよく練りながら、わざと相手の顔を見ずに答える。
「古河なの」
お以勢はこっちの顔をちらっと見なおして、
「そういえば、古河の御城内に峰村平左衛門という名倉の名人がいたのを知っておいでかえ」
と、そっと聞く。
「わしはそのせがれの鷹之助です」
「まあ」
お以勢はお美世の方のほうをそれとなく気にしながら、
「そなたがねえ」
と、びっくりしたように用心深くまたしてもこっちの顔を見ている。
鷹之助はこの機会にお以勢を十分信用させておかないと後の仕事にさしつかえると考えたので、

「そうだ、お乳母さまはこれに見おぼえありませんか」
と、素早く胴巻きの中から母の形見の観音像の入っている守り袋をさぐり出して乳母の手にわたした。
これはもとお美世の方の御生母の持っていたのを母の高枝が形見にちょうだいしてきたものだから、おなじころ仕えていたお以勢が知らないはずはないと考えたのだ。
「ああ、これは高枝どのの――」
案の定、お以勢は一目見ただけでそれとわかったようだ。
「お乳母さまは母を御存じでしょう」
母の名が出ると鷹之助もさすがになつかしい。
「それはもうよく」
お美世の方の軽い寝息が耳につくほどしいんと明るい夕方で、お以勢も感慨深げにその守り袋をちょっと押しいただいてから中をあけてみようとしたが、急に聞き耳を立てながらそれを自分の帯の間へしまって、
「高助、お薬はもうそれでいいのかえ」
と、なに食わぬ顔になっていう。
ちょうど腰元が水差しを持ってもどってきたのである。
「そうですな。もう少し水を足したほうがいいかもしれないです」
鷹之助は腰元がそこへおいた水差しを取りあげて、練り薬にちょっと水を足し、別にあわてたつもりは少しもなかったが、その実、その守り袋の中へ大切な二服の眠り薬を入れておいたことをついうっかりしていたのだから、やっぱり多少気持ちが動揺していたのかもしれない。

3

鷹之助が守り袋の中へ眠り薬を入れておいたことを思い出したのは、やがて老用人の迎えをうけて、奥から中間部屋へもどってきてからで、

——しまった。

とは思ったが、そのこと自体はそうあわてることもなかった。

守り袋はたぶん明日にもそのまま自分の手にかえってくるだろうし、その時もしあの薬はなんですと聞かれたら、わしの持病の合い薬ですと答えておけばそれですむことだからである。

そんなことより、とにかく今日お以勢との間に役目の上の了解がついたことは大きな収穫だと思った。後は二人きりの話のできる機会を待って、当主の帰国する八月までにゆっくり善後策を講じればいいのだ。その機会は無論お以勢のほうで作ってくれるはずである。

事実、翌朝から仕事は非常にやりやすくなったような気がした。お以勢に余計な気をつかわなくてもすむし、むしろお以勢のほうがこっちの気苦労を半分しょってくれる形になったからだ。

それに、万右衛門老人も鷹之助の人柄にだんだん安心してきたか、奥への送り迎えはあいかわらずきちょうめんだが、療治中廊下に座って監視しているということはほとんどなくなってきた。表に用のない時でも、こっちの療治がすむまで、よくぶらぶらと庭を歩きまわっていることのほうが多い。

控えの間の腰元たちも、療治の手順になれてきて、療治中は退屈だからよく座を外して、別室で油を売っていることがある。お以勢が別にそれをしかりもしないからであった。

要するに、だれもかれもが鷹之助になれてきて、いつの間にか鷹之助自体が奥の空気に溶けこんでしまった形になってきたのだ。

それでいて、問題の守り袋は、翌朝、無論、無事に鷹之助の手へかえってはきたが、さてお以勢と二人きりになって話すという時は容易に得られなかった。二人ともお美世の方のそばを離れて会うという口実がどうしても見つからないのである。

お美世の方の足のほうは、幸い毎日目に見えてぐんぐんよくなって、十日ほどもたつと、もうびっこをひきながら自分用ぐらいは足せるようになってきた。まだ足首のほうに痛みは多少あるようだが、そこまでになれば床についている必要はない。

が、お美世の方はなかなか床払いをしようとはいい出さなかった。このごろは足の療治よりもみ療治のほうをたのしみにして、わざと足首の痛みをおおげさに訴えるといった風がないでもなかった。

「お方さま、少しは御無理でも、もうお庭ぐらいは歩いてみられるほうがよろしいのですがねえ」

その日も鷹之助は横になっているお美世の方の肩をごく軽くもみながら、そうすすめてみた。

すでに花は散って葉桜の季節に入っているから、あけ放した庭の芝生に春の日ざしがうらうらと美しい朝だった。

控えの腰元たちは例によって油を売りに行っているし、珍しくいましがたまでそこにいたお以勢の姿も見えなくなっている。こんなことはかつてないことなのだ。

「まだ歩くと足が痛みます」

お美世の方はふきげんな声でいう。

このふきげんはそう驚くことはない。足はだいぶよくなりましたというといつもふきげんになるそのふきげんだとわかっているからだ。

「しかし、少しぐらいは我慢なすって、歩き歩きおなおしになったほうがなおりが早いのです」

「またころんだらどうします」

「おころびにならないように、ゆっくりゆっくりと歩いてみられるのです。毎日一度は日にあたられたほうが、肩のお凝りにもよいのです」

肩の凝りはすでにきれいになくなっている。あまりもみ癖をつけても体によくない。だから、いまはただ軽くなでさすっているだけなのだ。

「高が肩をかしてくれるの」

ふっとお美世の方がそんな軽い口をきいて、ふ、ふとわらった。

「そんなまねをすると御用人さまにしかられるです」

「万右衛門のいない時ならいいでしょう」

お以勢のいる前では決してこんな口はきかないし、だいいち中間などとじかに口をきいてはならないのだ。

「下郎と口をおききになると、お乳母さまにしかられますよ、お方さま」

「高が先へ話しかけたのでしょ」

「ああ、そうでした。どうも失礼いたしましたです」

そんななれなれしい口をきいてみると、もうお美世の方の肢体にもその濃厚な肌のにおいにも慣れっこになっている鷹之助は、急に身分の隔たりがとれてきたような気がした。しかも、この熟れた女体は欲求不満から絶えず異常な肩の凝りをおこし、毎日按摩をほしがるのもその不満からきているのだとはっきりわかっているだけに、鷹之助の若い血はむらむらっと甘い謀反気に駆られてくる。

「お方さま、これはなんです」

鷹之助は冗談のようにいいながら、肩をさすっていた手を大胆にも胸乳のほうへすべらせていき、じんわりと寝まきの上から豊かな乳房をつかんでいった。

「まあ」

お美世の方はさすがにどきりとしたように身をすくめたが、

「くすぐったい、高」

と、その男の手を上から自分の両手でしっかりと乳の上へおさえつけている。

「高は、高枝の子なの」

あっと鷹之助は目をみはって、

「どうして、それを、お方さまは」

と、びっくりせずにはいられなかった。

「乳母から聞きました」

お美世の方はまだ男の手を乳房の上でおさえたまま、

「なにしにここへきたの」

と、うっとりとしたような甘い声音になっている。

「お方さまのお力になるようにと殿さまから申しつけられまして」

鷹之助はなんとなく冷や汗を感じてくる。

「そう――」

「なにか江戸へお使いがあればすぐに行ってまいります」

「そのことは、また後でね」

「はい」

「だれにも疑われないように、気をつけて、――美世といまこんな話をしたこと、乳母にもいってはいけません」

「なぜです、お方さま」

「高のこと、本当は乳母から聞いたのではないの」

ちらっとこっちを見あげて、お美世の方はいたずらっぽく微笑してみせる。

すると、このあいだ眠っているとばかり思っていたのに、お以勢とここで話していたことが耳に入っていたのだろうか。

それにしても、お以勢はどうして自分のことをいまだにお美世の方の耳に入れずにいるのだろう。

「高、いつまでもそんな顔をしていると人に疑われますよ」

お美世の方はそういいながら、またしても鷹之助の手を胸へじんわりとおさえつけてきた。

鷹之助の頭はひどく混乱していながら、そのくせ甘く火のように燃えている。自分の手がしっかりとお美世の方の乳房をつかんでいるからだ。女がそれを男にゆるしているのは、もう男のものになってもいいという心があるからにちがいない。

――人目が怖いぞ。

鷹之助はそれを恐れながらも、ついに我慢しきれなくなって、素早くお美世の方へのしかかるように口を吸いにいっていた。

4

その日、足の塗り薬を張りかえて後始末をしていると、

「高、ちょっときてください」

お以勢がそっと声をかけて、先に立って廊下へ出た。

「はい」

これもいつにないことなので、鷹之助はどきりとはしたが、相手がお以勢なのだから別に恐れることはないと、すぐに思いかえした。

お美世の方はとうとう男に口までゆるしたさっきの熱ぼったいたわむれに疲れたか、今日は本当にうつらうつらとしているようだ。

——おれの恋人。

鷹之助はその美しい寝顔をちらっと見ながら、よろこびが胸いっぱいにふくらんでくる。大それたことをしたという罪の意識は少しもなかった。

ふところに眠り薬が二服ある。いざとなればそれが一切を解決してくれるのだ。今はそんな気持ちにさえなっている。

お以勢は控えの間の廊下の端へ行って座って、鷹之助に庭からまわれと合図している。

鷹之助は草履をはいて、庭からその廊下先へまわっていって立った。

こうして話している分には、よそ見にはお乳母さまに小言をいわれている中間としか見えない。それがお以勢のねらいなのだろう。

「高助、困ったことになりました」

お以勢はなにか浮かない顔色をしている。

「どうかしたのですか、お乳母さま」

「実は、さきほど御用人さまがあたくしを呼んで、お方さまのお足はもうなおったのではないかというのですがねえ。本当はどうなのです、

高助」

「ああ、そのことでしたら、すっかりというわけにはいきませんが、もうだいぶおよろしいようです」

鷹之助は正直に答えて、

「わしはまだお歩きになるところを見ていないのでわかりませんが、自分用ぐらいは足していられるんでしょう」

と、こんどはこっちから聞いてみる。

「それは、人の肩をかりて歩いていられますが、なにしろお大事をとる御性分ですから」

「びっこをおひきになるでしょうね」

「まだ足首が痛むとおっしゃっているくらいですから」

お美世の方の本当の容体は、始終そばについている乳母のほうがこっちよりよく知っているくらいなのだ。

「そのように御用人さまに申し上げたのですか」

鷹之助がそういって微笑すると、

「それはそうお話はしたのだけれどねえ」

お以勢はちょっと当惑顔になりながら、

「つまり、これから先の療治は塗り薬を張りかえるだけのことなら、高助の手をわずらわすことはないのではないかというのです」

と、思いきったようにいう。

「ああ、わしが毎日奥へ通うのを用心し出したわけですね」

高助の目が急に鷹之助の目になって、声をひそめる。

「そうなの。足の療治だけならよかったのだけれど、按摩が心配になってきたようです」

「どう心配になるようなんです」

役目としてもその辺が重大問題になってくるので、一本突っこんでみた。

「江戸のお指図は、簡単にいえばどうなのです」

お以勢も真剣になって切りかえしてきた。

が、鷹之助としてはこれは正直に返事はでき

ない。
「離縁という手段を取る口実がどうしてもないか、よく事情を調べてくるようにと、御家老からいいつけられてきています」
「そのことは、御家老さまに手紙でよく申しあげてあるはずなのですがねえ」
お以勢はちらっと不服そうな顔色になる。
「御当主さまの御執心はそんなに強いのですか」
お以勢ははっきりとうなずいてみせる。
「お方さまが自害するといってもふせぎきれませんか」
「それは自害しろということなの、それともそういって脅してみろということ」
さすがに鋭い切りかえしである。
「わかりました。とてもふせぎきれないわけですな。もう一つぶしつけなことをうかがいます。先代さまは腎虚で亡くなられたほどだから、お方さまをだれにもやってはならぬと遺言されたというのは事実ですか」
お以勢はふっと顔を赤らめながら、これにもはっきりとうなずいてみせる。
こうして見ると、御殿奉公の長いお以勢は年よりもずっと若々しい感じで、顔にも体にも女の羞恥を十分に残しているようだ。
「つまり、御当主さまの御執心もそこに根強いものがある。御用人さまは無論のこと、近臣方もそれを承知しているというわけですね」
鷹之助は内心だれにともなく嫉妬のようなものを感じながら、
「それで、丸山さまはどうなのでしょう、やむをえないという気持ちでお方さまを監視しているのでしょうか」
「御用人さまの立場としては、それよりしようがないのではありませんか」
「なるほど。それで、この屋敷では、今から奥のうわさを絶対に禁じているというわけですね」
お以勢は答えない。いや、返事の言葉がない

思いなのだろう。
「お乳母さまは反対だが防ぎきれないと心配されている。お方さまはただそれを恐れていられる」
「高助、女というものは弱いのが普通でしょうからねえ」
お以勢はため息をつきながらうなだれていた。
「わかりました。なんとか考えてみます」
鷹之助にもとっさにはこれという思案はつきかねるのだ。
「それで、高助、療治のほうはどうします」
「お乳母さま、お方さまはむしろびっこになられたほうが、いまわしい執念からのがれられるんじゃありませんか」
「まあ、そなたは――」
お以勢はあきれたような顔をする。
「いまのは冗談です。しかし、もう少し足首の筋をよくかためてから多少もみほぐさないと、軽いびっこをひくようになります」
「本当ですか」
「明日わしがお方さまを芝生へおつれして歩かせてみますから、御用人さまにもそれとなく立ち会ってもらってください」
「そうですね」
「それから、正直に申しあげておきますと、お方さまの肩の凝りは血の道からきているものです。その度に按摩をとってその血を散らさないと、めまいを起こし、もっとそれが嵩じると気が狂ってこないともかぎりません。このこともお乳母さまから御用人さまによく申しあげておいてください」
お以勢に思いあたる節はあるのだろう、あっと目をみはってこっちの顔色を見すえていた。
「では、わしはこれでさがります」
「お待ち、高助」
「なにか御用でございますか」
「乳母も覚悟をきめましたから、そなたも正直

に打ちあけてください」
「なにをです」
「この間のそなたの母御の形見の守り袋の中に、薬が二服入っていましたね。あれは江戸からわたされてきた毒薬でしょう」
ずばりといいきって、お以勢は必死の目になっている。女でも武家育ちだから、この目はごまかせそうもない。持病の合い薬だなどといっても納得はしないだろう。
「あれは、お乳母さま、眠り薬です」
「眠り薬――」
「ただし、あれを一服のむと眠ったまま死にます」
「まあ」
「あれは蘭方のほうの珍しい眠り薬で、わしは師匠の戸村蘭石先生から二服わけてもらって持っているんで、江戸からわたされてきたのではありません。江戸からわたされたのなら、一服でいいはずですからね」
鷹之助はするりといいぬける。
「よくわかりました。そなたは戸村蘭石先生にもついたことがあるのですか」
「はあ、これでもへたなやぶ医者よりはましのほうです」
「そうでしょうねえ。高枝どのはよいお子を持ってうらやましい」
それは御殿奉公で一生を終わろうとする女の本音だったようだ。寂しい顔だが、その顔にはっきりと母性愛のようなものがにじみ出ていた。
「母は四年前に亡くなりました」
「うかがっています。でも、おしあわせな御一生だったのですから」
「そうかもしれません。父も母も一生恋人同士のようでしたからね」
「まあ、そなたは――」
お以勢はあきれたように明るくわらっていた。
――おれにも恋人ができた。だれにもわたしてたまるものか。
鷹之助はじめて一人で奥庭をさがりながら、しあわせが胸いっぱいにふくらんでいるような気がした。その先にあるものは、今は考えたくないと思うのである。

痴情の記

1

「高助、今日はお方さまのお足をためしてみせてくれるそうだな」
翌朝、老用人丸山万右衛門は例によって鷹之助を奥へつれていきながら、そう気軽に話しかけてきた。
昨日のお以勢の話では、老用人は高助が足の療治ばかりではなく、このごろ毎日お美世の方の体に按摩するのをきらい、なにか用心し出したということだから、今日はたぶんふきげんだろうと覚悟していたのだが、今のところ別にそんな風には見えないようだった。
「へい。あんまり怖がってばかりいても、かえってなおりがおそいです」
「そうか。すると、足首のほうももうほとんどよいのか」
「自分用は足せるようになっているんですから、少しずつお庭を歩いて足を慣らしているうちに、だんだん痛みはとれてくるです」
「では、もうびっこになるような心配はないわけだな」
「その心配はありません」
「気鬱、めまいのほうは肩の凝りからくるんだということだが、お方さまは特にそういうお体つきにできているのだろうかな」
老用人はやんわりとそれにふれてきた。
これは一口にいってしまえば、健康な女盛りの女体が欲求不満からおちいりやすい病状なので、世なれた老用人がおそらくそこへ気がつい

ていないはずはないだろうし、下郎の分際としてそんなことはあからさまに口にはできない。

「それは御体質というより、丈夫な人間が家の中でただぶらぶら遊んでいれば、男なら時々思いきりあばれてみたくなるし、女ならどうしても気鬱になってくるのです。お方さまも御自分で洗濯をされたり、台所へ出たりされてせっせと働いていれば、めったにかんしゃくはおこらなくなるです」

「なるほど――。しかし、お方さまに洗濯や台所は少し無理だな」

老用人は苦わらいをしている。

「ですから、毎日、朝と晩の二度ずつぐらい、お庭を走りまわるとか、薙刀のおけいこでもされて、汗をかいてみるといいです」

「そうか。薙刀のおけいこなどは、ちょうどいい運動かもしれぬな」

老用人もお美世の方が気鬱症にかかった時の気難しさには相当手を焼いた経験があるのだろう。

やがて奥の間の廊下先へきてみると、今朝はお美世の方は黒縮緬の被布をきせられ、まだ行儀よく座ることができないから、脇息へ腰かけて両足を投げだすようにしながらこっちの行くのを待っていた。今日はお庭を歩いてみるのだということは、すでにお以勢の口から耳へ入れてあるようだ。

「お方さま、お早うございます」

鷹之助が廊下先に立っていねいにあいさつをすると、

「高、美世はまだ足が痛みます。それでも庭へ出て歩くのですか」

と、なにをすねているのか、お美世の方はいきなり頭からふきげんそうにそう声をあびせてきた。

お以勢はそばで困ったような顔をしているし、老用人もおじぎをしただけで、黙って目を伏せている。

「お乳母さま、ちょいと失礼しますです」

鷹之助はわざとお以勢のほうへことわって、そのこと廊下からあがっていき、お美世の方の足の前へ行って座った。

「そんなにまだ痛むんですか、お方さま」

療治をまかせられている間は自分の足だし、この女体の口も乳房も昨日もうひそかにわがものにしているのだから、鷹之助は平気で無造作にすそから左手を入れてお美世の方のふくらっぱぎをつかみ、右手で軽く白布がまいてあるかかとを押しあげてみる。

「痛いというのに――」

お美世の方は甲高く叫んで、青いまゆをひそめていたが、声ほどに足のほうは痛がっていないようである。

「大丈夫です。ちょっとお立ちになってみてください」

鷹之助は立ちあがって、気軽にお美世の方の右腕をかかえて引き起こすようにする。

そのやりかたがいかにもものなれていてきぱきしているから、お美世の方も見ている者たちも言葉を入れていくすきがない。

そして、お美世の方が自分の体重をすっかり男の腕へ投げかけるようにして渋々立ちあがると、

「ゆっくり歩いてみましょう」

と、有無をいわせず廊下先までつれ出してきた。

お美世の方はまるっきり体を支えている男の腕へあずけるようにして、痛いほうの足をかばいながら、おそるおそるびっこをひいている。

「さあ、お痛みになるほうのお足から先へおろして、そっと縁に掛けてみてください」

お美世の方はちょっと不服そうな顔はしたが、もうしようがないというように、くつ脱ぎの上へそろえてある真新しい草履の上へ痛いほうの足からおろしていく。

「どっこいしょ」

お美世の方の腰が縁にかける時、鷹之助はわざと掛け声をかけてやった。
お美世の方はにこりともしない。
鷹之助は支えていたお美世の方の腕を放して、素早く自分も下へおり、かまわずさっさと草履をはかしてしまう。お美世の方の左の足のほうだけ足袋をはいていた。
お以勢も、腰元たちも、鷹之助のすることを黙って見ているほかはない。
「さあ、少しお庭を歩いてみましょう」
「高助、歩けなくなっても知りませんよ」
「大丈夫です。わし力があるから、おんぶでもなんでもできるです」
鷹之助はわらいながら、ふたたびお美世の方の右腕を自分の左腕で支えて、ゆっくりと日ざしの明るい芝生へ出た。
晩春の微風がほおにたわむれてくるようなのどかな朝である。
「日にあたるとお方さま、お気持ちがいいでしょう」
「足が痛いだけです」
「お足のことはお気になさらないほうがいいんです」
「痛いのだもの、しょうがありません」
お美世の方は当たりちらすようにとがった声でいいながら、それでもゆっくりゆっくりびっこをひきながら歩いているうちに、だんだん足もとがしっかりしてくるようだ。
久しぶりで日にさらされたお美世の方のほおはもうほんのりと桜色に上気して、におうばかり美しい。
三間ばかり離れて、うしろから腰元が二人、供についてきていた。
「高、離れへ行ってみたい」
ちょうど芝生の真ん中あたりへきて、お美世の方はふっと立ちどまり、一息入れながら小声でいった。
「かしこまりました」

鷹之助は支えている腕を放して、少しさがっておじぎをしながら答える。
それとなく廊下のほうを見ると、お以勢と老用人がじっとこっちをながめながらなにか話しあっているようだ。
「行きましょう、高」
「はい」
右腕を支えに行くと、じんわりとこっちへ体重をかけてきて、梅林の小道のほうへ歩き出しながら、
「足はまだ本当に痛みますのよ」
と、わざと顔をしかめてみせる。
「でも、我慢できないほどではございませんのでしょう」
「それは、こうして歩いているのだもの」
「もう歩き歩きお足を慣らしたほうがよろしいのです。痛みはそのうちに自然となくなります」
「いやっ、美世はいつまでも足が痛いほうがいいの」
まるっきり体重をこっちへかけてくる。
いくら世間知らずでも、お美世の方は来年は三十である。今朝の痛いのは、年だけに考えついた恋の狡智とわかってはいたが、いまこうして体ごとその恋心を投げかけられてみると、若い鷹之助の血は不敵に燃えあがってくるばかりだ。
が、うしろからついてくる腰元たちの目をどうしてふさぐつもりなのだろう。それより、お以勢のほうはともかくとして、もし老用人が用心をしてあとから茶室へ追いかけてくれば、せっかくここまでこしらえてきた芝居もそれまでのことになってしまう。
「お方さまは、昨日の御用人さまの話、聞かれましたか」
「聞いていますのよ」
「御用人さまはわしに用心し出したようです」
「でも、美世の足がなおらなければしようがありません」

「それはまあそうですけれど――」
「高、万右衛門はね、美世がだだをこねてやりますから、心配ありません」
いつか梅林の小道へ入ってきて、お美世の方は声音まで甘ったるくなっていた。

2

その日のお美世の方のやりかたは、まったく大胆なと、さすがの鷹之助も唖然とせずにはいられなかった。
小鳥の声がのどかに耳につくほど森閑とした梅林の中の離れの枝折り戸を入ると、
「小枝、そなたたちはここで待っていてください。美世はお茶室でしばらく足を休めていきますから、もしだれかここへまいったらすぐに知らせてくれますように」
お美世の方はついてきた腰元たち二人にはっきりとそういいつけたのである。その少しも悪びれたところのない清泉院さまのおっとりとした鷹揚な態度に、
「はい」
腰元たちはすなおにおじぎをして、疲れたから休息なさる、それを言葉どおりにうけとっていたようだ。
そして、お美世の方は鷹之助に支えられて離れの廊下のほうへまわり、そこから茶室へ入って、あとの障子をしめきると、
「高、とうとう二人きりになれましたね」
と、男の胸へすがるようにして顔を見あげた。
目が熱ぼったくうるんで、おはぐろがちらっとのぞいている赤いくちびるが燃えるように男の口を誘っている。
「お方さま」
鷹之助はその肩をしっかりと抱いて、のしかかるようにお美世の方の口を吸いに行った。
――もうだれがきたってかまうものか。
お美世の方があまりにも大胆なので、鷹之助もすっかり度胸をすえ、そのまま女体を横抱きにするようにしてそこへ座りこむ。
お美世の方はすでにうっとりと目をつぶっている。
被布の前がはだかると、下はいつもの白羽二重の寝まき姿で、前で結んだ淡紅色のしごきが目にしみるほどなまめかしい。
昨日寝まきの上からつかんだ豊かな乳房のふくらみがすぐ目の前にある。
――おれのものだ。
鷹之助は無造作にその衿をはだけて白桃のような乳房をあらわにすると、子供のようにいきなりその小さなかわいい乳首に吸いついていった。女盛りの甘い濃厚な肌のにおいが鼻にむらがって、激しい情欲をそそり立ててくる。それは練り絹のように白々とした光沢をたたえて、しっとりとした美しい柔肌なのである。
「高、もう切ない」
お美世の方は夢うつつになって、あえぎながら身もだえする。
いつか五彩の霧が二人きりの楽園を深く押しつつんで、そこには一切の雑念を去った男と女の火のように灼熱した赤裸々の魂が、歓喜を求めてからみあい、もつれあい、男はついに女のしごきにまで手をかけていた。
先代を腎虚させたというお美世の方の女体は、たしかに若い鷹之助を有頂天にさせずにおかなかったようだ。
「高は、お行儀が悪い」
やがてすべての興奮が歓喜の絶頂へきて、それが終わった時、帯しろ裸にされているお美世の方は困ったように前をあわせて横座りになりながら、男の顔をにらんでわらった。
「ああ、お方さまは一人で着物がきられないんですね」
大名育ちは自分で着る習慣がない。下の物までみんな家来につけさせるのである。
「そんなこともありませんのよ」
「わしが着せてあげましょうか」

「恥ずかしい、高」
そのくせ、お美世の方は手早く身じまいをして、人目から不義の名をのがれようとするずるい気持ちなど少しも持っていないようだ。
それは、優美というにはそのこと自身があまりにも動物くさい行為の後ではあるが、少しも動じた色は見せずに、自分の不器用さをいくぶん面はゆげにして、一つずつのろのろと身じまいをしていくお美世の方は、微祿者育ちの鷹之助の目には、まるで天女のようにさえなまめかしくも美しいものに見えた。
「お方さま、まだそんな風に座っては足が痛くはありませんか」
ともかく着つけのまずさを上から被布でかくしたお美世の方は、横座りではあるが、うっかりそこへ座ろうとして、
「ああ、忘れていました。痛い」
と、窮屈そうにそっと右の足を出していた。
「縁がわへ出て腰かけましょうか」
鷹之助は老用人の迎えが気になるのだ。
「まだ話がありますのよ、高」
お美世の方の女体は、たった今の火のような興奮の余燼にまだ恍惚としているらしく、とろんと目の色まで甘くなっている。
——おれはとうとうこの天女の肌をわがものにした。
それは鷹之助にとっても到底ありうべからざる夢のような歓喜である。この目がお美世の方の女体をあますところなく見きわめ、その女体が興奮して男に媚びながら身もだえするところまで、はっきりとまぶたに焼きつけている。いや、おれの血は現実に、いま目の前にあるお美世の方の体内深く食いこんで全身を甘く駆けめぐっているはずだと思うと、またしても有頂天にならずにはいられない。
が、その半面この幸福をだれにも見破られてはならないという狡智が強く胸へ突きあげてくることも否めない。それは二人の歓喜の終わりであると同時に、命の終わりでもあるからだ。
「お方さま、こんなところを御用人さまに見つけられたらただではすまないでしょう」
「かまいませんのよ。美世は高が好きなのだもの」
「それは、わしももうお方さまをだれのものにもしたくない。お方さまはわしのものだ」
「美世もそれでいいの」
「殿さまは本気にお方さまに迫るのですか」
急に嫉妬らしいものが鷹之助の胸に火のうずをまいてきた。
お美世の方はわらいながら黙ってうなずいてみせる。
「わしはいやだ。そんなこと承知できない。腕力で迫るんですか、お方さま」
「高はどうして美世をここから助け出すつもりなの。江戸ではどう考えているの」
お美世の方の目がふっと理性を取りもどしてきたようだ。
「わしはお方さまをおつれしてここを逃げ出そうと考えているんです」
鷹之助は我ながら愚かしい言葉だと思ったが、返事のしようがないのだからついロから出まかせをいうほかはなかった。
「そんなこと、できますかしら」
「できるできないより、そうするほかはないんでしょう。離縁は到底だめなんだとお乳母さまはいっているし、八月になればいやでも殿さまが帰ってきます。お方さまがおきらいなのでしょう」
「きらいです。殿さまはただ美世の体をおもちゃにしたいだけで、高のような愛情など少しもありません」
「しかし、八月がくれば、こんどはとてもだめなんでしょう」
「だめかもしれません。去年は万右衛門が味方になってくれましたし、三回忌がすむまでといってやっとのがれましたのよ」

「御用人さまがお方さまの味方になってくれたんですか」
「そのかわり、万右衛門は乳母が好きで、お以勢はそっと身をまかせてしまったようですのよ」
お美世の方の顔がほんのりと赤らんでくるのを見て、鷹之助はあっと目をみはった。
「お乳母さまがそういったんですか」
「いいえ、乳母は黙っていますけど、美世にはちゃんとわかります」
「じゃ、お方さまとわしの今日のことも、お乳母さまにはすぐわかってしまうかもしれませんね」
鷹之助は思わず苦わらいをする。
「乳母にはわかってもかまいません。あとのこともあるし」
「あとのことといいますと――」
「まあ、高は――。そなたはもう美世とお茶室へくるのはいやなの」
「そんなことあるものですか。なるほど、お乳母さまにはどうしても味方になってもらわなくてはなりませんね」
それにしても、あの老用人がお以勢と人目を忍ぶ仲になっているとは、ちょっと意外だった。
が、考えてみると、当主は執念の鬼になっているのだから、先代の忌いみも遠慮もあったものではないだろう。しかも、この屋敷中がみんな当主の味方のようなものなのだから、女たち二人の力ではとても当主の迫姦はふせぎきれない。
だから、どっちからそれを持ちかけたか、とにかくお以勢が身を犠牲にする気になったことは少しもふしぎはない。
その万右衛門の力でも今年はどうしようもないと見て、お以勢はひそかに江戸の力にすがろうとしたに違いないのだ。
「高は美世をどこへつれて逃げる気なの」
「江戸のお屋敷へ逃げこみましょう。うまく逃げこんでしまいさえすれば、いくら殿さまだってあきらめるよりしようがなくなります」

「それはそうだけれど――」
「八月までにはまだ日があります、そのことは高にまかせておいてください」
しかし、まるっきり自信のない鷹之助なのだ。
「高、美世はもうそなただけがたよりなのですから、一人で黙って江戸へ行ってしまってはいやですよ」
「そんなことはしません。わしももうお方さまのそばは一日だって離れたくない」
「きっとですね」
お美世の方は、やがてくる八月の心配より、今ここにある人目を忍んでの甘いあいびきのほうがたのしくてしようがない。そんな熱ぼったい目をして、熟れた女体に媚さえ含みながら、燃えるような情熱をたぎらせているようだった。

3

その日の茶室のあいびきは、わざわざ腰元たちを遠ざけて、半刻（一時間）ほども二人きりでゆうゆうと障子をしめきりにしていたのだから、疑えば十分疑われてもしようがない性質のものだった。
が、そのあまりにもゆうゆうとしていたことが、もし本当に不義をたのしむ者ならもっと人に疑われないように利口に立ちまわるはずだという常識的な考え方もあって、老用人はむしろそっちへ考えがいったようである。それに、御後室さまと下郎とではあまりにも身分が違いすぎるし、はじめて庭を歩いたのだから、また足でももませているのだろうと見ていたのかもしれない。
お以勢はお以勢で、鷹之助の身分を知っているから、その相談につい時がすぎたと見ていたようだ。
そして、そっちはかえってその半刻を利用して老用人がお以勢を別間へつれていった形跡さえあるのだから、世の中は案外皮肉なものだと、鷹之助は内心苦笑せずにはいられない。

とにかく、鷹之助がお美世の方の腕を支えて座敷へもどってきた時は、老用人はもうそこにはいなかった。そして、すぐに寝床へ入ったお美世の方の足の塗り薬を張りかえて帰ろうとすると、お以勢が昨日の廊下のところで待ちうけていたのである。

「高助、お茶室で江戸の話が出たのですか」

それでもお以勢は女らしい敏感さからちらっとさぐるような目をしたが、鷹之助は無造作にかまえて、

「出ましたです。お方さまは八月になるのが怖いと、ひどく沈んでおられました」

と、まことしやかに答えた。

「それはそうでしょうね」

「わしは少しぶしつけかと思いますが、お方さまに去年は本当になんにもなかったのでございますかと思いきって聞いてみたです」

これはこっちの嫉妬から、そんなさぐりが一本入れてみたかったのである。

「まあ、そんな乱暴な」

お以勢はあきれた顔をしながら、

「それはね、高助、御酒を召しあがってきて、ふいに追いまわされたことはあるのです。ですから、お方さまは余計御当主さまがお怖いのです」

と、声をひそめていた。

「では、今年はとてものがれられませんね」

「だから心配しているのです」

「御用人さまもそれは承知しているわけですか、今年はもうしようがないと」

「相手が殿さまですからね。それに、はじめはおきらいになっても、結局はおあきらめになる、それよりしようがないと考えているのかもしれません」

「なるほど――」

「そうなっていちばん困るのは、もしお子でもできてはと、それが心配なのですけれどねえ」

そんなことおれがさせるものかと鷹之助はひそかに反発を感じながら、

「それで、お足の療治のほうはどうきまったんでしょう」

と、ずばりと切り出してみる。

「それは、お一人でお庭が歩けるようになるまで、もう少し様子を見ようということになりました。八月になれば、どうしてもいやな日がくる。それまではなるべくごきげんを損じないようにと、そんな気持ちもあるんじゃないかと思います」

これはお以勢のほうから老用人に申し入れたと思われる節が多分にあるようだ。

「よくわかりました。さっそく江戸のほうとも連絡をとってみましょう」

鷹之助はそんな気やすめをいってお以勢と別れてきた。

老用人とお以勢とが人目を忍ぶ仲になってるとわかったことは、多少常軌を逸しかけている鷹之助の神経をいっそうずぶといものにしたようだ。

が、その事実からは、お美世の方を救い出す手段はどう考えてもなんにも出てこない。

お美世の方を当主の執念から救い出す手段は、江戸か古河へつれて逃げる以外にはないのだが、これとて実行するとなると到底不可能な問題ということになってくる。

――すると、おれは、役目をいいことにして、ただお方さまの女体をもてあそんでいる痴漢ということになってしまいはしないのか。

そんな反省が鷹之助の良心を絶えずとげのようにさし出すようになりはしたが、一度主従の垣をこえて赤裸々な男と女になってしまった今は、その良心の苦悩にも増して、どうしてお美世の方の女体に人知れず酔いしれることができるか、不義の歓喜を求める煩悩のほうがはるかに強いものになっていた。

そして、それはまた女盛りの女体をもてあましていたお美世の方のほうに、もっと激しいも

のが燃えていたようである。
翌朝、鷹之助はいつものとおり老用人につれられて足の療治に奥へ向かった。
「高助、昨日お方さまはあれだけ歩かれても、後で別にお足にひびいたということもなさそうだったようだな」
「へい。お痛めになられた筋は、もうたいていなおっていられるんですから、これからは怖がってばかりいないで、毎日少しずつお歩きになるほうがいいんです」
「あのびっこはほっておいても自然になおっていくのか」
「普通ならそれでいいです。ただ、お方さまのお足は実用向きでないですから、少しずつもんでほぐさないと、足をかばいすぎてびっこが癖になるかもしれないです」
「そうか。しかし、もむとまだ痛いだろう」
「少しぐらい痛くても、我慢しなければいけないです」
「さあ、その我慢がな。時々なかなかお気難しくていられるでな」
老用人は気さくに苦わらいしながら、昨日の茶室の秘密などは別に疑ってもみていないようだ。自分のほうにもたのしい秘密があったので、半刻という時の長さがさほど気にならなかったのかもしれない。
そして、今朝は廊下先までくると、
「お乳母どの、高助をつれてまいった」
と、お以勢に声をかけておいて、そこからさっさと引きかえしていった。
下郎の監視はもうお以勢まかせで大丈夫だときめているのだろう。
「お早うございます」
鷹之助は廊下へ座ってあいさつをして、
「御苦労ですね、高助」
お以勢がそれに答えてくれるのを待ってから座敷へ入っていった。
お美世の方はいつものように足を廊下のほうへ向けて寝床に横になっている。
次の間にはちゃんと腰元が二人ひかえているし、これではとても冗談口ひとつきくわけにはいかない。
お美世の方は今朝はきげんがいいのか悪いのか、寝たままじっと目をつむっているようだ。
「お乳母さま、お方さまは昨日あれからお足はお痛みにならなかったようですか」
「別にお痛みはなかったようですよ」
「では、今日も少し歩いてみられるといいんですがねえ」
お以勢と話しながら、油紙をひろげて塗り薬を練る支度にかかっていると、
「乳母――」
お美世の方がふいにふきげんそうな声で呼んで、むくりと布団の上へ起きあがった。
「どうかなさいましたか、お方さま」
お以勢がびっくりしたように聞くと、
「高に少し聞きたいことがあります。しばらく遠慮してください」
と、お美世の方はなにか思いつめた顔つきで、まともに乳母を見すえながらいう。
「はい」
お以勢はどきりとしたように顔を伏せ、それからおじぎをして静かに立ちあがると、次の間の腰元たちへ目くばせをして廊下へ出ていった。
――おどろいたなあ。
鷹之助は唖然として、脇の下へ冷や汗さえ感じる。
こっちの顔を見ないようにして立っていったお以勢の目のまわりがほんのりと赤みをさして、はっきりとなにかを感づいているようだった。そういうみずみずしい女心がまだたぶんに残っているお以勢だから、老用人の男心をさそったのだろうし、男とそんな秘密を持っている乳母だから、まだどこかになまめかしさがあるのだといえるのかもしれない。

「高、そこの障子をしめて――」
お以勢と腰元たちが出ていってしまうと、お美世の方はもう燃えるような目をかくそうとはせず、そんな大胆なことをいった。
「ここをしめてはおかしくありませんか」
「おかしくてもかまいません。高は怖いの」
そこまであからさまにいわれては、鷹之助も後へはひけなかった。
思いきって廊下の障子をしめきってしまうと、
――なるようにしかならない。
鷹之助はそんな気持ちでかっと全身の血が狂ったように燃えてきた。
そこに淡紅色のしごきをしめて男を待っている寝まき姿の女体は、もうお美世の方ではなくて、肌に激しい情欲の血をたぎらせているただの三十後家なのだ。
「お方さま――」
鷹之助は引き寄せられるように女体へ躍りかかって、荒々しくその肩を抱きしめるなり、口を口へ重ねていく。
「どうしても二人きりになりたかったの」
ぬれた赤いくちびるが切なげにいう。
「わしもおなじです」
「高はお行儀が悪いから好き」
お美世の方は自分から衿をはだけて、豊かな乳房をあらわにする。吸えというのだろう。
お美世の方は、そんな野獣のような男の愛撫を女体にうけたのは、昨日がはじめてだったに違いない。その強烈な興奮を忘れかねて、今日もあくなくそれを求めているようだ。

4

大胆にも人払いまでして男を求めたお美世の方は、あますところなく貪婪な野獣の愛撫をうけて、ただ歓喜に狂いまわっていた。白々とした素肌に紅を刷いて身もだえする女体の躍動を朝のあかるさの中でまぶたに焼きつけた鷹之助は、自分もまたその美しい女体の奴隷になって燃えつくさずにはいられなかったのである。
そして、すべてが終わった時、
「高、また明日もですのよ」
と、お美世の方は甘く腕を男の首にからんで、もう明日をねだっていた。
「お方さまは昨日のことをお乳母さまに話してしまったのですか」
「いいえ、――どうして」
「さっき人払いをした時、それがなんの人払いか、お乳母さまはちゃんと感づいていたようです」
「そうかしら」
お美世の方は男のほおにほおずりしながら、とろんとして目でわらっている。
「お乳母さまは明日わしをここへ呼ばせないかもしれません」
「そんなことありません。乳母は美世の味方ですもの」
「しかし、腰元たちの手前もあるし、こんなことが表へ知れていちばん困るのはお乳母さまですからね」
「では、高、明日はまたお茶室へ行きましょう」
「さあ、それも考え物かもしれません」
「高は夜ここへ忍んでこられないの」
「わしはこのごろずっと夜まわりの組から外されているから、夜は奥庭へ入れないんです。たとえば、忍んできたとしても、ここにはお乳母さまがいっしょにやすむのでしょう」
鷹之助は痴情にすっかり理性を失いかけているようなお美世の方がなんとなく不安になってきた。
「乳母は次の間ですし、見ても見ないふりをしてくれます」
「しかし、それではお方さまが窮屈でしょう。声ひとつ立てられませんからね」
「そんなことをいっては恥ずかしい、高」
たった今の物狂いを自分も気がついているら

しく、お美世の方はさすがにほおをそめていた。
「とにかく、お足の療治にかかりましょう。明日のことはまた明日相談すればいいのですから」
鷹之助は立っていって、廊下の障子をあけ放した。この期になっても、できれば秘密は秘密にしておきたい下司根性の働くのが、我ながらあさましくあり、気恥ずかしくもある。
「高、美世はもう一刻もそなたと離れていたくないの。いっそ江戸へ逃げましょうか」
「それがいちばんいいと思うんですがねえ」
口ではそう答えたが、それをさせないためにこの屋敷へは毎晩夜詰めの士が城から通ってくるのである。
奥へ足の療治に通い出してから夜まわりの組から自分を外したのも、そこに老用人の細心の用心があるので、とてもここからお美世の方をつれ出すことなどは不可能に近い。
いや、ひょっとしてお美世の方との不義がそうらしいと疑いをかけられただけでも、老用人はひそかに自分を暗殺しかねないかもしれぬ。
――そうだ。これはうっかりできない。
鷹之助は塗り薬を練りながらなんとなく肌寒くさえなってくる。
「どうしたの、高、急に黙りこんでしまって」
「いや、もうお乳母さまを呼びましょう。明日からここへ来られなくなるようなことでもあると、わしだって悲しい」
「そんな心配はしなくてもいいの。そなたには美世がちゃんとついているのだもの」
お美世の方は年だけに、そんな姉ぶったこともいえるようだ。
手をたたくと、お以勢はまもなく腰元をつれて座敷へもどってきたが、
「お話はおすみになったのでございますか」
と、おだやかにお美世の方に聞いて、こっちを疑うような風は気ぶりにも見せなかった。
翌朝、お美世の方はどう考えなおしたか、人払いをしようとも、茶室へ行こうともいい出さ

なかった。
ただ足の療治のあとで、しばらく横になったまま按摩をさせながら、お以勢の目がこっちを見ていないとわかると、鷹之助の手を素早くつかんで乳房の上へ持っていく。女体はそれでひそかに興奮をたのしんでいるのが鷹之助にもよくわかった。
鷹之助はまたもうすっかり知りつくしている女体を手の感触でたのしみながら、好き勝手なところをさぐりたわむれて、かえって異常な興奮におそわれたりした。
――おれはどうしても痴漢だ。
その夜、鷹之助はお美世の方の肉体ばかりが目にちらついて、激しい情欲をそそられ、なんとしても寝つかれず、しまいにはそういう自分がたまらなく情けなくなってきた。
しかも、お美世の方を救い出す手段が絶対にないとすれば、結局自分の手で一服盛らなければならない。散々痴情に狂った女体を、あげくの果てに自分の手で殺す、それこそ痴漢のする業だ。とてもおれにはできない。
それならいっそ自分からお美世の方との不義を丸山老用人にあばいて、その刺客に暗殺されてしまったほうがまだ増しだと思う。
――よし、おれはもう人目などは恐れない。明日はこっちから堂々とお方さまを茶室へつれ出してやる。
そんなやけな気持ちにさえなってくるのだ。
そして、その翌朝――。
「高助、荒木屋のおせきは、たしかお前の叔母だといっていたな」
老用人がふっとそんなことを聞いたのは、これからお美世の方の前へ出ようと奥庭をつれ立って歩いている時だった。
「へい、わしはおせきの甥っ子です」
「そのおせきがゆうべ屋敷の宇吉と駆け落ちをしたらしいという話をおまえは聞いているか」

「いいえ。それは、御用人さま、本当なんでしょうか」

鷹之助はびっくりして聞きかえした。そういえば、宇之吉は昨夜、宵の口に出ていったきり、とうとう大部屋へは帰ってきていなかった。

「今朝、部屋の藤兵衛が、荒木屋へ行って太平の口から聞いてきたというんだから、たぶん間違いないだろう」

「それなら本当だ。どうしたっていうんでしょうね」

「この間うちから、宇之吉はちょいちょいおせきを呼び出して、いっしょに歩いているのを見かけた者があるそうだ。おまえはそんな話を耳にしなかったかな」

「ちっとも知らなかったです。わしはこちらへ御奉公にあがってから一度も荒木屋へは帰ったことがないもんですから」

「宇之吉はそう悪い人間じゃないようだが、どっちからそんなことになったのか、おせきはたしか四十だといっていたな」

「へい」

「宇之吉とは十六、七も年が違うが、色恋ばかりは思案の外だというでな。もっとも、おせきは気の若いほうだったし、ちょいと宇之吉をからかってみる気で、つい深みへおちてしまったのかもしれぬ」

「荒木屋の元締めさんはさぞ怒っていなさるんでしょうねえ」

「そりゃまあ女房に駆け落ちをされて、よろこんでいるやつもないだろうが、——藤兵衛はゆうべ宇之吉が屋敷へ帰ってこないので、前からのうわさもあるし、今朝念のために荒木屋へ行ってみたんだそうだ。すると、太平が座敷へあげて、実はおせきもゆうべ出たきりで、調べてみると金も少し持ち出している。たぶん、宇之吉といっしょだろうということになったんだそうだ」

「申し訳ないです。叔母御はどうしてそんな気おこしたんかなあ」

鷹之助はおせきの気持ちを聞かされているので、おそらく小悪党ぶった宇之吉にうるさくつきまとわれて、亭主の太平の手前、家にいづらくなったんだろうとわかるだけに、そういう女心があわれになってくる。

「太平はな、藤兵衛にいっていたそうだ、まだそうとははっきりきまったわけじゃないし、世間に聞こえてあんまり自慢になる話でもないから、当分ここだけの話にしておいてくれ、おれは二人はさがさないことにするからとな。つまり、二人がどうなっても大目に見て、おせきをそっと離縁する腹なんだろうと藤兵衛はいっていた」

「申し訳ないです」

口ではいったが、鷹之助ははてなと思った。自分がここでなにか仕事をすれば、その罪が叔母になっているおせきにかかっていく、太平の気持ちの中には、その時のことが大きな含みになっているのではないかと気がついたからである。

「とにかく、色恋というやつは恐ろしい」

老用人はそれをこっちに聞かせるつもりか、自分にいい聞かせたのか、あるいはただ漫然とそういっただけのことか、ひとりごとのようにぽつんとつぶやいていた。

露の命の記

1

峰村鷹之助が清泉院お美世の方と主従の垣をこえて人目を忍ぶ邪恋におちたのは三月末の晩春のことで、二人の燃えるようなあいびきは、それから、四月、五月、六月の一夏をすごし、七月残暑のころまで、とにかく人に怪しまれもせずにつづいてきた。

それにしても、奥への出入りのことにきびしい切り髪屋敷で、そういう度かさなる激しいあ

いびきが少しも人に疑われもせずよくつづいたものだと、鷹之助は我ながらふしぎに思っていたが、それにはそれだけの理由がちゃんとあったことが、後になってだんだんわかってきたのである。

はじめのうちは、お美世の方が右足を捻挫して、その療治にかようのだとわかっているから、無論、表の者たちはだれも怪しむ者はいない。

しかし、その捻挫は二十日ほどでほとんど全快している。その後二日おき三日おきぐらいに、少しびっこをひく足の筋をもみほぐしに呼ばれていくのだ。しまいには、奥から呼びにこなくても、鷹之助はお美世の方に会いたくなるとこっちから平気で中木戸を通って奥へかよった。

人間という者は妙なもので、やかましい中木戸番も、ほかの足軽、中間たちも、それが慣れっこになってしまうと、鷹之助だけはそういう特権をゆるされている中間として特別あつかいにされていたのだ。

が、奥の女たちや、特に切り髪屋敷の責任者になっている老用人丸山万右衛門の目はとてもごまかしきれない。

お美世の方はその度に人払いをするか、自分から茶室へ鷹之助をつれていって、気のすむまで二人きりの痴情をたのしまなければ承知しないのだから、当然二人きりでいるそのかなり長い間が問題にならないはずはない。

無論、乳母のお以勢はとっくにそれを感づいていて、目をつむっているばかりでなく、そばからうまく首尾を取りつくろって、かばっていてくれる風さえあった。

お以勢がその気なのだから、若い腰元たちは黙って見ないふりをしているほかはなかったのだろう。そして、いちばんやかましいはずの丸山老用人は、完全にお以勢に口をふさがれていたのだ。

要するに、男禁制を極端に厳守してきたところに、かえってこんな大きな透き間ができてし

まったのだから、案外世の中というものは皮肉にできているものなのである。

とにかく、一度女盛りの女体に不倫の歓喜をはっきりと焼きつけられてしまったお美世の方は、相当わがまま育ちだけに、二日と鷹之助の足が遠のくともう全身の血が男を求めてたぎり狂ってくるらしく、必ず足が痛み出したと、そんな見えすいただだを平気でこねはじめるようだった。

鷹之助が迎えをうけて、このごろは行きもかえりも一人で奥へ出かけると、まず腰元たちがなんとなく座を外して、お以勢もあいさつがすむとなにかしら用にかこつけてさっさと廊下へ去っていく。

夏になってから廊下の障子はすだれ戸になっているので、人払いさえしてしまえば簡単に二人きりの世界になれるのだ。だからもう、わざわざ炎天の中を暑いおもいをして離れの茶室へ出向くことはほとんどなかった。むしろ、この居間のほうが広くて涼しいし、用心の点からいっても、ちゃんと見張りがついているから、こっちのほうが安心していられるのである。

「高、どうして毎日こないの。そなたにはもう美世があきたのかしら」

二人きりになると、お美世の方は鷹之助をすぐひざの横へ引きつけて、絶えず男のどこかへ体がふれていないと気がすまないようになよなよとまつわりつきながら、濃厚な媚態をたぎらせてくる。

「あきはしませんけど、毎日ではおかしいでしょう」

「おかしくはありませんのよ。美世はまだ足が痛いのですもの」

「それに、毎日ではお体にさわりませんか」

「そんなことありませんのよ。お以勢も毎日なのですもの」

「えっ、お乳母さまが毎日――。本当ですか、それは」

鷹之助は思わず目をみはらずにはいられなかった。

お美世の方は熱ぼったい目をしてわらいながら、はっきりうなずいてみせる。

「それは、お乳母さまのほうから呼ぶのかしら、それとも御用人さまのほうから通ってくるんですかねえ」

「さあ、どっちかしら。でも、お以勢は少しも疲れてはいないようですのよ」

それが本当なら、なるほど、お以勢はいつも血色のいい顔をしていて、そんな疲労のあとなどどこにも見せてはいない。いや、その点は老用人のほうもおなじことだ。

お以勢は死んだ母の高枝より二つか三つ上のはずだから、まだ五十を少し出たばかりだが、老用人のほうはたしか六十四、五にはなっている。そのどこにそんなたくましい精力をたくわえているのだろう。

もっとも、養生訓に老人は漏らさずということがあるにはあるが、それにしてもあの年で毎日女の肌にふれずにはいられないとすれば、その気力の若さだけでもなにか異常なものを感じさせられる。

「ああ、わかった」

「なにがわかったの、高」

「御用人さまは前からお乳母さまが好きだったとお方さまにいわれたことがありましたねえ」

「そうなの。万右衛門はとても乳母にはやさしくて、どんな無理でも陰で乳母にたのまれると、たいていのことはいけないといえなくなってしまうようですのよ」

「きっとそれなんだ。御用人さまはそのほうが並外れて強い。だから、毎日お乳母さまをかわいがらずにはいられない。その弱みがあるから、お乳母さまのいうことだけはこばむことができないんです。わしがお方さまのところへこうして通ってくるのを黙って見のがしているのは、そのおかげなんだ」

「ですから、高ももっと強くなって毎日きてくれなくては」

お美世の方もまたそのために先代を腎虚させたほどだから、濃厚な精力の持ち主だった。

若くて健康にあふれている鷹之助がそれに負けるというようなことは決してないが、しかし、あいびきもつづけざまに度かさなってくると、ついお美世の方の女体にも慣れすぎて、時にははじめのうちほどのあのすばらしい興奮を感じられないことがある。

そういう自分を刺激しようとして、このごろではだんだん女体をさいなんでたのしむことをおぼえてきていた。ちょうど季節が夏に向かっていて、裸が苦にならないのもそんないたずらを増長させる条件になっていたのかもしれない。

そして、お美世の方の脂の乗りきった女体は、どんな被虐にもたえ、はては息も絶えだえに悲鳴をもらしながらも、

「高、もっといじめて」

と、むしろその苦痛を歓喜している。

お美世の方を全裸にして、しごきでうしろ手に縛りあげ、その女体を思いのままにさいなむようないたずらが白昼堂々と行われてるのだから、それはあまりにも人間離れがしすぎていて、興奮がさめての後では、

——おれはもう痴漢以上のなにものでもなくなってしまった。

と、鷹之助は慙愧して、打ちのめされたように後悔することも度々だった。

「高はまた沈んでいる」

もう男に媚びること以外になにも考えてはいないようなお美世の方は、その度に気をもんで鷹之助のきげんをとろうとする。

「お方さま、高はあさましい悪党です」

「そんなことありませんのよ。美世と高は御夫婦もおなじことなのですから、二人きりの時はなにをしてもかまわないの」

「しかし、あまりにもお行儀が悪すぎます」
「いいの。美世はお行儀の悪いのが好きになりました」
きちんと身じまいをなおして清泉院お美世の方にかえった高雅な姿は、ついいましがたまで散乱する衣類の中で白々とのたうちまわっていた淫蕩な女体とはどうしても思えない。そっとしておけばそういう高雅な姿のままでいられる清泉院さまを、けだものじみた下司下郎が日ごとにあさましいことばかり教えて汚していくのだと思うと、鷹之助はたまらない自己嫌悪にさえおちいってくることがあった。
一つには、当主帰国の八月がすでにひと月ほどに迫ってきているのに、お美世の方を救い出す手段は、よほどの奇跡でもおこらないかぎり、絶対にありえないとわかっている。その自分の無能さが激しく良心をむちうってくるのでもある。
救い出す手段がないとすれば、いやでも自分の手で一服盛るほかない。それを、いかにも救い出す自信があるように見せかけて、あわれな犠牲者の女体をおもちゃにしている、その行為は世にも冷酷無惨な無頼漢のすることでしかない。
——おれはこんなに無能な情けない人間だったんだろうか。
そんなことを考えると、鷹之助はまったく情けなくなってくる。
高崎は夏の雷の多いところで、雷が鳴り出すとそのいちばん激しい盛りに鷹之助は用をこしらえてよく夕立の中へ出ていった。雷にうたれてしまえば、なにもかも一切終わりになる、そんな僥倖をねらう気持ちにさえなっていたのだ。

2

それは七月に入ってまもなくのことだった。
珍しくお以勢がいつもの廊下先で待っているので、

——江戸のたよりを聞かれるんだな。
と、鷹之助はどきりとしながら、そっちの庭先へ歩いていった。
当主帰国までの日限はいよいよ三十日を切れているので、お以勢も気が気ではなくなってきたのだろう。
こっちにはもうその答弁のしようがないのだからつらい。
「お乳母さま、御用でございますか」
黙ってうなずいてみせてから、お以勢は用心深くちらっとあたりを見まわす。
きれいに結いあげた丸髷にも白いものは一筋もないし、顔色もつやつやとして、肉付きのいい胸のあたり、まだ薄物だから太々としたふくらみを見せ、なるほど老用人が毎日通いたくなるのも無理からぬふしぎな若さだと、鷹之助はいまさらのように感心した。
「高助、そなたは蘭方にも心得があると申しましたね」
「はい、多少は心得ています」
「お子をおろすことができますか」
声をひそめて思いきったようにいってから、さすがに目のふちがほんのりと赤らんでくる。
「やったことはありませんが、方法だけは聞いています。お乳母さまですか」
「まあ、なにをいうの、そなたは」
お以勢はあきれたように顔を赤くしながら、
「お方さまは御懐妊のようだけれど、そなたはまだなんにも聞いていないの」
と、真顔を少しくもらせるのだ。
「本当ですか、お乳母さま」
鷹之助はがあんと頭を鉄鎚で殴りつけられたような気持ちで、わが耳を疑わずにはいられなかった。
「では、なにもお方さまからそんな話はないのですね」
「ありません。それはいつごろからなんです」
「たしか、四月、五月、六月とあれを見なかっ

たようなので、昨夜うかがってみますと、そうかもしれないとおっしゃいました。すると、御自分ではまだお子ができたとは気がつかずにいるのかもしれませんね」

「お乳母さまはゆうべそのことは申しあげなかったのですか」

「申しあげなくても、おわかりになっていると思ったのです。それに、そなたがついているのですし、もうお二人の間でそっと始末をする相談ができているのだろうから、余計なことは申しあげないほうがよいと思いましてねえ」

「わしはうっかりしていました。もっとも、少しお顔の色がさえないなとは思っていましたが、――お方さまははじめてなんで、なんにもわからないのかもしれません」

今朝も悪ふざけをよろこんでいて、そんな風は少しも見えなかったのである。

「お肉付きのよいほうですから、まだ目立つような心配はありませんが、今月あたりはもうそろそろつわりがはじまるころですからね。始末はなるべく早いほうがいいのでしょう」

「それはそうです」

「お体にさわらないようにして、早いほうがいいと思います」

「かしこまりました」

「江戸からはまだなんともいってこないの」

お以勢は当惑したように、そっとため息をついている。

「まだなんともいってきません」

「高助、ついでだから耳に入れておきますけれどねえ、御用人さまはなにもかも知っているのですよ、お二人の仲のことはねえ」

「申し訳ございません」

鷹之助はやっぱり冷や汗が出てくる。

「あたくしはあの人に、あなたのできるだけのことはどうか大目に見てあげてくださいとたのんであります。あの人も、八月がくればもう自分の力ではどうしようもない、それだけは承知

しておいてくれといって、このごろではお方さまのことについてうるさいことはなにも口にしません。わかるでしょう、高助」

「はい」

「あの人はねえ、もしこんなことが少しでも人にもれるようなことがあったら、そなたを切って、自分も腹を切ればいいと覚悟しているのです。そういうあの人を、あたくしはまだだましている、心苦しくてねえ」

お以勢はふっと気重そうに目を伏せていた。

「よくわかりました。必ず二、三日うちになんとか始末をつけます」

鷹之助はそういって、なんとも奇妙な気持ちになりながら表へかえってきた。

――いよいよ来るところへ来た。

そのことはすでに覚悟していたのだから、いまさらあわてはしない。

しかし、お美世の方の胎内に自分の子が宿っている、そんなことは考えてもいなかったことだけに、なんともふしぎな気持ちなのである。それは決して当惑した気持ちではなく、なにかびっくりしているような気持ちなのだ。

――お美世の方、そして、おれの子。

そうか、これは深い宿縁なのだ。

今まで一度も身ごもったことのないお美世の方が、はじめておれの子を宿して母親になる。それは、お美世の方は生まれた時から鷹之助の妻になるべき女体だったということで、おれは痴漢だったのではなく、その子の父親になるべきお美世の方の夫として生まれてきたのだ。

そう気がついたとたん、鷹之助は急にお美世の方を妻という身近なものに感じ、その胎内の子に強い愛情をさえ感じてきた。

――お美世、そして、おれの子。

その子はしょせん日の目は見られないだろうが、堕胎などしてたまるものかと思う。

親子三人、あの世へ行って暮らせばいいのだ。あの世へ行って、わが妻お美世がおれの子

をうむ。これはすばらしいと、鷹之助はよろこびが胸いっぱいにあふれてくる。

しかも、これはお以勢にも、御用人にも、だれにも迷惑をかけずに実行できることなのだ。

――しかし、お美世がそれを納得するだろうか。

だまして殺したくはない。親子三人であの世へ行くのだということをお美世の方がよろこんでくれなければ、おれはやっぱり不倫の罪をおかした痴漢でしかなくなってしまうのだ。

鷹之助の不安はその一点にしぼられてきた。

翌朝――。

鷹之助はいつものとおり奥へ出向いた。

お以勢は昨日のことがあるので、すぐに腰元たちに目くばせして、座を外してくれた。

「高、今日も暑くなりそうね」

お美世の方は男を目でさそいながら、なにかぐったりしているようである。顔色もたしかにさえないようだ。

「残暑ですから、暑いのはしようがないです」

鷹之助はわらいながらお美世の方のそばへいざりよって、左手で軽く肩を抱き寄せるなり、右手でぐいと女の胸をはだけにいった。

いつものことだから、お美世の方はもう軽く目をつむって、うっとりと男のするなりになっている。

鷹之助は衿からこぼれた白々と豊かな乳房をつかんで、じっと乳首を見た。それは昨日も口に含んで散々たわむれた乳首なのだが、なるほど、こうして見なおすとたしかに多少色づいてきているようだ。

「どうしたの、高」

いつもと様子が違うので、お美世の方は薄目をあいて聞く。

鷹之助はふいに激情に胸をつかれて、おはぐろのきれいな口に口をかさねていきながら、乳房を放した手が素早くお美世の方の下腹へ行って、薄ものの上からさぐるようにそこをなでまわしている。しかし、手のひらはむっちりと柔らかい下腹の肉付きを感じるだけで、それらしい感触はなにも得られない。

「お方さま、ここにもうわしの子ができているような気がする」

「そうかしら」

お美世の方は別に驚いた風もなく、とろんとした目で微笑している。

「お方さまはここしばらくあれがないんでしょう」

「ええ」

「いつごろからないんです」

「四月からかしら」

「じゃ、この春すぐにできたんだ。そんな気はちっともしないんですか」

「そういえば、このごろおなかになにかありますのよ。高の子かしら」

ちょっと面はゆげな顔になりながら、しかし、当惑したようなところは少しもない。

「無論、わしの子です。産んでくれますねえ、お方さま」

「それは産みますけれど、本当かしら」

「たぶん本当です。初産ですねえ、お方さま」

「本当だとうれしい。美世は石女だと思っていたの」

「いや、お方さまのこのおなかは、わしの子を宿すまで待っていてくれたんだ。お方さまとわしは、前世から夫婦になるようにできていたんです」

鷹之助の手はまだ愛情をこめてお美世の方の下腹をなでまわしている。

「それは美世もそう思いますのよ。それでなければ、高をこんなに好きになるはずはないもの」

「お乳母さまはまだなんにも気がつかないようですか、おなかのことは」

「そうねえ、そういえば二、三日前に月のもののことを聞いていたようだけれど」

それでもまだなんの不安も感じないようだ。

そして、いつまでも下腹をなでられている感触からしだいにいつもの興奮をさそわれてくるらしく、

「高、もういけないの、おなかにややがいては」

と、目を細めながら甘ったるい声になっている。

それが、ふいに鷹之助の異常な興奮をさそったのだ。いきなりあらわな乳房へ吸いついていくと、

「そっとね、高。お腹のややにさわるといけないから」

と、もうちゃんと胎児をかばう母親の気持ちになっている。

3

その日のそれは、こっちにも母体をいたわろうとする気持ちがあって、もう決して女体をさいなんでたのしむなどという気にはなれなかったが、それにもまさる愛情の深さが二人に歓喜を与えてくれた。

が、お美世の方のほうに不義の子を宿したという不安が少しもないので、鷹之助はどうにも来世ということを口に出しかねる。

むしろ、お美世の方のほうから、

「高はいつ美世を江戸へつれていくの」

と、のんびり切り出されて、

「今月中にはきっとおつれします」

と、苦しいうそをつく羽目におちいってしまった。

「道中はまだ暑いでしょうねえ。美世はもっとおなかが重くなるだろうし」

お美世の方はそんな心配をするだけで、あとのことは一切鷹之助を信頼してしまっているようだ。

そういう無邪気なお美世の方に、自殺のことなどとても説く勇気は出ない。

――まだ日があるんだから。

鷹之助はそうあきらめて、その日は奥をさがってきた。

しかし、それは翌日も、そのまた翌日もおなじことだった。しかも、お美世の方は日ごとにはじめて母親になったということに切実なよろこびを感じてくるらしく、明るい顔で鷹之助を迎えるのである。

「高、ゆうべは乳母がややのことを聞きましたのよ」

四、五日たってから、お美世の方がわらいながら告げた。

「とうとうわかってしまったんですね」

鷹之助はやっぱりどきりとせずにはいられない。

「美世が梅の実がほしいとたのんだものですから、もしや御懐妊ではないのですかと聞かれてしまったの」

「どう返事をしたんです、お方さまは」

「そうかもしれません、高のややですといいますとね、困ったような顔をして、高はもう存じているのでしょうねというの」

「それで――」

「ええ知っていますというと、高はどうするつもりなのかしらと心配するの、ですから、高は八月になる前に美世を江戸へつれていってくれますから、心配しなくてもいいのですというと、びっくりした顔をし、そんなことができるのですかというの」

「それは、だれだってびっくりするでしょう」

「だから、美世はいってやりました。できても、できなくても、高は美世のおなかのややの父親なのですから、美世はいっしょに江戸へ行って高をだんなさまにするのです、乳母はどうしますかと聞くと、そうですねと考えていました。乳母は万右衛門と別れるのがつらいのかもしれません」

お美世の方はあまりにもおおらかすぎると、鷹之助はひそかに胸が痛くなってきた。

こんな女神のような邪心のないひとに、とて

も自分の口から自殺などというむごたらしいことはすすめきれそうもない。

それにしても、お以勢は昨夜のお美世の方の言葉をどううけとっているだろう。また廊下先で呼びとめられて、一体どうする気なのと聞かれると、こんどこそ返事のしようがないと、なんともつらいおもいだったが、幸いその日はお以勢は廊下へ出てはこなかった。

そして、その翌日——。

今日はなんとなくお以勢に顔をあわせるのがつらくて、奥へ行きしぶっていると、四ツ（十時）ごろになって、

「高の字、御用人さまが中木戸のところでお呼びだよ」

と、珍しく小頭の丑蔵が呼びにきた。

「へい、すんません」

妙にどきりとはしたが、こっちにはそれ以上のつらい苦悶がつづいているから、手討ちにされるならむしろそのほうが気が楽だとすぐに思いかえして、いつもの中木戸へ小走りに走っていった。

今日も朝から残暑がきびしい日で、じりじりと頭から照りつけられると、寝不足の目の芯がくらくらしてきそうだった。

——しようがないです。おれのお嫁さん無邪気で、少し強すぎるものな。

ふっとそんなことを考えただけでも、お美世の方に対する愛情がじいんと胸をしめつけてくる。

子までなした仲、その事実にはみじんも悔いはなく、今はその母体がわが妻としていとしくてたまらないのだ。

「お呼びでございますか、御用人さま」

「うむ、いっしょにまいってくれ」

老用人の顔色はいつもと少しもかわりがないようだった。

なるべく日かげにそって歩く老用人についていくと、

「高助——」

老用人が振りかえって、肩をならべろと首でさそう。

「へい」

肩をならべていくと、二、三歩黙って歩いてから、

「おまえ、たしか蘭方も少し心得があるという話だったな」

と、意外なことをいい出す。

自分の口からそんなことをいったおぼえはないから、おそらくお以勢から聞いたのだろう。

「門前の小僧でございます」

「お乳母さまからなにか薬をたのまれはしなかったか」

「いいえ、別に」

こっちはまだ気がつかないから、ぽかんとした顔をしていたにちがいない。

「そうか、それならよいが、——すると、どこから手に入れたか」

「お乳母さまがどうかしたのでございますか」

「うむ、ゆうべから眠ったきり、いまだに目がさめぬ」

「眠ったきり——」

鷹之助はふいにぐらぐらっと大地がゆらぎ出したような気がした。

が、ふしぎとすぐに腹がすわってきた。

——おれには大切な役目がある。

まずそれがはっきりと頭へよみがえってきたのだ。

お以勢が眠ったきりだとすれば、お美世の方もそうにちがいない。

どうしてそんなことになったのだろう。いや、どこからそんな眠り薬を手に入れたのだろう。

——しまった。

いまも自分の胴巻きの中にある母の形見の守り袋は、一度お以勢の手にわたして、かえしてもらったのは翌日だった。

その時、あの二服の眠り薬はたしかに元のまま守り袋の中に入っていたが、中身までは調べていない。

きっとそれだ。あの時、お以勢は中身をぬいていたのである。

「あれは江戸からわたされてきた毒薬じゃないかえ」

と、後で半分なじるように聞かれたことがある。

「いいえ、あれは戸村蘭石先生からもらった蘭方の眠り薬です。しかし、分量をあやまると眠り死にするかもしれません」

たしか、こっちはそんな風に返事をしておいたはずだ。

「高助、あがれ」

いつもの奥の間はまだ雨戸がしまっていて、控えの間の廊下の戸袋口の一枚だけがあいていた。

老用人にうながされて、あとから廊下へあがると、ひんやりとした空気を肌に感じ、なによりも胸にしみるような女のほのかな甘いにおいが鼻をかすめる。

——鬼になれ。

鷹之助は奥歯をかみしめながらまずおのれをしかった。

控えの間のすだれ戸をあけると、そこに白麻の蚊帳が涼しげにつってあって、お以勢が廊下のほうをまくらに仰向けになって眠っている。薄い掛け布団を胸のあたりまでかけ、ちゃんとその胸の上で両手を組みあわせている。きれいに化粧をした顔は蒼白で、すでに息はない。

「それを見ろ、高助」

蚊帳の中へ入った老用人は、静かに掛け布団を足もとのほうへはいでいった。

お以勢は水色のしごきでひざのあたりをきちんと縛っている。覚悟の自害なのだ。

「お方さまを見ておあげせよ」

老用人の声は低くしわがれていた。

「はい」

鷹之助は蚊帳の外からお以勢に合掌して、ふすまのあけ放してあるお美世の方の蚊帳の前へ寄っていった。

4

お美世の方はお以勢とおなじ向きに、おなじように寝かされていたが、胸で組みあわせた手は後からお以勢がそうさせたらしく、組んだ手の指に力がなく、半ばほどけかけていた。

掛け布団を足もとのほうへはいでいくと、これも淡紅色のしごきできちんとひざのあたりを縛ってもらっている。

まるでいまにも目をさましそうなきれいな死に顔なのだ。

わざと控えの間のほうへ背を向けて座った鷹之助は、我にもなく右手をお美世の方の下腹の上へおいていた。まだちゃんと体温が残っている。

この下腹は昨日もこの手でなでてやった下腹で、しかもこの胎内には自分の子が宿っているのだ。

——お方さま。

なんというむごいことをしたのだろうと思うと、鷹之助はその下腹をなでさすりながら、突然こみあげてくる慟哭をあやうく歯をくいしばって声だけは必死にかみころしたが、肩を波うたせながら、滝のようにあふれ出る涙はどうすることもできなかった。

——お方さま、わしもいっしょに死にたい。なぜ一人で死んでしまったんだ。

それはおろかしい愚痴だとはわかっている。しかし、それが鷹之助のその時の本心だったのだ。いや、お美世の方の道づれは乳母ではなく、このおれだと覚悟をきめて、夫婦親子三人づれの死出の旅を夢にまで見ていたのである。

それを、とうとう妻と子だけが一足先に行っ

てしまったのだ。泣いても泣ききれない。

しかも、お美世の方は自分では死のうなどとは露いささかも考えていなかったにちがいない。明日目がさめればまた高に会えると、それをたのしみに、いま胸で組みあわせているこの手は下腹のわが子の下にあって、

「これは高のやや――」

と、ひそかにつぶやいて、わらいながら眠りについたかもしれないのだ。

――一体、これはだれの罪なのだ。

むらむらっと怒りがこみあげそうになって、鷹之助は愕然とした。

――おまえの罪だ。

はっきりと耳もとできめつける声を聞いたからだ。

おまえが無能で、いつまでもお美世の方を救う道を講じようともしない。

しかも、お美世の方はおまえの子を宿して、このままでは生きていけない体になっている。

お以勢は見るに見かねて、まだ身重が人目につかないですむかもしれない今、お美世の方を自分の手にかけ、自分もまたそれに殉じたのだ。

いわば、乳母は無能なおまえのしりぬぐいをしてくれたのだ。

よく考えてみろ。お以勢は昨夜、あの眠り薬をつわりに効く薬だからとでも偽って、人を疑うことを知らぬ無邪気なお美世の方にのませる。その眠りにおちるのを待って、きれいに後の始末をつけ、自分も死出の身じまいをして、おなじ眠り薬をのんで自分の蚊帳の中へ入ったのだ。

その胸のつらさ切なさがおまえにわかるか。

――よくわかるです、お乳母さま。

鷹之助はもう涙さえ出なくなってきた。

「高助――」

ふっと控えの間のほうから老用人が呼ぶ。

「はい」

「おまえ、そのお方さまのひざのしごきをほどいておあげしてな、元のように布団をなおして、こっちへこい」

「はい」

老用人はお以勢のひざのしごきを持って、すでにそこの廊下へ出て待っていた。

鷹之助はいいつけられたとおりにして、お美世の方のひざのしごきをとき、それを持って老用人のところへ出ていった。

「まあ座れ」

「はい」

下座へさがって座ると、薄暗い光の中の丸山老用人の顔は急にげっそりと年老いたように見えた。

「おまえな、いまお方さまのおなかに手をおいて泣いていたようだが、お方さまはお子を身ごもってでもおられるのか」

悲しみにみちた老用人の顔、声音である。

「はい。お察しのとおりでございます。どうぞわしをお手討ちに願いますです」

鷹之助はそこへすなおに両手をつかえた。

「そうか、それでやっとわかった。それではお乳母さまもこうするほかはなかったろう」

老用人はおだやかにうなずいてから、

「高助、お乳母さまは書き置き一つ残してはおらぬ。薬の包み紙さえ焼きすてているようだ。だれにも迷惑のかからぬよう、急死と見せたかったのだろう。その心根をくんで、わしはおまえにもお方さまのひざのしごきをとかせた。わかるか」

と、諭すようにいう。

「はい、よくわかるです」

「いまだからいうが、お以勢はな、八月になるまではお方さまの好きにさせてあげてくれ、そうすれば、お方さまも何事も前世からの約束ごとと思ってあきらめるだろうし、またあきらめさせてみせるとわしに誓った。だから、わしも見て見ぬふりをすることにした。そのかわり、

その時はかわいそうだがおまえには死んでもらうほかないと考えていた。しかし、こういうことになっては、いまさらおまえを手討ちにしてもしようがないし、またおまえはここで死んではならんのだ。それでは、せっかくのお乳母さまの苦労が水のあわになってしまう。よいな」

「はい」

「縁あって、おまえはお方さまの御寵愛をうけた。しかも、このお年まで石女だったお方さまがおまえの子を身ごもったのは、よくよくの宿縁があるからだろう。そのお方さまのためにも、ここは後へだれにも傷がつかないようにきれいに始末をつけてやるのが仏への供養になるのだ」

「はい」

「わしは愚かな田舎侍で、難しいことはわからぬ。しかし、わしもおまえも、またお方さまもお乳母さまも、こうなるにはこうなるだけのそれぞれの因果をしょってきているのだろう。いまさらだれが悪い、だれが間違っていたといっても、それは愚痴だ。ただ、こうなったからには、生きるも死ぬるもなるべく人に迷惑をかけてはならぬ。自分の因果は黙って自分でしょっていくほかはない。おまえもただの下郎ではあるまいから、そのくらいのわきまえはあるはずだ」

「申し訳ございません」

「いや、いまさらその遠慮はいらぬ。ここの後の始末はわしがつけるから、おまえはすぐに屋敷を出て、今日中に当地を立て。そして、二度と高崎の土を踏んではならぬ。しかと申しつけたぞ」

「はい」

一言もかえす言葉はないが、しかし、鷹之助はどうにも急にはここを立ちかねる気がするのだ。

「どうした、高助」

「はい」

「おまえ、まさかお方さまに未練があるのではなかろうな」

実は、未練があるから立ちかねるのだ。

「高助、なまじ未練を残すとお方さまに傷がつくぞ。お方さまの御寵愛は胸深くにしまって、男らしく立て。ありうべからざる夢を、いつまでも追っているものではない」

「はい、よくわかりました。それでは仰せにしたがいます」

その実、わかったのは、自分はここにいてはいけないのだということだけだった。

鷹之助はおじぎをして老用人の前を立ち、もう一度お美世の方の顔を見に行こうとしたが、それはやめた。

お美世の方のおもかげは、その胎内の子とともに、はっきりと胸の中に生きている。未練を残してはならないと気がついたからだ。

鷹之助はあらためてお美世の方の蚊帳のほうを向いて合掌し、それからお以勢の蚊帳のほうへ別れを告げて、黙って一枚あいてる戸袋口から芝生の庭へ出た。

日盛りになってきた残暑の太陽がぎらぎらと目に痛い。

切り髪屋敷を出た鷹之助は、その足ですぐ荒町の荒木屋へ帰った。

「どうしなすった、高助さん」

不審そうな目をする太平に、

「元締め、なにも聞いてくれるな。わしはすぐ江戸へ立つ」

と告げると、太平は黙ってあずかっている鷹之助の衣類大小を奥座敷へ運んできてくれた。

「元締め、えらいことになった。御用人の丸山さまが御用部屋で腹を切ってしまってね」

小頭の丑蔵があたふたと荒木屋へ駆けこんできたのは、それからまもなくのことだった。

振り出し浪人の記

1

峰村鷹之助が名もなき一介の骨つぎ浪人として、市井に骨をうずめよう、おれの生きる道はそれよりないと腹がきまって、上州藤岡の宿を立ったのは、もう秋もかなり深くなってからのことであった。

高崎の城下をぬけ出して藤岡に五十日あまり潜伏していたのは、まっすぐ江戸へ帰るのはあぶないという荒木屋太平の注意があったからだ。

鷹之助はもう一切過去のことは忘れることにした。ことに、切り髪屋敷ですごした半年あまりの月と日は、ありうべからざる夢として完全に空白にしてしまわなければならない。事実また大名の後室の胎内に下郎の子が実を結んだなどということは、あまりにも異常すぎることで、それをそうさせたすべての事情をも含めて、一切抹殺してしまうほうがいいのである。

――骨つぎ浪人峰村鷹之助、今日誕生。過去はない。

鷹之助は白紙にかえった気持ちで、藤岡の宿から表街道へ三十町、のんびりと歩いて新町の宿へ出てきた。ここで右へ道をとれば二十三里あまり歩いて江戸、左へ行けば三里歩いて高崎の城下である。鷹之助は無論右へ曲がった。

次の宿は二里歩いて本庄、時刻はいま四ツ(十時)をすぎたばかりだから、本庄で中食ということになるだろう。

身なりは黒木綿の紋服に小倉の袴、紫木綿のふろしき包みを左の肩から斜めにしょったかっこうは、柄が大きいだけにやぼそのままの律儀者に見える。この律儀そうなのが、とんだ道づれに見こまれたようだった。

「お武家さん、お早うございます」

新町の宿外れに近い休み茶屋の前を通りすぎるとまもなく、うしろから追いかけてきて声をかけた者がある。

「わしかね」

見ると、年ごろ二十七、八、どこか大店の番頭といった旅支度の、いかにも人のよさそうな男である。

「へい、お願いがございますんで」

「どんなことだ」

「ただいま主人がまいりましてごあいさつをいたしますそうでございます」

「主人はどこにいるんだね」

「あの掛け茶屋におりますので」

なるほど、その掛け茶屋から、あたまが島田髷だからまだ娘なのだろう、一目で江戸の大店育ちとわかる二十二、三のあざやかな年増娘が出てきて、小走りにこっちへくる。

「お武家さん、お呼びとめしてすみません」

娘にしては大柄のほうで、色の白い健康そうな、いかにもしゃっきりとした江戸娘ぶりである。

「番頭うじはいま主人といったようだが、あんたのことか」

「はい、あたしは江戸両国横山町の桐生屋という呉服屋の女あるじで、お光といいますの」

「ああ、女主人か。それで、わしに用というのは」

「まことにぶしつけなお願いなんですけれど、江戸まで道づれになっていただけませんかしら。少し気になることがあるもんですから」

「それなら、まあ歩きながら話そう」

どっちみちおなじほうへ行くのだから、鷹之助はかまわずゆっくりと歩き出す。

女主人だという娘も番頭のほうもきちんとしたそれらしい身なりなのだから、別に怪しい者でもないだろうが、なんとなくふにおちないことがある。

たとえこれが内儀にせよ、番頭と二人きりの

道中というのは変だ。駆け落ち者に間違えられてもしようがない。

それに、娘がこの年でまだ養子も取らずに女主人というのも少しおかしい。

「気になることがあるんだといったねえ」

肩をならべて歩き出した娘に聞いてみる。

「ええ、なんですか気になるんです」

「どんなことだね」

「今そこの茶店のおばあさんに聞いたんですが、あたしたちが休む少し前に、三人づれの浪人さんたちが休んでいったそうですの。三人とも一癖ありげな浪人さんたちだった、余計なことかもしれないが、おまえさまはおなごのことで目につきやすい、番頭さんと二人きりでは心配だから、だれかお武家さまの通るのを待っていて道づれになってもらいなさいと教えてくれましたの」

「ふうむ、三人づれねえ」

「あたしはこれで案外度胸のいいほうなんですけれど、うちの番頭の駒どんはそういうほうはからきし弱虫で、すぐ青くなるほうなんです。すみませんが、もしなにかあったら口をきいていただけませんかしら」

「そうか——。しかし、あいにくわしも見かけ倒しでな、あまり用心棒の役には立たないほうなんだ」

鷹之助は苦わらいをしてみせる。

「いいえ、お刀を抜いてくださいの、けんかをしてくださいのというんじゃないんです。おなじ包み金を出すにしても、こっちが青くなっていたんでは足もとを見られます。お武家さまがいっしょについていてくださるだけでも心丈夫な上に、損が違ってくると思うんですの」

自分で度胸がいいというだけあって、これはなかなかしっかりした娘のようだ。しっかりしているから、平気で番頭一人をつれて道中ができるのかもしれない。

「お光さんはどこへ行った帰りなんだね」

「死んだ父親の故郷が桐生なので、商い用かたがた親類へ顔を出してまいりましたの」

「あんたはだいぶしっかり者のようだな」

「ふ、ふ、これであたし、本当はもっと男みたいなんですのよ。今はまだ少し慎んでいますけれど」

「つまり、男まさりという組なんだな。なかなかたのもしい」

「失礼ですけれど、お武家さんだってずいぶんたのもしそうですわ。お強いんでございましょう」

「申しおくれたが、わしは峰村鷹之助という骨つぎ浪人でね」

剣客と間違えられては困るので、鷹之助は正直に名乗っておく。

「あら、名倉をなさるんですか」

「浪人者はなにかやらないと食っていけないんでねえ」

「お住まいは江戸ですの」

「いや、一度江戸を引き払っているんで、こんどはまた新規まきなおしなんだ」

「御新造さまはどうなさいました」

「死にました」

うっかりそれが口に出て、じいんと胸の傷口へひびいてきそうになったので、

「あんたはどうしてお婿さんをもらわないんだろうな」

と、いそいで話をそっちへ持っていく。

「好きな人がなかなか見つからないんです」

「なるほど、あんたは男まさりで、頭がよくて、度胸がある。あんたの好きになれる男は、ちょいと見あたらないかもしれないな」

「いいえ、あたしそんなにぜいたくはいいません。普通の人でいいから、おめかけなんか持たないで、あたし一人をかわいがってくれる人——。だめかしら」

「なあに、そういう律儀で立派な男も世の中にはかなりいるはずだ」

おもしろいことをいう娘だなあと鷹之助は思った。
「峰村さまは御新造さまを大切にしたんでしょう」
「うむ、ずいぶん大切にした」
「あたし、一目見た時、きっとそうだと思いましたのよ。いつごろお亡くなりになったのかしら」
「去年の秋だった」
「ああ、それで家を引き払って旅に出たんですね。お子さんはなかったんですか」
「おなかの中にあったよ」
その下腹をなでてやりながら、嗚咽した朝を突然ありありと思いうかべ、たまらなくなって、
「もうその話はやめよう、つらい」
鷹之助はそれっきり口をつぐんでしまう。
そして、いくら白紙にかえろうと覚悟しても、これだけはだめなもんだなと自分のもろさに苦笑しながら、あやうく涙さえこぼれそうになってくるのだ。
「すみません。——そんなにつらいものかしら」
お光はちらっとこっちの顔へ横目を使って、なにか白々しそうにつぶやいていた。
稲田の上の青空が深い色にからんと晴れあがって、思い出したように鳴子が鳴ると、群れすずめが空へ投網を投げたように飛び立ちひろがっていく。
おかしいのは駒どんという番頭で、さっきから一言もこっちの話の仲間入りはしようとせず、おとなしくうしろからついて歩いている。気の小さい男だというから、ふだんからこの性格の強い風変わりな女主人が苦手なのかもしれない。

2

「あたしねえ、峰村さん、これでももっと小娘のとき一度ぐれたことがあるんですよ」
本庄で予定のとおり中食をとって、深谷の宿のほうへ歩き出してから、お光がふっとそんな話をし出した。
「ふうむ。ぐれたといって、どんなぐれ方をしたんだ」
「女だてらに町へ飛び出していって、地まわりとけんかをしたり、子分をつれて盛り場をのし歩いたり、おもしろかったわ」
「子分って、やっぱり女の子か」
「いいえ、みんな自分より年の上の男の子よ、そりゃ女の子もいるにはいたけれど」
「驚いたなあ。いくつぐらいの時だ」
「十三の時から十八ぐらいの五年間ほど。つまり、色気のついた盛りなのね」
すっかりこっちの様子に慣れてきて、もう大丈夫と見たか、そんな思いきったことを平気で口にするのだ。
「どうしてまた大店の娘がそんな風にぐれ出したんだろうな」
「それがおかしいのよ。おとっつぁんが死んで、おっかさんがまだ三十後家だったでしょう。親戚中で相談して、店の一番番頭をおとっつぁんの跡へ入れたんです。それがあたしにはとてもきたならしく見えて、おっかさんがその一番番頭とまるで前のおとっつぁんとおんなじように仲よくしていると、虫酸が走ってくるんです」
「おっかさんを取られて悔しいという気持ちもあったんだろうね」
「そうかしら。ただやたらに二人ともきたならしいと思ったわ。だから、ぐれ出したんです。匕首なんかふところにしてね」
「よくそれで自分がきたならしい目にあわなかったな」
鷹之助の常識からいえば、無論ただではすんでいないと思ったのである。
「あたしがそんなことさせるもんですか。おっかさんやおとっつぁんがきたならしいと思っているくらいなんだもの。でもねえ、男はみんなおおかみのようにあたしをねらったわ。あたし

はがむしゃらだったもんだから、変なまねをするとわらいながらいきなり匕首で突き刺してしまうんです。何人もやったもんだから、あいつはくまんばちのお光だとぐれ仲間がいうようになって、しまいにはみんな手を出さなくなったのよ」

「死んだものはなかったのか」

「いいあんばいにありませんでした。もっとも、殺すとこっちも凶状持ちになると思ったから、なるべく肩か、股か、腕をねらったのよ。おとっつぁん、後のほうのだけれど、それでずいぶんお金をつかったらしいわ」

「そうか、そのきたならしいおとっつぁんが、いちいち娘の後始末をしてくれたわけだな」

「まあそういうことになるんですね」

「賭場へ行ったか」

「行ってみたかったけれど、それだけは行かなかったわ。あたしは家にお金があるんだから、別にお金はほしくないんです。後で考えてみると、おとっつぁんはあたしに家出をされるのが怖くて、お金だけは少しもかくそうとしなかったんですね。それをいいことにして、あたしは黙ってお金を持ち出しちゃ、子分たちをつれて飲んだり食ったり、芝居や見せ物を見て歩いたり、散々遊びまわって、それでも夜の四ツ（十時）ごろまでに家へ帰るんです。よそへ泊まることだけはしないでおくれっておっかさんが泣いてたのむもんだから、帰るのはきっと帰ることにしていたのよ。だから、いくらか親孝行じゃあったのね」

「それが、どういう動機で改心するようになったんだね」

「それは今夜のおたのしみにとっておきましょうよ。旅館へついて、一杯やりながらゆっくり話してあげます」

「そうか、たのしみにしていよう」

「あたしはそんなまねをして男のきたならしいのを散々見ているもんだから、それでなかなか好きな人が見つからないんですね」

お光は自分では気がつかないのだろうが、そんな高慢らしい口を平気できく。

「それはあねごがそんなきたならしい男とばかり付き合っているせいじゃないのかな」

鷹之助はそれとなく皮肉をいってやる。

「そうかしら」

「あねごはこれまで、男ときたならしいことをしてみたいと思ったことなんか一度もないか」

「いやだなあ、峰村さんは。あたしはこう見えてもかたわじゃござんせんのよ。ちゃんとした女なんだもの、好きな人に思いきり抱きしめてもらったらどんな気がするんだろうと、そんなことを考えて体中が熱くなることだってありますのよ」

これはまたあまりにも正直すぎるようだ。

「なるほど、それならいい。その気持ちは本当に好きな人が見つかるまで大切にとっておくんだね」

「そうするつもりよ」

「今でもいつも匕首を用意しているのかね」

「ふ、ふ、もっといいものを用意しているわ」

「そうか——。女は油断しないほうがいい。どこでどういう目にあわないとはかぎらないからな」

「峰村さんの御新造さまは、きっときれいなひとだったんでしょうね」

ふいにお光がそんなことを聞く。男がからかってみたくなったのだろう。

「とても美人だったよ。しかも、姉女房だったんだ」

「お仲人があったのかしら」

「いや、勝手にいっしょになった」

「たぶんそうだろうと思った。骨つぎに通ってきたひとを引っぱったんでしょ」

「うむ、当たった」

「すみにおけねえんだなあ。まさか、御亭主のあるひとじゃなかったんでしょうねえ」

お光はさっさと旅支度を取り、帯までといてしごき姿になると、

「峰村さん、ひとっぷろ浴びてきましょうよ。背中を流してあげるから、いっしょにいらっしゃい」

と、大胆にもふろへ誘うのである。

「いっしょに入ってもいいのか」

「いいわよ。本当はね、峰村さん、ほかの客がくるといやでしょ。だから、用心棒につれていくのよ」

「ああ、そうか。じゃ、用心棒をつとめてやるよ」

「駒どん、お膳をたのんでおいておくれ。一本ずつつけてね」

「へい」

おとなしい番頭は、さすがにちらっと女主人のほうを妙な目で見ていた。ほかの男といっしょにふろへ入るお光がやっぱり気にもなるし、心配にもなるのだろう。

「違うよ、後家さんだった」

「ああ、そうか。じゃ、おなかが大きくなってしまったんで、つれて駆け落ちをしたってわけね」

「うむ」

「もうこれくらいにしておいてやろうかな。また泣き出すとみっともねえや」

ひどく荒っぽい口になって、こっちを横目で見ながらわらっている。油断のならない娘だ。

本庄から深谷へ二里二十五町、深谷から熊谷へ二里二十九町、ついに問題の浪人たちに出会わなかったし、またそんなことは忘れるともなく忘れてもいた。

それにしても、お光はきかない気だけに案外達者な足で、昼から五里半近くも歩いて熊谷の宿の小松屋という上旅籠へついたのは、さすがに宵の口をすぎた時刻だった。

ここは桐生屋の泊まりつけの宿らしく、二階の二間つづきのいちばんいい座敷へ通されて、

鷹之助は袴だけとって着流しになり、小出しの紙入れのほうはふろ場へ持っていくとしても、胴巻きの五十両は不用心でふろ場へも持っていけない。といって、番頭にあずけていくのもわざとらしいし、だいいち、お光は自分で金を持っているのかいないのか、そんなことは一言も番頭に話していないのだ。

鷹之助はふっと気がついて、胴巻きの金は胴巻きごと素早く控えの間の鴨居の横額のうらへあずけて、お光の後を追っていった。

ふろ場は三人ぐらいは楽に入れる広さで、幸いほかに相客はなかった。

こっちが一足先に流し場へ出て、ちょうどころあいの湯加減だから湯ぶねにつかっていると、後から入ってきたお光はまったく少しもこっちは気にせずに、下湯をつかって平気でいっしょに湯ぶねへひたってくる。

「ちょうどいいお湯ね」

棚の上の燈心の薄ぐらい光の中へ浮き出した白々とした年増盛りの肌は、四肢がよく均斉がとれ、むっちりと肉づき豊かに、それがいやでも目の前でいきいきと息づいているのだから、ことに白桃のような乳房のあたりからこんもりと地ばれがしているような下腹部のあたり、鷹之助はつい目に痛いほど今は亡きひとの女体を連想せずにはいられなかった。

「あねご、男といっしょにふろへ入る時は、七首はどこへかくしておくんだ」

「あたまをごらんなさい。女はかんざしというものをさしていますのよ」

お光はつんと澄まして答える。意地の強そうな赤いくちびるだ。

「峰村さん、背中を流してあげようか」

やがて流し場へ出ると、お光は湯ほてりに美しく紅を刷いたようなぬれぬれとした体で形よく片ひざ立ちに座りながらこっちへいう。

「いや、遠慮しておこう。罰があたるといけない」

鷹之助もまた亡きひとが甘くまつわりついて、この上もなく情熱のかぎりをつくしてやまなかったたくましい胸幅を見せて、上がり湯で顔を洗いながらあっさり答える。

「うまくいってるわ。本当は死んだひとが怖いんでしょう」

「それもある」

「あんたその姉女房によっぽどかわいがられたね」

「うむ、死ぬまぎわまでね」

「まあ、憎らしい」

一瞬、お光は冗談にしては少しうわずった声になりながら、いまくんだばかりの桶の湯を、こっちの体へざあっとぶっかけてきた。

「熱いっ」

「うそばっかし。かんざしで突き刺してやろうかな、憎らしい」

「邪険なんだなあ、あねごは」

思わず男の目がそっちへ行っても、お光はびくともしない顔つきでそれを目でうけとめながら熱ぼったくわらっていた。

ひときわ声のいいこおろぎが、どこか身近なところで秋深い感傷をそそり立てるように鳴いている。

3

やがて、湯上がりののんびりした気持ちで、連れ立って二階へもどってみると、座敷はきれいに片づいているが、番頭の駒どんの姿が見えなかった。鷹之助は念のために、それとなく胴巻きをあずけておいた額のうらへ手をやってみると、胴巻きはちゃんとそこにある。

さっそく鏡台の前へ行って髪に櫛を入れているお光は、番頭のことは別に気にもならないのか、なんにもいわない。

「ごめんくださいまし」

そこへ女中が膳を運んできて、

「あの、番頭さんは、今のうちにお店の用足しに行ってくるから、桐生屋のおねえさんにさきにお膳をあがっていてくださいといいおいて、さっきお出かけになりました」

と、お光のほうへ告げた。

「そうお——。どうもお世話さま」

女中はそこへ膳を三人分ならべて、いそがしそうにさがっていく。膳にはちゃんと銚子が一本ずつついていた。

「さあ、峰村さん、お酌をしましょ」

お光は差し向かいの膳の前へきて、こっちの顔をいたずらっぽく見ながら自分の銚子を取りあげる。

「うれしそうだな、あねご」

「うれしいわ。これでやっと二人きりになれたんだもの」

「変なことをいうんだなあ。それはどういうわけなんだ」

「まあ、あたしにもひとつお酌をしてくださいよ」

「そうか——」

どうもなにかありそうだと思いながら、鷹之助は自分の銚子をとってお光に酌をしてやる。

「ありがとう。今夜は、あたし少しぐらい酔っても、峰さんなら大丈夫ね」

大胆にもいろっぽい目をして、目にからんでくる。

「うむ、大丈夫だ。おれはあねごのかんざしが怖い」

「いやな人——。本当はもっと怖い七首にねらわれていたの知らないんでしょ、峰さんは」

「もっと恐ろしい七首——」

「ああ、そうそう、あんたおふろへ行く時、胴巻きをどうしました」

「胴巻きって、金のことか」

「ええ」

「いいところへあずけておいたよ」

「ちゃんと無事なんでしょうね」

「無事だよ」

「そんなはずないのよ。調べてごらんなさいよ」
お光はなんとなく真剣な顔になってくる。
「いや、もう調べてみたんだ」
鷹之助はわらいながら、
「あねごはどこへ胴巻きをあずけてふろへ行ったんだ。番頭さんにかね」
どうもそれらしい様子もなかったので、ついでに聞いてみた。
「あたしはここへ持ってるのよ。ふろ場へもっていきました」
お光は自分の帯のあたりを手でなでてみせる。
「しかし、ふろへ入った時は持っていなかったじゃないか、わしはあねごのおなかをちゃんと見ているんだ」
「いやな人――。あの時はちゃんといいところへあずけておいたんです、自分の目で見えるところへ」
「ふうむ、ちっとも気がつかなかったなあ」
「本当はね、流し場のあいた桶の中へあずけておいたのよ」
お光はちょいと得意そうにわらいかけたが、
「峰さんは胴巻きをあの額のうらへあずけているんでしょう」
と、控えの間のほうを振りかえって図星をさしてきた。
「なあんだ、知っていたのか」
「ああいうところがいちばんねらわれやすいへたなかくし場所なのよ。中身の五十両はきっと偽金に化けているわ。もう一度調べてごらんなさいよ」
「なんだって――」
鷹之助はびっくりして、控えの間に立っていった。額のうらから胴巻きを取り出してみると、なるほど重さが少し違うようだ。
「あねごのいうとおりらしいなあ」
膳の前へもどって、二十五両包み二つになっている金の封印を切ってみると、なるほど中は鉛の金に化けていた。
「驚いたなあ」
「ごめんなさいね、いまわけを話すけれど、その五十両はあたしがかえしてあげます」
お光がすまなそうな顔をしていう。
「いや、金などなくなってもいいんだ。五十両は惜しいとは思わないが、どうしてこんなことになったんだろうな」
鷹之助は事実骨つぎ浪人で十分食っていける自信があるし、この五十両はいやな隠密の役をしょわされて江戸を立つとき家老から手わたされた金なのだから、あんな悲しい結果になった今となっては、未練など少しもなかった。
「昼間、あたしがぐれた話をしましたね」
「うむ、くまんばちのお光」
「そのころ、きんちゃく切りの駒吉というやつがいて、匕首で人を一人刺し殺して江戸を売ったんです。もとからうわべはおとなしそうな男でいて、根は執念深いへびのようなやつだったんですが、それが凶状持ちになってから、匕首の駒といわれるようなすごい道中師になっていたんです」
「あの番頭の駒どんがそれなんだね」
「そうなんです。桐生へいっしょについれていった番頭が、途中であたしにきたならしいまねをしようとしたんで、横っ面を引っぱたいてやったら、それっきりどこかへ行ってしまいました」
「おまえ、本当にいまだに匕首なんか持って歩いているのか」
「いいえ、あたしはかんざしでたくさんなのよ。それで身がまもれないようなら、匕首を持っていたっておんなじですもの」
「そのほうがいい。堅気の商人の娘が匕首なんか持っているのはおかしい。それで――」
「今朝、高崎の城下を出るとすぐ、あの駒吉に出会ってしまったんです。悪いやつにつかまってしまったとあたしは内心困ってしまったけれど、ああいうやつに弱みを見せたら最後どこま

でつけあがるかわからないとわかっていますから、駒の字、変なところでぶつかったもんだなと、いきなり頭から高飛車に出てやったんです。幸いあいつはあたしがまだぐれている最中に江戸を売ったきりなんで、とうとうあたしが勘当されて女道中師になりさがっているんだと勘ちがいをしてしまったんですね。女が一人で歩いている上に、あたしは胴巻きの中に百両持っているんで、あねごうまい鴨を絞めたようだなと出てきました。あたしは澄まして、これは商売物さ、おまえこそだいぶ重そうじゃないかというと、なあんだ、それじゃぽちぽちだなって、すっかり引っかかってきました」

「あねごは度胸もいいが、頭もいいんだなあ」

鷹之助は明け放しで感心する。とにかく、平気で男といっしょにふろへ入れる娘なんだから、これはたしかに常識以上の女にできているのだ。

「それで、じゃいっしょに一仕事しようということになったんですが、駒吉のねらいは半分はあたしの体だとわかっているんで、なんとか日が暮れないうちにうまく切りぬけなくてはと気が気じゃありません。ですから、今朝新町で峰さんが掛け茶屋の前を通っていくのを見た時は、本当にほっとしたんですのよ」

「どうして――」

「あいつが峰さんのふところは五十両とにらんだんです。あたしはあたしで、あの人ならたよりになると見ました」

「おれはよっぽど甘い顔をして歩いているとみえるねえ」

「そうじゃないのよ。柄は大きいし、律儀そうだし、正直にいうと、これなら道具に使えると思ったんです。ごめんなさい」

「いいとも、男はどうせ女の道具に使われるためにできているんだ」

「そう考えている峰さんは偉いからで、普通の男はみんな女を道具にしたがっているんじゃないかしら。だから、女を見るとすぐにきたならしい欲ばかり起こしたがるんだと思うわ」

「よろしい、その話はまた後で勝負をつけるとして、あねごはどういう風におれを道具に使おうと思ったんだね」

「それは、峰さんはもうあたしの道具に使われちまったんだから、たいていわかっているんでしょ。あたしはあいつに、とにかくあの男を呼びとめろ、後のことはあたしがうまくやってみせると、そこであんたを呼びとめさせたんです」

「すると、変な浪人者が三人歩いているといったのは口から出まかせなんだな」

「そうよ。峰さんはあたしたちのことちっとも疑わなかったようね」

「あいにく、おれは人を疑うほど利口な人間にできちゃいないんだ」

「結構でございます。そういうところがきっと姉女房の気に入ったのね」

「そうかもしれないな」

「あんたさっき、赤ん坊の話が出たら泣きそうになったでしょ、憎らしい」

そんなことまですっぱぬいて、お光はちょいと悔しそうな顔をする。火のような女だけに、時としてうっかり自分の感情がまる出しになってしまうのだろう。

「おれも憎らしかったな」

「どうしてさ」

「さっきふろ場でひょいとおまえの下っ腹を見た時、その中に赤ん坊が入っているような気がして、ぎょっとしたんだ」

「思い出したのね、いけ好かない」

「いい面の皮だな。自分の胴巻きを抜かれているのも知らないで、人のおなかに見とれていたんだからな」

「そのとおりよ。あたしはそのつもりであんたをふろへ誘ったんだもの。その後であいつが五十両を鉛とすりかえて、一足先に熊谷土手へ行って待っている。あたしはあんたをうまく寝か

しつけてから熊谷土手へ行って、あいつと五十両を山分けにしようということになっていたのよ」

「ふうむ。すると、あいつは今ごろ熊谷土手で待っているわけか」

鷹之助は思わず目をみはる。

「追いかけてみる、峰さん」

「いや、よそう。おかげでおれはきたならしいことを知らないあねごの弁天さまのような裸を拝ましてもらったんだ。あの五十両はお賽銭にしておこう」

「欲がないんだなあ」

お光はあきれたような顔をしながら、

「本当はね、峰さん、さっきもあたしはふところに百両持っているといったでしょ。あのへびのような執念深い駒吉に百両とられた上、体までねらわれるくらいなら、あいつにあんたの五十両をくれてやって、後であんたにはあたしの五十両をかえせば損は五十両ですむという算盤をはじいたんです。ですから、あんたの五十両はいまここでかえします」

と、さっそく両手を内ふところへ入れようとする。

「待った、あねご」

「どうして――」

「もし後からあねごが熊谷土手へ山分けの金を取りに出かけなかったらどういうことになるんだ」

「あの男はよろこんで五十両を自分一人のものにしてしまうだけのことよ」

「いや、そうはいくまい。こんどはあねごをねらいそうだな」

「だって、あたしには峰さんがついているもの、そこまではあきらめるんじゃないかしら」

お光はそんなのんきなことをいう。

「いや、あの男はどうも五十両の金よりおまえの体のほうをねらっているかもしれないぞ。それに、おまえさえ手に入れれば、おまえはともかくも桐生屋の女主人なんだからな」

「そうかしら」

「おれはきっとそうだと思う」

「じゃ、賭けをしましょうか」

「どんな賭けだ」

「もし江戸へつくまでにあいつがまた姿を見せるようならあんたの勝ち、二度と見せなかったらあたしの勝ち」

「それで、なにを賭けるんだ」

「勝った者が主人で、負けた者は家来になるのよ」

お光は熱ぼったい目をしながらそんな挑戦をしてきた。

「そいつはちょいとあぶない賭けだが、まあいいだろう」

こっちがあっさりその賭けを承知すると、お光はじっとさぐるような目をして男の顔を見ていた。

4

翌朝――。

鷹之助とお光は小松屋を一番立ちにした。

どっちもそんなに早く立つ必要もない旅なのだが、夜明け前に鷹之助がふっと目をさましてみると、まくらをならべているお光がため息をついているようである。

暗くした有り明け行燈の下にこおろぎがしいんと鳴いていた。

「どうした、あねご。眠れないのか」

鷹之助はこっちから声をかけてみた。

「ええ、ひと眠りしたと思ったら、目がさめちまったのよ」

お光はこっちへあたまを見せたまましめっぽい声で答える。

「おれのいびきがじゃまになったかな」

「そうでもないんだけれど――」

「ああ、賭けのことを気にしているんだな。あ

んな賭けは取り消してもいいんだよ」
「違うのよ。あたし、ずいぶん親不孝をしてしまったと思って、それを考えていたのよ」
「そうか――。親のことをねえ」
鷹之助もまた若くして両親に死に別れているのだ。
「あたし、おっかさんと二度目のおとっつぁんがきたならしいといっていたでしょ」
「うむ」
「いま考えてみると、ちっともそうじゃなかったのね」
「それは、年をとればだんだんにわかってくることなんだ」
「あたしがぐれているのをやめたのはね、二度目のおとっつぁんが、あたしが桐生屋をつぶす分にはつぶしてもいいと考えていることがわかったからなんです。おとっつぁんは先代からあたしというわがまま娘とおっかさんをあずかっているんだと考えていたのね」
「なるほど――」
「おとっつぁんはあたしに小言ひとついわずに、陰にまわってずいぶんお金をつかっていたんです。それでなければ、あたしがあんな乱暴なまねをして、今まで無事に生きていられるはずはないんです」
「まあ、それはそうだろうな」
「おっかさんはそういうあたしのことを心配したり、おとっつぁんにすまながったり、だから、両方でなぐさめあって、とても夫婦仲はよかったんですね。まだそんな年じゃなかったけれど、おとっつぁんが十日ばかり寝こんであっけなく死んでしまうと、半年もたたないうちに、おっかさんも後を追って行ってしまったのよ」
くすんと鼻を一つ鳴らしたお光は、
「あたし、なんだか急におとっつぁんとおっかさんのお墓まいりに行きたくなっちまった。早く江戸へ帰りたい」
と、子供のようなことをいいだしたのである。

じゃ今日は一番立ちにしようということになって、夜の白々明けに宿を立ってきたのである。
外は霧の深い朝になっていて、ほとんどまだ人通りはなかった。
熊谷の宿を出外れると、吹上まで桜並木の熊谷土手が二十町あまりつづく。視界を乳色につつまれた並木道は、まるで雲の上を歩いているような気持ちだった。
「桐生屋の店はいまだれがやっているんだ」
どう気が強くてもこの娘一人では切りまわしきれないだろうと思ったので、鷹之助は聞いてみた。
「おっかさんのほうの伯父さん夫婦がやっていてくれるのよ。あたしはただ勝手に自分の好きな商いをしていればいいの」
「商いは好きなのか」
「好きよ。もうかる時があるんだもの」
いかにもお光らしいいい方である。
向こうからひたひたと足音が近づいてくるなと前を気をつけているうちに、ふいに霧の中から飛脚が出てきて、
「お早うございます、だんな」
とあいさつをした。
「お早う。御苦労だね」
「どういたしやして。この少し先にねえ、だんな、辻切り、じゃない、辻切られが倒れていやすから、お気をつけなすって」
中年の飛脚はそう教えておいて、またひたひたと霧の中へ消えていった。
「怖いなあ、あたし」
お光がそっと鷹之助の手をさぐってくる。
「もう死んでいるんだから、怖いことはないよ。人間は生きているうちが怖いんだ」
鷹之助はわらいながらお光の手をひいてやる。冷たい手だった。
「あねごは急に弱虫になったようだな」
「ふ、ふ、あたし昨日からどうかしちまったみ

お荷物娘の記

1

武州熊谷から鴻ノ巣へ四里六町、日の出ごろから霧が晴れ出して、今日もからりと晴れた秋日和になってきた。

昨日から道連れになっている江戸両国横山町の呉服太物商桐生屋の娘だというお光は、鷹之助の常識ではちょいと考えられない風変わりなところがあって、それだけにまたひどく変わった宿命をしょって生まれてきているようでもあった。

妙な宿命をしょっているという点では、峰村鷹之助もまたこの娘に勝るとも劣らぬものをしょっているので、鷹之助はなんとなくお光に同情せずにはいられない。

とはいっても、お光は人に同情されてよろこびそうな女ではない。

たい」

ちょうど熊谷土手の中ほどまでくると、そこの桜の根方に、右肩を深く切られた男がうつぶせになって倒れていた。

番頭風の男で、昨夜のうちに切られたものらしい。

「あっ、駒吉だわ、峰村さん」

お光がいきなりすがりついてくる。

「そうらしいな」

鷹之助はお光の肩を抱くようにしてさっさとそこを通りすぎてから、

「あねご、賭けはこれでお流れになったな。死んでしまったんじゃしようがない」

と、苦わらいをしながらいった。

白い霧が音もなくすいすいと二人の目の前を流れていく。

ぶような甘い娘ではなく、あくまでも自分の宿命と闘って生きていこうとする覇気と強情さを持っていて、まだ弱音など吐いていないのである。

そういう勝ち気で純粋な性分が、この娘に女にあるまじき無法にも似た思いきった行動をとらせ、それがまたお光の歩いていく女の道をいよいよ変わったものにするという因果をこの娘はしっているようだ。

その点、鷹之助の宿命が外から強いられたものとすれば、お光の宿命は自分から求めたものといえるかもしれない。

「ねえ、峰村さん、ゆうべの賭けはあたしの負けかもしれないわ」

やがて吹上の立て場を出外れるころになって、お光はふっと思い出したようにそれを口にした。

「どうしてだ、あねご」

「だって、駒吉は熊谷のほうを向いて倒れていたし、あの切られ方はうしろからふいに一太刀でやられたんじゃないかしら」

「うむ、うしろから袈裟がけにやられていたようだな。やったやつはかなり腕の立つ男だ」

「あたしはねえ、峰さん、あいつはかなりえげつないほうの悪党だから、うまく五十両手に入れてみると、急にあたしと山分けをするのが惜しくなって、きっと一人で持ち逃げをするんじゃないかとみていたんですのよ。それを、あいつ、やっぱりあたしを待っていたんですね。とうとうあたしが行かないもんだから、様子を見にもう一度熊谷へ引きかえそうとして、うしろから辻切りにあんな風にやられてしまったんです」

「どうもそういうことになりそうだな。わしはゆうべあねごにその話を聞いた時から、駒吉は金よりあねごの体をねらいそうだと見ていた」

「ばからしい、だれがあんなやつなんかに」

お光は頭からばかにしたようにわらいながら、そんな男の執念など自分の知恵と力できっ

とふせげるという自負めいたうぬぼれを持っているようだ。

それが鷹之助にはなんとなくあぶなっかしく見えてしようがない。

「そういえば、あねごは店の番頭を一人つれて桐生へ行ってきたんだといっていたねえ」

「そうですのよ」

「後見人の伯父さん夫婦が、よくそんなあぶないことを許したもんだなあ」

「あたしはくまんばちのお光だって昨日話したでしょ。普通の娘とは少しちがいますのよ」

「そりゃあねごにはそういう自信があるだろうが、——伯父さんてのはおっかさんのほうの兄なのか」

「ええ、おっかさんの兄で、今年四十八。儀兵衛っていいますのよ」

「いい伯父さんなんだろう」

「昔からいい伯父さんでした。だから、本郷のほうへ桐生屋の分店を持っていたのを、おっかさんが去年の春死ぬ時、あたしのために横山町へ帰ってきてもらったんです」

「伯母さんもいっしょだといったね」

「伯母さんはおたきさんといって、伯父さんの後妻なのよ。十五ぐらい年が若いのかしら。本郷には伯父さんの長男がもうお嫁をもらっているもんだから、うちへくるまでは外に囲われていたおめかけさんだったのを、こんど本妻におしてうちへつれてきたんです」

「じゃ、きれいな人なんだな」

「そうね、派手好きで、おしゃれで、伯父さんはとても気に入っているようですのよ。なんだかきたならしい」

「あねごにこんど横っ面を引っぱたかれたって番頭は、一口にいってどんな男なんだ」

「和助といってうちの三番番頭なんです。おとなしくて、とてもまじめな男だったんですがねえ。だから、伯父さんも和助ともう一人出入りの頭をつれていけっていってくれたんですけれど、あたしは和助一人でたくさんだっていったんです。それを和助はなにか勘違いをしてしまったのかもしれない」

「男はたいていうぬぼれが強くて、きたならしくできているものなんだ」

鷹之助は苦わらいをしながら、いちばんはじめにあのひとの乳房をつかんで誘いに行ったのはおれのほうからだったと、ふっとそんなことを思い出す。

「でも、峰村さんはちっとも勘違いなんかしなかったじゃありませんか、憎らしい」

「おれはあねごのかんざしが怖いんでねえ。その和助の時は、かんざしはつかわなかったのか」

「あたしが和助なんかにそこまでずうずうしいまねをさせるもんですか」

「なるほど、和助はあねごがくまんばちのお光のころをよく知っているわけだからな」

「それもあったんでしょうね。行きも、桐生へ行ってからも、とても神妙でしたのよ。それが、おとといの晩、高崎の城下へ入ろうとする時になって、急にねちねちと変なことをいい出したんです」

「つまり、くどき出したのかね」

「それも、人をおどしにかけるような、いやらしいくどき方なの。お嬢さん、こんなことをあたしからお耳に入れるのはどうかと思うんですが、人の欲というものは親子の間でも油断はできないものなんです。お嬢さんは桐生屋の一人娘で、もしお嬢さんさえいなければ、桐生屋のお店はだれのものになるかよくわかっておいでになるんでしょうと、早くいえば伯父さんが桐生屋をねらっているようなことをいうの」

「なるほど。それで——」

鷹之助は人のことながらこれは聞きのがせない話だと直感した。

「あたしはずるいから、いいたいだけいわせてやろうと思って、それ本当なの和助って、わざとびっくりしたような顔をしてやったの。和助

はすっかり調子に乗って、あたしは証拠のないことをお嬢さんのお耳に入れるようなそんなかるはずみな男じゃありません。こんなことが表ざたになれば、それこそ血で血を洗うようなことになって、お店がめちゃくちゃになってしまいます。いちばんいいのは、お嬢さんがすぐにも養子をきめて身をかためることで、それには桐生屋のことをよく知っている者がいいんです。よそからなんにも知らない若だんな育ちの人を入れたってうまくはいきません。亡くなったおかみさんがお店の中から先代を跡へおなおしになったように、お店の者がいちばんいいんですと、和助は忠義顔をしてすすめていました。証拠って、和助はどんな証拠を握っているのと聞いてやると、それはお嬢さんの覚悟をちゃんと聞いた上でないと、あたしも命がけのことになるんだから、うっかり口にできないんですと逃げてしまうのよ」

「それは和助を婿にしろというなぞなんだね」

「そうらしいんですのよ。だから、あたしがわざと黙って歩いていると、お嬢さん、あなたは本当にいまあぶない断崖の上に立っているんですよ。江戸へ帰ってからではもうおそいんです。正直にいえば、お嬢さんを助けてあげられるのはこの和助一人しかいないんですと、和助はだんだん夢中になってきて、しまいにはあたしはお嬢さんのためになら命もいらないと思っているんですと、手まで握ってくるのよ。だから、あたし、じゃ和助はどうすればあたしにその本当の証拠ってのを見せてくれるのと聞いてやると、夫婦の約束をしてくださいといって、いきなりあたしをどこかの社の森の中へ引っぱっていこうとするんです。あたしはもう我慢ができなくなって、ばかっ、いいかげんにしないかと、思いきり横っ面を張り飛ばしてやったわ」

「ふうむ。和助はどうした。怒って腕力ざたに出てこなかったかね」

「そんなことをしたら、こんどはかんざしだわ。けれど、和助はよっぽどびっくりしたのね、ぼかあんとした顔になって、お嬢さんはあたしのいったことをうそだと思っているんだとうらめしそうにいうから、あたしはそんなことを真にうけておまえなんかにだまされるほど甘くはないんだよと啖呵をきって、さっさと一人で高崎の城下へきちまったんです。それでもあたしは、旅籠へついてから、もしや和助がわびを入れてくるんじゃないかしら、それだったら長年お店でつとめあげてきた番頭なんだから、一度は許してやってもいいと考えていました。けれど、和助はとうとうあやまってこないのよ。ばかなやつね、これからどうするつもりでいるのかしら」

さすがにお光はなんとなく寂しそうな声になっている。

秋の日はようやく高くなって、よく熟れた稲田の向こうから時々もずの鋭い声が耳につくようになってきた。

2

「その和助という番頭は、いくつぐらいの男なんだね」

お光のこの話にはどうも解せないところがあるので、鷹之助は聞いてみた。

「今年二十八ぐらいかしら」

「金はいくらか持たせてあったのか」

「路銀をわたしてあるぐらいのものよ」

「あねごがふところに百両持っていることは、無論知っているんだろう」

「それは知っています。このお金は、桐生の親戚に融通してあったのを、ついでだから持っていってくれといわれて、和助もいる前でわたされたんですから」

「あねご、わしにはなんだかふにおちないところがある」

「なにがふにおちないの、峰村さん」

お光はちょっとこっちを見て不審そうな顔を

する。

この娘は自分でもいうとおり、わがままで、大胆で、無鉄砲で、かっとなると相当悪たれることも知っているが、こうして落ち着いている時は聡明そうないきいきと澄んだ目を持っている。おそらく、きたないことはまだ本当に一度も知らないかもしれない。いや、母親が後夫を入れたのは子供心にきたならしいと思ったくらいだから、そういうことにはひどく潔癖な性分なのだろう。

「変なことを聞くがなあ、あねご、伯父さんと伯母さんといっしょに住んでみて、なにかきたならしいと思ったことはないか」

「いやだなあ、あたしはもう二十三なのよ、峰村さん。そんなことをきたならしいと思う年じゃないじゃありませんか。自分がそろそろだんなさまを持とうかなと考えることもあるんだもの」

お光は正直にいって、ふと顔を赤らめている。

「なるほど、それはたしかにそうだな。正しい夫婦というものは、決してきたないものじゃない。どうだ、若い伯母御は伯父さんにほれきっているようか」

「どうしてそんなことを聞くのかしら」

「まあいいだろう。じゃ、あねごは、和助がなにか証拠を握っているなどということは、口から出まかせだと見ているんだね」

「ええ。本当にそんな証拠があるんなら、それを見せて恩にきせてから夫婦になってくれと出たほうが、引っぱたかれずにすむんじゃないかしら」

「それはたしかにそうなんだ。和助が本当にあねごの身を心配している忠僕なら、あねごの婿になってやろうと考える前に、まず証拠を見せて善後策を立てるほうが先だ。それから、もう一つの考え方は、和助がただあねごの婿になりたくて、証拠もないのにそんなうそをいっていよろうとしたのなら、その前にあねごの寝こみを襲って、いやおうなしに自分のものにしてしまったほうが手っ取り早い。また、そのほうが成功する率も多い」

「だれがそんなことをさせるもんですか。あたしをあんまり甘く見てもらいたくありませんのよ」

お光はぷっとふくれてみせる。

「いや、事実はそんなことをさせるほど甘いあねごじゃないにしても、和助はそう考えて、そっちの手段を取ったろうとわしはいいたいんだ」

「だからどうだっていいたいの、峰村さん」

「わしは、和助はなにか証拠を握っているから、その証拠にたよる手段に出たと考えたいな」

「なんですって――」

「だいいち、わしは、いくらあねごが和助だけつれていけばいいといっても、若い番頭と二人きりであねごを道中に出すのは、伯父御夫婦の間違いだと思う。本当にあねごに愛情のある伯父御夫婦なら、いい年をしてそんな常識を踏み外すようなことはまずないだろうと思う」

「じゃ、峰村さんは伯父さんたちになにか悪いたくらみがあるというんですか」

お光はむっとしたように顔色をかえる。

「賭けようか、あねご」

「なにを賭けるの」

「江戸へ入る前に、和助はもう一度必ずあねごをねらう。今日までなんにもできなかったのは、駒吉が余計な飛び入りをした上にわしという道づれまでできてしまったからで、今日か明日、和助はきっとなにかたくらんでくる」

「そうかしら。――でも、だから伯父さんたち夫婦がうしろで和助の糸をひいているとはいえないんじゃないかしら」

「その答えは実際にぶつかるまで待ってみることにしよう。わしの考えがまるっきり外れていれば、おたがいにこれに越したことはないんだからね」

鷹之助はそれっきりその話は打ち切ることにした。そんなことはないと信じているお光に、無理にいやな心配を強いることはないと思ったからだ。

が、鷹之助は、自分が主君の密命をうけてあのひとを毒殺しに行った帰りだけに、もしお光の伯父儀兵衛夫婦に桐生屋を横領しようという悪心があるとすれば、和助は儀兵衛から、お光を好きにして殺してくれとたのまれているのではないかと、ふっとそんなことを連想してしまったのである。

お光は一度女だてらにぐれて、地まわりに取りまかれていたことのある札つきの娘だから、伯父の儀兵衛としては桐生屋ののれんをまもるためにという名目をこしらえることができる。

和助がその口実を真にうけるうけないは別にして、和助にはうまく人に知れないようにお光を殺せる手段があるだろうか。

それがあるとすれば、やっぱり自分の場合とおなじように、眠り死にをするような麻薬を用いるほかはない。

かりに和助がそういう毒薬を儀兵衛からわたされているとしたら、どんな気持ちをおこすだろう。

和助は、お光が自分を養子婿にしてくれる気にさえなってくれれば、逆に儀兵衛の悪謀をあばいて、自分が桐生屋の主人になることができるのだ。

しかし、これは先にお光に真相を打ちあけて夫婦になってくれと迫っても、お光がそれを承知してくれなければ、完全に和助の失敗ということになってしまう。だから、証拠のあることを強調して、まずお光を自分のものにしておこうという手段をとった。

――この空想はあまりにもおれの独断すぎるかな。

鷹之助は何度もそう考えなおしてみながら、一度おちこんだこの仮想からどうしてもぬけきれないものがあるような気がしてならない。

とすると、お光をくどき落とすことに失敗した和助は、なんとかして江戸へ入る前にお光の口をふさいでしまわないと、やっぱり自分の身が立たないことになってくるのだ。

「なにをそんなに考えこんでいるんですよう、峰村さん」

その実、お光もさっきからなにかしきりに考えこみながら歩いていたくせに、その重苦しい気持ちをまぎらそうとでもするように、いきなりどんと肩をぶつけてきた。

「あねご、昼にはまだ少し早いが、ここで中食をとっていこうか」

すでに鴻ノ巣の宿へかかってきて、今朝は熊谷を一番立ちしているから、時刻はかれこれ四ツ半（十一時）に近い。

「あたし、まだそんなにおなかはすいていませんのよ」

「しかし、この次の宿は桶川で、二里近くある。途中でおなかがすいてきても、桶川まではなんにもないぞ」

「じゃ、峰村さん、ここでお酒のんでもいい」

お光はいたずらっぽくわらいながらそっと耳もとへ聞く。

「そりゃのんでもいいが、酒をのむと歩くのがいやになりはしないか」

「歩くのがいやになったら泊まっちまう」

そんなわがままを口にしながら、

「あんたが変なことばかりいうもんだから、くさくさしてしようがありゃしない」

と、冗談のようにとうとう本音を吐いていた。

「そうだ、あねごにわしがいいものをあげよう」

「なにをくれるの、峰村さん」

お光が子供のようにさっと目を輝かす。

「まあ、あそこへ休んでから出してあげる」

鷹之助はちょうど目についた宿の中ほどのこぎれいな中食所へ先に立っていった。

「いらっしゃいまし」

時分どきよりまだだいぶ早めなので、土間はがらんとしてほかに客はない。

「さあ、峰村さん、いいものを出してみせて」

床几にかけて、鷹之助が小女に中食を二人前注文するのを待ちかねていたように、お光はさっそく白い手を出す。

「これだよ」

鷹之助は胴巻きの中をさぐって、母の形見の錦の袋を取り出して、無造作にお光にわたしてやった。

「あら、これお守り袋ね」

「中をあけてごらん」

お光はちょっとなあんだといいたげな顔をして、器用な指で袋のひもをとき、中から守り札をつかみ出す。

それは赤銅の地金の表に金で彫った高さ一寸ほどの精巧な聖観音像がはめこんである逸品で、裏には観音経が細字できざみこんである。

「まあ」

しいんと澄んだ秋気を吸って燦然と光る観音像を一目見たお光は、たちまちそのおごそかにも美しい観音像に魂まで吸いつけられたようだ。うつむいた顔が薄紅を刷いたように興奮している。

「あねごは今はみなし子で寂しそうだから、それをあげよう。それをいつも肌身につけていて、寂しくなったら、南無大悲大慈の観世音さま、人にも我にも慈悲を垂れたまえと念じてごらん。きっと気持ちがすがすがしくなる」

鷹之助はそう教えてやったが、耳に入ったのか入らないのか、お光は観音像に見入ったまま返事をしようともしなかった。

3

「ねえ、あたしがさっきもらったこの観音さま、峰村さんのおっかさんの形見だっていいましたね」

お光の口からあらためてその話が出たのは、

鴻ノ巣で軽い中食をすませ、そこを出て、やがて宿外れへかかってきてからであった。

お光はその観音像のお守りがすっかり気に入ってしまったらしく、それを肌身につけてからもひどく感動している様子で、中食の膳にさえうわのそらで、ほんの少し箸をつけただけなのである。

「あねごはそのお守りがだいぶ気に入ったようだなあ」

「ええ、あたしとてもうれしいの。もったいないけれど、こうしているとなんだか自分が観音さまになったようなのよ」

帯のあたりを大切そうに手でおさえながら、お光はそんな子供のようなことをいう。

「そんなによろこんでもらえば、おふくろさまもきっとうれしいだろう。わしのおふくろさまはねえ、ある大名の奥方さまに仕えていて、その奥方さまがお亡くなりになる時、そのお守りをお手ずから形見にいただいたんだそうだ」

「じゃ、これはもとお大名の奥方さまのお守りだったのね。道理で、こんな見事な観音さま、あたし見たこともないと思ったわ」

お光はまたしても目を輝かせながら、

「どうして峰村さんはそんな大切なものをあたしにくれたのかしら」

と、いまさらのように不審そうな顔をする。

「わしはその観音さまに一度もう命を助けてもらっているんだ。仏の慈悲というものはいつまでも一人のものにしておくもんじゃない。だから、こんどはあねごがその慈悲に浴する番だと思ってね」

鷹之助はその守り袋の中へ、そこがいちばん安全だと思って、二服の眠り薬を入れて江戸を立ってきた。それが、いつの間にか乳母のお以勢の手でぬきとられていて、自分だけこうして生き残ったのは、やっぱりこの守り袋の不思議な慈悲があったからだろうと、今ではそんな気がしている。

そして、惜しからぬ命を助かってこの世に生き残ったということは、この世でもっと苦しい罪のつぐないをしろという仏の意思かもしれないと、そうも考えている。

「ねえ、峰村さんはどうしてこの観音さまを死んだ御新造さんにあげなかったの。そうすれば、そのひと死なずにすんだかもしれないでしょ」

お光はふっとそんな痛いところをついてくる。

「それが人の運というやつなんだな。そのころわしはまだおふくろさまの形見だからその守り袋を胴巻きの中へ入れていただけで、そんな功徳などということは考えてもいなかった。むしろ、神仏は敬うもので、たよるものではないと教えられていたくらいでね。ところが、二人でいっしょに食った総菜が、女房にあたって、わしはなんでもなかった。まあ、医者にいわせれば、その時の体の具合いということになるんだろうがね」

鷹之助はそんな風に軽くいいぬけしながら、しかしじいんと胸へひびいてくるものがある。どう考えてみても、その守り袋はあのひとには縁のないものだった。そのなきがらのふところへさえ入れてやることができなかったのである。

「だって、その観音さまを持っている人が看病してあげたのに、それじゃだめなのかしら」

お光はその観音像の功徳を絶対なものにしなくては気がすまないようだ。

「いや、その功徳があったから、女房はそう苦しますに死ねたんじゃないかと思う。最期には眠ったまま息を引きとったんで、自分じゃ死ぬなどとは少しも思っていなかったんじゃないかな。それだけに、こっちはまあ余計つらかったがね」

お光は急に黙りこんで、じっと向こうを見ている。街道は右がわが雑木林になって、それがしばらくつづく。左がわは広々とした畑地にな

って、赤とんぼが群れをなして飛んでいた。

ちょうど鴻ノ巣と桶川の中間あたりで、この辺はどこにも人家は目に入らない。

——ああ、あれか。

向こうの林の中から、つかつかと浪人者らしい着流しの男が一人道端へ出てきて、こっちを見ながら立ち止まった。お光はそれを目ざとく見つけていたのだろう。

「やっぱり出てきたわ」

「知らん顔をして通りぬければいいよ」

「そううまくいくかしら」

上背のある五分月代の、目のぎょろりとした、どう見ても人に憎まれて世渡りをしているといった柄のよくなさそうなやつである。

「おい、待っていたんだ。おぬしたち、だいぶゆっくりだったな」

案の定、こっちが近づいていくと、その男は往来へ出てくるなり、前へ立ちふさがっていう。少しあかじみてはいるが、ぞろりとした身なりで、どうやら御家人くずれといったところがある。

「待っていたというと——、あんたわしたちを知っているのかね」

「うむ、知っている。おぬしたちはゆうべ二人で熊谷宿の小松屋へ泊まったろう」

「うむ、当たった。それで——」

相手はしきりにすごんでみせようとしているようだから、鷹之助はわざとそれが通じないような顔をしてのんびりと聞きかえす。

「おれは御家人くずれで菅井安次郎。おぬしの名は」

「申しおくれました。わしは浪人者で峰村鷹之助という者です」

「よし、人がくると面倒だから、手っ取り早く話をつけよう。おれは桐生屋の番頭和助にたのまれておぬしたちをここで待っていたんだが、おめえはどういうつもりでその和助の女ときまっているお光を昨日横取りしたんだ。人の女を横

取りするなんてことは、たとえばどんなわけがあったところで、二本差した侍のすることじゃねえ。どうだ、そのお光をここですなおに和助にけえしてやるか、それとも不承知か。余計な文句はいらねえから、二つに一つ、返事はどっちなんだ」

御家人安は鷹之助とお光をじろじろ見くらべながら、これはまた話にもならないすごい横車を押してきた。

「菅井さん、和助はどこにいるんだね」

「一足先に桶川へ行って待たせてある」

「それじゃいっしょに桶川へ行って話をつけることにしよう。当人のいる前でないと、菅井さんのいうことは事実とだいぶ食いちがいがあるようなんでねえ」

「おいおい、おれは余計な文句はいらねえとはじめからことわってあるんだぜ」

「文句をいわれると都合が悪いからかね」

「なんだと――」

「菅井さんはこのお光が両国横山町の桐生屋の今は女主人だということをちゃんと知っているようだな」

「それがどうしたっていうんだ」

「和助は桐生屋の番頭なんだ。その番頭が主人のお光を自分の女だなどというのは少しおかしくはないかね」

「そいつがちっともおかしくねえんだ。和助は、桐生屋の後見人でそのお光の伯父の儀兵衛夫婦がお光の婿養子にするときめて、こんど承知の上で二人を道中に出しているんだ。自分の女だというのに不思議はねえし、現に行きの旅籠の泊まり泊まりで、もうちゃんといっしょに抱かれて寝てもいる。うそだと思ったら、そのお光に聞いてみるがいい」

御家人安は濁ったきたならしい目つきでわざとお光の体中を見まわしながら、みだらな薄わらいをうかべている。

顔色が青黒いからはじめはわからなかったが、どうやら昨夜の酒か朝の酒か、その酒気がだいぶまだ残っている様子だ。

「和助はお光に横っ面を引っぱたかれたことを話さなかったようだねえ」

「そうか、おぬしもゆうべ小松屋でやられたか。お光はもと評判のあねご娘だったことがあるんでな、いまだにそういう悪い癖がぬけてねえんだ」

「どうだろう、菅井さん、五十両出すからこの仕事から手を引いてもらえないかね」

「おれを甘く見たな、やまざる。五十両ぐらいのはした金ならおれのほうからくれてやってもいい。おめえこそ足もとの明るいうちにお光を置いてさっさと消えてなくなったほうが身のためだぜ」

「ああ、わかった。ゆうべ熊谷土手で辻切りをやったのは菅井さんだな」

「なんだと――」

御家人安は不意をつかれて、明らかにどきりとしたように凶悪な目の色になる。

「あんたはお光がふところに百両持っていると和助から吹きこまれてこの仕事を引きうける気になったんだろうが、あんまり欲をかくと、魚をくわえて橋の上から川をのぞきこんだ欲張り犬の伝で、せっかく手に入った五十両まで失うことになりそうだな」

鷹之助が平気で嘲笑してやると、

「くそっ、行くぞ、やまざる」

御家人安は図星をさされてかっと殺意をあおられたらしく、いきなり抜き打ちをかけようとする。抜かれてからではやっかいだから、相手が腰をひねったとたん、はじめからそれとなくそこをねらっていた鷹之助は、

「あぶない」

それを気合いがわりに、たくましいずうたいを肩から猛然と火の出るような体当たりに出た。

「わっ、うぬっ」

まったく思いもかけない奇襲に御家人安の体は六尺もうしろへ吹っ飛ばされて、林ぎわのほうの道端へどさっと仰向けにしたたかたたきつけられていた。

「逃げよう、あねご」

それと見るなり、鷹之助は啞然としているお光の手を取ってどんどん桶川のほうへ駆け出していた。

4

「あねご、もう大丈夫そうだな」

お光の手を引っ張るようにして小一町ほど走った鷹之助は、幸いだれもあとを追ってくる者はなさそうなので、足をゆるめながらお光の手を放した。

「峰村さん、和助は本当に桶川に待っているかしら」

お光はせいせい肩で息を切りながら、放された手ですぐに男の腕へつかまっていた。

「いや、たぶんあの林の奥にかくれて様子を見ていたんじゃないかと思うな」

「そうかしら」

お光は痛いほどこっちの腕をつかみながらじっとくちびるをかんでいる。はずんでいる息は一足ごとにしずまってくるが、それとは逆にどうしようもない大きな不安と怒りがしだいに胸にひろがってくるのだろう。

和助があんな御家人くずれを利用しようとしたということは、その背後にもっと大きな黒幕があることを明らかにしたようなもので、お光はいま絶体絶命の断崖のふちに立たされたことになるのだ。しかも、このわがままで無鉄砲な娘には、あまりたよりになる味方は一人もいないようである。

「あたし、どうすればいいのよう、峰村さん」

案の定、お光はやつ当たり気味に、どうしようもない鬱憤を手近な鷹之助にたたきつけてきた。

「まあ落ち着いて考えてみよう」

「なにを考えろっていうの」

「あねごは昨日うまくわしを道具に使って、駒吉のような悪党の裏をさえ見事にかいているんだ。それだけの知恵と度胸があるんだから、落ち着いて考えればどんなことだってできるはずだ。そうびくびくすることはない」

「あたしちっともびくびくなんかしていませんのよ。ただ悔しいだけだわ」

「いちばんいま悔しいのはどんなことだ」

鷹之助はわらいながらのんびりと聞いてみる。

「あんな和助になんかばかにされたと思うと、悔しくてたまらないわ」

「ただ悔しいだけか」

「あんな恩知らず、あたし江戸へ帰ったらおかみに訴え出て縛り首にしてやる」

「ところがなあ、あねご、和助はあねごを無事に江戸へかえすと自分が縛り首にされるのをよく知っているから、さっきあんな御家人安のような悪を道具に使って、あねごをあの林の中へつれていって始末をしてもらおうと思ったんだ」

「だれがあたしあんなやつなんかに――」

「無論、あんなやつなんかに始末されてしまってはたまらないが、向こうも縛り首はいやだろうからな、またきっとなにかたくらむ」

「負けやしませんたら」

「そうか、負けなければそれでいい」

鷹之助はあっさりと出て、もう少しお光の興奮のさめてくるのを待つことにした。

「ねえ、熊谷土手の辻切りは、やっぱりあの御家人安なの」

しばらく放心したように歩いていたお光が、ふっと思い出したように聞いてきた。

「たぶん、そうだろうと思うよ」

「その時、和助もいっしょだったのかしら」

「いや、そうじゃないだろう。和助は、昨日の

朝、高崎の城下外れであねごを待ち伏せしていた。あねごを自分一人の手で料理するには、わびを入れてもう一度お供して歩くのがいちばんいいと考えたんだ」

「じゃ、その前にあたしは駒吉につかまってしまったことになるのね」

「そうだろうと思うな。それから和助はずっと我々のあとをつけて歩いて、今朝は熊谷土手のとば口あたりでまた待ち伏せしていた。だから、和助もあの辻切り、じゃない、辻切られは見ているはずだ。そして、我々が鴻ノ巣で中食をとっている間に、その前を通りぬけて、それから御家人安に出会ったんだろう。御家人安とは江戸で顔見知りかもしれないねえ。そうでなければ、どうせ悪事を働くのに、わざわざ桐生屋の名は出さないだろうからな」

「もし峰村さんがいっしょでなかったら、あたし本当にあぶなかったのね」

お光はいまさらのように身ぶるいしながら、しっかりとこっちの腕をつかんで、青ざめた顔をしていた。

それだけ気持ちが落ち着いてきたのだろう。

「さあ、これから先が知恵くらべなんだ。いいか、あねご」

「だめよ、あたしはもう峰村さん一人がたよりなんだもの」

「そう逃げちゃいけないな。いっしょに考えるんだ。和助は御家人安にあねごのふところの百両だけをやって、あねごの体は自分のものにしたかった。しかし、御家人安はそんな甘い手に乗るようなやつじゃないから、とにかくじゃまになるわしをまず片づけさせて、一時はあねごを御家人安の好きなようにさせる、そのうちに安のすきを見てなんとかしてしまおうと考えた。安をなんとかしてしまわないと、せっかく桐生屋を乗っ取っても、始終安にゆすられるかもしれないし、へたをすると自分の罪をあばかれてしまう」

「じゃ、和助は自分で桐生屋を乗っとるつもりなの」

「あねごさえ和助を婿養子にする気になればね」

「そんなこと、いやだわ」

「いやの場合は、あねごの体をおもちゃにした上で死んでもらう」

「それは、桐生屋の財産を伯父さんたちと半分わけにするということなの」

「たぶん、伯父御たちはそう和助に約束しているだろう。そして、和助がうまくあねごを始末してくれたら、こんどは和助を始末してしまえばいいんだからな」

「あたし、伯父さんはどう考えてもそんな人じゃないと思うのよ」

「もう一つ知恵を働かせてみよう。伯父御がいくら悪人で桐生屋を自分のものにしたくても、ただではあねごを殺してくれとは和助にはたのめない。だいいち、へたをすれば和助はあねごと手を握って、逆に公儀へ訴え出るかもしれない。そんなことに気のつかない伯父御じゃないと思う」

「じゃ、和助はだれにあたしを始末してくれとたのまれたのかしら」

「たった一人だけ、そういうことを平気でたのめる立場の人がいるにはいるんだ」

「それはだれなの」

「これはまだうっかり口にすることじゃないんだ。まあ、自分でよく考えてごらん」

「そうねえ」

それっきりお光はすっかり沈みこんでしまったようである。桶川から上尾へ三十町、お光の足はだんだんおそくなって、時刻はやがて八ッ半（三時）になろうとしていた。

秋の日は傾きかけると落ちるのが早い。風も急にひえびえとしてきたようだ。

「あねご、今夜は上尾泊まりにしようか。上尾から大宮へは二里だ。この分だと途中で夜中に

なるからな」
「あたしはどっちでもいいのよ」
「じゃ、上尾泊まりにしよう。無理に夜道をかけるほどいそぐ旅でもない」
「そうねえ」
お光はうわのそらで、まったく元気がない。
「宿についたら、またいっしょにふろに入って背中を流してもらおうかな」
「いやよ。恥ずかしい」
「あれえ、恥ずかしいったって、わしはもうゆうべあねごのはだか観音を拝んでいるんだぜ」
「いやよ、峰村さんのは亡くなったひとのはだかと見くらべているんだもの」
「そんなことはない。そんな失礼なことをするもんか」
「御新造さんはなんという名だったの」
「おみつ」
「うそばっかし」
「本当さ。姉女房だからわしはおみつさまと呼んでいた」
「おみつさまは峰村さんをなんて呼んでいたの。やっぱりだんなさま」
「いや、鷹さんと呼んでいた。わしはだんなさまにしては少し若すぎたんでね」
「いくつぐらい違うの」
「六つぐらいかな」
「鷹さんはいくつなの」
「二十四だよ」
「あら、本当に若いのね。あたし六ぐらいかと思ったわ」
「四でもあねごより一つ上だよ」
「だから、お光って呼びすてにしてもいいわ」
「よそう、思い出すからな。あねごにしておくよ」
「まあ憎らしい」
どすんと肩で小突いてきて、ようやく少し元気が出てきたようだ。
が、今夜はこの因果娘にどんな運命が待っているのか。そういえば、自分もまた大手を振っては江戸へ入れない日かげ者の身なのだから、我、人ともに一寸先はやみである。
やがて行く手に上尾の宿がやや遠く見え出してきたようだ。

お光観音の記

1

上尾の宿は人家二百軒ほどの小さな町である。旅籠も旅籠らしいのは脇本陣一軒だけで、ほかには木賃宿のような安宿しかない。
この宿を大宮のほうへ出外れるとすぐ上尾ノ原という不毛の地が二十町あまりつづき、灌木が厚いやぶを作って、きつねがすんでいるといわれるほど奥が深い。
鷹之助が桐生屋のお光をつれてそこの脇本陣へわらじをぬいだのは、まだ八ツ半（三時）を少しすぎたばかりの明るい夕方だった。
「上尾へ泊まるのは、あねごもはじめてなんだろうね」
「そうなの。大宮まで行けばうちの定宿があるんだけれど」
「すると、宿帳は浪人峰村鷹之助二十四歳、妻お光二十三歳としておかないと、駆け落ち者と間違えられそうだな」
「妻お光じゃ迷惑なの、峰村さん」
「いや、おれはそんなことはないよ」
「じゃ、だんなさま、あねごはいけませんのよ、お光と呼んでくださらなくては」
「心得た」
「あたしは鷹さんと呼んであげましょうか、あのひとのように」
「どっちでもいいよ。どうせままごとの御夫婦なんだからね」
鷹之助はあっさりわらって答えたが、このままごと夫婦は、形から見ればもうすっかりそれ

に慣れて、本物の夫婦といってもおかしくないほど息があっている。お光の気性が男のように強くて、あまり女というものを感じさせないから、鷹之助としても気楽にできるせいだった。

女中に案内されたのは鍵形の廊下でつづく奥の別棟の二間つづきの上座敷で、縁先の小庭には白いはぎの花がこぼれるように咲いていた。

「だんなさま、お膳にお銚子をおつけになりますか」

旅装をといて火ばちの前へ差し向かいに座ると、お光はまじめな顔をして聞いた。

「いや、酒はよそう。おれはなければないですむほうなんだ」

「そんな意地の悪いことというもんじゃありませんのよ。妻お光のお酌ではお気に入りませんの」

「そうか、それじゃ一本つけさせよう」

そういえば、お光は中食の時も酒がのみたいといっていたのを思い出して、鷹之助はわらいながら承知した。

お光の胸の中に、払いのけてものけきれないどす黒い不安がうずをまいている。酒でものんだら少しは気が晴れるだろうと、ついそんな気持ちにもなるのだとわかっているだけに、鷹之助はあわれになってくる。

「あの、おふろがわいていますから、どうぞ――」

二度目に女中が丹前を持ってきて告げた。

「ありがとう。ふろは後にしよう。それより、ねえさん、膳はいそがなくてもいいんだが、銚子を一本つけて出してもらいたいな」

「かしこまりました」

女中は丹前を次の間へおいて去っていった。

「おふろを浴びてくればいいのに」

「よすよ。昨日のように妻お光といっしょでなければつまらない」

「いやな人――」

「本当はな、あねご、今日はおれは妻お光のそばをなるべく離れないほうがいいような気がするんだ」

「どうして」

「和助はこれからいよいよ死にもの狂いになる、明日あねごに無事に江戸へ入られると、自分はいやでもおたずね者にならなけりゃならないからね」

これだけははっきりいっておくほうがいいと鷹之助は思ったのだ。

「じゃ、あいつ、ここへも押しかけてくる気なのかしら」

「自分でくるか、御家人安のような殺し屋をたのんでよこすか、油断は禁物だと思う」

「あたしにはもうだんなさまのおっかさんの観音さまのお守りがついているから大丈夫ですのよ」

お光はちょっとふところを押さえてみせてきっぱりという。

「うむ、それは大丈夫だ。またぜひ大丈夫でなくては困るしな」

「あたしねえ、峰村さん、和助のことより伯父さんたちのことを考えると、どうしていいかわからなくなってくるのよ」

やっぱり強がりきれないお光のようだ。

「和助は本当に伯父さんたちからあたしを殺してくれってたのまれているのかしら」

「そうここで断定してしまうのは早すぎるかもしれないが、しかし、この世の中からあねごが消えていちばん得をするのは伯父さん夫婦なんだからね」

「それじゃ、たとえ和助の手をのがれて江戸へ入っても、あたしは安心して家へ帰れないんですね」

「当分はそういうことになるかもしれない」

「あたし、家へなんか帰らなくてもいいけれど、あの伯父さんたちがなわつきになったらどんなに悲しいだろうと思うのよ。死んだおっかさんやおとっつぁんをあたしあんまり困らせたもんだから、きっと罰があたったのかもしれな

い」

お光はうす寒そうに白いあごを襟へうずめるようにする。

「そうか。あねごのいちばん近い肉親は、伯父さんと、本郷の分店の従兄ということになるんだな」

「峰村さんは兄弟があるの」

「いや、おれも従弟が一人いるきりだ」

その従弟杉田源吉は、この正月、鷹之助がふいに江戸の上屋敷から内密の呼び出しをうけて古河を立った朝、わざわざ房川戸の渡し場まで送ってきて、

「いいか、鷹さん、負けちゃいけねえぜ。どんなことがあっても、人間死んじゃいけねえ。古河にばかり日は照りゃしねえや。きっと生きていてくれよなあ」

と、手を握って泣いてくれたたった一人の従弟なのである。

——そして、おれはいまこうして生きている

にはいる。

しかし、ふたたび古河へ帰れる日はないだろう。いや、江戸へ入るにさえ大手を振って入るわけにはいかない因果をしょってしまっているのだ。

その従弟源吉に会って、おい、おれは生きていたぜと、もう一度手を握りあえる日がはたしてあるかどうか。

そういえば、許婚の初枝は本当に前岡英之進の子を産んで母親になっているだろうか。たとえば、その事実が自分の運命をここまでゆがめてしまったにしても、今は恨みもなにも残ってはいない。むしろ、初枝が英之進としあわせな家庭を持っていてくれればいいと思うだけである。

「なにを考えているの、峰村さん」

お光が急にとがった声を出す。

「またあんたはあのひとのことなんでしょ」

意地の悪い目が光っている。

「いや、従弟の話が出たんで、ちょいと従弟のことを思い出していたんだ」

「女の従妹ね」

「違うよ。男の従弟だ。わしが浪人をする時、どこへ行っても死んじゃいけねえ、きっと生きているんだぞといって、大いに励ましてくれた従弟なんだ。——そうだ、あねご、きっと生きられる。元気を出すんだな」

「どうすれば生きられるんです」

「それは江戸へ入ってから教えてあげよう。どうもあねごはおれよりちょいとつらい因果をしょっているようだが、さっきあねごはなかなかいいことをいった。そこから必ず運がひらけてきそうな気がする」

「そうかしら」

お光の目から意地の悪さは消えたが、なにかぼかんとした顔になって、さぐるようにこっちの目を見すえていた。

2

その夜の何刻ごろだったろうか、鷹之助はふっと寝床の中で目をさましてわが耳を澄ました。

今夜もしいんと降るようなこおろぎの声が耳につく。それとは別に、鷹之助はたしかにどこかに人の忍び寄る気配を感じたのだ。

——夢だったかな。

そっとまくらもとへ手をのばしてみると、寝る時そこにおいた大小はたしかにそのままだ。

宿帳は妻お光だから、身近に寝床をならべて敷かれたお光は、すぐ手のとどくところに、こっちへ背を向けてくの字なりに行儀よくぐっすり眠っているようだ。有り明け行燈のうす暗い光の中に豊かな黒髪がぬれぬれとなまめかしい。

——よし、お光も刀も無事だ。

鷹之助はなにかほっとして、もう一度障子の外の廊下へ耳を澄ましてみる。

どうもどこかに人のうずくまっているような気配を肌に感じてしようがない。

気のせいだろうか。

そういえば、今夜は妙な晩だった。

秋の日がたそがれてきて、座敷に行燈が入ると、女中がすぐ膳を運んできてくれた。注文の銚子が一本ついていたが、あんなに酒をほしがっていたお光は、杯に一つほしただけで、二つ目は膳の上へおいたまま、もう手をつけようとしなかった。

「どうした、のまないのか」

「あんまりおいしくないの」

「しかし、少しのんだほうがぐっすり眠れるよ」

「あたし、なんだか怖くて」

お光はすっかり沈みこんで、なんとしても気が浮かないようだった。

そのお光の怖いという言葉にさそわれて、鷹之助も急に気になり出したのである。

今日、御家人安には体当たりをくらわしただけだから、どこにもけがはないはずだ。もし和助にけしかけられて、今夜二人でここへ寝首をかきに忍びこむ気になれば、ここはあまり泊まり客もないようだし、やってできないことはないかもしれない。

しかし、ここは大道と違って、かりにも脇本陣なのだから、万一失敗するとこんどは押し込み強盗の名をまぬがれることはできないのだ。

それだけの度胸があの二人にはないように思えるし、いや、やりかねないぞという気もする。御家人安は熊谷土手でたしかに辻切りをやっている男だし、和助はお光を始末してしまわなくては自分の生きる道がない男なのだ。

「いやだなあ、峰村さんは、黙りこんでばかりいて」

「そういうあねごだって、さっきから浮かない顔ばかりしているじゃないか」

「だって、あたしは帰る家がなくなってしまったんだもの」

お光の心配は和助のほうよりむしろ桐生屋のほうにあるようだった。これは肉親に裏切られているのかもしれない不安なのだから、人の子としてやりきれない気持ちにちがいない。

「まあ、そう心配するな。そのほうは江戸へ入ったらおれがいちばんいい道を教えてやる」

「あたしも、さっきから少し考えていることがあるにはありますのよ」

「そうか。それはそうだろうな。よし、明日になったら明るい太陽の下で二人でよく話しあってみよう。夜は人間はどうも感情に走りすぎてだめなものなんだ」

「そうね。本当は、あたし、こんなに弱虫じゃないんだけれど」

お光はふっとはにかんだように寂しい微笑をうかべていた。

食事がすむと寝るほかに用のない体だし、それに今朝は熊谷を一番立ちにしてきているので、二人とも疲れてもいた。

ことに、鷹之助は一本の銚子をほとんど一人でのんでしまったので、まくらにつくなりぐっすり眠ってしまったようである。

正直にいって、お光がすぐ手のとどく鼻先に寝ている姿は、いまはじめて見るのだ。

妻お光だから、女中は気をきかせて寝床を近近とならべてとっていった。

いやならお光が自分でいいようになおすだろうと、さっさと先に自分の寝床へ入って、お光がまだ座敷のすみでぬいだ着物をたたみつけているうちに、もう眠っていたらしい。

——そうか、あねごも今夜は心細くて、いやもきらいもいっていられなかったんだな。

そう気がつくと、なにかほほえましい。

そのくせ、耳はじっと廊下の気配をさぐっている。

いっそ立っていって障子をあけてみようか、それともう少し待ってみようかと、暗い天井に目をすえていると、

「峰村さん、起きて」
眠っているとばかり思ったお光が、泣き声を出しながらくるりとこっちへ寝がえりを打ってきた。
「どうした、あねご」
「おなかが痛いの。錐でもむように痛い。我慢できないのよう」
真っ青な顔になって、まゆをひそめながら、必死に身を縮めているようだ。
「よし、どの辺が痛いんだ」
鷹之助はむくりと起きあがって、もう右手をお光の内ふところへぐいとさしこんできた。
「この辺か」
みぞおちのあたりを男の手でじかにさぐられて、お光は一瞬ぎくりとしたようだが、
「そこじゃないの」
恥ずかしいもなにもいっていられないほど痛いらしく、歯をくいしばりながら答える。
「じゃ、この辺か」
鷹之助の手が腹へさがっていく。
「もう少し下だわ」
しかし、そこから下へは帯がじゃまになって手がとどかない。
「痛い、峰村さん。お医者を頼んでもらえないの」
「あねご、この辺のやぶ医者よりおれのほうがよっぽど名医なんだ。いますぐなおしてやるから、安心するんだ」
鷹之助はそういって聞かせながら、寝まきのしごきを少し下へずらせるようにして、
「この辺か」
と、やっと下腹のあたりをさぐりに行く。
「痛い。その辺が痛いの。どうしよう」
「よし、ここだな。さしこむように痛いのか」
「錐でもむように痛いの」
「いつから痛み出したんだ」
「痛くて目がさめたの。目がさめたら、火のつくように痛み出したの」

「今日通じはあったか」
「ありましたのよ」
「くだっているのか」
「いいえ」
「吐き気はどうだ。胸はむかむかしないか」
「しないようだわ」
その間に鷹之助は慣れた手つきで脈をとっていた。脈はかなりしっかりしている。
「わかったよ、あねご。たぶん冷えこんだんだ。いま薬をやるからな、それをのんだら、もう一度よく診てやる」
印籠から万能丸を取り出して、こんなものはほんの気やすめにしかなりはしないが、効くと思ってのめば効くこともあるのだ。
「そら、口をあくんだ」
「痛いのよう。あ痛っ。どうすればいいのよう」
「これをのめばすぐおさまる。それ、水だ」
まくらもとにおいてあった水差しの水を湯飲みに移して口のはたへ持っていってやったが、丸薬をくわえたまま、また差しこみがきたらしく、歯をくいしばっていてどうしようもない。
鷹之助はとっさに湯飲みの水を自分の口にふくんで、両手でお光の口をわりながら、素早く口移しに水を吹きこんでやる。
お光は夢中でそれをごくりとのみこんだようだ。
もう一度こんどは帯をとかせて、よく腹をなでまわしてみなければならない。別に腹は張っているようでもなかったし、下痢もしていないというから、冷えこみだろうと診た。冷えこみなら温石を抱かせるという手でなんとかなるが、それ以外の疾患からくる痛みだと、たとえ患部がわかっても薬の用意がないから、こんな田舎ではどうしてやりようもないのである。
——弱ったなあ。
鷹之助はちょいと当惑して、蒼白になった額に脂汗をうかべているお光の苦しそうな顔をのぞきこんでいると、ふっと足もとのほうの廊下

の障子に、なにかさわったようなばさっというかすかな音がした。
「くせ者っ」
それが人の気配だと直感した鷹之助は、手近な湯飲みをとるなり、さっと障子へ投げつけた。
「あっ」
不覚にもくせ者は声をもらして廊下を走り出す。
「くせ者、待てっ」
鷹之助はまくらもとの刀をひっつかんで一気に廊下へ出る。
黒いくせ者の影は、いま母屋の廊下へつづく曲がり角の戸袋口の雨戸を一枚あけるなり庭へ飛びおりていくところだ。
「くせ者だぞ。みんな起きろ。くせ者は庭へ逃げたぞ」
大声に叫びながら鷹之助はその戸袋口へ走って庭を見まわしたが、くせ者はあらかじめ逃げ道をこしらえておいたらしく、もうどこにもそれらしい姿は見えない。
十日ばかりの明るい月かげに、庭の白はぎが夢のように白々と夜風にゆれていた。

3

鷹之助は急病人をひかえているので、声を聞きつけた番頭たちが駆けつけてくると後はその人たちにまかせて、いそいで座敷へ引きかえしてきた。
開けっ放しの障子の廊下に投げつけたさっきの湯飲みがわれもせずにころがっているところを見ると、湯飲みはくせ者のどこかに当たって落ちたものとみえる。
障子をしめると、湯飲みが飛び出した桟の障子紙がそこだけぽっかりと穴があいていた。
「くせ者がいたんですか」
お光は仰向けに寝たままぱっちりと目をあけている。
「うむ、そこへ忍びこんでいたようだ」

鷹之助は自分の寝床の上へ座りながら答える。
「まあ怖い。どんなやつだったんです」
「そうだな、中肉中背かな。手ぬぐいをぬすっとかむりにして、道中差しをさしていたようだ」
「じゃ、やっぱり和助かしら」
「ここをねらっていたとすると、そうかもしれないね。——おまえ、おなかの痛みはどうした」
「なんだか、とても楽になりましたのよ。お薬が効いたのかしら」
そんなに覿面に効く薬ではないのだから、びっくりした拍子に腸の痙攣がおさまったのかもしれない。
「もう少しも痛まないのか」
「ええ」
お光は腹のほうへ神経をあつめているような顔になって答える。
「どれ、もう一度診察してみよう」
「恥ずかしい、なんだか」
「冗談いうなよ。おれは医者なんだぜ」
鷹之助はわらいながら、もうさっさとお光のふところへ手をさしこんでいた。
「どうだ、ここは」
みぞおちを押してみる。なめらかな肌の感触である。
「そんなに押しちゃ痛い」
「胃の中はもうからっぽだな」
その手がむっちりとした腹へさがって、
「ここはどうだ」
と、こんどは軽く押しながらさぐっていく。
「痛いっていうのに」
妙に甘ったるいような声音だ。
「本当に痛かったのはここのはずだぜ」
もがいているうちに帯がゆるんだらしく、こんどは完全に下腹まで手がとどいていた。
「もういや、だんなさまは」
そのとろんとした声に、鷹之助ははっきりとあのひとの声音を聞いたような気がした。そし

て、お光の張りのある若い下腹は、そこに子を宿したあのひとのこんもりとした下腹の感触とそっくりなのである。

鷹之助はどきりとして、手をぬいて、思わずお光の顔を見おろしていた。

肉体から苦痛の去ったお光は、うっとりと目をつむって、その顔にほんのり血色さえ出てきている。

この顔はたしかにあのひとより若々しい。しかし、この顔もまた安心して甘くなにかを待っている顔なのだ。

鷹之助はその顔にはじめてむらむらっと激しい女を感じ、思わず両手で肩を押さえつけながらお光のくちびるを吸いにいった。

お光の口にはまださっきの万能丸の芳香がかすかに残っていた。

お光は体中を固くしながら、男にそんなまねをされるのはじめての経験らしく、切なげに息がはずんでいる。

「お光、これで二度目だね」

鷹之助はお光のくちびるを離してささやくようにいった。

「知らないわ」

お光はあえぐようにいいながら、まだ目をあけようとはしない。ほおが火のように燃えている。

「ごめんくださいまし。お目ざめでございましょうか、お客さま」

廊下へ番頭がきてひざまずいたようだ。

「起きているよ。番頭さんか」

「はい。さきほどはどうもありがとうございました。こちらさまはなにも取られませんでございましたろうか」

「うむ、そこの廊下まできた時、気がついて追いかけたんだ」

「それはよろしゅうございました。どろぼうは湯殿のたき口のほうから入りまして、まずこちらさまから仕事をするつもりで、まっすぐこの廊下へまいったようでございます」

「すると、ほかにはまだ被害はなかったわけだな」

「はい、おかげさまで助かりました。ちゃんと逃げ道をこしらえて入りましたようで、裏木戸から逃げていったようでございます」

「そうか。だれにも被害がなくてよかった」

「ありがとうございます。いずれまた明朝あらためてお礼にうかがいますが、ちょいとごあいさつにまいりましたので。どうもおじゃまをいたしました」

「そのあいさつでは痛み入る。時に、いまは何刻ごろなんだろうな、番頭さん」

「はい、まだ九ツ（十二時）前でございます。どうぞごゆるりとお休みくださいまして」

「ありがとう。お休み」

こっちを夫婦者と見て、番頭は障子越しにあいさつをして帰っていった。

「まだ九ツ前か。すると、おれたちは今夜ずいぶん早寝をしたことになるんだな、お光」

お光は黙って目をつむっている。まださっきの興奮からさめきらずに、夢を追ってうっとりと酔っているような顔つきだ。

「どうした。またおなかが痛み出したのか」

そんなわかりきったことを口にしながら、お光はわずかにかむりを振ってみせるのを見ると、鷹之助もまたその生娘の熟れたような紅いくちびるに甘く吸いよせられていかずにはいられなかった。

そして、その男の前に増した激しいくちびるの愛撫は、かたくなった生娘の全身の血をしだいに燃えあがらせ、女体はいつか甘い興奮にとけゆるんで、身もだえしながら未知の世界にとあこがれてくる。もう男にどんな愛撫をうけても、女体はただ夢うつつの歓喜の中にいて、自分ではどうする力もなくなっていた。

こうして、その夜、ついにお光を女にした鷹之助は、もうままごとの妻ではなくなったいと

しいお光をあたたかく胸に抱いてやりながら、朝までひと眠りに安らかな眠りをむさぼったのである。

翌朝、鷹之助が目をさました時は、お光はもう先に起き出して、すっかり身じまいをすませたところだった。

「お早う。早いんだな、おまえは」

鷹之助がむっくり起きあがると、

「早く顔を洗ってらっしゃい。あたしぜひ話したいことがありますのよ」

お光はいきいきとした目にちらっと羞恥の色をのぞかせながら、明るい声でさえずるようにいった。

「さてはお灸をすえられるのかな。おれは昨日ちょいと悪いいたずらをしているようだからな」

「いやっ、そんなことをいっちゃ恥ずかしい。あたしとても怒っていますのよ」

お光は花が咲いたように顔を赤らめながら、晴ればれとわらっている。昨夜のあの重く沈んだ顔色はどこにもない。

——妙なもんだなあ。今朝はもうすっかり女になっている。

鷹之助は顔を洗いに行きながらふしぎな気がした。お光の顔にも体つきにも、昨日までは見られなかったどこか満ち足りたやわらかさがあざやかに浮きあがっている。

それはこっちの気のせいばかりではなく、あのむき出しになっていた気の強い片意地がともかくも表面から消えて、今朝は女らしさのほうが先に目をひいているのだ。体の変化から起こった現象か、それともう自分一人ではないという安心感からそうなったのか、いずれにせよお光にとって昨夜二人が結ばれたことは決して悪い結果にはなっていないような気がする。

今日もからりと晴れた秋日和で、朝の水はもう肌に冷たかった。

座敷へ帰ってみると、お光は次の間のほうへ

ちゃんと朝茶の支度をして待っていた。

「だんなさま、お早うございます」

「お早う。おまえおなかのほうはもうすっかり大丈夫か」

「大丈夫ですのよ」

「ふしぎだなあ、あんなに痛かったのがけろりとなおるなどということは、おれの医学じゃどうもわからない」

「はい、お茶」

お光は澄まして茶を入れて出して、

「あたしにはそれがちゃんとわかりましたのよ」

と、真顔になっていう。

「ふうむ、どうわかったんだ」

「あれはね、あたしが肌身につけていたあなたのおっかさんの観音さまの功徳だと、今朝になってはっと気がつきました。観音さまは、和助があたしを殺しにきたことを教えるために、おなかを痛くしてあたしの目をさまさせてくださいましたの。だから、和助が逃げ出すとすぐ、あんなにけろりとなおってしまったんです。あたしありがたくて」

お光は目に涙さえ光らせながら感動の色をかくそうとしない。

「なるほど、たしかにそうかもしれないな」

そういうことが絶対にないとは、鷹之助にもいいきれない。そして、西洋医学にはないことだが、そう心から信じている者には、そう信じさしておいても決して悪いことではないと思う。

「あたしね、今朝とてもしあわせな気持ちで、ふっと目がさめたら、あなたの胸の中にいたの。ああそうだったと思い、少し恥ずかしかったけれど、涙がこぼれるほどうれしくなって、ああこれがきっと観音さまのお慈悲なんだと気がつきました。そして、急にいまのことが思いあたってきたんです。あたしもうありがたくてじっとしていられなくなってしまい、そっと布団をぬけ出して、おふろを借りて水をあびてきまし

たのよ」
「おいおい、あんまりむちゃするなよ。冷えるとまたおなかが痛くなるぞ」
「あら、そんなこといっちゃ観音さまの罰があたりはしないかしら」
お光は目を丸くしていそいでいう。
「ああ、そうか。そういえば水垢離をとって腹が痛くなったという話は聞かないな」
お光はふっとまじめな顔になって目をつむり、軽く合掌して口の中でなにかいっている。
おそらく、罰当たりなことをぬけぬけと口にした亭主のために、どうか罰を当てないようにと拝んでいるのだろう。
これは大した貞女観音だ。
鷹之助はいささかあきれたような気持ちで、しかし今朝水垢離までとってすっかり観世音に打ちこんでいるお光のすがすがしい姿を好もしく見とれていた。
いわゆる愚者の一念というやつは恐ろしいと思う。
そのくせ、そのすぐ後から、
「お光、おまえがそうお光観音になっちまうと、おれは怖くて今夜から抱いてやれなくなりゃしないかなあ」
と、ついからかいたくなってくるのだから、我ながら救いがたい俗人にできているようだ。
「大丈夫ですのよ、観音さまにはお慈悲というものがありますもの」
「じゃ、拝んでからお願いすることになるのか」
「いやっ、あなたは。太陽の下ではもっと大切な話をするものだとゆうべ自分でいっていたくせに」
「まいった、たしかにそのとおりだ」
「だから、あたし、考えたことがありますのよ」
「お手やわらかにたのみたいなあ」
「あたしね、もうあなたのままごと妻じゃなくなったんだから、帰る家がなくなってもいいと思うの。江戸へ帰ったら、桐生屋は伯父さんにやってしまいます。それでいいでしょう、だんなさま」
実は鷹之助がいいたかったのもそれだったのだから、そこへ気のついたお光の顔をいまさらのように見なおさずにはいられなかった。

4

脇本陣の主人にあらためて昨夜の礼をいわれて、鷹之助が新妻お光をつれて上尾の宿を立ったのは、やがて五ツ（八時）に近い時刻であった。
上尾から大宮へ二里、宿を出外れるとすぐ上尾ノ原へかかる。
「ねえ、だんなさま」
「なんでござる、お光うじ」
「いやだな、そんな、お光うじだなんて」
「そうか。じゃ、あねご」
「ふ、ふ、あたしはつい昨日まであねごだったわね。なんだか夢みたい」
「おれもそんな気がする。考えてみると、おれはゆうべおまえに口移しで薬の水をのませた。あれがいけなかったんだな」
「あら、どうして」
「あれから急におれはおまえがかわいくってたまらなくなったんだ」
それはたしかに鷹之助の正直な気持ちだった。
「そういえば、それまであなたはあたしなんか少しもかわいくなかったようですね、憎らしい」
「すると、おまえは熊谷の旅籠でおれと二人きりになった時、もうかんざしはつかわない気でいたのか」
「そうかもしれませんのよ」
「本当かなあ」
「いやな人――。きらいな人だったら、いくらあたしがやんちゃでも、いっしょにおふろへ入る気になれるかしら。あらあら、もうそんな話はおしまい。太陽の下ですからね」

「心得た」
かわいいやつだなあと、鷹之助はまったくたのしくなってくる。
「それより、あたし、昨日の朝は熊谷土手で駒吉の死骸を見てしまったでしょ。なんだか、今朝もそんなものを見るような気がして怖いのよ」
「見れば和助の死骸だが、そんなこともなかろう。あいつはずるいから、まだ死にそうもない」
「そうかしら――」
上尾ノ原を三町ばかりきたところで、向こうからわらいながら走ってくる男があった。
「あら、脇本陣の番頭さんじゃないかしら」
「そうらしいな」
話しあっているところへ近づいてきて、
「お早うございます。いまお立ちでございますか」
と、立ちどまって愛想よくおじぎをする。
「お早う、ゆうべはやっかいになった」
「いいえ、手前どもこそお世話になりまして」
「どこへ行ってきたんだね」
「へい、この先へ二町ばかり行ったところに、妙な行き倒れがございましてな」
「行き倒れ――」
「それが、お客さま、お侍の行き倒れなんです。浪人さんなんでしょうねえ。ぞろりとした身なりで、道端に江戸のほうを向いて仰向けに長々と寝ころんでいるです」
「どこにも傷はないのか」
御家人安らしいと思いながら、鷹之助は聞いてみた。
「いいえ、傷はございません。なんでも、ゆうべ宵の口に、この宿外れに近い三河屋という酒屋へ、若い番頭風の男と升酒を立ちのみに寄って、番頭のほうは半分ほど残した。先生、これもやってくださいというと、よし引きうけたといって、それまでのんで、これから大宮まで行くんだといいながら、二人でぶらぶら出かけたんだそうです。その浪人さんのほうなんで。だいぶ

ふらふらしていたようだから、ことによるとあそこへ寝ころんだまま卒中でもおこしたんじゃないかと三河屋の主人は話していました」
「ふうむ。じゃ、その若い番頭のほうは、酔っぱらいをそこへ一人でおいて逃げてしまったんだな」
「たぶん、そうなんでございましょうね。まさか死ぬとも思わなかったでしょうからな」
「わざわざ知らせてくれてありがとう」
「どういたしまして。どうぞお大事においでなさいまし」
番頭はおじぎをして上尾のほうへ走り出す。
「お光、おまえの勘はあたったようだね」
「怖い、あたし」
お光はしっかり鷹之助のたもとにつかまりながら、
「ねえ、その行き倒れ、御家人安じゃないのかしら」
と、声をひそめていう。
「どうもそうらしいな。つれの若い番頭は和助だろう」
「じゃ、和助が御家人安を殺したの」
「うむ」
「だって、どこにも傷はないといっていましたね。絞め殺したの」
「いや、たぶん眠り薬だろう。三河屋でのみ残した自分の升酒の中へ入れたんだ」
「眠り薬で死ぬの」
「うむ。ゆうべおまえが癪をおこしたろう。ああいう時にも使う眠り薬なんだが、それを分量を多くすると、眠ったまま楽に死んでしまうんだ」
鷹之助はそう説明しながらなんとも胸が重い。そしてまた、その和助の眠り薬は、一つ間違えばこのお光がのまされるところだったのだ。
「お光、和助はだれかにその眠り薬をおまえにのませてくれとたのまれたんだ。それを、和助はおまえをくどいて女房にしてやろうという欲

をおこしたばかりに、おまえに横っ面を引っぱたかれて、その機会を失ってしまった。切羽詰まって御家人安におれたちを殺させようとしたが、これも失敗に終わった。こんどは御家人安を殺してしまわないと自分の体があぶない」
「いやだなあ、あたし。そんなことを聞くと身ぶるいが出てくる」
お光はぴったりと肩を押しつけてくる。
「和助は江戸を出る時、道中差しをさして出たか」
「いいえ、そんなものはいらないとあたしがやめさせたの」
「すると、これは御家人安の死骸を見てからでないとはっきりいえないが、ゆうべの脇差はたぶん御家人安のだろう。それでうまくおれたちを片づけたら、その脇差を死骸にかえしておく、強盗は御家人安ということになってしまうんだ」
「じゃ、和助は宵から脇本陣へ忍びこんでいたのね」
「どうもそうらしいな。ゆうべはふろ場のたきロのほうから忍びこんでいるというし、おまえといっしょにふろへ入らなくてよかったな」
「もう怖いから、よして、そんな話」
「大丈夫だよ。妻お光はおれの命にかけてもきっとまもってみせる」
お光まで眠り薬にとられてたまるものかと鷹之助は思うのだ。そして、少し虫がよすぎるかしれないが、お光はあのひとのかわりに観世音菩薩が自分に与えてくれた宿命の妻のような気さえしてくるのだ。
「ねえ、和助はまだあたしたちをねらうの」
「ねらうだろうな。あいつは、おれがおまえにゆうべロうつしで水をのませているのをのぞいてみている」
「もう、怖い」
「いや、怖いやつは江戸にもいる。そいつはまだおなじ眠り薬を持っているにちがいないんだ」

「わかったわ。伯母さんは本町の薬問屋の番頭さんの娘なのよ」
「そうか、どうもその辺が臭いとおれはにらんでいたんだ」
「じゃ、和助は伯母さんと――」
「無論、ただの仲じゃないだろう」
「なら、伯父さんは――」
「やがては眠り薬をのまされるほうかもしれないね」
「どうしよう、あたし、また胸が痛くなってきそうだわ」
「おいおい、冗談いうなよ、早く観音さまのお守りで胸をなでてみろよ」
お光は正直に内ふところをさぐっている。
からんと大気の澄んだ向こうのやぶのそばに、五、六人人立ちのしているのがはっきり見えてきた。そこに悪党御家人安が悪運つきて行き倒れになっているのだろう。

江戸近きの記

1

上尾の宿から大宮へ二里、上尾ノ原で御家人安の死骸を見てしまったお光は、やっぱり胸にこたえたらしく、しっかり鷹之助の手につかまって歩きながら、いつまでもその手を放そうとしなかった。
一つ間違えば御家人安が殺されたおなじ眠り薬で自分が眠り死にさせられていたかもしれないのだとわかってみると、自分のしょっている因果というものがいまさらのようにそら恐ろしくなってくるのだろう。
「どうした、お光。おまえ怖くなってきたのか」
そういうお光があわれになって、鷹之助はわざと明るく声をかけていく。
「いいえ、もう怖くなんてありませんのよ」

お光はうわのそらでぼんやり答えながら、その自分の声でふっと我にかえったように、
「本当ですのよ。あたしにはこんなたのもしいだんなさまがいるんだし、観音さまだってちゃんとついていてくれるんですもの」
と、いつもの張りのある声が出てきた。
「そうだとも、おれはこれでもたのもしいだんなさまなんだ。すくなくとも昨日よりはな」
「あら、じゃ、昨日まではたのもしくなかったんですか」
「うむ、正直にいうと、昨日までは生きても死んでもどっちでもいいと、そんな気がしていた。しかし、今日はどうしても生きなけりゃならないと思っている」
「どうしてかしら――」
「おれはお光のたのもしいだんなさまになってやらなければならないからさ。だいいち、ひょっとすると、おまえのおなかの中にはもうおれの子ができていないとはかぎらない」
「いやな人――」
お光はふいをつかれて、思わず顔を赤らめながら、
「でも、本当ね。もうあたしあなたのおかみさんなんですものね」
と、その言葉をしみじみと自分でかみしめているようにいう。
「そこでなあ、お光、おまえは今朝、桐生屋の身代は伯父御にやってしまってもいいといっていたな」
「ええ」
「それを、おまえ本当に実行する勇気があるか」
「ありますわよ」
「そうか、それならいい。なまじ桐生屋の身代に未練を残すと、おまえの身の因果からぬけきれないんじゃないかとおれは思うんだ。人間、欲ほど恐ろしいものはないからなあ」
「じゃ、あたし、もうこのまま桐生屋へは帰らないほうがいいの」

「おれはそのほうがいいような気がする。江戸へ入ったら、まず本郷の従弟というのをたずねて、一通りこっちの事情を話してやるんだ。そして、伯父御のことは、親子なんだからその従弟にまかせておけばいいだろう」
「あなたは和助を手先に使っているのは伯母だろうといいましたね」
「うむ」
「伯母さんは本当に和助と妙な仲になっているのかしら」
「ちゃんとした証拠をつかまずに、そんなことを勝手にきめてしまうのは少し早計すぎるかもしれないが、眠り薬をわたしておまえを殺してくれとたのむようなことは、ただの主人と奉公人の間柄ではできない。だから、おれはその若い後妻の伯母御と和助とは密通をしているんじゃないかと見た。それなら平気でたいていのことはたのめる」
「じゃ、伯母さんはあたしと伯父さんを殺して、和助と夫婦になって桐生屋を自分のものにするつもりなんですか」
「さあ、それはどうだろうな。とにかく、平気で人殺しをたのめるような女は毒婦と見ていい。毒婦は一種の狂人なんだから、どんなことをやり出すか常識ではわからない。近寄らないにかぎるんだ」
強情で勝ち気な女だから、こっちから逃げるなどということは気に入りそうもないなと見ていると、案の定、
「あたしのほうでいくら身をひいても、その狂人の毒婦のほうから追いかけてきたらどうすればいいの」
と、やんわり突っかかってきた。
「そりゃ、降りかかる火の粉は払わなくちゃならないさ。そのために、こうしてたのもしいだんなさまがついているんだ」
「あたしねえ、身代なんかに未練はないけれど、毒婦に負けて追い出されるのはなんだか悔しい

わ」
「おまえの気性じゃそうだろうな」
「ねえ、和助は今日も本当にあたしをねらうのかしら」
「それはねらうだろうと思う。あいつはどたん場へ追いこまれたおおかみのようなもんで、今日おれたちをかみ殺しておかないと、毒婦に愛想をつかされてしまうんだ。それに、悪いことには、あいつは御家人安のふところからたぶん五十両の金をさらっているだろうからな」
「ああ、熊谷土手で御家人安が駒吉を切って奪った五十両なのね」
「そうだ。その金はもともとおれの胴巻きの中にあったものなんだ。おれの胴巻きの中にある間はそう悪事を働く金じゃないが、それが和助のふところへ入ると、おれたちの命をねらう軍資金になる。金というやつはそういう恐ろしいものなんだ」
しかも、その五十両は鷹之助がお美世の方を毒殺するために江戸家老から路銀としてわたされた因縁つきの五十両なのである。
「本当ねえ。あのお金は、あたしが自分の命が惜しいばかりに、切羽詰まって熊谷の旅籠であんな小細工をしたのに、それがまたあたしたちの命をねらうお金になるなんて、あたしはどうしてもそういう因果からぬけきらない女に生まれてきているのかしら」
「いや、そんなことはない。おまえは熊谷の旅籠で五十両すてる気になったから、おれというたのもしいだんなさまといっしょになれたんだ。だから、金の欲さえすてれば、そこにきっと安住の地が得られる。どうだ、おまえ桐生屋の身代とだんなさまと、どっちを取ったほうが大切だと思うね」
「そんな、わかりきってるじゃありませんか。いやな人――」
「ところがだな、おまえが自分の勝ち気に引きずられて、毒婦に負けるのが悔しいばかりにそういう毒婦に向かっていくと、おまえは自分の大切なだんなさまを失うことになるかもしれないんだ」
「どうしてなの――」
「降りかかる火の粉は無論払わなくちゃならないが、忘れてきたものが惜しいばかりに火事の中へ飛びこんでいけば必ずけがをする。そのために命を失って、世間のわらいものになる例も決してすくなくはないんだ」
「もうやめて――、あたし毒婦なんかとけんかをするほどばかじゃありませんのよ」
口ではそうはっきりいっても、胸の中にはまだ十分悔しさが残っているお光のようだった。
しかし、それはここでいくら説得してみたところでそういう性分なのだから急にはどうにもならないと鷹之助は思いかえして、それ以上その問題に触れないことにした。
大宮から浦和へ一里十町、浦和で中食をとって、浦和から蕨へ一里十四町、昼からの秋の旅は暮れやすいから、蕨から板橋へ二里八町、板橋へ入るころには宵になりそうである。
「お光、今日は精々板橋泊まりだろうな」
浦和の宿を出外れてから、鷹之助はのんびりといった。
「あたし蕨泊まりでもいいんですのよ。どうせ帰る家なんてないんだもの」
お光は妙に寂しそうだ。
「まあそういうな。そのかわりに、おれたちには新しい所帯を持つというたのしみがある」
「そうねえ。あなたはどこへ家を持つつもりなの」
「おれは田舎者だから、なるべく静かなところがいいと思っている」
「あたしはずっと横山町育ちだから、あんまり寂しいところはいやだな」
「そうか――。それはまあ明日江戸へ入ってからゆっくり相談することにしよう」
わがまま娘を承知の上でこんなことになって

しまったのだから、鷹之助はできるだけお光のいうなりにしてやるつもりではいる。

しかし、お光はだんだん江戸が近くなるにつれて、やっぱり生まれた家というものに強い執着を感じてくるようだ。さっきから浮かない顔をして、なんとなくきげんがよくない。

——どうしても生まれた家があきらめきれないというのなら、かえしてやるよりしようがないな。

つい鷹之助もそんな気になっている。

考えてみれば、鷹之助もまた微禄とはいえ父祖重代の家祿をすてて、自分から生涯浪人ときめてはいるが、それで自分の命が助かるかどうかはわからない深い因果をしょっているのだ。本当はお光とこんなあやまちをおかしてはいけなかったのかもしれない。

——因果者同士、まあ成りゆきにまかせるよりしようがないだろう。

鷹之助はそうあきらめながら、そのあきらめの底からお光に対する根強い愛情が胸の中へ深く食いこんでくる。

ついこの間あのひとを失い、いままたたとえ一夜でも本気で妻にしたお光を失うことは、なんともたまらない寂しさなのだ。

2

「お光、おまえどうしてそうきげんが悪いんだ」

愚かなる男はつい女のきげんがとりたくなってくる。

「きげんなんかちっとも悪くありませんのよ」

「そうかなあ」

「あたしのたのもしいだんなさまは、こんどこそ、和助が出たらきっと切ってくれるんでしょうねえ」

「ああ、おまえ、和助が怖いのか」

「あんなやつ、怖くなんかあるもんですか。あたしはね、和助が出てきたら、こんどこそかんざしで両方の目玉を突き刺してやる気でいるんです」

「くまんばちのお光ちゃんだからなあ。怖いなあ」

「ええ、あたしはくまんばちのお光なんです。いざとなれば、毒婦だって、気ちがいだって、なんでもありゃしない」

どうやら本音がちらっと顔を出したようだ。

「それはそうだろうなあ。しかし、眠り薬だけは気をつけないといけないぞ」

「だれがそんなもののまされるもんですか」

「それならいい」

「どうしてあなたは毒婦なんか怖がるのかしら。あたしは身代なんかちっとも惜しいとは思わないけれど、悪いやつに勝手に家の中をかきまわされるなんてとても我慢できそうもないわ」

「そうか、それなら勇ましく闘ってみるんだな」

「あなたは黙って見ているつもりなの。あたしを助けてくれる気はないんですか」

「いや、そのかわり、おまえの死骸だけはきっと拾ってやるよ」

「なんですって——」

お光がかっとしたように立ちどまった時、そこのなにかの社の境内の森の中からさっと黒い風のように往来へ飛び出してきたやつがある。

体つきのがっしりした股旅姿のやくざらしいやつで、走りながらきらっと腰の長脇差を引き抜く。あきらかにこっちを切るつもりのようだ。

「あっ」

それと見てさすがに棒立ちになって立ちすくむお光を、

「どいていろ、あぶない」

鷹之助はとっさにうしろへかばうようにして刀の柄へ手をかけていた。

「くそっ」

長脇差を胸でかまえて、体ごと死にもの狂いで突っこんでくる。それがこの男の身についた唯一の我流らしく、目を血走らせて突っこんで

きながら、
「おやっ」
六尺ほどのところへきて、急にびっくりしたように立ちどまった。
「おめえ、高助じゃねえか」
「やあ、宇之さん、珍しいところで出会ったもんだなあ」
鷹之助も思わず唖然として目をみはった。
それは姿こそ中間からやくざに変わってはいるが、この春高崎の切り髪屋敷でしばらくおなじ釜の飯を食っていた宇之吉で、たしか花が散って葉桜になったころ、十六、七も年上の荒木屋の女房おせきをそそのかして駆け落ちをした男だ。
「なあんだ、おめえいつそんな侍になったんだ。そうか、そういやあおせきから、おめえのおやじは浪人者だったって聞いたことがあったっけ」
「宇之兄貴はまだおれの叔母といっしょなんかね」
鷹之助はわらいながら聞いてみた。
「おめえにゃすまねえが、叔母御とは先月別れたんだ」
「そうか、やっぱり年が少しちがいすぎるからなあ」
「なあに、年なんかかまやしねえんだが、おれがあまりいい気になって金をしぼっていじめたもんだから、これじゃ先の見こみがないと、つまりおれに愛想をつかしたんだろうな、先月黙って高崎へ帰っちまいやがった」
「ふうむ、高崎へ帰ったのか、叔母は」
「うむ、なんでも元締めにわびを入れて、元の鞘へおさまってるって話だ。あれで元締めはおせきにゃ首ったけなんだそうだからな」
宇之吉はてれかくしににやにやわらいながら、
「あぶねえ、あぶねえ、おれはもう少しのところで、うっかりおめえを突き刺してしまうところだったんだぜ」

と、手にしていた抜き身を鞘へおさめる。
「ふうむ。どうしてだ、兄貴」
「一体、おめえはいつ切り髪屋敷を出たんだ。そういや、御後室さまはこの七月のはじめだかに、なにかはやり病のようなもんにかかってぽっくり死んじまったんだってな」
鷹之助はなんとなくぎくりとしながら、うわさはそんな風にひろまっているのかと、当たらずさわらずに、
「なんでもそんな話のようだなあ。おれは兄貴と叔母のことがあるんで元締めは知らん顔をしていてくれるんだが、どうも高崎に居づらくなってね、元の骨つぎの先生で田舎まわりをやっているんだ」
と、そらっとぼけておく。
「そうか、それでわかった。けど、おめえ人の女を取っちゃ罪だぜ。おめえ、和助って呉服屋の番頭を熊谷土手で脅して、あの娘を横取りしたんだっていうじゃねえか」
やっぱり、宇之吉もまた和助に金で買われた刺客だったようだ。
「そりゃ、兄貴、少し話が違うんだ。その和助ってのはどこにいるんだね」
「あれえ、おめえ和助に会っても平気なのか。こんどは刀で脅そうったって、あっちにはもう一人大和田っていう用心棒の先生がついているんだぜ」
宇之吉は小声でいいながら、森の中の社のほうをそっとあごでしゃくってみせる。
「いや、だれがついていてもかまわない。その和助っていう男に会えば話がわかるんだ」
「そうか――。じゃ、こっちへ来ねえ。あの社の裏に待っているはずだ。本当に、おめえ、いいんだろうな」
「うむ、かまわぬ」
鷹之助はここで和助という男に会えれば話は早いと考えたので、うっかり宇之吉について歩き出しながら、ふっと気がついてお光のほうを

振りかえった。五、六間向こうの松林のそばに、それまでへそを曲げて歩いていたところだからお光はまだきげんがなおらないらしく、つんとした顔で立ってこっちをにらんでいる。

こっちから呼んでやるのを待っているのだ。

「お光、どうしたんだ」

わらいながら声をかけたとたん、そこの社の森の垣根の破れ目とおぼしいあたりからぱっと人影がけだもののように往来へ躍り出してきた。手にきらっと匕首のようなものが光っている。

その道の反対がわの真正面に立っているお光が、

「あれえっ」

と、顔をゆがめて金切り声をあげた時は、もう男の匕首がぐさっとお光の帯のあたりを突きさして、お光の体はどっとくずれるように松原のほうへ腰からおちていき、匕首の男はそのそばを脱兎のように走りぬけて、松原の中へ逃げこんでいく。

「お光っ」

しまったと思った鷹之助は、くせ者を追うどころではなかった。

それでも乱れたすそをかばうようにくるりとうつぶせに身をかえしたお光のそばへ一足飛びに走り寄った鷹之助は、

「しっかりしろ、お光」

肩に手をかけるなり、右手が素早く傷のあたりをさぐっている。

お光は歯をくいしばって、一瞬気を失っているようだ。

無論、あの突っかけ方は、一突きでみぞおちのあたりを刺しとおしているはずである。とても助かるまい。こっちの顔がわかって、一言でも口がきければ見つけものだと思った。

「お光、しっかりするんだ、お光――」

鷹之助は全身に冷や汗を感じながら傷口をさぐる。その右手に全神経がかかっているのだが、

まだ血を感じない。

――はてな。

と思った。もう一度傷口をさぐる。

たしかに帯のあたりが一寸ばかり横に裂けているようだ。その奥になにか堅いものが指にさわる。そのほかにはどこにも傷らしいものはないようだ。

助かったと鷹之助は直感した。

「お光、けがはないようだぞ」

それでも鷹之助はそっと肩を抱いてお光を起こしてみる。

「あなた、あたしもうだめなの」

ようやく意識を取りもどしてきたお光は、夢中で傷口をおさえながら、まだかたく目をつぶったままかすれた声で聞く。

「しっかりするんだ。おまえは助かったんだ。そら、どこにも血なんか出ていないだろう」

鷹之助はぐったりしているお光の体をうしろから支えてやりながら耳もとへささやいてやって、思わずほおずりをしている。

涙がこぼれてきそうな気持ちだった。

「本当――。あたし助かったの」

お光はおずおずと傷口をさわってみながら、やっと匕首の切っ先は帯と衣類を裂いてそこにある堅いもので止まっているのがわかったようだ。

「これ、観音さまのおまもりかしら」

じいっとそこを手でおさえながら、ふっとお光のまぶたから涙があふれてきた。

「よかったわ、あたし。助かったのね」

「うむ、助かったんだ。どこも痛くはないんだろう」

「ええ。これは観音さまのおまもりなのよ」

お光はぬれた目をそっとあけて、はじめて鷹之助の顔を見あげていた。

3

「へええ、観音さまのおまもりがねえ。大した

もんだなあ」

さっきから少し離れたところにぽかんと立っていた宇之吉は、お光が鷹之助にたすけられて無事に立ちあがったのを見ると、安心したようにそばへ寄ってきていった。

「宇之さん、いまのくせ者が和助というやつなんだろう」

「うむ、手ぬぐいで顔をかくしてやがったが、あいつが和助なんだ」

「もしこのお光がおれに横取りされた女なら、なにも女の命をねらうはずはないだろう」

「そりゃそうだな」

「本当はな、宇之さん、和助はお光の家の番頭なんだ。それが商用でいっしょに上州へつれていった旅先で、主人の娘をくどこうとした。お光は気が強いから、その場で暇を出してしまったんだそうだが、その後でおれが道づれになった。つまり、和助としてはおれがじゃまになるわけだ。これまですでに二度おれは和助にねらわれているんだが、今日は宇之さんが中途でおれにかかるのをやめてしまったんで、もう破れかぶれでお光を殺してしまう気になったんだろう。あいつはもう半分気ちがいになっているようだからな」

「そうか。おれもな、あいつがその娘さんをねらって飛び出した時は、本当にどきりとしちまった。そんな約束じゃなかったんでね」

「大和田とかいう用心棒先生もいっしょだとかいっていたな」

「うむ。志村というところに幸兵衛さんて親分がいるんだ。そこの用心棒で大和田信蔵さんて先生なんだが、さっき蕨の宿で出会ったんで、二人で一杯やってるところへ和助が入ってきやがったんだ。あれはちょうどおひるごろだったかな」

「いくら出すと持ちかけたね」

「手つけが一両で、うまくいったら十両、こいつは悪い仕事じゃない。しかも、主人の娘なんだろう。利口な人だからね。なまじ顔を出すと面倒だと思って、早いとこ引っかえしてしまったんじゃねえかと思うな」

「なるほど、それを見て和助は自分でお光をやる気になったんだな」

「そうかもしれねえ。けどまあ、間違いがなくて本当によかった。おめえは江戸までお光つぁんを送っていくんだろう」

「うむ、乗りかかった船だからね」

「うまくいってらあ。さっきの介抱のしっぷりじゃ、乗りかかった船くらいじゃなさそうだぜ」

「おれより、宇之さん、おめえまた高崎へ叔母をいたぶりに行くんじゃないだろうな」

「冗談じゃねえ、うっかり高崎へ足を入れてみろ、こんどは元締めにかたわにされちまわあ」

「なるほど、それはそうだな」

「けど、おせきはすごく情が深かったからなあ。ちょいと未練があるにゃあるんだ」

宇之吉はにやりとわらってみせてから、

で、どうしても取りかえさないと店へ帰れないんだって泣きっ面をしてやがる。よし、そういうことなら、二人でそのさんぴんをたたっ切ってやる。しかし、娘はもう傷物にされているかもしれないぞ、それでもいいのかと念まで押したんだ」

宇之吉はちょっと好色そうな目をお光に向けてそんなことまで口にする。

お光はまだ青ざめた顔をして、ぼんやりと足もとへ目をおとしていた。

「その大和田先生は姿を見せなかったようだね」

「おれがやりそこなったらふいに出てたたっ切るという約束でね、なにしろちょいと強い相手だっていうもんだから、こっちもちょいと計略を立てたのさ。けど、相手が高の字だとわかっちゃ、いくらおれでもそうむやみに切るわけにゃいかねえや。おれがおめえと話しこんだのを見て、大和田さん、こいつはいけねえと思った

「じゃ、高の字、また縁があったらどこかで会おうぜ。お光っちゃん、精々高の字にかわいがってもらうんだね。さいなら」

と、お光のほうへからかうような目を向けて、さっさと浦和の宿のほうへ足早に歩き出す。

もうすっかり風来坊が板についてしまったような宇之吉の姿だった。

「さあ、こっちも出かけよう。歩けるか、お光」

鷹之助はなにかまだぼんやりしているお光の顔色を見ながらいたわるように聞く。

「歩けるわ」

お光は我にかえったように男の腕へつかまってゆっくりと歩き出す。

秋の日はすでに八ツ半（三時）をまわったような日差しになってきていた。

「ねえ、あたし観音さまの罰があたったのかしら」

「どうしてだ」

「あなたにすねたりなんかしたもんだから、あんな怖い目にあわされたのかもしれないわ」

「そんなことはないだろう。しかし、油断はできないな。和助はいよいよ死にもの狂いになってきている」

鷹之助はいまさらのようになにかぞっとせずにはいられない。お光がすぐそばにいればまさかあんなことにはならなかったろうが、こっちがうっかり宇之吉について五、六間離れていた、そのすきをねらわれてしまったのだ。そして、どう考えても、お光はたしかに和助に匕首で一突きにされている。こうして助かったのは、まったく奇跡のようなものだ。

「しかし、びっくりさせられたなあ、お光。正直にいうと、おれはてっきりおまえはやられたと思って、傷口をさぐっている手がふるえていた。血が出ていないんだからすぐにわかりそうなものだのに、何度もそこをさぐって血をさがしているんだ。すっかりあがっちまっているんだな」

「あたしはもう死んだと思ったのよ。ぬすっとかむりの中の和助の血走った目を見たと思ったら、もう匕首で一突きにされていたんですもの。あなたの声は耳に入ったけれど、目をあけるのが本当に怖かったの」

「まったく、生きていてよかった」

「この観音さまのおかげですのよ。これで二度目ですものねえ」

お光はしっかりと帯の上をおさえている。

「おまもり袋、出してみたか」

「いいえ、それは宿へついてからにします」

「そうか。今日は少し早いが、やっぱり蕨泊まりにしよう。板橋まで欲張ると、どうしても夜道にかかりそうだからな」

「和助はどうしてもあたしを江戸へ入れたくないんですね」

「憎いやつだ。おれは今まで欲に迷ってかわいそうな愚か者だと多少は同情していたんだが、おまえを一度殺されてみると、もう許せなくなってきた。こんど出てきたら切るかもしれない」

鷹之助は本当にそんな気がするのである。悪事を見のがせるのはこっちに命の余裕がある間のことで、命の危険を感じるようになってはもう絶対にゆるしてはおけないのである。

「ねえ、向こうにはまだ大和田とかいう用心棒がついてるんでしょう」

「だれがついていたって、おれはもうびくともしないよ」

「でも、あなたにもしものことがあったらどうしよう。あたしそれが怖いのよ」

お光はこっちの手をさぐって、しっかりとつかまってくる。

「なあに、油断さえしなければ大丈夫だ。観音さまのおかげで、せっかくこんないいお嫁さんができたのに、今から死んじゃいられない」

鷹之助はやっと冗談口がきけるようになってきた。

「そういえば、さっきの人だれなの。変なことをいってましたねえ」

お光がふっと思い出したように聞く。これもいくらか落ち着いてきたようだ。
「あれは高崎の中間でねえ、おれもしばらく高崎にいたことがあるんだ」
高崎のことはあまり口にしたくない鷹之助だが、さっきそばで聞いていたのだから、まるっきりうそもいえない。
「ああ、あなたのあのひと、高崎で死んだのね」
「うむ」
「叔母さんがいるんですか」
「本当の叔母さんじゃないんだが、あのひとのほうの引っかかりなんだ」
「おせきさんとかいってましたねえ。あの宇之さんて人となにかあったの」
「おせきは元締めの女房でね、まだ四十そこそこのもとは料理茶屋にいた女なんで、気の若い、派手っ気な女なんだ。そこへもってきて、亭主のほうはもう六十を越しているんで、どうしてもかわいがりかたが足りなくなるんだな。宇之って男はああいう野放図なところのあるさばさばとした性分なんで、どっちから先に手を出したか知らないが、つい妙な仲になってしまって、この春とうとう駆け落ちをしてしまったんだ。その駆け落ちのほうは野放図な男のほうから持ちかけたらしいな」
「だって、十いくつも年が違うんでしょう」
「うむ、年からいえば親子ほども違うんだが、宇之はどうせ一生夫婦になろうなんて気はないんだから、そんなことはかまわないんだろう」
「叔母さんのほうはどんな気だったのかしら」
「それは、亭主の手前、家にいられなくなって、いずれは捨てられるとわかっているんだが、それを承知で男のいうなりになった。さっきも宇之はおせきは情が深かったっていったから、無鉄砲な若い男が一面では子供のようにかわいいにはかわいかったんだろうね」
「宇之さんはずいぶん叔母さんをいじめたっていってましたね」

「宇之は半分はそれが目的だったんだろうから、女が金を持っている間は金をせびる、金をやらなければ着ているものまで裸にむいて持っていく、そんなことを平気でやる男なんだ」
「叔母さんは高崎へ逃げて帰ったっていうけれど、御亭主とうまくいっているのかしら」
「そりゃ、そっちもまた親子ほど年がちがうんだから、亭主のほうは大目に見る気になるだろう。若い女房はかわいいもんなんだそうだ。年上の女が若い亭主をかわいがるのとおなじ気持ちでね」
お光はふっと黙りこんでしまう。
道はどうやら蕨の宿外れへかかってきたようだ。
あのひとは鷹之助にとっていわば年上の女房だった。だから、若いけだものがどんなに乱暴なまねをしても、高はお行儀が悪いからと目を細めてわらっていた。
いまここに、こんどは若い女房がいる。この女房はかなり癇の強い因果娘だから、気が立ってくると時々暴れ出して亭主を困らせそうである。
鷹之助がふっとそんなことを考えながら歩いていると、
「あたし、わかったわ」
と、お光が急に顔をあげた。
「なにがわかったんだ」
「伯母さんが和助を手先に使っているんじゃなくて、きっと和助のほうが伯母さんを突っついてなにかたくらんでいるんです。いまに和助は伯母さんを脅して駆け落ちをするんじゃないかしら」
お光にはそんな風にとれたらしく、そういいながらじっとくちびるをかんでいた。

4

蕨の宿は、町八町、人家三百軒あまりで、町の大きさは上尾の宿とそうかわらないが、こっ

ちのほうが江戸に近いだけ人家は百軒ほど多い。

鷹之助がお光をつれてそこの林屋という旅籠についたのはまだ七ツ（四時）を少しまわったばかりで、通された奥の二階座敷の西の廊下の障子に、黄ばんだ夕日がやがて赤みをおびていこうとするところだった。

この座敷は上尾の時とおなじように廊下でつづく別棟になっていて、ただこっちは二階の二間だから、人の出入りは階段口が一つあるきりだ。上尾の時の座敷より用心はずっといいわけである。

お光は、女中が二度目に茶道具を運んできて、

「おふろがわいておりますから、どうぞ――」

とあいさつをして出ていくまで、旅装を解いただけでぐったりと火ばちの前へ座りこんだまま口をきくのも大儀だというように黙りこんでいたが、その女中の足音が階段をおりはじめると、急に立って座敷のすみへ行った。

もうしばらくだれもこないと見て、守り袋の中の観音像を調べてみるつもりなのだろう。うしろ向きになって堅い帯を手早くときはじめる。

その帯がするするとうずをまくように足もとへ落ちると、

「だんなさま、これを見て――、やっぱり胴巻きのところとおっていますのよ」

と、くるりとこっちを向いて立てひざになる。

「どれ――」

鷹之助はいざり寄っていってみた。

なるほど、さっき手でさぐってみたとおり、ちょうどみぞおちの下あたりの着物が斜めに一寸ばかり口をあけ、それが長襦袢をとおして胴巻きまで鋭く切り裂いている。

「和助も死にもの狂いだったろうからな」

まったくぞっとせずにはいられない。お光は座りながら、両手をそで口から内ふところへ入れて、右手で錦の袋を取り出す。

裂け口はやや小さくなっているが、そこにもおなじ切り口がある。

その袋のひもをといて、赤銅の守り札を取り出しながら、お光の白い指はかすかにふるえていた。

七首の切っ先をうけとめたのは観音像をはめこんである表のほうではなく、観音経の彫ってある裏がわで、切っ先をうけとめたところはやや深く、そこから斜めに一線かすり傷が流れている。

「もったいない」

その傷跡をじっと目でたしかめてからお光はため息をつくようにつぶやいて守り札を押しいただき、いそいでもとの錦の袋へおさめる。そして、手早く内ふところの胴巻きの中へしまいこみながら、

「ねえ、あたしはやっぱりさっき一度死んだんですねえ」

と、しみじみとした声でいう。

一瞬その感謝にみちたいきいきとした白い顔に、やや赤みを加えてさしている障子の夕日がひっそりと静かな陰影を作って、鷹之助にはお光自身が観世音菩薩になりきっているような美しさに見えた。

「よかったなあ、お光」

鷹之助は思わずその肩へ手をかけて、胸の底から泉のようにわきあふれてくるよろこびに歓喜しながら、急にお光を抱きよせて愛情のくちびるをかさねていった。

「あなた――」

お光もまたおなじよろこびに胸の血が一度に燃えあがってきたのだろう、両手をひしと男の背へまわしてすがりつきながら、激しくくちびるを吸われて、うっとりと目をつぶっている。

若い男と女にとって、生きているよろこびはついに生きているよろこびを求めあわなくてはおたがいに満足できないようだった。

「お光」

息づまるような男の声が、それを納得させるように、そっと女の名を呼ぶ。

お光はただ熱い息づかいになって、かたく目をつむりながらすでに夢うつつの中にあえいでいる。紅を刷いたように上気した顔も、全身から力のぬけている女体も、それは甘くとけゆるんで男を待っている女の姿でしかない。

男はそのぬれぬれとした熱い女のくちびるをもう一度強く口にふくみながら、静かに女体を畳の上へおいていく。女体はもう男のなすがままであった。

やがてあらしのような興奮がしだいにたかまって、生命の歓喜に燃え狂いながら、あくなく求めあうものをついに求め得て、心も肉体も陶然とみちたりていった。

お光の女体は昨夜のそれよりもはるかにはっきりと男を感じたようである。

「ねえ、少しお行儀が悪くないかしら」

横座りに起きあがって、いそいでひざ前をなおしながら、お光はいくぶん男をなじるような目をしていう。

「そんなことはないさ。観音さまに助けてもらった命をおれたちは感謝して、二人で心からよろこびあったんだ。おれたちは夫婦なんだから、これでいいんだ」

「だって、少し恥ずかしい」

「夫婦の間に恥ずかしいはないだろう」

「そうかしら――」

お光はまだ女体に残っている歓喜の甘い余燼をかみしめているようなうっとりとした目を障子の夕日のほうへ遊ばせながら、

「ねえ、あのひとのお墓、高崎にあるの」

と、ふいに真顔にかえって聞く。

「どうしたんだ、いきなり――」

鷹之助は内心どきりとしながら目をみはった。

「どうもしませんのよ。あたし一度どうしてもあのひとのお墓まいりがしたいの。お墓は高崎なんでしょう」

「うむ、高崎だよ」

「年が上だったのね」

「うむ」

「きっと、ずいぶんかわいがってもらったのね」

「そのかわり、こんどはその分をおまえにかえしてやろうと思っているんだ」

「だから、あたし、お墓まいりをして、あなたをあたしのだんなさまにくださいって、一度あのひとにことわってこなくては気がすまないの。つれていってくれますね」

「おまえ、案外義理がたいんだなあ」

「そうですのよ。あたしそうしなければあのひとに悪いような気がするんです」

あのひとに悪いというより、男のなにからなにまで自分のものときめてしまわなければ気がすまない、お光はそういう性分の女なのだろう。

「よし、それじゃこんど高崎へつれていこう」

鷹之助は気軽にそう約束はしたが、あのひとの事情が事情だけに、はたしてそれがいつの日になるか、ふっとそこになにか不安なものを感ぜずにはいられなかった。

浮き世舟の記

1

「お光、おまえふろはどうする」

膳が出るまでにはまだ間がありそうなので、鷹之助は聞いてみた。

「あたしどうしようかしら。――入ったほうがいいと思う」

お光はそんな聞き方をして、ちょっとはにかんだような顔をする。

「いや、わしはどっちでもいいんだが、今日はどこへ行くにも絶対におまえのそばを離れるわけにいかないんでね」

「そうねえ。あたしも一人になるのなんだか怖

い」

手あぶりを中にして向かいあいながら、さてそうなると飯になるまでは所在ないような気もしてくる。

そのくせ、こうして黙って顔を突きあわせていても、もう他人でいた時のようにぎごちなさはどこにもなく、ふっとこれからの長い一生をいつもこんな風に二人で暮らしていくんだろうなと思うと、なにか豊かな愛情がじいんと胸へうずいてくるのだから楽しい。

「ごめんなさい」

廊下へ宿の女中がきて、声をかけながら障子をあけた。

「あの、お客さんは峰村さんというんですか――」

「うむ、わしは峰村だが――」

「それなら、今、店へ大和田信蔵さんて人がきて、ちょっとお目にかかりたいっていっています」

お光がぎくりとしたようにこっちを見る。

「どんな人だね」

「浪人さんのようです」

「一人か」

「一人のようです」

「よし、会ってみよう。つれてきてくれ」

「はい」

女中は障子をしめていそがしそうにさがっていく。

障子の夕日は消えて、そこに秋深い水色の夕方が急にひえびえとただよいはじめていた。

「ねえ、大和田って、さっき宇之さんて人がいっていたどこかの用心棒でしょう」

お光は夢からさめたように不安の目を大きくみはっている。

「どうもそうらしいな」

「大丈夫なの、会っても」

「大丈夫だ。見えない敵より見える敵のほうがまだ始末がいい。どうせただじゃすまないんだ

からな」

鷹之助はとっさに度胸をすえながら、たったいま甘い感傷にひたりかけていた自分を、いい気なものだと苦笑したくなる。

「お光、おれのそばを離れちゃだめだぞ」

「離れやしませんけれど、あなたを切りにきたのかしら」

「なあに、まさかここじゃ刀は抜かないだろうよ。どっちにしたって、おれは切られやしないから、つまらない心配はしなくてもいい」

いたわるように大口はたたいてみたものの、運悪く切られる自分より、後に残るお光のことを思うと、たまらないいじらしさに襲われてくる。

「いいんですのよ。わたしだって和助なんかに負けやしません」

そういうお光の目は精いっぱい憎悪に燃えて、

「勝ってね、あなた。あたし、一人になるのいやよ」

と、歯をくいしばっている。

階段をあがってくる足音が耳についてきた。

「安心しておいで。おまえを一人にはしないから」

鷹之助はにこりとわらってみせながら、あくまでも強気にならなくてはならないと思った。

「こっちです、お客さん」

「ああ、そうか」

軽く答えた声音に案外殺気めいたものはないようだがとそっちを見ていると、

「失礼する」

廊下の障子に黒々と人かげがさして、さらりとそこがあいた。

「鷹さん、おれだ」

「やあ、信吾」

鷹之助はあっと目をみはった。

五分月代の着流しで、身なりはすっかり用心棒浪人にかわってはいるが、国もと古河の徒士

組仲間で太田信吾という神道無念流の使い手である。

「驚いたなあ、大和田信蔵ってのは信さんだったのか」

「さよう、おれだ」

信吾はわらいながらそこへ座って、

「御新造、わしは峰村の友人の太田信吾です。——御新造でいいんだろう、鷹さん」

お光のほうへ軽くあいさつをして、あらためてこっちへ聞く。

「うむ、たしかに女房でいいんだ」

「あたし、お光と申します。どうぞ、あの、こっちへお寄りくださいまし」

お光もまったく意外だったらしく、真っ赤な顔になりながらどぎまぎと手あぶりの前をさがって、その座を客にすすめる。

「いや、かまわんでください。わしはすぐおいとまするんだから」

信吾は座ったところを動こうとはせず、

「和助という男はひどいやつらしいねえ」

と、お光と鷹之助の顔を見くらべながらいう。

「すると、信さんも、さっき宇之吉がいっていたが、和助にお光がやられるところを見ていたことになるのか」

「そうなんだ。あの時はおれはまだ志村の幸兵衛一家の用心棒大和田信蔵で、和助に宇之吉といっしょに一両の手つけ金をもらっていてね、熊谷土手で主人の娘を横取りした浪人者をやっつけることになっていたんだ。しかし、それが鷹さんだとわかってみると、おれも宇之吉とおなじで、あの場は逃げ出してしまうよりしようがないやね」

信吾はけろりとした顔つきで苦わらいをしている。

「あれから和助はどうしたんだろう。知らないかね」

「あいつはさっき鷹さんたちの先まわりをして、この宿の外れへかくれていたんだ。そこへ一

突きにしたはずの御新造がだんなと仲よくいっしょにやってきたもんだから、悔しがるまいことか。畜生、どうして助かりやがったんだろうとじだんだを踏んでいるから、おめえはなんだって主人の娘を殺す気になったんだっておれが聞いてやると、こうなりゃもう主人の娘もくそもあるもんか、あの娘はもと地まわりといっしょになってぐれていて、くまんばちのお光と肩書きのついた毒婦だったんだ、あんなごろつき浪人とぐるになって店をかきまわされちゃ後見人がかわいそうだし、店を台なしにされちまう、どうしてもおれの手で始末をつけてやるんだといって、鷹さんたちがこの林屋に入るのを見とどけてから板橋のほうへ駆け出していったようだ。たぶん、志村の幸兵衛一家へ駆けこんで、また助太刀をたのむ気なんだろう。金はまだいくぶ持っているようだからね」

「あの、粗茶でございますけれど」

お光はもうすっかり落ち着きを取りもどしたらしく、茶を二つ前へおいていた。

「信さんはどうして博徒の用心棒なんかになっていたんだろうな」

鷹之助はふっと疑問を感じて聞いてみた。たとえば、なにかの理由で用心棒になりさがっても、この男は初対面のどこの馬の骨かわからないやつに一両もらって殺し屋などを引きうける軽率な性分ではないはずなのだ。

「いきなり、いやなことを聞くんだなあ、鷹さん」

案の定、信吾は目でわらいながら、ちらっと真顔を見せて、なんとなくお光のほうへ気兼ねをしているようである。

「お光はここにいてもかまわないんだ。信さんはおれを切りにきたんじゃないのか、ある人にたのまれて」

鷹之助はずばりと切り出していく。

「そうか、御新造は一生つれそう女房ってわけ

だからな」

信吾は冗談のようにいいながらあらためてお光のほうを見なおしている。

「そうなんだ。おれは一生骨つぎで結構食える男なんだ。それでいいと思っているんでね」

「ある人もたぶんあの男はそのつもりだろうといっていた。そのつもりで、当分江戸の上屋敷へも国もとへも立ちまわる気がなければそれでいいんだそうだ」

「おれは江戸を立つ時から無論その腹でいた」

「鷹さん、おれは鷹さんがなんの目的で高崎に行ったのか聞いちゃいないんだぜ。しかし、ある人は、高崎の刺客を気をつけてやってくれと、それも心配していた」

「ふうむ、高崎の刺客をねえ」

鷹之助はいまさらのように目をみはる。

「非情のようだがなあ、鷹さん、ある人は鷹さんが高崎の刺客にやられるという不名誉を恐れているらしいんだ。特にこの街道筋と国もとの領内でやられては困ると考えているらしいな」

「その気持ちはわかる」

わかるにはわかるが、その非情さにはやっぱり納得しかねるものがある。

「つまり、ある人はおれの自決を望んでいるんじゃないのか」

鷹之助は我にもなくつい皮肉が口に出てしまった。

「さあ、おれは事情はなんにも知らされていないんでねえ」

信吾はあっさりかわして、わざと冷静な顔をしてみせるのだ。

2

どっちからともしばらく言葉がとぎれて、妙に白々しい空気が重くよどんでくる。

廊下の障子はすでに冷たいたそがれの色にかわってきていた。

お光は鷹之助のうしろへさがって、石のように体中をかたくしながらじっと目を伏せているようだ。

——かわいそうなやつ。

ふっとそう気がついたとたん、鷹之助の気持ちから急に怒りらしいものが淡雪のように消えていった。

「信さんも貧乏くじをひいたもんだなあ」

この男もまた役目を果たさなくては帰参するわけにはいかないのである。

「源吉がねえ、鷹さん、こんどのことは吉川の伝之助と前岡のせがれとの陰謀だといっているんだ。かれの説によると、吉川の初枝はこの七月在所へかくれて、たしかに英之進の子を産んでいるというんだがね」

「ふうむ」

やっぱりそうだったかと鷹之助は思ったが、初枝のことはもうすっかり記憶のかなたへ色あせている感じである。

「それで、次の幕は来年の春あたり、初枝はまた娘になって前岡のところへ嫁に行く段取りだろうというんだ。しかし、兄貴は死にやしねえ、きっとどこかで生きている。ざまあ見やがれといって、一人で痛快がっていたようだぜ」

信吾はさりげなくそういってわらってみせる。

「だから、おれが一度国もとへ立ちまわりゃあしないかと信吾が心配してくれたというわけか」

「邪推をまわしちゃいけねえ」

「なあに、おれにゃあいにくここに女房がいるんだ。もう国もとにゃ用がないかわりに、いま死んでやるわけにもいかない。こんど源吉に会ったら、これがおれの本音といってやってくれないか」

「心得た。ところで、さっきの宇之な、あいつの話だと、鷹さん高崎の切り髪屋敷であいつとしばらくいっしょだったそうだね」

「うむ」

「そこへ夜詰めに通っていた牧田常蔵と坂上文次郎という男を知っているかね」
「知っている。それがどうかしたのか」
鷹之助はどきりとせずにはいられなかった。牧田も坂上も高崎の徒士組の侍で、選ばれて切り髪屋敷の夜警をうけもっていた男たちなのだ。
「その二人に途中で出会わなかったのか」
「いや、会わなかった」
「すると、どこかで行き違いになったんだな。その二人は高崎の貧乏くじ組らしかった。おれといっしょにおとといまで志村の幸兵衛一家の用心棒をやっていて、毎日戸田の渡しを中心にしてこの辺までぶらぶらしていたんだが、一度高崎へ帰ってみようということに相談がきまったらしく、昨日の朝、二人でわらじをはいたんだ」
「ふうむ」
昨日はこっちは上尾泊まりだった。しかも、今日とおなじようにかなり早目に旅籠について いるから、たぶんそこで行きちがいになったのかもしれない。
「いいか、鷹さん、高崎にも貧乏くじ組が出ているとすると、大名の片意地でな、恨みは相当深いものと見なければならない。ことによると一生つきまとわれるかもしれないんだ。おれは今日ここで鷹さんに会って、聞くだけのことは聞いたし、いうだけのことはいった。これで役目はすむんだから、おれにも女房子があるし、薄情のようだが、これ以上鷹さん夫婦の盾になってやるわけにはいかないんだ。だから、むごいようだが、早くこの街道筋を離れること、江戸と国もとへはなるべく当分近づかないこと、これだけはぜひ忘れないでもらいたいんだ」
信吾はいかにも気の毒そうに、しかもきっぱりといいわたすのである。
「ありがとう。よくわかった。必ず善処するから安心してくれ」
「それじゃおれはこれで失礼する」

「まあいいじゃないか。これが一生の別れになるかもしれない。いっしょに飯を食っていっちゃどうだ」
いよいよ一生浪人と身分がきまってみると、この友人にもなんとも名残惜しい気がしてくる鷹之助だった。
「いや、遠慮しよう。ここで御新造と二人に当てられちゃかなわない」
「冗談いうなよ」
「無論、いまのは冗談だがね。おれはあんたたち新夫婦を祝ってやる贈り物がなんにもない。せめてこれから志村へ帰って、和助だけは御新造の迷惑にならないように説得しておいてやりたい。——御新造、この男はあんまり気のきくほうじゃないが、きっと女房は大切にする男です。この男のおやじもそうだったから、これだけは間違いありません。では、ごきげんよう」
信吾はわらいながら立ち上がって、
「鷹さん、見送りはいらないよ、軽挙のうちに入ると悪いからな」
と、わざわざ念を押して廊下へ出ていく。
「ありがとう。あんたも達者でな」
鷹之助はそれだけしかいう言葉がなかった。客のさった障子にたそがれの色が濃い。うしろでお光のたもとで押し殺しているような嗚咽の声がする。
鷹之助はあふれそうになる涙をじっと奥歯でかみころしながら、これはなんの涙だろうかと思った。
感傷の涙など味わっている時ではない。自分はいま一生の岐路に立たされたのだと、はっきりそれを感じた。
生涯、高崎の刺客につきまとわれる体だとしたら、このままお光をわが女房にしておいてもいいだろうか。第一にそれがなによりも問題になってくる。
それに、自分はともかくもお美世の方を毒死させているのだ。

だから当然自決するのが本当だと家老が迫るなら、意地になっても生きぬいてその非情と対決してやるが、生死は勝手にしていいといわれてみると、自分としてもう一度自分の良心と対決しなければならないような気がしてくる。

「お光、もう泣くな。今夜ゆっくり二人で相談しよう」

「ええ」

そのお光が急に立って、控えの間へ逃げていく。

階段をあがってくる足音がして、女中が行燈を持ってきたからである。

「おそくなってすいません、お客さん。もうお膳を出してもいいでしょうか」

「うむ、そうしてくれ。銚子を一本つけてな」

「はい」

薄暗い座敷へ灯が入ると、目がさめるように気持ちまであたたかくなってくるからおかしなものである。

「ねえ、あたしの顔泣いたように見える」

暗いところから出てきて、もとの手あぶりの前へ座りながら、お光はこっちへ顔を向けてみせていた。まだしめっぽい目だが、その目がもうはにかんだようにわらっている。

「なあに、もうわかりゃしないよ」

「あたし、どうして泣いたりしたのかしら」

「そうだなあ。泣くようなことはなにもなかった」

考えてみると、こうなりそうだなあと思っていたことがこうなったまでのことで、いまさら動揺することもなかったのだ。

「あの人、親切な人なんですものねえ」

「あれはおれたちの仲間ではいちばん腕が立つんだ」

「だから、貧乏くじをひいたのね、きっと。女房子があるといっていましたねえ」

「うむ、国もとにね。もう近いうちにその女房子に会える。本当によかった」

「あなたも国もとへ帰りたい」

帰れないのを知っていて、わざと聞きながら、同情しているような目だ。

「冗談いうなよ。おれは国もとへ帰らなくったって、ちゃんとここに女房子がいるじゃないか」

「あんなこと――。まだ女房だけで子はありませんのよ」

「しかし、お光、おまえどうする。おれは江戸へ落ち着くわけにいかなくなってきたが、本郷くらいまでなら送ってやれると思うんだ」

「その話はまだいや。御飯をたべてからにしましょうよ」

ぴしゃりといってお光はわらっていた。

そのお光はなにを考えているのか、膳がきて、一本の銚子を二人でのみ、飯をすませてからも、その間中うきうきとたわいもない口ばかりきいて、その話にはなるべく触れないように避けている。

そして、やがて寝る時がきて、まくらをならべて床につくと、

「ねえ、あの話は明日にしてね。いいでしょう」

と、先手にことわって、どうしても口をひらかせようとしない。

こっちもそんな話をしないですむなら無理にしたい話ではないのだし、これが二人の最後の夜になるかもしれないという気持ちもあるから、ただむさぼるようにお光の体を抱きよせていた。お光もまたそれにこたえるように女体にあるだけの情熱をたぎらせながら激しい興奮を求めつくして、その興奮が満ち足りると、まもなく男の胸の中で甘い安らかな眠りにおちていた。

――のんきなもんだなあ、一体お光はどういうつもりでいるんだろう。

この寝顔には、明日は別れなくてはならないというような悲しみはみじんも感じられない。

そして、ふっと気がついたのは、さっき信吾は和助のほうの片をつけてやるといって帰って

いった。お光はそれを待って覚悟をきめる気でいるのかもしれないということだった。

しかし、たとえ和助のほうがどう片づいてみたところで、こんどはそれだけですむ問題ではないのだ。それより大きな問題がこっちにあるのである。

――お光にはそれがわかっているのだろうか。

鷹之助はそんなことを寒々と考えているうちに、自分もまたどうしようもない宿命に思い疲れて、いつの間にか深い眠りにおちていたようだ。

3

翌朝――。

鷹之助はお光といっしょに、普通の時刻に旅籠を立つことにした。

今日は二里歩けばもう板橋で、場合によってはそこでお光と別れなければならないのだが、お光は朝起きた時から明るい顔をしていて、なんの屈託も見せようとしない。それがあながちつけ元気とも思えないのだ。

――おかしな女だなあ。

そうは思ったが、鷹之助もなまじめそめそされるよりこのほうが気が楽なので、お光のほうからなにか切り出してくるまで余計なことはいわないことにしていた。

今日もよく晴れた秋空である。

「ねえ、今朝もまただれかの死骸を見るかもしれませんねえ。いやだなあ、あたし」

お光がふいに妙なことをいい出す。もっとも、一昨日は熊谷土手で駒吉の死骸を見ているし、昨日は上尾ノ原で御家人安の死骸に行きあたっているから、今朝見れば三度ということになるのだ。

「二度あることは三度あるというが、まあそうともかぎらないだろう」

「そういえば、三度目は昨日のあたしだったかもしれませんねえ」

「つまらないことをいうなよ。おれはあんなにびっくりするのはもうたくさんだ」

「ですから、あたし、三度目は昨日のあたしということにしておきます。本当にあたしは昨日は一度死んだのもおなじですもの」

お光は真顔になっている。

「そりゃまあいい、厄落としにはなったかもしれないなあ」

「ええ、二度目はあたしでもうすみましたのよ。――ちょっと待ってね」

お光はふいに立ちどまって素早く鷹之助のうしろへまわると、

「つるかめ、つるかめ」

といいながら右手で男の両肩を払っている。

「なんのまねだ、それは」

「さあ、もういいんですのよ、これで安心なんだから」

「なにが安心なんだ」

「そんなこと気にしなくてもいいんですのよ。あたしがもうあなたの身がわりになってしまったんですもの」

「ああ、そうか。おまえ、おれの高崎の刺客――」

「いやっいやっ、その話はたくさん」

お光は痛いほどぎゅうっとこっちの腕をつかんで、

「鷹さんもお光も、昨日生まれかわりました。いま死んではおなかの中の赤ん坊がかわいそうです」

と、冗談のように棒読みにしてわらっている。

「じゃ、おまえ、おまえ家へ帰らなくてもいいのか」

「鷹さんにもお光にも、帰る家はありません。今夜はどこへ泊まるんでしょう」

「そうか、かわいそうになあ」

鷹之助は冗談のようにうけて、やっとそういうお光の気持ちがのみこめてきたような気がする。お光は、男が刺客にねらわれていて国も

「わらっちゃいやだっていうのに」

さすがにお光は赤い顔になりながらもうしっかりと目をつぶって、こっちのたもとにつかまって歩いている。

「こいつはなんでも、渡し場のおやじの話だと、ゆうべ辻切りにやられたんだとよ」

「どこか江戸の番頭らしいな。まだ若い男じゃねえか」

土地の者らしい男が二人むしろをはぐって顔を見ているようなので、はてなと思い、通りすがりにつかつかとそばへ寄っていってみると、案の定それは和助で、前のめりに両手をのばして土をつかむようなかっこうで倒れているのは、ふいにうしろから袈裟がけにでもやられたものとみえる。

「お光、やっぱり和助のやつだったよ」

一足先にさっさと通りすぎて待っているお光に追いついて、肩をならべながら小声でいってやると、

とへも江戸へも足を向けられないとわかってから、すっかり同情してしまったのだろう。

しかし、そのひどい現実の世界に、はたしてそんな夢のような甘い同情がうまく実を結んでくれるかどうか、鷹之助はいよいよ自分と対決してみなければならない羽目に立たされてきた。

「あら、あれなにかしら」

お光がどきりとしたように声をあげる。

並木道がゆるくうねっていく向こうの道端に四、五人の人だかりが見え出して、ちらっと不気味な荒むしろの端がのぞいている。ちょうど藪と板橋の中間、戸田の渡しに近いあたりである。

「やれやれ、やっぱり本当の三度目にぶつかってしまったようだね」

「あたし、見るのはいや。今日は目をつぶって通りますからね。赤ちゃんにさわるとかわいそうなんだもの」

「おまえ、そんなに赤ん坊のことが気になるのかなあ」

「じゃ、信吾さんが切ってくれたのかしら」

と、お光はうしろを振りかえってみようともしない。

「そうじゃないらしいな。和助は藪のほうを向いて倒れている。そっちへ向かって歩いているところを、ふいにうしろからやられたようなかっこうをしている」

信吾は決してうしろから人を切るようなひきょうな男ではないし、まして国もとに女房子が待っているのだから、いまさら和助などを切るはずはないと思うのだ。

「そうかしら」

お光はうわのそらで答え、早くそんなところから遠ざかりたいというようにさっさと歩いている。

戸田の渡し場へくると、ちょうど渡し舟が五、六人客を乗せていま岸離れしようとしているところだった。

「お光、走ろう」

別にそういそぐ必要もないのだが、そこは人情で、鷹之助はお光の手を取って走った。

こっちの舟はそれを待っていてすぐに岸を離れた。棹を突っ張って、五、六間も離れたところで向こうからきた渡し舟とすれ違うようになる。

向こうの舟の胴の間あたりに、真新しい手ぬぐいをあねさまかむりにした女が、船端にこいきなうしろ姿を見せて腰かけていた。そばに御家人くずれとも見える渋い旅支度の男がすらりと立って川上のほうをながめている。

田舎では見なれない一組みだからすぐ目についたのだ。

——こっちの組だっておなじことだろう。お光は少し目につきすぎる。

鷹之助がひそかに苦わらいをしていると、ふっとすれ違っていく舟のほうを見たお光が、あっといって立ちあがった。

「どうした、お光」

「いいえ、なんでもないの」
客の目がみんなこっちへ集まったので、お光は戸惑いしたようにわらいながら、
「あそこに伯母さんが乗っているのよ」
素早く耳もとへささやいて、元のところへ腰かけてしまう。
その間に向こうの舟は桟橋へ横づけになっていく。
今になって、立ちあがった向こうの女は男にこっちを指さして教えながら、さっさと舟をおりていくのがもうかなり小さくなって見えた。向こうもやっぱりこっちを知っていたのである。
「お客さん、いまのお武家さんを知っていなさるかね」
船頭のおやじがのんびりと声をかけてきた。舟はやがて中流へかかっている。
「いや、知らない人だった」
「そうかね。大きな声じゃいえねえが、昨日もうしまい舟のころ、あのお武家さんと、そら、向こうで切られて死んでいる若い番頭さんね、その二人がおれの舟に乗って向こうへわたったです」
「ふうむ、すると、帰りもここを渡ったのかね」
「なあに、帰りはどこにでも抜け道があるからねえ」
船頭はうすらわらいを浮かべている。
「けど、それが本当なら、大胆なもんだなあ、とっさん。あんなきれいなべっぴんをつれて、もう一度その死骸のそばを通るなんてよう」
相客の一人が感心したようにいう。
「いんや、おれは別にいまのお武家さんがその若い番頭を切ったんだとはいわなかったぞ。ただ舟に乗ったといっただけだ」
「ああそうか。そうだったっけな」
客は土地の者らしく、あは、はと、取ってつけたようにわらっていた。
お光は知らん顔をして川下のほうをながめている。
それはどうやらいつもの意地の強い顔になっているようだ。

4

渡し舟の中ではうっかりした口はきけない。が、いま見たお光の伯母おたきの姿は、どう考えてもあの御家人くずれと駆け落ちをしていくところだとしか鷹之助には思えないのだ。
おたきが駆け落ちに踏み切ったのは、無論、和助がお光の毒殺を失敗すると見越してのことで、あるいはあの情夫の御家人くずれが後からおたきのあまりにも杜撰な計画を耳にして、事がばれてからでは命がない、逃げるなら今のうちだといいきかせて、おたきをつれ出したのかもしれない。
また、こうも考えられる。
お光と和助は、順当にいけば一昨日は大宮泊まりで、おそくも昨日の夜両国横山町の桐生屋へ帰れるはずだ。
あの二人はともかく昨夜板橋まで出てきて、御家人くずれが戸田の渡しまで出張り、お光か和助かどっちかが帰ってくるのを待ちうけていた。
そこへ、お光を刺し殺しそこねた和助が、夕方もたそがれ近く一人で渡しをわたってきた。和助は御家人くずれをおたきの情夫だとは気がついていないが、顔は知っている。こいついいところで出会ったと、信吾たちを金で雇った伝で、さっそくあの御家人くずれに渡りをつけ、二人で蕨へ引きかえす約束ができて、いっしょに渡しをわたった。
御家人くずれにすれば、自分の考えたとおりの結果になっているのだから、さっきの並木道で和助の口をふさいで板橋へ引きかえしたということになるのだろう。
それにしても、あの二人が今日この道をとおれば当然途中でこっちと出会うのを承知で、顔

をかくさずにこの道をとおったのはどういう気持ちなのか、今のところ鷹之助にはそれがちょっと解せない。

あるいは腕に自信があって、旅籠へ押しこむのはちょいとまずいが、街道筋でなら刀を抜いてもけんかですむ。うまくいったらそれをやろうという、そんなずぶとい気持ちがあったのかもしれない。

——とにかく、ああして毒婦が桐生屋から退散すれば、お光は安心して家へ帰れそうだ。

鷹之助がそんなことを考えているうちに、渡し舟はどうやらこっち岸へ着いたようだ。

「お光、着いたぞ」

どやどやと舟をおりはじめる五、六人の人たちのうしろから、なにかむっつりと沈みこんでいるお光をうながしてこっちも岸へあがっていったとたん、そこの渡し小屋のかげからふいに思いがけない男が飛び出してきたのである。

「高の字、待っていたぜ」

昨日大宮のほうへ別れていったはずの宇之吉なのだ。

「どうしたんだ、宇之さん」

「こっちへきてくんな、偉いことになりやがったんだ」

宇之吉は血相をかえて先に立ち、土手下の河原をずんずんあしやすすきのしげった川下のほうへ歩き出す。

——はてな。

街道は渡しをわたるとまもなく戸田ガ原へ出て、寂しい草っ原の道が二十町あまりつづく。その草っ原を通りすぎると志村へ出るのだ。

鷹之助は戸田ガ原になにかあるんだと気がついたので、黙ってお光の手を取り、宇之吉の後についていった。

小一町もあしのしげみの中の河原道を入っていくと、もう渡し場からこっちの体は見えなくなる。

「さあ、この辺なら大丈夫だろう」

宇之吉は立ちどまってくるりとこっちを向きながら顔の汗をふいている。

「妙なところで出会ったなあ、宇之さん」

「すまねえ、おれの大しくじりなんだ」

「しくじり——」

「昨日あそこで高の字と別れて大宮の近くまで行くとな、ばったり丸山さまのせがれの万之助に出会ったんだ。知っているだろう。しかも、牧田常蔵と坂上文次郎がお供についていやあがる」

やっぱりそうかと鷹之助は思った。万之助は切り髪屋敷の用人丸山万右衛門老人のせがれなのだ。

お光は、牧田、坂上と聞いて、さっと顔色をかえたようだ。

「宇之、おまえ今日途中で高助に会わなかったかと、万之助のやつがわらいながらねこなで声で聞きやがるんで、こっちはうっかりいい気になって、会いやしたよと返事をしてしまったんだ。もういけねえや、がらりと様子がかわりやがって、いっしょに案内しろ、いうことを聞かなければ、おまえには無断で切り髪屋敷を出奔した罪があるからたたっ切るとぬかしやがる。こっちは一人だし、どうしようもねえやね。なんでも万之助は古河のほうから藤岡あたりまで高の字をさがして歩いたんだとよ。やっと藤岡でおめえの様子がたぐり出せたんで、三人でいそいで跡を追ってきたらしいんだ。万之助は親の敵討ちのようなもんだっていっていたが、おめえそんなおぼえがあるんか」

「いや、それは少し違うんだが、いま三人はどこにいるんだね」

「ゆうべ夜道をかけてよ、たぶん高の字は板橋泊まりだろうとやつらは見当をつけていたんだが、念のためにそこの渡しの船頭を起こして聞いてみると、そういう人はわたらなかったっていうんだ。そういやあ、高の字、和助が川向こうの並木道で切られているのを見ているか」

「うむ、そいつはいま通りすがりに見てきた」
「そうか。あいつは自業自得でまあしようがねえが、おれはなんとかしておめえを助けてやりてえと思ってな、まんざら他人てわけじゃねえしよ。それで、やつらは三人で昨日志村の幸兵衛親分の家へ泊まったんだ。いいあんばいに、そこに大和田先生がいてくれてな、よし、おれがいい知恵を貸してやる、明日三人はおれがついて戸田ガ原で高助を待つように段取りをつけてやるから、おまえは渡し場へ見張りに立つふりをして、高助たちがきたらそこから土手づたいに川下の川口の渡しへ逃げてしまえと教えてくれたのよ」
「そうか。じゃ、大和田さんもいっしょなんだな」
なにか胸あたたまる思いがしたとたん、鷹之助は決心がついた。
「お光、おまえな、ここからならもう一人で家へ帰れるだろう」
鷹之助は思いをこめてお光の冷たい両手を両手でしっかりと握りしめていた。
「あなたは、あなたはどうなさるの」
「おれは敵呼ばわりをされるおぼえはない。そんな大名のわがままな非道を通すのはいやだ。三人にもよくそのことをいい聞かせて、それがわからないようなら三人を相手に堂々と闘ってやる」
生涯刺客から逃げまわるような屈辱には、男としてたえきれそうもない。いや、そんな宿命を無理にしょわされたことに対して激しい憤りさえ感じてくるのだ。むしろ、大名の愚を天下にさらけ出してやりたいような興奮にさえ駆り立てられてくる。
「やるのか、高の字」
一瞬、宇之吉はぽかんとした顔になっていた。
「それは、あなた、少し違いますわよ」
お光の愛情にみちた目が静かに見つめてくる。

「違う——。どうしてだ」
「あなたが死ねば、信吾さんだって生きていられませんわよ。せっかくお国もとへ帰れるってよろこんでいたのに、それでは御新造さんやお子さんが気の毒ですわ」
「なにっ」
「高崎の貧乏くじ組にだって御新造もお子もいるんでしょう。逃げてあげたほうが男らしいんじゃありませんかしら」
「一生逃げまわれっていうのか、お光」
「あなたはお大名にたよらなくても骨つぎで生きていけるんですのよ。一生逃げまわったって、骨つぎでいくらも人を助けられますわ」
「もし三人があくまでも殺しにきたらどうするんだ」
「あくまでも逃げましょうよ、人を助け助け。それでも死ぬ時がきたら、あたしもいっしょに死にます」
「おまえはもう家へ帰ろうと思えばすぐにでも帰れるんだよ」
「いいえ、帰りたくありません。あたしは昨日和助に一度殺されているんですもの。ふところの観音さまといっしょに、一生あなたのそばについて骨つぎのお手伝いをしたほうが、あたしはしあわせになれると思いますのよ」
観音さまのような顔をしてお光はわらっている。
「こいつはおもしろそうだ。なあ、高の字、おれもいっしょにつれてってくれよ。骨つぎ先生だって、薬籠かつぎはいるんだろう。こっちも三人で日本国中をまわってみようじゃねえか、人助けによう」
宇之吉までそんな夢のようなことをいい出す。
鷹之助はまだお光の両手を握ったまま、これも夢を追っているようなわが女房のきれいな目をじっと見つめながら、夢はいつ破れるかもしれないが、これは決して悪い夢でもなさそうな

気がだんだんしてくるのである。
秋深い朝の青空が三人の頭の上でからんと晴れわたっていた。

紫忠兵衛

鯨退治

新涼というさわやかな季節の八ツ（二時）下がり、南品川と本宿をつなぐ橋の欄干にほおづえをついて、つまらなそうに海を見ていた体のばかでかい雲助が、それとなく道の上手下手を横目でうかがいながら、

「あアあ」

と、わざとらしい大きなあくびを一つしたと思うと、どさりと橋の上へ大の字なりにひっくりかえって、こんどはゆうゆうと青空をながめはじめた。

この辺は江戸と東海道への出入り口にあたり、有名な青楼が軒を並べる繁華な本宿へかかろうとするところだから、人の行き来がほとんど絶えない。その橋の上いっぱいに、仁王のような体がふさいでしまったのだ。

むろん、頭の方と足の方が少しあいているにはあいている。が、そこを通りぬけても、またいで通っても、因縁をつけられることに変わりはあるまい。この男、無法なのと、強いのとで、品川の仁王竹といえば江戸の下町一帯に悪名を売りこんでいる雲助で、飲みしろがほしいから、こんな思いきったばかをやって往来をとめたのだ。ただし、ちゃんと目当てはある。

南品川の方から、川崎の大師へ日帰りでおまいりに行ってきたのだろう、そんな土産物を用心棒の鳶の者に持たせた芸者とも見える水際立った女が、結いつけ草履のすそさばきもあざやかに、連れと冗談口をかわしながら来るのに目をつけた。つけられた女こそいい災難である。

「あらあら、どうしようねえ、三吉、鯨が橋の上へあがってるよ」

橋のたもとで足をとめた女は、さすがに意地っぱりらしく、きれいなまゆをよせて、聞こえよがしにいった。

「なるほど、こいつはでっかい鯨だなあ」

に組の半纏を着ているからに組の若い者には違いないが、人間が少し半端にできているから、いつまでたっても追いまわしの用にしか立たず、しかもおでこで、鼻があぐらをかいていて、お神楽というあだ名がうってつけのひょうきん者だ。ひょうきん者にあんまり度胸のいいのはいない。三吉も御多分にもれずこういう大きな鯨にはちょいと江戸前の啖呵もきりかねるようだ。

「どうしやす、ねえさん」

「どうするって、お前、あたしは両国へ帰るんだよ。この橋をわたらなけりゃ帰れないじゃないか」

「そういやそうでござんすね。鮫洲へ後もどりすりゃ船ってものがあるにはあるが」

「人をばかにおしでない。ねこがかん袋をかぶせられやしまいし、あたしは後もどりなんかいやなこった。その鯨まだ生きてるようだから、いつごろ海へ帰る気か聞いてごらんよ」

「あっしが聞くんですかえ」

三吉はうかない顔だ。

「怖いのかえ、三公」

「いいえ、別に鯨なんか怖かありやせんがね、あいにくあっしは鯨の言葉を知らねえ。人間の言葉で間にあいやすかねえ」

おなじように道をとられて迷惑している人たちが、もっともだというような顔をしてくすくすわらい出す。そのいちばん近いところにいるのは、紫のふろしき包みを右の肩から斜めにしょった旅の若侍で、しごくおっとりと微笑しているのが妙に人なつこい顔に見えたから、

「だんな、わらいごとじゃありませんや。だんなはお武家さんでしょう。こういう時にこそ人助けのためになんとか鯨に話をつけてやっておくんなさい。たのんまさ」

と、三公はさっそく押しつけにかかる。

「あいにく、わしも鯨の言葉は知らんのでな」
若侍はまたしてもにっこりする。
「逃げっこなしさ、だんな。だんなら言葉はわからなくても、そこはお武家さまの御威光でなんとかなるに違いねえ。岩見重太郎さんだって、狒々の言葉は知らなかったろうが、それでも立派に狒々を退治して、名主さまの娘っこを助けているんですからね」
三公も一生懸命だから、うまいところへ岩見重太郎をかつぎ出す。
「わしは岩見重太郎さんほど強くはないんだ」
「そんな謙遜しちゃいけません。謙遜なんてなあ、時と場合によるもんだ。だいいち、相手は鯨ですからね。謙遜なんて奥ゆかしいことは通じやせんや」
「そうか。では、ちょっと掛け合ってみようかな」
若侍はのこのこと橋の上へ出て、仁王竹の頭の方へ中腰になり、両手をひざがしらへおいて鯨の顔をのぞいている。こっちから見ていると、どうもあんまりたのもしいかっこうではない。
「あれえ、ちょいと心細いな。大丈夫ですかねえ、ねえさん」
「あたしは知らないから」
女も三吉が口車にかけた責任があるだけに、心配そうな目を放さない。
「おい、君、君は鯨かえ」
「なにを、この野郎――」
仁王竹は大の字なりになりながら、かっと目をむいた。
「やあ、人間の口をきいたな、それじゃ話が通じるだろう。往来の者がみんな迷惑しているんだ。こんなところで甲らを干していないで、どいてくれないか」
「なにをぬかしやがる。ここはてめえの往来じゃねえや。甲らを干していようが、寝ていようが、おれさまの勝手だ。よけいなお節介をぬかすねえ」

ふんぞりかえったままだみ声をあげて悪たれる仁王竹だ。
「寝ているのはお前の勝手だが、わしはここを通りたいのだ。またいでいってもいいかえ」
「ぬかしやがったな。品川の仁王竹さまがまたげるもんならまたいでみろ、けころされたっておれのせいじゃねえぞ。さあ、またげ」
「けころされては困るな。酒手をやるから起きないかね」
「いやなこった。おれはこじきじゃねえ」
「では、どうすれば起きてくれるんだね」
「あの女が両手をついてあやまったら起きてやる。黙っていりゃいい気になりやがって、人を鯨にするたあふてえあまだ」
「そんな無理をいうもんじゃない。あのねえさんでなくても、お前のようなずうたいの大きい男がそんなかっこうで寝ていれば鯨と間違える。あんまり人騒がせをしないで、もういいかげんに起きなさい」
「ぬかしやがったな、こんちくしょう。ようし、こうなったら、もうだれがなんといっても起きてやるもんか。矢でも鉄砲でも持ってきてみろ。びくともするもんじゃねえや」
「困ったな。じゃ、しようがない。またいで通るよ」
「通ってみろ、けころしてやるから」
下からにらみつける仁王竹を当惑したような顔でながめていた若侍が、なんと思ったかふいにわらじの右足をあげて、どすんと寝ているやつのみぞおちのあたりを踏んづけた。まさかと思っているところを、とつぜん急所へ当て身をくらったようなものだから、
「ううむ」
仁王竹はびくっと手足をちぢめ、歯をくいしばってたわいもなく気絶してしまった。
「なんだ、こんなところで眠ってしまっちゃ困るじゃないか」
若侍はその手をつかんで、ずるずると大きな

体を橋の一方へ片寄せ、往来止めをくった人々があっけにとられてぽかんとながめている間に、さっさと本宿の方の人ごみの中へまぎれこんで姿を消してしまった。はじめがのろのろとあまりぱっとしなかっただけに、それはまったくあざやかな豹変ぶりで、いざとなるとずいぶん思いきったまねをする男、そんな印象を見ている人々に強くあたえたようだ。

悪い手癖

「だんな、――もし、だんな」

お神楽の三公がやっとその若侍に追いついたのは、本宿を通りぬけてもう八ツ山下から高輪海岸へかかろうとするあたりだった。

「やあ、君か――」

若侍はひょいとふりかえって、にっこり例の人なつこい微笑はうかべたが、少しも足はゆるめようとしない。

「速い足ですね、だんなは」

「そうかなあ」

ゆうゆうと歩いているようでいて、歩幅が人より広いのだ。もっとも、身の丈五尺七寸の上はあるだろう化け物のような仁王竹には及ばないが、がっしりと均斉のとれたいい体格だ。

「さきほどはどうも、だんな、ありがとうございました」

「ああ、あの鯨か。君のつれのねえさんはなかなか美人だが、口も悪いなあ。どうした、姿が見えんようだが」

「だんなの足が速すぎるんでさ。――ところでねえ、だんな、あれは橘町の常五郎って頭の妹で、両国同朋町から芸者に出ている小妻ってねえさんなんです。鯨のお礼にぜひだんなに一杯さしあげてえっていってるんですが、そこいらで付き合っていただけやせんかねえ」

「それには及ばない」

「へえ、及ばないんですかえ」

あんないい女に水を向けられたら二つ返事だろうと思ったのに、三公は当てが外れて小首をひねってしまった。

「だんな、お礼心なんですから、勘定はもちろんこっち持ちなんですぜ」

「どっち持ちでも困るな」

「やっぱり、困りやすかえ。どうしてでござんしょうね」

「わしはこう見えても女にほれっぽい。つまり、小人なんだな」

「なあんだ、ほれたっていいじゃありませんか。小妻さんにゃ別にだんながあるわけじゃなし、なんならうまくくどいて長火ばちの前へ座ったって、だれも文句のいい手はないんですぜ。ただ、ちょいとどうかと思うのは、あのねえさん、あれでなかなか気が強いからな、うっかり変なことをいうと横っ面をぶんなぐられる」

「ははあ、君は変なことをいってぶんなぐられたロかね」

「冗、冗談じゃねえ。あっしはそんな大それたまねはしねえが、ぶんなぐられたやつがたしかにあるんでさ」

「そうか。まあ、よそう。わしはぶんなぐられるのはあんまり好まない」

「だから、ぶんなぐられねえようにくどくんでさ」

「いや、さわらぬ神にたたりなしだ」

「なるほどねえ、さわらぬ女ははらまないか。どうも困ったなあ」

「なにも君が困ることはあるまい。それとも、あのねえさんはそんなにはらみたがっているのかね」

「ぶんなぐられるぜ、だんな」

ぷっとふくれたところを見ると、この男はよっぽど小妻ねえさんの崇拝者らしい。

「おい、君、ねえさんを一人おいてけぼりにして、用心棒がわしと歩いていていいのか」

もう大木戸をとっくに入って、薩摩の下屋敷のあたりまできている。

「じゃ、だんなはどうしてもねえさんと一杯付き合ってくれねえんですかえ」
「鯨は酒のさかなにならんからな」
「なんですって――」
「鯨がとりもつ縁かいな、なんてのもない。ここで別れよう」
「そうですかねえ」
三公は一杯のみそこなってがっかりしてしまった。
「じゃ、だんな、お名前だけ聞かせておくんなさい」
「紀州浪人紫忠兵衛、年は二十五歳、江戸ははじめてだから、まだ住まいはない」
「どうして御浪人なすったんです」
ちょいと聞いてみたくなる三公だ。
「敵を持つ身だ」
「えっ、敵討ちですかえ。こいつあ勇ましい。いよいよ岩見重太郎だな。紀州なら笹野権三郎か。この人も摩耶山で狒々退治をやっている。だんなは男がいいから、槍の権三の方だな」
「君はなかなか歴史にくわしいんだな」
「くわしゅうござんすってさ。特にあっしはあだ討ち物が好きでね。だんな、ぜひ、あっしに助太刀ってのをやらしておくんなさい」
「君、ねえさんを一人にしておいていいのか。ぶんなぐられるぞ」
「もうねえさんどころじゃねえ。あだ討ちでござんすからね」
「誤解しちゃいかん。わしは討たれる方だ」
「なんですって――」
「わしは討たれる方だから、助太刀はいらん」
「じゃ、かたき役なんですね。そうは見えねえんだがなあ。こいつあがっかりだ」
「心配するな。討たれるのはおれだ。君じゃない」
「おどろいたな。やっぱり討たれる方なんですかえ、どうあっても」
「おい、君、ねえさんを一人ほっておいてもいいのか」
「うっちゃっといておくんなさい、あんなやつ。それどころじゃござんせんや。こっちは討つ討たれるのさかいなんだ。――あ痛っ」
びしゃりと三吉のほおがうしろから鳴った。
びっくりして、ふりかえって、
「あれ、ねえさん」
「ねえさんじゃないんだろう。どうせ、あたしはあんなやつさ。おぼえといで」
いつの間にきていたのか、小妻がすぐうしろで柳眉をさかだてているのである。そのうしろから、駕籠屋がから駕籠をかついで、にやにやわらいながらついてくるところを見ると、その駕籠で追いついてきたのだろう。
「さあ、いけねえ。――すんませんでござんす、ねえさん。ついロが滑っちまったんで。なにしろ、こっちは討つ討たれるのさかいなんでしてね」
「おどきよ、ばか」
三公を突き飛ばしといて、つと忠兵衛と肩をならべてしまう小妻だ。
「さあ、まいりましょう、紫さま」
「さては、すっかり聞かれたかな」
「紀州浪人紫忠兵衛、年は二十五歳ね。江戸ははじめてで、まだお住まいはないんですってね」
「うむ、しかし、君は男をぶんなぐる癖があるそうだから、決して長火ばちの前はねらわない。安心していてください」
「だれがいまに首のなくなる人なんか長火ばちの前へ座らせるもんですか。あんまりうぬぼれないでくださいよ」
「ありがとう。おかげで、ぶんなぐられないですむ」
「そのかわり、こうしてあげるわ」
「痛い」
左にならんでいる右手が、素早く二の腕をつねりにきたのである。
「おどろいたなあ、君は。そんな悪い手癖を持

っていたのかえ」
「あんたの足癖よりましよ。あたしはあんな大きな鯨は踏んづけませんからね」
「ねえさん、お話し中でござんすがね――」
うしろからおずおずと三公がよんだ。
「なにさ、三公」
「駕籠屋が、とても見ちゃいられねえ、目がくらみそうだからもうお暇がいただきてえって、――どうします」
「おや、たいそうおとなしい駕籠屋さんだこと。お前、駄賃を払って、帰しておあげな」
「あっしはどうしましょう。少し熱が出てきたようなんですがね」
「そこに海があるじゃないか。逆さに入って少しつかってきてもいいよ」
「御親切に、どうもありがとうござんす」
三公は半分べそをかいているような顔だ。のっけからこんなに猛烈なところを見せつけられようとは思わなかったのだ。

ばかの一念

この熱い道行きは、札ノ辻から金杉橋の方へと進んで行く。女づれだから、忠兵衛も遠慮して、だいぶゆっくり歩いているようだ。
「ねえ、忠さん」
「あんまり心やすい呼び方は遠慮してほしいな」
「おや、どうしてさ」
「わしは女にほれっぽいたちなんでね、苦労が絶えないんだ」
「しょってるのねえ、あんたって人は。あたしは長火ばちの前へ座れなんて、そんなことはいわないって、はじめっからことわってあるでしょ」
「助かるよ。さわらぬ神にたたりなしだからねえ」
「なんのこと、それ――」
「さわらぬ女ははらまないってことさ。いま三公うじから聞いたばかりだ」
「ああ、わかった。忠さんは国もとでお腰元をはらましてきたのね。あいにく、そのお腰元に許婚があって、憎いやつだとやみ討ちをかけられた。幸いあんたの方が強かったので、お気の毒だけれど、その男を切って、国もとを立ち退いた。だから、敵討ちになったってわけなんでしょう」
「少し違うようだな」
「どこが少し違うのさ」
「わしは腰元にはさわらなかった」
「じゃ、人の奥さんなの。なお悪いわ」
「いや、奥さんにもさわらない」
「じゃ、だれにさわったの」
「そんなこと、気にしなくてもいいよ」
「気になるんだから、話してくださいってば」
「わしは女などにさわったおぼえはない」
「本当――？」
「女の方がわしにさわりたがるんだ」
「ぶんなぐるから――」
ぶんなぐるかわりに、いやというほどわき腹を小突かれてしまった。
「痛いなあ。――おい、三公うじ」
「なんです、だんな」
「この辺に甲冑を商う店はないかね」
「かっちゅうねえ。聞いたことがねえな。どんな食い物です」
「食い物じゃない、よろいかぶとだ」
「なあんだ、よろいかぶとか、そんなものを買ってどうするんです」
「よろいかぶとで身をかためないと、痛くてこのねえさんとは歩けない」
「ちぇっ、御勝手になさいましだ」
「三公――」
こんどは小妻が呼んだ。
「まさかり屋ですかえ、ねえさん」
「まさかりをなんにするのさ」
「甲冑をぶんなぐる」

「こいつめ」
悔しがって、手をふりあげながらくるりとうしろを向いた小妻が、
「あっ」
と、忠兵衛の腕にすがりついた。
「どうしたね」
「あれ、仁王竹じゃないかしら」
「仁王竹」
見ると、なるほど、町のまんなかを岩のような半裸の大男が、どんどんこっちへ駆けてくる。人も馬も車も、みんなびっくりして道をよけているようだ。
「いけねえ、ねえさん、たしかに鯨だ」
自分で息を吹きかえしたか、人に活を入れてもらったか、とにかく正気にかえった仁王竹は、無念やるかたなく、そこはばかの一本気から、仕返しがしたいばかりに、血眼になってどこまでも追いかけてきたのだろう。
「どうしよう、忠さん。早くかくれた方がいいんじゃないかしら」
さすがに小妻はおろおろと、顔から血の気が引いていく。
「だんな、こんどはよろいかぶとじゃ間にあわねえ、相手は鯨だからね。今のうちだ、早くかくれておくんなさい」
「なるほど、ばかの一念甲冑をもとおすか。どうもやっかいなことになったねえ」
忠兵衛としては、まさか武士たるもの、いまさら逃げかくれもできない。
「かくれやしょう、だんな」
「まあいい。それより、三公うじ、鯨は女を見ると、よけい調子にのって狂いたがる、お前はねえさんをつれて早くその路地へかくれろ」
「大丈夫なんですかえ、だんなは」
「おれは紀州生まれだ、鯨退治にはなれている。心配するな」
「ねえさん、早く」
どうやら鯨はこっちを見つけたようだ。

「おうい」
とらのごとくほえながら、両手をあげて、いっそう足が速くなった。
「いやだ、あたしはここを動かない。だれが逃げるもんか」
「いけねえ。そんなことをいっちゃいけねえ」
必死に腕を引っぱる三吉、金魚が身もがきでもするように行くまいとする小妻、面倒だから、忠兵衛がその肩を引っかかえるようにして路地の中へ押しこんでくると、
「さあ、野郎、もう逃がさねえぞ」
ちょうど全身汗だらけになった仁王竹が、いのししのように鼻息を荒くしながら、追いついてきたところである。場所は金杉橋の橋だもとだった。

うなる荷車

「やい、さんぴん。さっきはよくもおれを踏んづけて通りやがったな」
仁王竹は往来いっぱいに立ちはだかりながら、目をむき、肩を怒らせ、日本一の胴間声を張りあげて、まず大見得をきった。品川からお江戸日本橋へまっすぐ通じる繁華な大通りだから、それけんかだと、野次馬がたちまちたかってくる。
金杉橋を背にして立った紫忠兵衛は、
「やあ、君は体も立派だが、声も破れ鐘のようにすばらしいな」
と、感心しながら敵を迎えた。
「なにを――」
「いや、まったく惜しいんだ。それで衣をきて薙刀をふりまわすと、武蔵坊弁慶そっくりになるんだがな。生まれてくる時代が少し遅すぎたかねえ」
「おべっかを使うねえ。さっきはさんざっぱら人を鯨にしやがって、あの女をどこへ隠しやがったんだ。ここへ出せ」
「ああ、あのねえさんか。あのねえさんは一足

先へ帰った。君によろしくいっていたよ」
「うそをつけ、今いっしょに歩いていたのを、ちゃんとこの目で見ていたんだぞ。おれはめくらじゃねえや」
「そうか、それなら自分でさがすんだな。わしは別にあのねえさんの番人ではないから、どこへ行ったか知らないんだ」
「こんちくしょう、どうしても吐かねえ気だな」
「君はあのねえさんになにか用があるのかね」
「あんなすれっからしに用なんかあるもんか。引っつかまえてぶん殴ってやるのよ」
「まあ、よした方がいいな。ぶん殴るのは、あのねえさんの方が名人のようだ。あべこべにぶん殴られるよ」
「なにをぬかしやがる、おれをだれだと思ってやがるんだ」
「どうだ、けんかはもうよさないかね、往来のまんなかでみっともないし、どっちがけがをしてもつまらないからな」
忠兵衛はなだめるようにいってみた。
「ばかにするない、この野郎」
「はあてね」
「けがをするのはてめえの方だ、待ってろ、こんちくしょう、いま大けがをさせてやるからな」
「わしは大けがをするのは好まんのだ、もうけんかはよそう」
「虫のいいことをぬかすない、てめえをたたっ殺してやらなくちゃ承知できねえんだ」
「君は、こんちくしょう、ばか、この野郎、たたっ殺す、そんな乱暴な言葉しか知らないのかえ」
「なにを――」
野次馬がげらげらわらい出す。
「毎日、そんなことばかりどなっていたって、世の中はつまらないだろうになあ」
「こんちくしょう、待ってろ」
仁王竹はかっとなったらしく、なにか得物はないかとあたりを見まわしていたが、とたんに

おいてある空の荷車に目をつけ、つかつかとそばへ寄っていくなり、かじ棒を引っつかんで、いきなりそれをうーむと振りあげた。脳は少し足りないようだが、大したばか力。
わあーっと、そのあたりにいた野次馬がびっくりして逃げ散る。
「親方、そ、それはおいらの車だ、こわさないでくれよう」
十三、四ともみえる小僧が、一度はみんなといっしょに逃げかけたが、主人の車をこわされては大変だと気がついたのだろう、おろおろと立ち止まってとどめたが、
「黙ってろ」
仁王竹は耳にもかけず、のっしのっしと忠兵衛の方へ向かってきた。
「やあ、えらい力だなあ」
そんなもので殴りつけられては命がいくらあっても足りない。忠兵衛はあきれながら、急にすたこら金杉橋を渡って逃げだした。
「こんちくしょう、ひきょうだぞ。待たねえか」
ばかほど怖いものはない、それでも荷車を振りあげたまま橋の中ほどまで追いかけてきたが、さすがに空身の足にはかなわないとみたのだろう。
「野郎、くたばりやがれ」
ぶうんと、そいつを忠兵衛めがけて思いきり投げつけた。
むろん、そんなものが届くところにまごまごしているほど人のいい忠兵衛ではないから、荷車はいやというほど横ざまに橋の外れへたたきつけられ、どすん、がしゃんと、片一方の車輪が砕けて飛び散った。
「待て、野郎、待たねえか」
ばか者は大声をあげながら、相手が逃げたとなるといい気になってどこまでも追ってくる。それについて走っている物好きなやつも相当あるようだ。
――わしはばかとけんかしに花のお江戸へ出

てきたわけではないんでな。

忠兵衛は、わらいながら浜松町を、ついに四丁目から三丁目、二丁目へと走って、もう相手にはならないつもりだったが、侍が雲助に追いかけられているのだから、往来の者がびっくりしてみんなこっちを見ている。体裁が悪くてしようがない。

「おい、みっともないから、もういいかげんで仲直りしないかね」

とうとう立ち止まって、くるりとうしろを振りかえってしまった。

「なにをぬかしやがる。ぶん殴らなくちゃ承知できねえ」

すっかり相手を甘くみてしまった仁王竹は、追いついてくるなり節くれだった手でぐいと忠兵衛の胸倉を引っつかみ、右のこぶしをかためて大きく振りあげた。そんな勢いで真正面に頭をぶん殴られてはたまらない。

「危ない、よせというのに」

忠兵衛はとっさに胸倉をとってきた敵の左腕の関節をはっしと右のこぶしで打った。関口流の柔術のうちにある奥義の一つで、唐手から工夫したといわれる拳法だから、ひどく打てば六穴から血を吐いて即死する。

「わっ！」

仁王竹は、全身へ火のごとく走った激痛に、いきり立っていた力が一度にぬけ、苦痛の顔をゆがめながら、それはまるで朝顔の花が日盛りにしぼんだように、打たれたひじをかかえこんで、へなへなとそこへしゃがみこんでしまった。

「やあ、失礼。だから、わしはけんかはやめようといったんだ」

忠兵衛は気の毒そうにいって、くるりときびすをかえし、大股に芝口の方へ歩きだす。

ほんのあっという間の出来事だったので、野次馬はなにがなんだかわからず、ぽかんと目をみはっているばかりだった。

陣場亀十郎

「やあ、貴公、見事なもんだな」

ものの小半町と歩かないうちに、ふとうしろからなれなれしい声をかけて肩をならべてきた者がある。背こそ忠兵衛よりいくらか低いが肩幅のがっしりした堂々たる体格で、しかも、それが着物も袴も見るからに尾羽打ち枯らしながら、そういう弱みを人に見せまいとして、目を怒らせ、肩を張っているひげものの豪傑浪人だからいっそう人目に立つ。

「実はな、失礼ながら拙者は大いに憤慨していたんじゃ。いやしくも武士たる者が、天下の往来を雲助ごときに追われて逃げ走る、けしからん話だ。武士の体面にもかかわる、事の善悪は知らず、拙者が貴公にかわってあの人足めを成敗してくれんと、すでに一刀の柄に手をかけたところだ」

「あぶないところでしたな」

忠兵衛は仕方がないからあいづちをうつ。

「あぶないところだとも。すでにあわやというところだった。拙者こう見えても、まだ腕にまで尾羽打ち枯らしてはおらん。これでも小野派一刀流を学んで、三羽がらすとまでうたわれた時代があるんだ」

「三羽のからすですな」

おやというようにひげ浪人は横目で忠兵衛をにらんだが、忠兵衛は至極おっとりとまじめな顔をして歩いているので、

「さよう、その三羽がらすだ。拙者の得意は突きです。切り損じはあっても突き損じはないというくらいで、ここ一番という時、拙者の構えがぐいと高青眼にかわると、師匠でさえもうどうすることもできなかったものだ。へびにねらわれたかえる、ねこにねらわれたねずみ、まずあれだな」

と、この男はしゃべっているうちに自分でいい気持ちになってくるらしい。

「赤面の至り、あれはほんのまぐれ当たりでした。拙者は、からすどころか、すずめの組にも入れない男です」
「偉い。あれだけのたしなみがあってその謙遜、貴公はたしかに奥ゆかしい人格者だ。江戸へ出て五年、はじめてここに知己を得たような気がするな」
「それほどでもないです」
「時に、貴公、江戸ははじめてかね」
「そうです」
「やっぱり男児志を立てて羽ばたいた方だな。御同様、浪人者だろう。そうか、わが名を名乗らずして人の姓名を問うなかれ。これは失礼した。拙者は西国浪人陣場亀十郎、お見知りおき願いたい」
「申しおくれました。わしは紀州浪人紫忠兵衛です」
「ほう、御三家の出か。道理で、どこかおっとりしていると思った。だれか知り人があって、

「二羽はどうしました」
「二羽――？」
「からすです。あと二羽のからすです」
「ああ、その二羽か。それはまだ国もとにいるだろう」
「すると、貴公だけが一羽、江戸へ羽ばたいたわけですな」
「そのとおりだ。男児志を立てて江戸へ羽ばたく。しかし、世は末世だった。江戸へ出てすでに五年、江戸は腕よりおべっか、剣より金、士道はすっかり堕落しておる。われまたなにをかいわんやだ」
「いや、剣はけんのんだからでしょう。だれでもへびにねらわれたかえるにはなりたくありませんからな」
「なるほど、これは名言だ。そういえば、貴公がさっき用いた手は柔術かね」
けろりとして人の話題にのってくるあたり、なかなか度量のひろいところもあるようだ。
それをたよって江戸へ出てこられたかな」
「いや、知り人はありません、当分宿屋住まいです」
「それはいかん。それは貴公いかんぞ」
「いけませんかな」
「無論いかん」
「江戸では一人旅は泊めない法度でもあるのですか」
「いや、それは泊めてはくれる。しかし、ぽっと出の田舎者と、失礼、江戸になれないなと見ると、法外に宿賃をむさぼられる。だいいち、江戸は生き馬の目を抜くところと申してな、うっかり歩いていると、それ、さっきのようなやつがやたらにけんかを吹っかけて、酒手をねだりたがる。きんちゃく切りが紙入れをねらう。これがなかなか名人芸です、はいている下駄まで見事にするんだから、胴巻きの金を抜くぐらいはなんでもない話だ。失礼ながら、大金を所持しているんだろう」
「それほどでもありません。ほんの百両足らずです」
「ううむ、百両――。さすがは御三家の浪人だな。しかし、いかん。ますますいかん。貴公、ぽん引きというのを御存じか」
「知らんです」
「そうだろう。だからあぶない。ぽん引きというのは、ぽっと出の田舎者を、うまいことをいってどこかへ誘いこむ。そして、うまいことをいって身ぐるみはいで持ち逃げする。ひどいのになると、その逃げ際に人間の体まで売っていく」
「そんなことができますかな」
「それができるんだから名人芸だ。あぶないですぞ。人を見たらどろぼうと思え、女という女は貴公をたらして裸にしようとつめを研いでいる。男という男は、貴公をぺてんにかけて身ぐるみはごうと目を光らせている」
「どうせ裸にされるんなら女の方がましです」

忠兵衛はおもしろそうにわらい出す。

「そ、それが貴公いかん。江戸の女は、田舎者にはとてもあかぬけて見える。だから、つい引っかかるんだが、いい女ほどうしろに悪いひもがついていて、それが、美人局はやる、酒で殺す、ひどいのになると本当に一服盛るやつさえある。よろしい、そで触れあうも他生の縁だ、貴公が江戸に慣れるまで、拙者が指南役を買って出よう」

「いや、それには及ばんです」

「そうではない、貴公のような坊ちゃん育ちを一人でおくとどんな目にあわされるかわかったもんではない。まあ、悪いことはいわんから、拙者の浪宅へきたまえ。これでも拙者はもう五年間江戸で苦労しているから、江戸のいいも悪いも残らずきわめてあるんだ、それを一通り伝授してあげよう。武士は相身互いだ、遠慮はいらん」

「もし、江戸慣れた陣亀兄さん」

うしろからふいと呼ぶ女がある。

「だれだ」

陣場亀十郎がぎょっとしたように振りかえると、芸者とも見える水ぎわだった女が強い目をして立っている。これが陣場亀には先口の両国の小妻とは知らないから、

「なんだ、お前は――」

と、肩をそびやかす。

そうでもしないと、自分の身なりがあんまり尾羽打ち枯らしているからで、ちょうど芝園橋へかかろうとするあたりであった。

謝礼金一両

「せっかくですけれど、その人はあたしの連れなんですから、あんまり田舎者あつかいにしないでくださいな」

小妻はずばりとやっつけて、臆面もなく忠兵衛のたもとをつかみ、

「忠さんも忠さんじゃありませんか、ひとを黙っておいてけぼりにする人がありますか。早くその人にさようならをなさいってば」

とにらみつけながら自分の方へ引っぱりつける。

「おい、本当か、貴公」

陣場は、たしかにあきれたらしい。

「本当もうそもありやしません。江戸の女という女は、みんな田舎者をたらして裸にしようとねらっているかもしれませんが、あたしだけは自分が裸になってもこの人の面倒を見ようっていうんですから、どうぞ安心してお引き取りなすってくださいまし」

「どうだか怪しいもんだ。――おい、貴公、鼻毛をのばしてはいかんぞ。いまこの女は裸になって貴公の世話を見るといったろう。問うに落ちず、語るに落ちるというやつでな、うっかりこの女の裸に迷って貴公も裸になんかなると、ふところの百両足らずがいつの間にか煙になる。その上、たいてい鼻が落ちるのがおちだ。どうだ、今からでもおそくはない、心を入れかえて、拙者の浪宅へこないか、その方が百両足らずも鼻も安心していられるんだ」

にやにやわらいながら平気でこのくらいのことがいえるのだから、ずぶとい点にかけても、この男はどうやら三羽がらす以上の貫祿を備えているようだ。

「ふうんだ。お前さんこそ、そんなうまい口をきいて歩いて、いま首が落ちないように気をつけるんですね。江戸の人間はみんなぬすっとかきんちゃく切りのようなことをいって、江戸を悪くしたのはたいがい田舎から出てきた能なし浪人やあばれ百姓の無宿者に相場がきまっているんです。ゆすりたかりはやる、押し込みはやる、辻切り追いはぎ、踏み倒し、居直り、たいそうお勇ましくていらっしゃいます」

この意地っぱり女も一歩も負けてはいない。

「よくしゃべる女だ」

「口から先へ生まれたんですもの」

「どうだ、貴公、拙者がこんなに忠告してもまだこのおしゃべり女の裸の方がいいかね」
「わしは鼻は大切にするから安心していただきたいな」
忠兵衛がにっこりわらって答える。
「そうか、じゃしようがない。精々鼻を大切にして、この女の裸にかわいがってもらいたまえ。ところで、貴公、ものには謝礼ということがある。ともかくもおれは貴公に江戸の心得を一通り忠告してやったんだ。ふところの百両足らずの中から、ちょいと一両ばかり貸してくれんか。お安い御用だろう」
陣場亀はぬけぬけとたくましい右手を突き出す。
「まあ、ずうずうしい、どこを押したらそんな音が出るのさ」
小妻はあきれかえってしまった。
「お前は黙っていろ、たった一両ばかりおれがたかったって、百両足らずは一両しか減りはせん、後はお前が裸で勝手に取ればいいんだ。一人で欲張ってはいかん——なあ、貴公、そうだろう」
「そうですな、鼻を助けてもらったと思えば、一両は安いものです」
忠兵衛は紙入れの中から小判を一枚取り出して陣場亀の手の上へのせてやった。
「やあ、こりゃどうも。——貴公はさすがに御三家の浪人だ。話はわかるし、実に人柄がいい。たしかに、後世、出世をする人物だ」
ひげ浪人はさっそく小判をふところへねじこんでから、
「さて、ねえさん、ものには礼心ということがあるぞ。こんな立派な百両足らずの鴨を、わしはいさぎよくお前にゆずったのだ。どうだ、前祝いの祝儀に一分貸さんかね」
と、こんどは小妻の方へその手を突きつける。
「本気かえ、陣亀さん」
「さよう、ずんと本気だ」

「ふうんだ、憎らしい。そんな金があったら、あたしはいっそどぶん中へたたっこんでやる。あんまり甘く見ないでもらいましょう」
「そうだろうな、おれははじめから、こいつはしみったれだなと見ていたんだ。惜しい美人だが、しみったれじゃしようがない。まあ精々風邪をひかないように、裸でかせぐんだな。——しからば、失礼」
いいたいだけのことをいって、陣場亀はにやりとうす汚れた冷笑をのこし、ゆうゆうと芝園橋をわたっていく。
「畜生、どうしてくれようかしら。悔しい、あたし」
勝ち気な小妻は、その後ろ姿を見送ってじだんだ踏んでいる。しかもたもとだけはしっかりとつかんで放さないので、
「これこれ、そう暴れてはわしのそでがちぎれる」
と、忠兵衛はあわててそでを押さえた。
「忠さん、なんだってあんなやつに一両取られたんですよう」
「まあいい。一両ぐらい貸してやっても、まだわしは百両足らずふところにあるんだ」
「あたしは、あたしはお金のことをいってるんじゃあない。あんなやつに一両やるのは、どぶへ捨てるようなもんじゃありませんか」
「さあ、歩きながら話そう。人がわらっている」
「わらいたい人には勝手にわらわしておけばいいんです。あんたは荷車をこわされて泣いているかわいそうな小僧さんがいるのも知らないで、あんなやつにおどかされてみすみす一両やってしまうなんて、お人よしにも程がある。あたし見そこなっちまった。悔しい」
「はあてね。そうか、さっき荷車がこわれたね。その小僧さんはどこにいる」
はっと気がついて、忠兵衛はあたりを見まわした。ちょうど源助町の方から三公がさっきの小僧をつれていそいでこっちへやってくるとこ

ろである。

引っ越し酒

紫忠兵衛はふとした縁から江戸の仮住まいを馬喰町二丁目の堺屋源兵衛という大きな酒屋のすぐ裏の棟割長屋の中の一軒ときめることになった。

あの金杉橋でくそ力の仁王竹に荷車を投げこわされた小僧が、聞いてみると、捨吉といって、堺屋に奉公しているのだという。まだ十三の小僧で、普通ではめったにこわれそうもない荷車を、わざわざ投げこわされたのだ。このまま家へ帰っては番頭さんにしかられるといってべそをかいているので、責任の一半は仁王竹をからかった忠兵衛にもある。では、いっしょに行って主人にわけを話してやろうと、小妻と三公もいっしょに堺屋へきた。

話の様子によっては荷車の修繕代を立てかえてやってもいいと思っていたのだが、もう五十年配の主人源兵衛は、さすがに奉公人をたくさん使っているだけあって、

「お話はよくわかりました。いいえ、少し無理かとは思ったのですが、当人が行けると申すものですから、こんな子供を一人で遠方まで出しましたのが手前どもの間違いなので、まだまだ本人にけががなくてなによりでございました。御親切に、どうもわざわざありがとう存じます」

と、まことに話のわかったあいさつだった。

「失礼ですが、お武家さまはこれから旅籠をおとりでございますか」

「うむ、江戸に知り人もないから、当分は旅籠住まいのほかはあるまい。どこか浪人向きのしかるべき長屋でもあったら心がけておいてくれぬか」

「幸い裏に手前どもの長屋が一軒あいていることはあいていますが、お気にいるかどうか。なにしろ、棟割長屋のことですから」

「いや、決してぜいたくはいわぬ、先の長い浪

人ぐらしだ、雨露さえしのげればそれでいい」

「では、一度ごらんになってみますか」

主人はわざわざ自分で下駄をはいてくれるのだ。

店から表へ出ると、小妻と三吉が堺屋の横手の路地へかくれるようにしてまだ待っていた。

「なんだ、紫さんのお連れというのはお前たちだったのかえ。それなら遠慮なく入ればいいのに」

顔見知りとみえて、二人を見ると源兵衛は心やすげにわらった。

「今日は、だんな。用でもないのに、こんな姿でお店からおじゃましては悪いと思ったもんですから」

「なあに、かまわなかったのに」

「どこへ行くんです、忠さん」

その主人について忠兵衛が路地へ入っていこうとするので、小妻は変な顔をした。

「うむ、この裏にちょうど手ごろの空き家があるというものだからな」

「あら、いやだわ、そんな――」

小妻はうらめしそうな目をして、思わず忠兵衛のたもとをつかんでいた。察するに、今夜はどうしても自分の家へわらじをぬがせる気でいたのだろう。

「おや、悪かったかえ、小妻」

先に立つ源兵衛が聞きとがめて振りかえる。

「いいえ、悪いってことはございませんけど、――どうして、忠さん、あたしに先に相談してくれなかったのよ」

「いや、小妻ねえさんに相談すると、ねえさんは江戸っ子で気が早いから店賃の心配をかける。それでは申し訳ないと思ったんだ」

「あんたの店賃を、どうしてあたしが心配してあげなくちゃならないんです。そんなわけ、ちっともないじゃありませんか」

堺屋の前だと気がついて、あんまり浮気者にみられたくないから、急につんと澄ましてみせ

る。
「うむ、たしかにそんなわけはなかった。御主人、このねえさんとは今日品川から道づれになったんで、別にまだどうというわけはないんだ。店賃はわしが払うから、心配しないでいただきたいな。痛いっ」
いやというほど横っ腹のあたりをつねられたのだ。
「おかたいことで——。なあに、紫さん、痛いというほどの店賃じゃありません。なんなら御出世なさるまで手前どもがお立てかえしておきましょう」
主人はわらいながら、もううしろは振り向かなかった。
堺屋の裏に五軒長屋が二棟向かいあって建っていて、三尺の玄関と一間半の台所がならび、玄関が三畳、奥が六畳というひとり者にはそれでも広すぎるくらいの家だ。
「こぢんまりとして、いい家ですね、だんな。いっそあたしが借りようかしら」
まず小妻が気に入って、ぬけぬけとそんなことをいい出す。
「お前さんが店子じゃ、店賃は立てかえないよ」
「ようござんすとも。ここなら同朋町からだって遠くはないし、ここにしましょうよ、忠さん」
「うむ、店賃はわしが払う」
「そんなもの、だれが払ったっていいじゃありませんか。——三公、橘町の兄さんのところへ行って、ほうきと手おけとぞうきんを借りといでな。引っ越しするんだからっていってね」
「あれえ、本当にねえさんがここへ引っ越すんかね」
三吉は目を丸くしている。
「なにいってんのさ、じれったい。あたしがここへ引っ越しちまったら、稼業をどうするのさ」
「わかりやした。えへ、へ」
「なにがおかしいんだえ」
「当分は共かせぎってやつさ。うまく考えてや

がる」
「ぶん殴るよ。早く行っといでってば」
「おいおい、そんなものはわざわざ橘町まで取りに行かなくったって家にある。——紫さん、どうです、住めそうですか」
源兵衛があらためて聞く。
「貸していただこう。今日から住んでもいいかね。引っ越しといっても、この体だけなんだ」
「結構ですとも。では、店の者を掃除によこしましょう」
「だんな、せっかくですけど、掃除はあたしと三吉とでしますから、お言葉に甘えてほうきとぞうきんを拝借させてくださいまし」
いそいそと手ぬぐいを出し、もうあねさまかむりになる小妻だ。
「はあてね。小妻ねえさんは別に紫さんとどうというわけではなかったはずだが」
「だんな、大家といえば親も同然、店子といえば子も同然、そんな小姑みたいなことをおっしゃるとお人柄にさわりましょう」
ともかくも、運ぶものはなに一つないのに、すばらしくにぎやかな引っ越しになってしまった。しかも、もう夕方のことで、
「まあ、紫さんは、捨吉に案内させますから、銭湯へ行っておいでなさい」
と、ふろへ追い出され、ゆっくり旅のあかを流して帰ってくると、すっかり掃除がすんで、引っ越し祝いの膳までこしらえてあるという手まわしのよさだ。
なにしろ、大家の源兵衛が肝いりで、向こう三軒両隣どころか、十軒長屋の女房どもがこの時とばかり走りまわってくれる上に、橘町から小妻の兄の常五郎頭が女房のお勢をつれてあいさつにきて、酒は酒屋をかかえての引っ越し祝いになってしまったのだから、長屋中の者が集まってまことに派手な大盤振る舞いになった。
その席で、小妻は大っぴらに忠兵衛のわきへ座りこみ、うれしそうにとろんとなって、箸のあ

げおろしにまで世話をやかずにはいられない。だれが見てもお安くない仲だ。

「忠さん、こんなにお杯がたまっちまったじゃありませんか」

「うむ、わしはあんまり飲めないんだ」

「だって、みんなに悪いわ。せっかく、あんたのためにお祝いにきてくだすったのに」

その杯は自分が半分手つだったり、半分はそっと杯洗へあけたりしてせっせとさばいてくれる。

「頭、小妻は男ぎらいで通っていたんだが、この分ならそう心配したもんでもなさそうだね」

源兵衛だんながにやにやしながら時々ひやかす。

「へえ、どうもわがまま者でござんして」

常五郎もいささかあきれて目をみはっている。

そんなわけで、なんにも知らない長屋の連中はいいように当てられて、しまいには引っ越し祝いだか祝言酒だかわからなくなり、「めでためでたが三つ重なれば――」と、中には御祝儀までうたい出すそそっかしいのが出てくる。やがて散会ときまって手をしめ、

「いいのよ、あたしは跡片付けをしていくんだから」

と、世話女房気取りの小妻が酔ってあわよくば居残ろうとぐずるのを、常五郎がかげへ呼んでしかり、無理につれて帰ったのはもう四ツ(十時)すぎであった。

こうして忠兵衛は江戸の土を踏んだ第一夜から、ふしぎと仮住まいがきまってしまったのである。

観音もうで

江戸というところはまったく調法にできているところである。所帯道具はなんにもなくても、朝から一膳飯屋というものが営業をしていて、三食には困らない。忠兵衛のは大家の堺屋から貸してくれたのだが、借りたければ貸し布団屋までであるという。

そういうことを昨夜のうちに一通り聞いておいた忠兵衛は、翌朝起きて顔を洗うとすぐ、近所の世話やき女房のやっかいにならないうちに、ふらりと町の飯屋へ出かけた。熱いみそしるにのり、香の物、ほしければちゃんと煮魚まであるのだから、なかなか調法だ。

帰りに堺屋へ寄って、昨夜の礼をいうと、

「紫さん、朝飯は」

と、源兵衛が聞いてくれる。

「いや、飯屋というところへ行ってすませてきた。なかなか調法にできているものだね」

「それは調法には違いありませんが、長い間には不経済ですよ。だいいち、出かけるのが面倒になります」

「ありがとう。そのうちに考えよう。実は、やっかいなことをたのみにきたのだが、一人住まいでいちいち持って歩くのも不用心だ。金を少少あずかってもらえまいか」

「ようござんすとも。江戸は俗に生き馬の目を抜くといいましてな、大金を持って歩くのは物騒です」

「その上、ぽん引きや美人局までいて、うっかりすると丸裸にされ、その体まで売られてしまうことがあるそうだね」

忠兵衛は昨夜陣場亀十郎から聞かされた話をして、その陣亀から忠告賃金一両を持っていかれたことを話すと、

「なるほど、それはまた達者な男ですな」

と、さすがの源兵衛もあきれていた。

「しかし、紫さん、小妻は男を裸にする方でなくて、自分が裸になりたがる、どっちかといえば江戸の意地っ張り女だ。変に疑ったりするのはかわいそうですよ」

「いや、疑いはしないが、あれはすぐ人をつねりたがる。手癖が悪いな」

「あは、は、そこまではわしも知らなかったが、

まあ、つねられたがっている男がほかにたくさんいて、つねってもらえないのを、自分だけがつねってもらえるんだと思ってあきらめることです」

「あきらめても、痛いことは相当痛いんだ」

「なるほど、あれは相当のやきもちやきかもしれませんな」

忠兵衛は、おもしろいおやじだと思い、源兵衛は、育ちのいい男だなと好感が持てたようだ。

その源兵衛に、当座の小遣いだけ残して、九十両の大金の方をあずけてしまった忠兵衛は、帰りに橘町の常五郎頭の家へあいさつにまわってみた。が、朝の早い常五郎は、もう仕事場まわりに出かけたとかで、女房のお勢が如才なく、ぜひ上がってお茶を一つといってくれたが、いずれまた出直してくるからとことわり、

「あねごさん、これだけは頭によくいってもらいたいな。忠兵衛は決して女をだましたりもてあそんだりする不信の徒ではないから、その点は心配しないでくれとな」

と、念を入れておいた。変に誤解されたり疑われたりするのは、おたがいに困ることだと考えたからである。

「まあ、失礼ですけど、紫さんはほんとにお人格でいなさいますこと」

お勢は感心して顔を見ていた。

「いや、買いかぶっては困る。女にほれないというんじゃないんだ。ただ不信の徒にはなりたくない、これから長く付き合ってもらわなければならないのだからね」

「結構でございますよ。普請はしっかりしておきませんと、すぐ戸ががたぴしいたしますからね」

「そのとおりだ。常五郎うじによろしく」

なんだか話が少し変になってきたので、忠兵衛はほどよく切りあげることにした。

――ここまできて、小妻の家へ顔を出さんというわけにはいくまいな。

うっかりへそを曲げられる、ああいう性分だから、きっと血相を変えてどなりこむだろう、それこそ安普請の戸をがたぴしさせられては近所迷惑だと思い、朝から人出でにぎわっている両国広小路をつっきって同朋町の色街へ入っていく。

ここは朝のおそい街だから、いま表戸をあけたというような家が多く、なんとなくひっそり閑としている。梅川というなぎ屋の横の路地だと聞いておいたので、そこを入っていくと、なるほど、置き家がずらりと軒をならべている。みんなおなじような二階屋で、だいたい棟割長屋と変わりはないが、色街だけにみんな表はこぎれいにしている。ここもまだひっそりしているが、一軒の前で十四、五の下地っ子が表を掃いていたので、

「ちょっとものをたずねたいが」

と、そばへ寄っていった。

「はい」

「この辺に小妻さんというきれいなねえさんの家があるはずなんだが、どこだか知らないかね」

「それ、ここですけれど――」

見なれない田舎侍だから、下地っ子は自分の家を指さしながら変な顔をしている。

「ああ、そうか。ねえさんはいるかえ」

「いいえ、まだ寝てますけど、なんか御用ですか」

「ああ、寝ているか」

旅の疲れと昨夜の酒の後だから、まだ朝寝をしているのだろう。

「じゃ、また後でくる」

「御用なら起こしてもいいんですけど」

「なに、帰りに寄るから、わざわざ起こさなくてもいい。ねえさんが起きたら、昨日の忠さんがちょいとあいさつにきたと伝えておいてくれ」

忠兵衛はそういいおいて路地を出た。からんと澄んださわやかな秋空で、とんびが鳴きながらゆうゆうと大きな輪を描いている。

「たわけめ、ここでお前が腹を切って、おかした罪がつぐなえるか。一度死んだと思った命をながらえ、勘当してつかわすから、これからどこへなりと行って、人のため世のためにできるだけの苦労をつむがよい。いうまでもないことだが、決して出世などを心がけてはならんぞ」

そう父に悟されて、その場から、その夜のうちに、家柄も恋も、いや、肉親をさえ一切捨てて和歌山を立ってきた忠兵衛だった。

——世のため人のため、おれにそんな大それたまねができるかな。

浅学非才、取り柄といってはばかっ正直ぐらいのものだから、目のあたり江戸の繁盛を見てはただびっくり目を丸くしただけのことで、今のところとてもそこまでは手がまわりそうもないのだ。

諏訪町から駒形、並木通り、雷門の前へ出て、忠兵衛はまたしてもびっくりした。さっき両国広小路にあんなに人が出ていたのに、ここはそのまま所帯道具といっては何一つない、がらんとした長屋へ帰ってもすることはないので、ついでに浅草の観音さまを見物してくることにした。

浅草橋を渡って茅町、天王町、蔵前、江戸でも目ぬきの大通りで、蔵前には左手に天下の札差しが九十何軒、いずれも豪勢な甍をならべ、右はずっと米蔵がつづく。

——なるほど、大江戸だなあ。

田舎者の忠兵衛はしみじみと感心してしまった。

さて、自分はいまこうしてだらだらとその江戸の地を踏んでいるが、この先どういうことになるのか、なにをすればいいのか、今のところまったく見当のつかない忠兵衛なのだ。

国もとで、誤ってというより、仕掛けられたけんかだから、やむなく人を切った。

その場で自分も腹を切ろうと一度は覚悟したが、

れにも増したにぎやかさだ。江戸にはよくこんなに暇な人間がいるものだと、ただあきれるばかりである。

それが雷門から仲見世へ入ると、まるで肩で肩を押していくような人ごみになる。うっかり両側の店屋など見ていようものなら、人のかかとをふみ、人に突きとばされ、もみくちゃにされてしまいそうだ。

——これは大変なところだ。

しようがないから、前の人の背中ばかり見るようにして歩いていると、その人の背中さえいつの間にか変わっているのだ。

そういう人ごみの中でも、なれている者は平気だとみえて、すいすいとまるでつばめのようにすりぬけ、追いこしていく達者なのがいるからふしぎなものだ。

「あら、ごめんなさい」

そういう一人が、どすんと前からきて忠兵衛の胸へぶつかった。それが、おどろいたことには十五、六の、どこかの小間使いとも見えるくりくりとしたかわいい少女で、にっこりわらって頭をさげ、

「あぶないよ、ねえさん。こんなところで転ぶと命がないぞ」

「御親切さま——」

口早にいいながら、するりとその下をりすのようにすり抜けていった。

——急病人でもあるのかな、気の毒に。

仁王門を入ると、その人ごみの大半は左右にわかれて奥山の見せ物小屋の方へ流れてしまう。

おかげで、正面の観音堂への石だたみは、はとがあぶなげに豆をひろっているほどのゆとりが出てきた。

観音堂へあがって、別に祈願するほどのこともないが、礼儀だから人並みにお賽銭だけはあげていかなくては悪かろうと思い、ふところへ手を入れてみると紙入れがない。

——はてな、どこへ落としたろう。

それともいつの間にか生き馬の目をぬかれたか。自分にぶつかったのはあの小娘だけだが、まさかあんなかわいい少女にそんな恐るべき腕前があるとは思えぬ。あるとしたら、彼女は天下の名人芸を持った小娘ということになる。

——たぶん、あんまり人にもまれたんで、どこかで落としたんだろうな。

幸い大金の方は畳屋へあずけてきた。紙入れには十両足らずの金しか入っていない。

——まる裸にされたよりましだろう。いや、気をつけないと、この分ではいつまた裸にされるかわからんな。

苦笑はしたが、そこはあきらめのいい忠兵衛だから、のそりと回廊の方へ出てきた。

仁王門のあたり、まことに見事な人の頭、頭、頭の流れである。

と、その人の頭の流れが急に左右へ入り乱れ別れて、その中を小娘のえりがみをわしづかみにした浪人者が、目を怒らせてこっちへ入ってきた。

——はあてな、あれは昨日の陣場亀十郎らしいな。

そして、おどろいたことには、そのわしづかみにされてくる小娘は、さっきのかわいい小間使いのようである。引っ立てられる度に赤いすそがちらちらするのが、いかにも小娘らしい風情である。

——かわいそうに。

忠兵衛は思わず同情してしまった。

女豹

「こら、ついてきちゃいかん。見せ物じゃあない。ついてくるなというのに」

陣場亀十郎は、しっかり小娘のえりがみをつかみながら、ぞろぞろとついてくる野次馬をしかりつけるのだが、物見高い盛り場のことだから一向にききめはなく、みんなしかられているのはおれじゃあないというような顔をして平気でついてくる。

「浪人さん、あたしをどこにつれていこうっていうの」

引っ立てられている小娘は、小娘でも泣きべそをかくどころか大胆にも白い目をして陣場亀に食ってかかる。

「黙って歩け、太い女郎だ」

「あんたこそ、いきなりあたしをつかまえてどうしようっていうのさ。まさか、寂しいところへ引っぱりこんで、身ぐるみ脱げなんていうんじゃあないでしょうね」

「生意気なことをいうな、きんちゃく切りのくせに」

「おや、変なことをいうんですね。いつ、あたしがあんたのものをすったっていうんです」

「こやつ、白をきろうったってそうはいかんぞ。たったいま、わしに突き当たってふところから紙入れを抜いたのを、ちゃんとこの目でにらんでいたんだ」

「ふうんだ、あんまりわらわせないでもらいたいわ。自分のお身なりをごらんなさいましだ。たいそうお立派なぼろをさげて、きんちゃく切りにふところをねらわれる柄かしら」

思いきった小娘のこの毒舌に、野次馬どもがげらげら笑い出す。柄からいえば、陣場亀は、昨日と同じ尾羽打ち枯らして、まったくきんちゃく切りにふところをねらわれるような身なりではない。

「うるさいぞ、貴様ら」

そんなことに照れるような陣場亀ではないから、ぎろりと野次馬どもをにらみつけ、仁王門を入って左へ切れた。少し行くと地主稲荷の森があって、その辺なら人通りのじゃまにはならない。

「おい、女郎、黙って拙者の紙入れを出せ、四の五のぬかすと素っ裸にして調べるぞ」

「まあ、あきれた。じゃ、あんたはどうしても

あたしが紙入れをすったっていうんですか」
「あきれているのはおれの方だ。貴様はこの陣場亀十郎をめくらにする気か、承知せんぞ」
「おじさんこそ、人さまの前であたしをきんちゃく切りにして、どうしてくれるんです」
小娘も決して負けてはいない。
「強情なやつだな、貴様も。ようし、あくまでそんな白をきるんなら裸になれ。もう許さん」
「いいわ、人さまの前に恥ずかしいけれど、裸になります。そのかわり、陣場さん、裸になってももしあんたの紙入れが出なかったら、このおさまりはどうつけてくれるんです」
「なにっ」
「あたしだって女のはしくれですからね、裸を見せ物にされて、ただ間違いだった、悪かっただけですまされたんじゃあ女が立たないわ。もし本当に紙入れが出なかったら、あんたの首をもらいますよ。ようござんすか」
小娘の体中にはつらつとした敵愾心があふれてきて、なんとなくそれは女豹を思わせるようなすさまじい気魄だ。
「よし、陣場亀十郎も武士だ。もしおれの紙入れが出なかったら首をやる。そのかわり、紙入れが出たら貴様のその右手を切り落とすぞ。さあ、裸になれ」
陣場亀は小娘のえりがみを突き放して刀の柄に手をかけた。たしかに手証は見ている。
しかし、こういう小娘だから、途中でどんな小細工をしているかそれはわからない。もし紙入れが出なければたたっ切ってしまうほかはないと、妙な立場に追いこまれてきたのだ。自然とそういう殺気が面魂に出る。
「おや、あんた、あたしを切る気ね」
女豹は敏感にもそれを感じたらしく、体中を緊張させてじりじりと後へさがった。
「いいから、裸になれ。逃げると承知せんぞ」
「だれが逃げるもんか。あたしはあんたの首をもらってやるんだ。首をもらわない前にばっさりやられちゃあつまらないから、もっと後へさがっておくれ」
「むだ口をたたくな」
「大きなお世話だわ、口はあたしのもんだもの。さあ、裸になるわよ」
いつでも抜き打ちから飛びのける足の構えをとって、女豹は大胆にも帯に手をかけた。その燃えるような目が、油断なく相手を見すえている。
ただではすまないすごい真剣勝負になってきたから、さすがの野次馬どもも圧倒された形で、しいんと鳴りをしずめてしまった。
「よし、裸になれ」
陣場亀もいまさら後へはひけず、腹をすえて勝負と出た。小娘がさっと赤い帯を解こうとしたとたん、
「待った」
人だかりの中からさえた声がかかって、のそりと前へ出てきたのは紫忠兵衛である。
「なんだ、貴公か、——貴公の出る幕じゃあない、引っこんでいてくれ」
顔をみるなり、陣場亀十郎はふきげんそうにいってあごをしゃくった。
「しかし、陣場さん、世の中はおもしろいものだねえ」
「そんなのんきな話は後でいい」
「いや、わしのはいまの話だ。江戸は生き馬の目を抜くところだと、昨日わしに教えてくれたのは貴公だった。その江戸なれたお師匠さんの君が、今日紙入れを抜かれているなんて、江戸というところはたしか名人芸を持った人間がうようよしているんだな」
「ばかをいえ、おれが紙入れなんか抜かれてたまるか。だから、ちゃんと犯人をつかまえて、たたっ切るところなんだ。じゃまをしてはいかん。——あっ、逃げるか、女郎」
血相をかえて前の忠兵衛を押しのけようとするのを、

「まあ、待ちたまえ」
と、忠兵衛は両手でその肩をおさえた。
「くそっ、女郎っ。——どけ、貴公」
「よろしい、よろしい。ほっておきたまえ。一体、どのくらい紙入れに入っていたんだね」
その間に女豹の小娘はもうさっさと人ごみの中へ紛れこんでしまったらしい。
「逃げた、畜生。惜しいことをした。いったい、貴公、なんのうらみがあって、——いや、おれはどうしてもあいつをつかまえなけりゃあ」
「つかまえてもむだだよ。名人がすったものをいつまで体につけているはずはないだろう」
「よし、貴公がじゃまをしたんだ、貴公からすられた金はかえしてもらうぞ。異存はないだろうな」
食いつきそうな目をして胸倉をとってくる陣場亀だ。
「うむ、異存はない。いくらだね」
「金一両と二朱、——一両にまけておくから、すぐに出したまえ」
つまり、昨日忠兵衛から巻きあげた一両が財産だったらしい。
「いや、まけてもらわなくてもいいが、あいにくここには持ちあわせがないんだ」
「なにっ」
「実は、わしもたったいま紙入れをすられてね」
「そ、そいつは大変だ、おれと違って貴公のは百両余りの大金だからな」
「なあに、大金の方は家においてきたから心配はない。紙入れにあったのは十両足らずだ」
「ふうむ、十両足らず、やっぱり大金じゃあないか、惜しいなあ。だから、おれがいわんことじゃあない。江戸は生き馬の目を抜くところだと、あれほど——」
「あはは、そう教えてくれた指南番がやられるくらいだから、わしはいさぎよくあきらめる」
「しかし、貴公、まったく心当たりはないのか。どすんと前から突き当たったやつはいなかったか」
「うむ、いるにはいた。さっきの娘が仲見世で突き当たったが、ごめんなさいとあやまっていったから、まさかあの娘ではないだろう」
「畜生、あいつだ。だから、おれが裸にするといったのに、うぬっ、どうしても引っつかまえてやる」
憤然として陣場亀はきょろきょろあたりをにらみはしたが、男ばかりの立ち話ではつまらないのだろう、野次馬はいつの間にか散ってしまい、むろん敏捷なあの小娘がいつまでもこっちの目のとどくところにぐずぐずしているはずもなかった。

梅川忠兵衛

陣場亀十郎とは仁王門のところで別れた。すられた一両二朱を立て替えるからいっしょに家へいかぬかと誘ったが、今日はほかに少しもうけ口があってそっちの方がいそぐから、立て替えは明日きっともらいにいく、約束したぞという。抜けめのない陣場亀が一両二朱の方を後まわしにするくらいだから、今日のもうけ口はそれより金になる口なのだろう。
「いいか、貴公、江戸なれしているわしでさえ、紙入れをすられそこなうんだ。貴公は田舎者なんだから、十分気をつけて帰らなきゃあいかんぞ」
別れぎわに陣場亀がもう一度念を押してくれた。
「ありがとう、もうすられる紙入れは持っていないから、たぶん大丈夫だ」
「いや、それが油断というやつだ。貴公の腰にはまだ立派な印籠がさがっている。大小も相当なものだ。昨日もいうとおり、江戸というところは身ぐるみはいでその体まで売ってしまう恐ろしいところだ。ぼんやりして歩いていてはいかん」
なるほどと忠兵衛は感心した。印籠も大小も

父の形見だから、十両足らずの紙入れなぞには替えられぬものだ。しかし、印籠はともかくとして、武士が腰の大小を持っていかれるようではもうおしまいである。

「ありがとう。十分気をつけることにする」

忠兵衛は親切を感謝して、屋羽打ち枯らした陣場亀と別れたが、なんだかひとりでにおかしくなる。

――しかし、あんなかわいい顔した小娘が、本当にきんちゃく切りなのだろうか。

忠兵衛はまだ半信半疑だ。本当にきんちゃく切りだとすれば、すばらしい名人芸である。自分は本堂へあがるまでまったく紙入れをすられていることには気がつかなかった。

それに、あの女豹のような闘志。自分から裸になってみせようとしたくらいだから、むろんあの時はもう紙入れは持っていなかったのだろう。そして、本当に陣場亀の首をもらわなくては承知できない面魂だった。まったくすばらしい気魄である。陣場亀といい、あの女豹といい、そういえば、昨日の仁王竹や、お世話好きの小妻も、江戸には風変わりな人間が多いと、忠兵衛は感心しながらやっと仲見世の雑踏を抜け並木通りへ出てきた。

「お武家さん、いまお帰りですか」

ふっと後ろから声をかける者がある。振りかえってみると、さっきの女豹がにっこりおじぎをして、なれなれしく肩をならべてきた。

「やあ、君か」

忠兵衛はあっけにとられてしまった。

「さっきはどうも危ないところありがとうございました」

「その礼には及ばないが、君はとても威勢がいいんだね」

「ええ、おかげさまで江戸っ子ですから」

「なるほど。江戸っ子らしいな。しかし、さっきは陣場の前で本当に裸になる気だったのかえ」

「なる気だったわ、しようがないんだもの。そのかわり、あいつの首をとってやる気だったのよ」

「どうもそうらしかったな」

「でも、兄さんのおかげで助かったわ。あたしだって女ですもの、人の前で裸になんかなりたくはありませんものね」

「うむ、女はあんまり人の前で裸にならない方がいいね」

「そうよ、銭湯へ行った時はしようがありませんけどね」

澄ましてそんな揚げ足をとってくる。

「なるほど、ふろへは着物をきて入れないね」

「兄さんは田舎から出てきたんですか」

「そうだ、田舎侍だよ」

「国はどちら――お名前聞いちゃ失礼かしら」

「かまわない。わしは紀州浪人で紫忠兵衛というんだ」

「あら、しゃれたお名前ね。あたしはお梅っていうんです。どうぞよろしく」

「お梅さんか、君の名前もしゃれているね」

「それ、お世辞――？」

「いや、お世辞じゃあない。梅にうぐいすということがある」

「ふ、ふ、竹にすずめのロね」

「うむ、竹やぶにとらのロだ」

「だんだんやぼになるのね。兄さんは梅川忠兵衛って芝居見たことないんですか」

「ああ、あの小判の封を切る芝居か」

「そうよ、梅川忠兵衛、お梅忠兵衛、ちょいとしゃれてるじゃありませんか」

小娘のくせに、はなはだいろっぽい目つきをしてみせる。

「その忠兵衛なら、わしはだめなんだ」

「あら、どうして」

「あいにく、この忠兵衛さんは田舎侍だもんだから、さっきどこかへ小判を落としてしまってね」

「まあ。じゃ、兄さんすられたんじゃあないか

しら。江戸は生き馬の目を抜くところなのよ、気をつけなくちゃいけませんねえ」

いい度胸だなあと、忠兵衛はまったく感心してしまった。

「ありがとう。これから十分気をつけることにしよう」

「あたし、兄さんがとても好きになっちまったわ。どこかでいっしょに御飯をつきあってくださらない」

「せっかくだが、今もいうとおり、わしは文なし忠兵衛さんなんでね」

「そんな心配しなくたっていいのよ、小判ならあたしがたくさん持っているんだから」

「いや、今日は少し日が悪いんだ」

「意気地なし。あんた、そんなにあたしといっしょに行くのが怖いの」

急に女豹の声がとんがってきた。

「別に怖くはないが、こう見えてもわしには女難の相があってね、君にくどかれると困るからな」

「田舎っぺのくせに、思ったよりあんたずうずうしいのね」

「いや、ほめてもらうほどじゃない」

「へえんだ、だれがあんたのようなのろまを本気になってくどくもんか。少し甘い顔をすると、男ってすぐそれだから大きらいさ」

「知ってるよ。君が御飯に誘いたいのはこれだろう」

忠兵衛はわらいながらふところから印籠を出してみせた。根じめにすばらしいさんごの五分玉が、秋日を吸ってほおずき色に輝いている。腰にさげていたのを、それと気がついたから、そっとふところにしまっておいたのだ。

「あら、知ってたの。感心ねえ」

お梅は少しも悪びれない。

「うむ、たびたびおしりをなでてくれてありがとう」

「なにいってんのよ、たった二度じゃないか。おお汚い」

いそいで右手を人の背中でごしごしとふいている。まったくもって不敵な小娘だ。

「たった二度でも、せっかくおしりをなでてくれたんだから、これは君にあげよう」

「おことわりするわ。ばかにおしでない。はやぶさのお梅ちゃんが田舎っぺからそんなものをもらったといわれちゃ、明日からは浅草は歩けない。ようくおぼえておいで。お梅ちゃんはこの手できっとそのさんごの五分玉をいつか抜いてみせますからね」

「その度に、またおしりをなでてくれるのかえ」

「行っちまえ、間抜け。いけ好かないおたんちんだな」

どすんと力いっぱい背中を突きとばして、さっと女豹はうしろへ飛びのく。抜き打ちをさけたつもりだろうが、忠兵衛にはそんなやぼな気持ちは毛頭ないかわり、いくら突きとばされても油断なくがっしりして貧乏ゆるぎ一つしなかった。

「さようなら、お梅ちゃん」

振りかえって、にっこりわらい、そのままゆうゆうと蔵前通りの方へ歩き去る。

「こんちくしょう、なんでも知っていてそらっとぼけてやがる」

そのうしろ姿をにらみつけて、はやぶさお梅はいかにも悔しそうだ。ちょうど諏訪町八幡社の前あたりである。

胸倉

——どうしようかなあ。

浅草橋をわたってから忠兵衛はちょっと迷ったが、行きがけに寄った時、帰りに寄るからと下地っ子にいってきた。約束だから、このまま家へ帰っては不信の徒になる。

やんちゃな小妻に安普請をがたびしされても近所迷惑だろうから、やっぱり小妻の家へ寄っていくことにした。

かれこれもう昼をすぎる時刻だろう。一度きているから、こんどはその家の前で聞くわずらいもせずにすぐ小妻の家の玄関前へ立った。この里もようやく昼間がきたらしく、路地にはふだん着のあだっぽい女がちらつき、けいこ三味線の音がそこから耳につく。

「たのうむ」

声をかけて格子をあけると、

「どなた。——忠さん」

張りのある小妻の声がして、駆けてくるなりさっと障子をあけた。ぞろりとしたふだん着ながら、もうちゃんと化粧まですまして、まことにあざやかな女ぶりだ。その女ぶりよりもっとあざやかだったのは、

「どこへ一人で行ってきたんですよう、忠さん」

一調子張りながら、いきなり胸倉をつかんだ手ぶりの素早さだった。

「これはこれは」

「お上がりなさいってば。せっかく今朝うちの前まできて、どうして黙って行っちまったの」

「いや、黙っては行かなかった。まだ寝ているというから、それでは帰りに——」

「どうして起こしてくれなかったんです。薄情ってありゃしない」

有無をいわさず六畳の茶の間へ引きずりこんでそこへ引きすえ、ぴたりとひざを押さえつけてしまう。

「これはこぢんまりとしてなかなかいい住まいだねえ」

長火ばちも箪笥も茶箪笥も鏡台もびかびかとみがきこんで、狭い部屋へうまく並べて、なんとなくごたごたしている中にもきちんとまとまった女の部屋らしい美しさのあるのが、やぼ育ちの忠兵衛はすこぶるものめずらしい。

「そんなお世辞聞きません。どこへ行ってきたんですよう、一人で。悔しいわ、あたし」

「ついでだから、浅草の観音さまへ行ってきたんだ。なにがそんなに悔しいんだね」

「観音さまなら観音さまで、一言そういってくれれば、あたしもいっしょに行ってあげたんじゃありませんか」

「ああ、そうか。君といっしょなら、わしも無事にすんだかもしれなかったな」

「おや、じゃ無事にすまなかったんですか。なにかあったんですか」

「まあいい、もうすんでしまったことだ。少し落ち着こう」

「よかああありません。なにがあったんですよう。あんたはあたしに隠すんですか」

「そういうわけじゃない。ただほんの生き馬の目を抜かれただけだ」

「なんですって——」

「なかなか見事なものだ。いつのまにか紙入れがなくなっていてね。もっとも、金は出がけに堺屋へあずけて、持って出たのは十両足らずだが、とにかくあれは名人芸だねえ」

「悔しいなあ。田舎者のくせに一人でなんか出かけるから悪いんじゃありませんか」

「いや、やられたのは田舎者だけじゃないんだ。昨日の陣場亀十郎も、あんなに江戸なれていて、やっぱりおなじ小娘にやられたんだから、相手の方が一枚うわてなんだな」

「小娘なんですか、そのきんちゃく切りってのは」

なんとなく小妻の目が引きつってくる。

怖い客

翌朝、忠兵衛は小妻に寝こみを踏みこまれてしまった。

「忠さん、目がさめてるんですか」

「早いなあ、小妻ねえさん。いま起きようかと思っていたところだ」

「なにが早いもんですか。御近所はみんなもう起きて、雨戸がしまってるのはここだけじゃありませんか」

小妻は玄関から台所の雨戸をがたびし開け放

「さあ、もう起きて顔を洗ってきたらどうなの」
小妻はまくらもとでたすきがけになり、手ぬぐいをあねさまかむりにして、布団を引んめくりそうな勢いだ。
「勇ましいんだな」
これで家では御飯ごしらえから布団のあげおろしまで下地っ子まかせなのだろうが、うっかりそんなことをいうと引っかかれそうだから、忠兵衛はおとなしく起きることにした。
今日もからりと晴れた秋日和である。
女というものは所帯ごっこがそんなにうれしいものか、一人でいそいそと台所で働いていた小妻がやっと朝の膳を茶の間へ持ち出したのは、職人ならもうとっくにひと働きすませて四ツ（十時）の茶になる時分であった。
「忠さん、御飯よ」
別に隣近所へ聞かせたいつもりもないのだろうが、わざわざ自分が作った膳だけに、ついはずんだ声が出るのだろう。

して、颯爽と茶の間へ入ってきた。朝御飯だけはこれから毎朝あたしが行ってこしらえてあげると昨日自分からいい出して、今日はその第一日なのである。
「そんな面倒をしてくれなくても、江戸には飯屋という調法なものがあるんだからいいよ」
昨日もそういって、一応はことわった。
「そうはいきません。ちゃんとあたしというものがついていて、あんたに飯屋通いをさせているなんていわれたら御近所でわらわれるじゃありませんか」
ひとり者の飯屋通いより、御近所はむしろそのひとり者のところへわざわざ朝飯ごしらえに通う物好きの方をわらいそうだが、当人はもう他人ではないつもりなのだからしようがない。その証拠には、七輪、土鍋、手桶、火鉢など、一通り台所道具を買って歩いたついでに、茶碗、汁椀、箸だけはちゃんと女夫にそろえているのだ。
「すまんなあ、どうも」
「あら、変なことというのね。なにがすまないんです」
「とんだ造作をかける」
「どういたしまして。御飯ごしらえは女の仕事なんですからね。そんな御遠慮はなさらないでいただきます」
「しからば、遠慮なくちょうだいいたそう」
「そうなさいまし」
茶碗も箸も二人分出ているのだから、小妻は自分の分へも遠慮なく飯をつける。
「気を悪くしてもらっちゃ困るが、小妻ねえさんもはじめての朝飯なんだろうね」
忠兵衛は念のために聞いてみた。
「あたりまえじゃありませんか。二度も三度も朝御飯をたべる人がありますか」
「たぶんそうだろうとは思ったんだが、じゃ今までずいぶん腹がすいたろうな」
「あんたとこうしていっしょにたべたいから我慢してたんだわ。でも、うれしいわ、好きな人とこうして御飯いっしょにたべるの」
目をとろんとさせて、一人でうれしがっているばかりでなく、
「あんたはちっともうれしくなさそうね」
と、男にまでそのよろこびを強要してくるのだから、だいぶ熱が高い。
「いや、わしも心ではうれしいんだ。ただ、にやにやしていたんじゃ飯がかみにくいから我慢しているのさ」
「そんならいいけれど、——あたし、ゆうべも考えたのよ、あんたが病気にでもなってくれるといいと思って」
「なんでだね」
「病気は一人じゃおいとけないでしょう。うちへ引き取るか、あたしがこっちへ来っきりになるか、そうすればいつもいっしょに御飯たべられるもの」
「驚いたなあ。病人じゃ飯が食えないから、わ

しは君がうまそうに御飯をたべるのを指をくわえて見ていることになる」

「だから、けがの方にしようかと思ったんだけれど、うっかり不具にしちまっちゃ大変だし、世の中ってなかなか都合よくいかないようにできてるのね」

真顔でそんなことをいい出すのだからなんとも助からない。

「今日は、あんた、どこを見物するの」

食後の茶になってから、小妻があらためて聞いた。

「さあ、今日はどうしようかな」

忠兵衛は見物が目的で江戸へ出てきたわけではないのだから、そうあわてて毎日出て歩く必要もないのである。

「出かけるんなら、今日はあたしもいっしょに行ってあげるわ。またきんちゃく切りの小娘なんかにばかにされるといやなんだもの」

「そうそう、あの娘にはわしもびっくりした。たしかにあれは名人だな」

思い出すと忠兵衛はおかしくなる。あざやかなすりぶりもさることながら、あんなかわいい顔をしていて、陣場亀十郎ほどの男をまったく頭からのんでかかっていた。いや、忠兵衛などはまるで子供あつかいで、そんなことを小妻に話すとえらいことになりそうだから、後の出会いのことは話さずにおいたが、色目まで使って、とことんまで人をこけにしようとする、恐るべき度胸だ。

「なにいってるんですよう。そんな甘い顔をして感心しているから、紙入れなんかすられるんじゃありませんか。悔しくって、あたし、ゆうべは眠れなかったじゃありませんか」

これはまた少しおおげさなようである。

「そうかなあ。わしはまた、あのくらい名人芸を見せてもらったんだから、十両は安いと思っている。もっとも、二度は困るがね」

「あきれちまうな、この人。そんなのんきなこといってると、いまに生き肝を抜かれても知りませんからね」

「ああ、そうか。生き肝はちょいと困るな。そうだ、こんど見物に出かける時は、生き肝だけ小妻さんの家へ預けていくことにしよう」

「ばかばっかし」

しかし、生き肝を預けるというこの一言はきいたらしい。本気かしらというように目がとろんとなりかけた時、

「ごめんくださいまし」

と若い女の声がして、静かに格子があいた。

「はい」

女の声だから、小妻の顔色が正直にさっと変わった。

「あの、紫忠兵衛さまのお宅はこちらでございましょう」

もう我慢ができない。小妻は夢中で立っていって、しかし人に笑われたくないから、行儀だけは忘れない。ちゃんとひざまずいて玄関の障子をあけた。見ると、こざっぱりとした身なりの、十六、七のかわいい小娘が、おとなしやかに立っている。

「あなたはどなたさまでございましょう」

「あの、ねえさんは紫さまのおかみさんでございますか」

つぶらな目をして、まじまじとこっちの顔を見つめる。その目になんとなく不敵なものがあるので、

「ええ、あたしは忠兵衛の家内でございますけれど――」

と、小妻も負けてはいない。

「あの、おかみさんはやきもちやきかしら」

小娘のくせに、こんちくしょうと、小妻は思った。

「ほ、ほ、やきもちだなんて、あなたぐらいのお年でおわかりになるのかしら」

「本当はよくまだわかりませんけど、あたしここへおたずねして悪かったかしらと思って」

「そんなことはございません。御用がおありなんでしょう」
「ええ。あたしは昨日兄さんのおしりをなでさせていただいたお梅という者なんです。そういえばきっとわかりますから、取り次いでいただけませんでしょうか」
あっと小妻は目をみはった。
「じゃ、あなた昨日、観音さまでうちの人がお世話になった人と違うかしら」
「そうなんです。いいえ、お世話になったのはあたしの方なんで、実はお礼にうかがいましたの」
澄ました顔をして、なんともいい度胸だ。
「取り散らしていますので、ちょっとお待ちになってくださいね」
こんな小娘なんかに負けてたまるもんかという意地があるから、わざと落ち着いて茶の間へ引きかえしたが、胸の中が火がついたような小妻だ。
「あんた、お梅さんて方がたずねてきましたよ」
じいっと男の目を見てやると、
「そうか。まあ、そこを片づけなさい」
と、忠兵衛はおっとりと微笑しながら、少しも動じた色は見せない。
「じゃ、お上げしてもいいんですね」
「うむ、お目にかかろう」
とにかく小妻はいそいで膳を台所へ下げて、ます水を一杯のんだ。ここであの小娘に負けるようなことがあると、女の恥ばかりでなく、一生うかぶ瀬がなくなってしまうのだ。なにより大切なことは、あくまでもおかみさんらしく落ち着いていなければならないことである。

鞘あて

「兄さん、今日は――」
小妻が膳を台所へさげるのを見ると、はやぶさお梅はもう平気でづかづか茶の間へあがってきた。人見知りなどということは薬にするほども持ちあわせない小娘なのだろう。

「やあ、君か、よくここがわかったねえ」
忠兵衛はお梅に家を教えたおぼえがない。
どうしてわかったろうと、それが不思議だった。
「においでわかるのよ。びっくりした?」
「うむ、びっくりしたな」
「あたしはがっかりしたわ」
「どうしてだね」
「いまの女の人、ほんとに兄さんのおかみさんなの」
すぐ障子一重の台所に当の小妻がいるのを知っていて、この女豹はわざとそんないやがらせを口にするのだ。
「おかみさんには見えないかね」
「うそよ。ちゃんとわかってるわ。おかみさんなら丸髷に結ってるはずだもの」
「いや、それはそのうちに気が向いたら丸髷にでもなんでも結うつもりだろう」
忠兵衛は陰で聞いている小妻のためにあたらずさわらずの返事をしておく。
「甘いんだなあ、忠さんは」
「君はまたわしの汚らしいおしりをなでまわしにきてくれたのかえ」
「今日はおしりじゃないわ、生き肝の方よ」
「生き肝――?」
「兄さんは甘いから、いまの人に預けられちまってからじゃつまらないもの。あんたが持っているうちに抜いてあげるわ」
にやりと白い歯を見せて、どうやら立ち聞きでもしていたらしい。
「わしの生き肝など抜いても一文にもならんだろう」
「熊の胆屋が買ってくれるかもしれないわ。だめかしら、兄さんのは甘そうだからな」
小妻が茶を入れて出てきて、
「粗茶でございますのよ」
と、二人の前へおいた。
「あの、どうぞおかまいなく。おじゃまをして

すみません」
「いいえ、どうぞごゆるりと。うちは朝寝坊の方だもんですから、いま御飯がすんだところなんですよ」
「あの、おかまいなく跡片付けをなすってくださいまし」
「では、そうさせていただきます」
両方ともけろりとした顔つきで応酬して、小妻はすっと台所へ立っていく。まず小手調べというところなのだろう。
「なかなかきれいなひとね。あんな白い手をしていて、御飯うまく炊けるのかしら。どうだったの、忠さん」
顔が見えなくなると、お梅の毒舌がまたはじまる。
「君はどうなんだね」
「ばかにしっこなしよ。うそだと思ったら、明日の朝はあたしが御飯炊きにきて見せてあげるわ」
「そうか、君はなかなか指先が器用そうだからな」
ちょいとからかってみたくなる忠兵衛だ。
「ええ。おしりをなでるのも器用よ」
しゃあしゃあとしているのだから手がつけられない。
「つまり、君は名人なんだな」
「そうそう、あたしつまらないおしゃべりばかりしていて、肝心なことを忘れてたわ。昨日はあぶないところを助けていただいて、お武家さま、どうもありがとうございました」
「礼儀が正しいんだね」
「ええ、これでもあたし、さる大名の落とし胤なんです。世が世なら、こんな汚い裏長屋へなんかとてもお運びあそばすような身分じゃないんですよ」
「なるほど。あいにく世が世でなかったもんだから、落とされっ放しで、世をすねて、こんどは指の器用の方へまわって、ただ拾って歩いているというわけだね」
「人聞きの悪いことといわないでくださいよ。それじゃまるであたしがきんちゃく切りかなんかのようじゃありませんか。お姫さまに対して無礼だわ」
「これは失礼——。落とされ姫君にはただ昨日の礼をいいにこんなむさくるしい裏長屋へお運びになったのかね」
「ああら、わが君、恐惶謹言てとこね」
「ごていねいなんだね。その礼なら昨日諏訪町でたしかに一度もらっているよ」
「あんたわりにものおぼえがいいのね。お見それしたわ。でも、おくやみじゃなくてお礼なんだから、何度いったっていいでしょう。明日もまたきてあげるわ」
「あのおしりの印籠なら、今日あげてもいいよ」
忠兵衛はずばりと切り出してみる。それ以外にこの女豹がわざわざたずねあててくるはずはないような気がするのだ。
「ふうんだ、あんなけちなもの、もうほしかあないわ」
「じゃ、ほかになにかほしいものがあるんかね」
「だから、さっきいったじゃありませんか。あなたの生き肝がほしいのよ」
「君は意地が悪いんだね。わしはあのひとに生き肝をあずけるといったんで、急にそれがほしくなったんじゃないのかえ」
「そうよ。どこのきれいなひとがなんといったって、あんたの生き肝はきっとお梅ちゃんがもらってみせるんですからね。よくおぼえといてください」
それは台所への挑戦なのだ。が、台所の小妻は、どんな顔をしたかわからぬが、まことに静かに茶わんを洗っている。この勝負はどうやら小妻の勝ちらしい。
「ふ、ふ、聞こえないふりをしているわ。調法な耳ね」
お梅は不敵にも挑戦をやめない。

「あたしちゃんと知ってるわ。どうせ、あのひと、もう少したてばうちへ帰らなくちゃならないんだから、それまで待っててやるわ。負けてたまるもんか」
「そんなに意地にならなくてもいいよ」
「おや、あんたはあっちのひとにひいきをすんのね」
そろそろ女豹になりかけたようである。困ったものだと忠兵衛が苦笑いした時、がらりと玄関があいた。
「たのうむ」
野太い男の声だ。
「お取り次ぎはあたしがしますからね。あんたは台所で働いておればいいんですよ」
お梅は得たりと台所の方へ毒づいて、颯爽と玄関へ立っていった。ちゃんと障子際へ座って、
「どうれ」
と、気取った声で答え、こっちへ首をすくめてぺろりと赤い舌を出してみせてから、するすると障子をあけた。
「ああ」
「おや、貴様は昨日のきんちゃく切り娘だな。けしからん」
わめいて、いきなり仁王立ちになったのは、なんとひげ浪人の陣場亀十郎である。これも相当以上にずぶとくできている男だから、昨日約束した金一両を忘れず、さっそく受け取りに出向いてきたのだろう。
「おいでなさいまし。どなたさまでございましょう」
一度はぎょっとしたお梅が、あらためて白々しくそこへ両手をつかえる。
「なにっ、こいつめ、ばかにするな」
「あら、この方、頭が変なのかしら」
きょとんとした顔をあげてみせる。
「こいつめ、そらっとぼける気か、貴様」
「どうぞ、お静かに願います。隣近所でびっくりなさると、わたくしどもが迷惑いたします」

「あきれた女郎だなあ」
「いいえ、あきれているのはこちらでございますの。人さまの家へきて、顔を見るなり、ばかだの、女郎だのと、見ればお身なりもあんまりお立派のようでございますし、あたしどうなすったのかと、びっくりしてしまいました」
「ふうむ」
さすがの陣場亀が、まじまじとお梅の顔をながめてあきれかえっているようだ。
「あの、手前どもは紀州浪人紫忠兵衛と申す者の浪宅でございますけれど、失礼ながらあなたさまはどなたさまでございましょう」
「おれは陣場亀十郎だ」
「して、忠兵衛にどんな御用でございましょう」
「貴様は一体ここのなんなのだ」
「失礼なことお聞きになるものではございませんわ。ほ、ほ」
恥ずかしそうにしなを作って、そでを口へ持っていく。小娘のくせに、はなはだ色っぽいかっこうになる。
「ふうむ、驚いたやつだなあ。じゃ、貴様はもう紫を口説き落としてしまったのか」
陣場はとんだ勘違いをしてしまったらしい。
「ほ、ほ、あんまり恥ずかしがらせないでくださいまし」
「いや、許さん。たとえだれのなんであろうとも、貴様は昨日わしのふところをすったきんちゃく切りなんだ。さあ、わしの紙入れを出せ」
はっと気がついて、亀十郎はふたたびわめき出す。
「まあ、人聞きの悪い。あんまり失礼なことをいうと、あたしの方こそ許しませんよ」
「なにっ、こやつ。大きな口をきくな。きんちゃく切りだからきんちゃく切りだといったのに、なにが失礼だ。すなおにわしの紙入れを出して早くあやまってしまわんと、陣場亀十郎、今日こそ本気になって怒るぞ」
どすんと一つ足を踏み鳴らして、陣場は居丈

高にお梅をにらみつける。

鮮やかぶり

「あんた案外わからず屋ね」

陣場亀十郎がどう威嚇してみても、そんなことにびくともするようなお梅ではないようだった。

「なに、わからず屋だと」

「わからず屋だわ。おれの紙入れをすった、おれの紙入れをかえせって、さっきからお長屋中に聞こえるような大きな声をだして、まるであたしがあんたの紙入れでもすったようにほえておいでなさるけれど、あんたやせても枯れても刀を二本さしているお侍さんでしょ。心得のあるお侍さんが、もしあたしのような女に紙入れをすられたとしたら、それは自慢になることじゃあなくて、あんたの恥になることじゃありませんか。そんな自分の恥っさらしを一町も聞こえるような大きな声でわざわざ世間さまへ広告して自分のばかをおひろめしなくてもよさそうなもんだと、あたしは思うんですがね」

お梅は、いけしゃあしゃあとして、そんな小理屈を並べ立てる。

「ずうずうしいやつだなあ」

ずうずうしいことにかけては決して人後におちない陣場亀も、まったくあきれかえっているようだ。

「ほめてもらうほどじゃありませんわ」

「だれがほめるもんか。あきれているんだ」

「じゃ、おたがいっこだわ」

「なにを――」

「あたしのようなおとなしい娘さんをつかまえてきんちゃく切りだなんて、あきれてものがいえやしない。あんたの方こそ、みたところよっぽど人のふところをねらいそうな目つきをしてるくせに、鏡みたことあるんですか」

「こやつ、もう許さん。表へ出ろ」

口ではとてもかなわないとみたか、思わず刀の柄に手をかける。

「表へ出てどうすんの」

「たたっ切ってやるんだ」

「とうとう本性が出たわね」

「なんだと」

「切り取り強盗武士のならい。いい御商売だわ」

「むだ口をたたかず表へ出ろ」

「本気かえ、陣亀さん」

お梅はまだひやかすようにわらっている。刀の柄に手をかけて町人をおどかして歩くのは、こういうごろんぼ浪人の稼業のようなものだ。稼業だからめったに刀を抜きはしない。たとえ抜いたって、本当に切りはしない。人を切れば自分も罪をうけなくてはならないんだから稼業にならなくなるのだと、ちゃんと見抜いているお梅なのだ。

「こら、出ろといったら早く出ろ」

さすがの陣場もこの女豹はいささか持てあまし気味だ。

「よし、それじゃあちょいと相手になってやろうかな」

「さっさと出ろと申すに」

「そこをおどきよ、出ろ出ろといったって、そんな大きなずうたいをして出口をふさいでいちゃあ表へ出られないじゃあないか。頭が悪いなあ、あんたは。もっとも、利口ならそんなぼろをさげて人をおどかして歩くのを稼業にしていないだろうけれど」

陣場は黙って外へ出た。お梅の憎まれ口があんまり野放図なので、本当に腕の一本ぐらい峰打ちにたたき切る気になったのかもしれない。どうやら顔色が少し変わっている。

玄関の外はむろん長屋の路地だ。さっきから声が大きいから、近所の女房たちがみんな表へ出てこっちを見物している。

「忠さん、おじゃましました」

お梅はいっこう平気で、そこから茶の間の忠兵衛にあいさつをする。

「帰るかね」
忠兵衛はわらっていて、別に引きとめようとも、仲裁に入ろうともしない。
「帰るわ、山犬がうるさくてしようがないんだもの」
「気をつけてお帰り」
「ありがとう。明日の朝は、あたしが御飯炊きにきてあげますからね」
上がりかまちに腰かけて下駄をはき、鼻緒でもなおすようにひょいとかがんだとたん、その手がそばの小妻の吾妻下駄を片一方つかんで、さっと表へ投げつけた。
「あっ」
その下駄つぶてが、出てきたところを抜き打ちに痛めつけてやる気で、軒下三尺離れたところに仁王立ちになっていた陣場亀のみぞおちのあたりにはっしと飛んだから、ふいをくらって陣場が思わずよろめくすき、
「あばよ」
お梅は風のように玄関を飛び出して、陣場の前をすり抜けて、いともあざやかに路地のどぶ板を鳴らしながら走り去る。
「うぬ、やったな」
立ち直った陣場が悔しがって抜刀したが、それはただそこに見物していた長屋の女房たちをおどかしただけで、
「きゃあっ」
その女房たちに殺されるような金切り声をあげられてみると、まさか抜き身をさげて表通りまで追いかけて出るのも大人気ないと気がついたのだろう。
「あきれた女郎だなあ」
と、苦笑しながら立ち止まってしまった。
「うまくあつかわれたようだね、陣場さん」
玄関へ出てきた忠兵衛がおかしそうにわらっている。
「やあ、昨日は失礼」
陣場亀は、たちまちにっこりしながら、刀を

おさめて近づいてきた。
むきになっていつまで怒っていたって一文にもならぬ相手より、一両くれる約束になっている忠兵衛の方が、彼にとっては大切なだんなだからだ。
「まあ、上がりたまえ」
忠兵衛は誘っておいて、茶の間へもどった。

立て替え一両

「おいでなさいまし」
陣場亀がゆうゆうと茶の間へ座りこんだとたん、小妻が台所から茶を入れて出てきて、しとやかにそこへ両手をつかえた。
「なんだ、ここにも伏兵がいたのか」
このあざやかな女房ぶりをみて、陣場は唖然と目をみはっている。
「貴公はなかなか色男なんだな。一体、どっちが本妻なんだ」
むしろ小妻をからかうようにいったが、つんとした顔色で相手にならない。
「あんた、跡片付けすんだからあたし帰りますからね」
「そうか、御苦労だったね」
「後で少し相談したいことがあるんだけれど、家へ来ていただけるでしょうね」
お梅への鬱憤が胸にこもっていて、それがいたくてもじゃまな陣場がいては口にできない。
ついむかむかしてしようがないのだろう、にらみつけるような怖い顔だ。
「よろしい、後でちょいとおじゃますることにしよう」
「きっとですよ」
「わしは約束は固い男だ」
忠兵衛は決して逆らわない。
「では、陣場さん、ごゆっくりなさいまし」
小妻はすっと立って玄関の方へ出ていく。
「怖い顔だなあ。ああ、わかった、あのちんび

「そうだ、その金一両だ。忘れんうちにもらっておきたいな」

陣場亀は遠慮なくぬっと大きな右手をさしだす。

「よろしい。わしは約束の固い男だ。そのかわり、君にも一言約束しておいてもらいたいことがある」

「いってみてくれ。金一両の恩人だから、たいていなことは約束する」

「この金一両は、昨日君があのお梅という小娘に紙入れをすられたというからわしが立て替えるんだ。この一両が君の手に入れば、昨日すられた紙入れがもどったもおなじことになる。だから、以後はお梅に道で出会っても、胸の中でどう考えようとそれは勝手だが、きんちゃく切り呼ばわりだけはやめてやってくれぬか。どうだろうな」

「なるほど」

陣場亀は手のひらの上の一両小判と忠兵衛の

ら娘と鞘当てをやって、いいかげん毒づかれたという次第だな、それなら同情してもいいな。あり ゃ末恐るべき小娘だ」

陣場亀は、いま自分がさんざん手こずらされたばかりなのでちょっぴり同情するようにいったが、小妻は返事もしないで、さっさと玄関の戸をしめて出ていってしまった。

「陣場うじ、ゆうべのもうけ口はうまくいったのかね」

忠兵衛は、女たちにはなんの関心も持っていないような涼しい顔をして、ゆっくり切りだした。

「あれは今日にのびたんだ、先方の都合でな」

「とかくもうけ口というものはそうなりがちなものらしいね」

「しかし、貴公の方は大丈夫だろうな、貴公の方まで明日にのばされては、陣場亀十郎立つ瀬がない」

「金一両お立て替えの方かね」

顔をまじまじと見くらべて、

「つまり、貴公はあの小娘をきんちゃく切りではないというのかね」

と、妙な顔をする。

「いや、きんちゃく切りかきんちゃく切りでないかは、わしにもはっきりしない」

「しかし、貴公も昨日あの小娘に十両足らずの紙入れを抜かれたことはたしかなんだろう」

「赤面の至りだが、抜かれたものか、落としたものか、それさえ気がつかなかった。手証も見ないであの娘をきんちゃく切りだときめるのは少しかわいそうだ」

「貴公、そんな人のいいことをいっていると、いまにあの小娘に生き肝まで抜かれてしまうぞ」

亀十郎はいささかあきれた顔をする。

「まあ、それはその時のことにして、ああいう世をすねた娘は、人の面前できんちゃく切りだなどとののしられるとよけい悪たれたくなるものだ。現在悪事を働こうとしているところを見た場合はそうもいくまいが、道で会っても見て見ぬふりをしておく、そういうことにたのみたいな」

「よろしい。つまり、金一両の口止め料というわけだな」

「そうとってもらってもさしつかえない」

「とかなんとかいって、貴公あの小娘に変な色気があるんじゃあないのか。小妻という芸者もさることながら、あの小娘も悪たれさえしなければ、おもちゃにするにはちょいとおもしろい。それだったら絶対にやめたまえ、忠告する。あんなのはとらの子をかわいがるとおんなじで、いつ大けがをするかわからん。本当だぞ、貴公」

「忠告ありがとう」

人には人だけの了見しかないものだ。忠兵衛が別に弁明する気にもなれないからわらっていると、

「そうか。じゃあ、忠告料をもう一両奪発せんかね、ものには謝礼ということがあるからな」

と、陣場亀は右手の小判をつかんでひざもとへおろし、ぬっと右の手を出した。あいかわらず虫のいい男である。

苦笑しながら黙殺していると、さすがにこれは出ないとみてとったのだろう。

「あは、は、そう一度に欲をかいてもいかんかな。しからば、忠告料はまた他日ということにして、今日はこれで失礼」

亀十郎は、こばかにしたようなおじぎをして、すうと立ち上がった。

「これからまた昨日のもうけ口の方へまわるのかね」

「うむ、かせげる時にはうんとかせいでおかんと、おてんとうさまに罰があたるでな」

これもまたあきれるばかり堂々たる悪たれぶりである。

兄妹の命

今日は一日家でのんびり足休めをするつもりだったが、思いがけないお梅の出現で、小妻に後できっと来てくださいと呼び出しをかけられてしまった。用件は大体わかりきっているが、よろしい、行くと約束したからは行ってやらないとまた後がうるさい。

そう思ったので、忠兵衛は陣場が帰るとまもなくふらりと家を出た。

「おでかけですか、先生」

家の前で張り物をしていた隣の女房がわらいながらあいさつをした。

「ちょっと出かけてきます」

「先生もなかなか大変ですねえ」

にやにやわらっているのは、壁一重きりの隣だから、朝からのいきさつを残らず耳にしているのだろう。

「やあ、朝っぱらからお騒がせして、まことに申し訳ない」

「どういたしまして。生き肝にお気をつけなさいましよ、先生」

こう筒抜けではうっかりしたこともいえないと、忠兵衛は苦笑しながら馬喰町通りへ出た。やがて昼近く、今日もからりと晴れた秋日和である。

「あっ、忠さん、いいとこで会ったわ」

横山町通りへ出る角から勢いこんで飛び出してきて、出会い頭のようにいきなり腕へぶらさがったのは、またしても悪たれ娘のお梅であった。

「どうした、お梅あねご」

この顔色では、さてはまただれかに追いかけられているのかと、いそいで横町の方を見たが、そんな気配もない。ただ通行の人たちが、年ごろの娘が若い侍の腕をつかんでふりまわさんばかりだから、びっくりした顔をして見て通る。

「なにをきょろきょろしてんの、いやだなあ、あんたは」

「いや、だれかに追いかけられているんじゃないかと思ってね」

「ふうんだ、変な気をまわさないでよ」

「じゃ、なにをそんなに、そんなにあわてているんだね」

はてなと気がつき、忠兵衛はつかまれていない方の左手をそろりと腰の印籠へまわしている。

「そんなんじゃないんだってば」

敏感に悟って、お梅がぐいとつかんだ腕を引っぱりつける。

「すると、どれなんだろうな」

「人殺しが始まるんだわ。忠さんでなくちゃだめなんだから、早くきて」

「人殺しが始まる――？」

「なんて顔すんのよう、こんなとこでびっくりしていたってしようがないじゃないか。早くきてってば」

ぐんぐん横山町通りの方へ引っぱって歩き出すのだ。

「わしは、あねご、人殺しの手伝いは困るんだ

がねえ」
「なにいってんのよう。相手は侍が三人、こっちは病人の侍一人とその妹らしいな。かわいそうで見ていられやしない。忠さん、男をあげるのは今なんだから、しっかりやらなくちゃだめよ」
まるで姉が弟にでもいってきかせるような口ぶりだ。
「ありがとう。せっかくだが、わしは男をあげなくてもいいんだがねえ」
「おや、あんた今になって逃げる気――？」
「逃げはしないが、わしはあんまり強くない方なんだ」
「なによう、そんな大きなずうたいしていて。江戸っ子なら、あんなのだれも見てられやしないわ」
「あいにくわしは紀州の江戸っ子なんだ」
「あっ、そうだっけ、あんた田舎っぺだったわね。まあいいわ。今日だけは江戸っ子にしといてあげるから、ほんとにしっかりしなくちゃ」
お梅は一人でしょって立っているように意気ごんでいるが、忠兵衛は前身があるから、なるべくなら晴れがましい場所へは出たくない。しかし、一方が病人とその妹で、相手が三人というのは、やっぱり気になる。
「いったい、どんないきさつなんだ」
「いきさつもかんさつもありゃしないわ。両国の方から若い病人の旅の侍が竹のつえにすがって、それをあたしぐらいの妹がいたわりながらきたのよ。こっちから勤番侍みたいのが三人、あいにくそれが三人ともがっしりしたやつらで、ばったり顔が会うと、やあ、なんのなにがしだな、いいところで出会った、なにがなにしてなんとやら、さあ尋常に勝負しろって、三人の方が兄妹の方を取り巻いたのよ。兄貴の方は、それでも侍だから、さっと竹のつえをすてて刀の柄に手をかけたけど、やっとつえにすがって歩いていたくらいだから、一人で立っていられないのよ、妹の方がびっくりして、兄の方をかばい、このとおり病気なんだから、今日は見のがしてくれって、しまいには地べたに座ってたのむのに、三人のやつどうしても承知しないんです」
「敵討ちとも違うようねえ。ほら、あそこよ。忠さん、駆け出そう」
繁華な横山町通りへ出て、ひとところ黒山のような人だかりだ。すると、まだ兄妹は切られていないのだろう。ここまできては忠兵衛も自然と足が速くなる。
来てみて思わず目をみはった。なるほど、二十一、二ともみえる病人らしい若侍が、地に両手をついて病苦にあえぎ、その背中を十六、七ともみえる妹が、しきりになでさすっている。妹のかわりに、いま仲へ入って三人の勤番侍の方へぺこぺこ頭をさげているのは、に組の半纏をきたこの間のお神楽の三吉だ。
「そんな無理なことをいわねえで、ねえ、だんな、こっちの方はごらんのとおり病人なんだ、どんな深いわけがおありなさるか存じやせんが、今日のところはこのに組の半纏に免じて、どうかあっしに任せてやっておくんなさい。このとおりたのみます」
「ならん、くどいやつだな。貴様、いま自分の口で、どんな深いわけがあるか知らないがといったではないか。わけも知らずに仲人などとはおこがましい。たかが鳶人足のくせに、黙って引っこんでいろ」
どんぐり眼をした大きな勤番侍が、肩をそびやかして居丈高にしかりつける。
「そうでござんしょうが、足腰の立たない病人をお切りになさる、そいつは少し罪だ。黙ってみてられねえからつい飛び出しちまったんで、こうなっちゃあ、いまさらあっしも引っこみがつかねえ。あっしはけちな鳶人足だが、だからこのに組の半纏に免じてとお願いしていやすんで」

「ならん、ならん、に組の半纏がなんだ、に組であろうと、は組であろうが、半纏は半纏、そんなものに驚く我々ではない」
「おや、お前さん、組の半纏にけちをつけなさるんだね」
三吉はぺこぺこをやめて、急にぐいと胸をそらせた。
「組の半纏などは知らん。じゃまだからどけ。どかぬと貴様から先にたたっ切るぞ」
「なにをぬかしやがる、かぼちゃ侍め、それでも二本ざしだと思えばこそ少しはうやまって下から出りゃあいい気になりやがって、なにか、お前さんたちの国じゃ、病人や弱い者に情けをかけりゃあ侍の恥になるっていう規則でもあるのか。おそろしく薄情な国なんだな、道理で顔まで鬼のような面をしてやがる。それで角が生えりゃあいい値でお神楽のお面に売れるんだが、——ああ、わかった、てめえたちは小遣いに困りやがって角を質に入れてきやがったな。ざまあ見やがれ、鬼のなりそこないめ」
あんまりぱっとしない啖呵だが、野次馬たちはよろこんで、そうだ、そうだ、お神楽の兄い、しっかりたのむぞと、どっとわらい出す。三公の鼻はだれの目にも堂々とあぐらをかいているからだ。
「うむ、悪口雑言、もう許さん」
勤番侍がかっとなって刀の柄に手をかけるのをみて、
「忠さん、いまだわ、しっかり男をあげんのよ」
どすんとひじで忠兵衛のわき腹を小突いたお梅が、
「どいた、どいた、野次馬はどいた、泣く子も黙る紫忠兵衛さまのお乗りこみだよ」
と、大声を張りあげて野次馬どもをかきのけだした。

御意討ち

「しばらくお待ち願いたい」

紫忠兵衛は、血相をかえて柄に手をかけた勤番侍と、啖呵はきっているが命は惜しいからじりじりと逃げ腰になっているに組の三公との間へ、つかつかと割って入った。
「あっ、だんな、たのんます」
目ざとくそれを見た三公は、正直にやれ助かったという顔つきだ。
「だれだ、貴公は——？」
またじゃま者かというように勤番侍はむっと忠兵衛をにらみつける。
「拙者は紀州浪人紫忠兵衛と申します。お見知りおき願いたい」
「それがどうしたというのだ。とめ立てなら断るぞ」
「頭からそう申されては恐縮のほかござらんが、なにぶん穏便な話し合いに願いたいと存じましてな」
「よけいなことだ、武士がかように悪口をつかれて黙っていられるか。どいてくれ」
「ごもっともです。悪口の儀は後ほどいかようにもあやまらせますが、この者は至って口下手でございましてな、趣意は、これなる御兄妹にあなたがたが刀を抜けと勝負をいどまれる相手は御病人のようだから、今日のところはお許し願いたいと、見かねて仲へ入ったのだと思います。それが言葉の行き違いからつい悪口となりましたもの、拙者からもあらためてお願い申す。御病人相手の勝負の儀は、なにとぞ他日におゆずりくださらんか」
「よくべらべら一人でしゃべるやつだな。その男は君命に逆らって、御意討ちの仰せが出ている者だから切るのだ。私の勝負ではない。いらざる口は出さないでくれ」
「御意討ちとあれば、藩名ならびにあなたがたの御姓名をうけたまわりたい」
「よけいなことだ。どいてくれ」
御意討ちだから他人の干渉は許さぬといわぬばかりの口ぶりだ。この病人が主君にどう逆ら

ったかは知らぬが、御意討ちなどということは由来主君のわがままから出ることの方が多い。だから、昔の武道心得にも、御意討ちは主人当座の怒りから出ることだから、その場で討ち果たすならともかく、程経ては無用のことだと教えている。

「なるほど、あなたがたは物知らずだな」

「なにっ」

「たとえ御意討ちにもせよ、こんな町中で病人を三人で取りかこめば、事情を知らぬ者はあなたがたを無法な人殺しと見るのは当然だ。人殺しはたとえ他人のことでも心ある者なら黙視できぬ。一応はとめるのが人情だ、その仲人に対して、理由もいわず、姓名も名乗らず、御意討ちだからよけいな世話をやくな、引っこんでいろの一点張りでは、少しも話がわからんではないか。話がわからなければ、拙者はあなたがたを御意討ちを口実にしてこんな病人に私怨を晴らそうとする残酷な無法者と見る。それでもさしつかえないといわれるか」

「忠さん、しっかり」

うしろからうれしそうに声をかけたのはお梅だ。

「無礼な——。貴公はあくまでも御意討ちのじゃまをする気だな」

「当節は大名たりとも御意討ちはあまりはやらぬ。それを公衆の面前で、御意討ち、御意討ちと自慢そうにわめき立てるのは、主人の浅慮を世間へ披露するようなもので、あまり聞きいいものではない」

「許さぬ。刀を抜け」

勤番者は主人の悪口をいわれたとでも勘違いしたのだろう、いきりたってまたしても柄に手をかける。

「いやだ」

「なにっ」

「こんな町中で刀を抜いては人が迷惑する。わしはそんな場所知らずではない」

「かまやしないわ、忠さん。そんなわからず屋、やっつけちまいなさいよ」

お梅がだんだん前へ乗り出してくる。

「よし、柳原土手へ行け」

「承知した。時刻は今日の暮れ六ツ。それまでこの兄妹は拙者があずかる」

忠兵衛は先手を打った。

「ならん。今すぐ行け」

「貴公たち、藩の重役がたと相談してこなくてもいいのか」

「そんな必要はない」

「よろしい。それならいっしょに行こう。しばらく待ってくれ」

忠兵衛はくるりと踵をかえして兄妹のそばへ寄った。

「いずれ後ほどあらためてごあいさついたすが、あなたがたはたいへん難渋の御様子だ。お気の毒に存ずる。手前の住所はすぐ近くですからただいま案内させます。武士は相見互い、遠慮なくしばらく休息なさるがよろしい。——三吉うじ」

「おっと、だんな、合点だ。御浪宅へおつれ申せばいいんでしょう」

「ならん、ならん」

ふいに勤番者かそばからどなり出した。

「相原を見のがすことはならん。貴様といっしょにたたっ切ってやるから同行しろ」

「病人は歩けぬ。だから、わしがかわって相手をするのだ。わしの息のあるうちは指一本たりともこの兄妹にふれさせぬから、そのつもりでいてもらいたい」

「ならん。——うぬっ」

勤番者はよほどここで相原兄妹を取り逃がしては困る立場にいたのだろう、切羽詰まってついに意を決したらしく、いきなりだっと無法な抜き打ちをかけてきた。

「わあっ」

野次馬どもは仰天して、前の方からあわてふ

ためきながら人垣の輪をひろげる。

「忠さん――」

やられたと、そばにいたお梅が真っ青になって横っ飛びに金切り声をあげた時には、忠兵衛はひらりと白刃をかわし、空を切った敵がうろたえ気味に二の太刀を振りかぶった胸元へ風のごとく躍りこんで、目にもとまらぬあざやかな当て身だった。

「うっ」

勤番者は派手に大きくのけぞりながら、朽ち木倒しに引っくりかえっていく。

「やったな、うぬっ」

連れの二人が血相をかえて抜刀しようとするのを、

「お待ちなさい」

忠兵衛はしかるように手で制した。

「ここで刀を抜くと、勝っても負けてもあなたがたの主名が出る。それでもよいか」

はっと二人はためらったようだ。ためらうようでは、御意討ちを口にする方に無理がある。無理を承知しているから、なんでもかでもここで相原兄妹を切って口をふさいでしまいたかったのだろう。

「拙者は別に逃げもかくれもせぬ。浪宅はこの近く、馬喰町二丁目の堺屋源兵衛という者の長屋だ。ともかくも、この病人は一時わしがあずかってまいるから、あなたがたはその連れを介抱してひとまず屋敷へ引き取り、あらためて出直してはどうか」

二人もここで抜刀しては野次馬どもに憎まれているのはよくわかっているし、下手をすると切り死にをしなければならないと見たのだろう。

「よろしい。貴公の言葉にうそはないだろうな」

と、逃げ腰になった。

「疑わしければ、あなたがたのうちでどちらでも跡をつけてみてはどうか」

忠兵衛はあくまでも正々堂々と戦う腹だ。

はちあわせ

しかし、相原兄妹の事情をよく聞いてみないうちは、忠兵衛は一抹の不安がないでもなかった。こっちにそれだけの非があれば、理を非にまげてもというわけにはいかないから、せっかく家へつれて帰っても、けっきょくは藩の手に引きわたさなくてはならなくなるのだ。

「三吉うじ――」

勤番侍二人が仲間の介抱にかかったので、忠兵衛は三公を呼んだ。

「なんです、だんな」

「頭の家をしばらく借りたいがどうだろう」

忠兵衛がそれとなく耳もとへささやく。

「どうしてでござんす」

「わしの家はいま敵に明かした。万一、乱暴者に踏みこまれては、病人のためによくない」

「ちげえねえ。だんなは諸葛孔明さんみたいに計略があるからたのもしいや」

三公はあいかわらず講釈場の歴史をふりまわす。

「気の毒だが、貴公は病人を背負って一足先を歩いてくれ」

「合点だ。こいつも跡をつけられねえ計略のうちだね」

それを見破るおれもまんざらじゃねえでしょうというような得意の顔つきで、三公は病人のところへ飛んでいった。

相原という若侍は、どこが悪いのか、まったく生気のない顔をして、妹とお梅に両方からいま助け起こされたところだ。

「お武家さん、あっしの背中へお乗りなせえ」

「いや、歩けるから――」

「病気の時は、そんな遠慮はしねえもんでさ」

「そうよ。あなたこの人の背中をお借りなさいよ。忠さんがついていてくれるんだから、もうなんにも心配しなくたって大丈夫よ」

そばからお梅がすすめる。

三吉が病人を背負い、妹とお梅が両側について、こっちはさっさと歩き出したが、勤番組は気絶している仲間に活を入れ、まだしきりに介抱している最中だ。こっちの跡をつけるどころではないらしい。

横山町通りを緑橋の方へ歩いて、四つ角を右へ入れば馬喰町だが、三吉はさっさと左へ曲がった。

「あら、違いやしない」

お梅がいそいで注意したが、

「いいんだよ」

と、三吉は取りあわない。

「忠さん――」

お梅は少し後からついていく忠兵衛のところへ駆けもどってきた。

「あねご、心配しなくてもいいんだ」

「どうしてさ。あんたの家へつれていくんじゃないの」

「わしの家はあの侍たちに教えてしまった。あいう連中だから、もし取り返しにきて乱暴でも働くと病人が心配する。様子がわかるまで、ひとまず橘町の頭の家を借りることにしたんだ」

「なあんだ。あんた思ったより頭がいいのね」

「いや、お梅あねごほどじゃないな。下駄つぶてを投げて陣場をおどかすような知恵は、とてもわしには出ない」

疑わしそうにじろりと横目を使って、まんざらひやかされているのでもないようだとわかると、

「あたり前だわ。あたしは自分でも、どうしてこう知恵がまわるんだろうと、いつも感心しているんだもの」

と、ちょいと高慢ちきな顔をしてみせる。

「上へ悪の字がつくんじゃないかな」

「いったな、忠公」

どすんと体をぶつけてきたので、忠兵衛はいそいで腰の印籠をまもる。この女豹はいつどんないたずらをするかわからないからだ。

「でも、忠さん、男をあげてよかったわね」

「そんなに男があがったかね」

「あがったわ。見物がみんなとても強くて親切な浪人さんだってびっくりしてたわ」

「あれで間が抜けていなければもっといいんだがなっていってやしなかったかね」

「いいえ、その少し間の抜けたところがたまらなくいいんだ――って、ほめてた人があったわ」

「ふうむ。ずいぶん物好きなやつもあるもんだな」

「顔が見たい、そんなやつの」

「うむ」

「ほら、見せてあげよう。あたしよ」

ぐいと腕をつかんで立ち止まって、お梅が顔を突き出してみせる。明るい秋の日ざしに、紅も白粉もつけていないが、それはびちびちとみなぎるような若さをたたえた小娘ぶりである。

「ありがとう。お梅あねごになら、間抜けといわれても仕方がないな」

「おや、なぜさ」

さすがにぎくりと目を光らせたのは、昨日仲見世で忠兵衛の紙入れを抜いたことだけは気がひけるのだろう。

「まあ歩こう。おくれては三吉に申し訳がない」

「忠さん、あの相原さんとかの妹、少し田舎っぽいけれど、とても美人だと思わない？」

「そうだな。お梅あねごとどっちかな」

「うまくいってるわ。ほれると承知しないから」

器用な指が素早く並んでいる腕をつねってくる。

「乱暴をしちゃいけないな」

「あたしは忠さんの顔を売ってやった恩人なんですからね、しっかりしなくちゃだめよ」

この小娘は、なにをどう考えているのか、忠兵衛は苦笑しているよりしようがない。

まもなく常五郎頭の家の前だった。自分が病人をかつぎこませるのだから、あいさつは三吉にまかせておくわけにはいかない。

「たのうむ」
忠兵衛は一同を玄関外に待たせておいて、自分だけ土間へ入った。
「おや、紫さん、おいでなさいまし」
常五郎の女房のお勢がいそいで出てきて迎えた。
「頭は御在宅だろうか」
「あいにく出かけていますけれど、どうかなすったんですか」
お勢は目ざとく表の人たちの様子を見てとったようだ。
「実は、少し子細があって、三吉うじに病人を一人おぶってきてもらったのだが、一日二日御迷惑をかけるわけにはまいるまいか」
「さあ、どうぞ。頭が帰ってきてなんと申しますかはわかりませんが、御病人を外へはおけません。頭が帰りますまで、あたしがおあずかりいたします」
そこは仁俠が売り物の鳶の女房だから、てきぱきと話がわかりいい。
「御立派なごあいさつ痛み入る」
忠兵衛は心から感心してしまった。
「なんですねえ、他人行儀な。——三吉、こっちへ御案内しておくれ」
そういっているところへ、台所の方から意外にも小妻がいきおいよく走り出してきた。
「おっとっと、あぶねえ」
病人をおぶったままやっと上へあがったばかりの三公が、そのいきおいに驚いて身をよけようとする。三公一人なら痛烈な悪態が飛ぶところだろうが、病人をおぶって、しかも、そのうしろにつつましやかな妹までひかえているので、あわてて会釈をして身をひらいた。
「さあ、どうぞ——」
お勢がわらいをしのばせながら病人たちを座敷の方へ案内していく。
「忠さん、あんたは、あんたって人は——」
まだ土間に立っている忠兵衛の前へすりぬけた小妻は、いきなり胸倉をとらんばかりにして、その目のふちが真っ赤なのは、今まで兄嫁をつかまえてさんざん忠兵衛のうらみごとでもならべていたのだろうか。
「やあ、ねえさんか。いまお宅へ参上しようとして出かける道で、思わぬ珍事が出来たもんだから」
「いいからお上がりなさいってば。ここ他人の家じゃあないじゃありませんか。たのもうだなんて、水くさいってありゃしない。あんたがそんなに冷たい了見だから、あんな小娘なんかに——」
「えへん」
玄関の表でお梅がせき払いをした。
「あら、まあ——」
はじめて気がついた小妻がびっくりして棒立ちになる。
他人の家だから、黙って入っていいか悪いか、いまに忠兵衛がなんとか声をかけてくれるだろうと表で遠慮をしていたお梅だが、ここが小妻の兄の家だとわかると、いかにも悔しそうにあいた格子の前へぬっと立ちはだかった。
「やい、忠公、こっちをお向き」
まなじりを裂いて堂々たる悪たれぶりだ。
「どうした、お梅あねご」
「お世辞をつかうない。お前、男のくせに、よくもあたしをだましてこんな家へつれてきたね。ひきょう者」
「誤解をしてはいかん」
「ごかいも三階もあるもんか。後でおぼえてろ、忠公のばか野郎」
にーっと白い歯をむいてみせて、世にも悔しそうにさっと表通りの方へ駆け出していく。
「どうしたの、あんた」
その形相のすさまじさに、さすがの小妻も色を失ったようだ。
「あれは野性でね、困ったものだ」
なるほど、うっかりこんなところへ病人をつ

れこんだのは間違いだったかもしれぬ。お梅はお梅なりに、自分が見つけた病人だから、どこまでも自分が親切に看病の手伝いぐらい買って出るつもりでいたのだろう。

「あたしが顔を出して悪かったかしら」

小妻は小妻で、人前もなくはしたないまねをしたのがすまないと思うらしい。

「いや、まあいい。ともかくも上がらせてもらおう」

後のことは後のことだと、忠兵衛はもうこだわらない。

「さあ、どうぞ」

「小妻ねえさんは家からの帰りにすぐここへ寄ったのかね」

「ええ」

「泣いたようだな。目のふちが赤い」

顔を見てそっとわらうと、

「泣きました。泣かせる人があるんですもの、憎らしい」

忠兵衛はここでもまた二の腕をいやというほどつねられてしまった。

「紫さん、ちょっと」

お勢が奥から出てきて呼んだ。

「すぐ床をのべてあげたのですけれど、ちゃんとお座りになって、紫どのに御意得たいと、横におなりになりません。義理がたい方たちなのですね。すぐ行ってあげてくださいまし」

「お造作をかける。実は、まだ道で会ったばかりで、わしも姓名さえ聞いていないのだ。同藩の者に追われているくらいだから、なにか深い事情のある兄妹なのだろう。一応話を聞いてきた上で、あねごさんにはあらためてあいさつをいたす」

「そうしてあげてくださいまし。なんですか、お妹さんの方、いっぱい目に涙をおためになって、さぞ苦労なすっているんでしょうね。おかわいそうで見ていられません」

お勢はもう自分が涙ぐみそうになっている。

「ともかくも、ちょっと失礼」

忠兵衛は座を立って、奥座敷との間のふすまをあけた。

掛け合い

忠兵衛が常五郎の帰りを待って、あらためて二、三日の間だけ相原兄妹の世話をたのみこみ、快諾を得て橘町の家を辞したのはやがて夕方に近いころであった。

ただ困ったことには、相原兄妹は上州伊勢崎二万石、松平出雲守の家来で、病人の兄の方は千也といい年は二十一、妹の方は美保といって十七になる者だとまでは名乗ったが、どうして御意討ちというようなことになったか、その事情はどうかもうしばらく聞かないでくれという。

「危ない命を助けられた上、こんなお世話にまでなりながら、子細を隠すということは重々失礼と承知しています。拙者としてもまことに心苦しいのですが、家来として主家の恥辱はなんとも口にいたしかねます。ただ、私ども兄妹は決してうしろ暗いことをしてきたものではない、深い事情があって自分から主家を離れ、相州小田原藩の叔父をたよっていく途中の者だ。これだけを信用していただいて、勝手ながら、一両日の間おかくまいくだされば、この上のよろこびはございません」

兄の千也はそういってたのむのである。もしそれでは困るといえば、すぐにも兄妹で家を立つ覚悟があるから、病人は横にもならず、忠兵衛のあいさつを待っていたのだ。

武士の心がけとして、いうことも立派だし、筋道も立っている。

「よろしい、あなたがたを信用して引きうけますから、安心して病をお養いなさい」

兄妹を世話するということは、忠兵衛もはじめから異存はない。ただ、伊勢崎藩から照会があった時、事情を知らないと処置に窮するよう

なことはないかと、それがなんとなく気になるのだ。

——まあ、やむをえまい。照会がきたらきた時の話だ。

忠兵衛はそう腹をきめて常五郎頭の家を出た。同朋町へ帰る小妻がいっしょについて出て、

「だんだん日が短くなるのね。いやになっちまう」

と、自分が遊んでいたのを日のせいにしたそうな口ぶりである。

「小妻ねえさんは今朝家を出たっきりなんだろう」

「そうよ」

「そんなに家を空けていて、稼業にさわりはないかね」

「用があれば仕方ござんせん」

その用というのが、ならば一日中、忠兵衛のそばが離れたくない用なのだから、こんなことではいずれ稼業がなりたたなくなる日も遠くはなさそうだ。

「うちへ寄っていってくれる、忠さん」

「いや、今日は帰ってみよう。松平家からどんな話を持ちこんできているかわからないからね」

「それもそうね。なんだか因果のありそうな御兄妹——」

「君にも今日はとんだやっかいをかけてしまった。わしからも礼をいいます」

事実、小妻はなにくれとしきりに美保をなぐさめて、話し相手になっていた。それが他人の家で肩身を狭くしている苦労の多い娘に、どれだけ力になったかしれない。

「いやだな、そんな他人行儀」

すぐそこがもう横山町の四つ角で、二人の別れるところになる。

「あたしねえ、忠さん、後悔しているんです」

「なにをね」

「あのお梅という娘と、あたしもう決してけんかはしないつもりです。今日ははしたないまねをして、ごめんなさいね」

あの玄関先でお梅を怒らせたのが妙に気にかかるらしい。

「そうだな。ああいう娘は親切に飢えている、そこへ気がついたのはいいな」

ほめる時にはほめておこうと思う忠兵衛だ。

「でも、本当はあたしだって親切に飢えているんです。あんたって人は、ちっともそこへ気がついてくれないんだもの」

「なんだ。しっぺ返しか」

「ふ、ふ、いいんです。どんなにあんたが不親切でも、あたしはとても親切にしてあげる覚悟でいるんだから」

「どうもありがとう」

四つ角で二人は別れた。

忠兵衛がいちばん気になるのは、自分が親切で助けた相原兄妹を、事情やむをえなかったにもせよ、常五郎の家へ担ぎこんだことである。これは親切を人に押しつけるようなものだ。

——明日はさっそくこっちへ引きとることにしよう。

そんなことを考えながら、長屋へ帰ってきて玄関をあけると、

「だれ——？　忠さん」

茶の間からいきなり飛び出してきたのは意外にもお梅である。

「あら、お帰りなさいまし」

お梅は澄ました顔をして、おとなしやかにそこへ両手をつかえるのだ。

「やあ、留守番をしていてくれたのかね」

変なことでもいおうものなら、とたんにまた悪たれ出すにきまっているから、内心あっけにとられながらも、当たらずさわらずに出る。

「はあ、お夕飯の支度にまいっておりましたの」

「それはそれは御親切にどうもありがとう」

茶の間へあがってみると、ちゃんと火ばちに薬罐がかかって湯がたぎっている。お梅はさっ

そく茶器を取り出すのだ。
「留守にあの勤番さんの方からなんともいってこなかったろうか」
「どなたもおみえになりません。お茶を一つおあがりなさいまし」
「どうもありがとう。大変お行儀がいいんだな」
忠公おぼえてろと悪たれていた時から見るとまるで人が違って見えるのが、妙に不気味でさえある。
「ええ、これでもあたくしはもと公卿の娘でございます」
「おや、さっきは大名の落胤のように聞いていたが」
「はあ、両方まじっておりますの」
いけしゃあしゃあとしたものである。
「それで、本当は、わしをあやまらせにきたのかね」
「いいえ、あたしはここへお嫁にきてやったんです」
「それはよした方がいいな」
「よさないわ。あたしはもうちゃんと度胸をすえてきているんですからね」
そろそろこの女豹の目の色が変わってくる。
「お嫁さんになりたい女は、もっと恥ずかしそうにするもんだがな」
「話がきまったら恥ずかしそうにしてやるわ。ひとがせっかく男にしてやったのに、あの兄妹をあんな家へ連れこむなんて、あたしの顔は丸つぶれじゃないの。おまけに、あの小妻のやつ、いい気になりやがって、あんたの首っ玉へしがみつきやがって――」
「まさか、しがみつきはしなかったようだな」
「ほっとけばしがみつくにきまってるんだ。小妻もしゃくにさわるけれど、あんたはもっと憎らしい。あの家へ火をつけて二人とも焼き殺してやろうかと思ったんだけど、それじゃつまらない、いっそあんたのお嫁になって、小妻のやつをうんと悔しがらせてやった方がおもしろいと考えたんだわ。もしあんたがお嫁にしないというんなら、あたしはあの勤番者をけしかけて、あの兄妹を取りかえして、あんたの顔を丸つぶれにしてやるからいい。どうお、忠公、あたしをお嫁にするの、しないの、男ならはっきり返事をしてごらんよ」
大胆にも、真っ向から男をにらみすえて、堂堂と脅迫してくるのである。お梅としては、相原兄妹を小妻に引っかかりのある家へ担ぎこまれたのが、なんとも腹にすえかねるのだろう。つまり、根本はやきもちなのだ。
「人の家へむやみに火をつけては困るね」
「だから、あたしをお嫁にすればいいじゃないか」
「それはやめた方がいいな」
「どうしてさ、忠公」
「本当のことをいうと、わしはいまに首を返さなくてはならない人間なんだ」
「へえ、その首は借り物なのかえ。それにしちゃわりにぴったりくっついてるじゃないか」
お梅は、そんな手にのるものかといいたげな口ぶりだ。
「わしは敵を持っているんだ」
「ああ、敵討ちか、勇ましいんだね。あたしも助太刀をしてやるわ」
「いや、あんまり人に話してもらっては困るが、敵を討たれる方の男なのだ」
「へえ、どうしてさ」
「事情やむをえず人を切って国表を浪人したので、その身寄りの者が敵討ちに出てくればこの首をわたしてやらなければならない」
「返り討ちにしてやればいいじゃないか。あんたは自分が悪くて人が切れる男じゃない。とてもお人よしなんだもの、切られたやつの方が悪いにきまってるわ。つまらない遠慮なんかおよしよ。あたしが加勢してあげるから、そんなの返り討ちにしちまえばいいわ」
しごく簡単にきめてしまうお梅だ。

「わしを信用してくれてありがとう。しかし、ともかくも武士が人一人を切って自分が生きているということは許されないことなのだ。その時がくれば、わしはいさぎよく討たれてやるつもりでいる。だから、お嫁はいらないんだ。お梅あねごだけでなく、たとえ小妻ねえさんでも、お嫁はことわらなければならない男なんだ」

「それ、あの女にも話してあるの」

「いや、たぶん三吉にはちょいと話したことがあると思うが、よけいなことだからまだ小妻には話していない」

「ふうむ。じゃ、女でこの話知ってるのは、あたしだけなんだね」

「まあ、そういうことになるな。しかし、人に聞かれて決して自慢になる話ではないから、これはあねごの耳だけにとめておいてもらいたいと思う」

「あたしはそんなおしゃべりじゃないわ。あんたこそ自分の首があぶないくせに、そんなことべらべら人にしゃべる人がありますか」

お梅は大の男をたしなめるようににらんで、自分だけに秘密を打ち明けられたのがとてもうれしかったのだろう、どうやらごきげんがいくぶんなおってきたようだ。

「さあ、お夕飯にしてあげようか、忠さん」

うきうきと立ち上がった時、

「たのうむ」

玄関の格子ががらりとあいて、訪う声がした。

迎えの使者

「はあい」

お梅は妙にどきりとして、

「来たわよ、忠さん」

と小声でいったのは、あの勤番者が押しかけてきたとでも思ったのだろう、ねこのように足音も立てず素早く玄関へ忍びよって障子を細目にあける。

「なあんだ、亀公か」

「なにをっ」

そういう声はたしかに陣場亀十郎だ。

「貴様、またきているのか、あきれた雌犬だな」

「お前こそ二度も三度も忠さんになんの用があるのさ」

「ああ、そうそう、今日はお前などとけんかをしている暇はない。えへん——お女中、紫忠兵衛どのは御在宅かな」

雌犬が急にお女中に早変わりをして、陣場亀は気取った声を出す。

「はあ、兄さんは家にいますけど、あなたさまはどなたでございましょう」

これも忠さんが兄さんに変わったのは、もうお嫁の方はあきらめたのだろう。

「拙者は陣場亀十郎と申して、紫うじとは旧知の者、御在宅なれば御意を得たいとお取り次ぎを願いたい」

「ちょっとお待ちください」

澄まして茶の間へ引きかえしてきて、

「兄さん、陣場亀ってあんまり目つきのよくない野郎が九州から御意討ちにきたんですって。追っ払っちまいましょうか」

といいながら、べろりと赤い舌を出す。

「女がそんな乱暴な口をきいてはいかんな。お目にかかるから、お通ししなさい」

忠兵衛がわらいながらたしなめる。

「あの、陣場さま、お目にかかりますそうですから、どうぞお上がりくださいまし」

「しからばごめん」

わきで聞いているとどっちもどっちで、忠兵衛の常識では判断しかねる神経の持ち主のようだ。それにしても、今時分、陣場はなんの用があってきたのだろうと思っているうちに、ぬっと亀十郎が入ってきた。

「やあ、今朝ほどは失礼」

「もうけ口の帰りかね」

陣場亀の顔にどこか活気があるので、忠兵衛はそう取ったのだ。

「いや、今日は拙者、さる藩の使者として乗りこんできたんだ。ひとつぜひ拙者の顔を立ててくれ、たのむ」
「ふうむ。貴公の顔を立てると、いくらか貴公のもうけ口になるのかね」
「それをいっちゃいかん。事が卑しくなる」
渋い顔をしたのは、もうけを半分よこせと出られるのを警戒しているのだろう。
「しからば、その卑しくない方の話からうかがうとしよう」
「そうか、ありがたい。さる藩の御用人が、ぜひ貴公にお目にかかりたいと申してな、同朋町の料亭梅川で待っておられるのだ。すぐに拙者と同行してくれぬか」
「さる藩とは、どこの藩だね」
忠兵衛は伊勢崎藩だなと直感はしたが、どうして陣場亀が松平家などと関係があるのか、それがわかりかねる。
「藩名は御用人がお目にかかってから話すことになっているんだ。こんどだけは拙者の顔をぜひ立ててやってくれ」
「貴公は上州伊勢崎藩松平家とどんな関係があるんだね」
「なんだ、もう見抜いたのか」
亀十郎は一瞬ぽかんとした顔をしたが、
「そう見抜かれちゃしようがない。おれの古い友達が一人あそこに仕官しているんだ。それも今日何年ぶりで偶然にわかったんだが、正直にいうと、どうやらこれで拙者にも運が開けてきたらしい。その運をつかむも取り逃がすも、一つに貴公のこれからの出ようにかかっているんだ。とにかく、梅川へいっしょに出向いてくれぬか」
と、こんどは拝み倒しにかかる。
「貴公は今日の横山町での出来事を知っているのかね」
「そのことなんだ。そのことについて御用人がぜひ貴公に会って三人の無礼をわびたいといっているんだ」
「その三人の中に貴公の旧友が一人入っていたというわけか」
「そのとおりだ。あの三人がしょぼんと両国広小路へ出てきたところをわしが行きあって、まあ、その話は後でよろしい。向こうへ行って一杯やりながらゆっくり話すことにしよう」
「お茶をおあがりなさいまし」
台所からお梅が茶を入れてきて、神妙に陣場亀の前へすすめた。
「やあ、ありがとう」
「あの、お茶を召し上がったら、どうぞお引き取りくださいまし。兄はお人よしですから、あんまり悪いお友達と遊ばせたくございません」
「なんだと――」
「お帰りってば。忠さんをお前なんかの金もうけの道具に使われてたまるもんか。さっさと帰らないと、頭から水をぶっかけてやるぞ」
お梅は顔を真っ赤にして、いざといえば本当に水をぶっかけそうな形相だ。
「うぬ、きんちゃく切りのくせに――」
あまりの悪態に、これも血相をかえる陣場亀だ。
「待て、陣場、それを口にしない約束ではなかったのか」
いつになくずしりと重い忠兵衛の声音だ。
「いや、あまりにもこいつが」
「たとえどうあろうとも、男の約束ではないか。それを忘れるようでは、今後貴公は絶対に信用できんぞ」
「いや、わしが悪かった、あやまる、このとおりだ」
後に大きなもうけ口が控えているから、ここで忠兵衛にへそを曲げられては困ると考えたのだろう。陣場はけろりとしてそこへ大きな両手をつく。
「わしにではない。お梅にあやまってくれ」
「よろしい。お梅どの、まことに申し訳ござら

ん」

ぷんとお梅はそっぽを向いている。

「お梅ちゃん、ちょいと来い」

忠兵衛はお梅をうながして玄関の三畳へつれていった。

「君の怒るのはよくわかる。たしかにあの連中はなにかたくらんでいるんだ。それはわしにもわかっている。しかし、本当のことをいうと、相原兄妹は主家の恥になるからといって、自分からはわしらになにも話そうとしないのだ。その子細がわからなければ、わしらはあの兄妹をどうして助けてやればいいのか方法がつかぬ。だから、わしはこれから陣場といっしょに梅川に行って、先方の話を一応聞いてこようと思う。敵の手にのるのではない。相原兄妹を助けるために乗りこんでみるのだ。わかるかね」

両手を肩において、かんでふくめるように耳もとへ話してやると、お梅は体中を固くしながらこくりとうなずいた。

「では、わしは出かけるから、お梅ちゃんは夕飯をたべてゆっくり帰るがいい」

「いやだわ。あたし、また明日くる。さよなら」

お梅はするりと忠兵衛の手をすりぬけて玄関へ飛び出し、下駄を突っかけて、

「亀公、忠さんに変なまねをすると、きっとてめえの寝首をかいてやるから、おぼえてろ」

最後の悪態をたたきつけるなり、格子をあけて、しめて、風のようにからころとどぶ板をふみならし、路地の外へ走り去っていった。

「畜生、おれを木偶の棒あつかいにしてやがる」

茶の間へ引きかえすと、陣場がしようことなしに苦笑いをしている。

「まあ、我慢したまえ、これも金もうけのためだと思ってな」

「貴公、いっしょに行ってくれるだろうな」

「うむ。お梅の前へ両手までつかせた手前、ことわるわけにもいくまい」

「ありがたい。さっそく出かけよう。あそこのうなぎは久しぶりだからな」

急にひげ面をにこにこさせるあたり、この男も根は案外善良なのかもしれない。

御用人さま

忠兵衛はうっかりしていたが、陣場亀十郎とつれ立ってきてみると、同朋町の梅川というのは小妻の家のある路地の入り口の大きな料亭だった。

ちょうど宵の口をすぎたころで、この色街の横町はようやくにぎやかに浮き立ち、弦歌の声がわきたつように耳につく。

「どうだ、悪い気持ちはせんだろう」

陣場亀は昂然と胸を張って濶歩しながら、まるで自分がおごってくれるようなことをいった。

「うむ。この横町なら、もう二、三度きたことがある」

「ふうむ、さすがに貴公は大名浪人だな。では、百両足らずのうちだいぶつかいこんだな」

「いや、金などはつかわない。小妻の家に用があって通っただけだ」

「なあんだ。ただ道を歩くだけなら犬だって歩く。自慢にはならん。こういうところへきたら、思いきって金をつかって遊ぶもんだ。けちな遊びならせん方がいい」

陣場亀はいつも大尽遊びをしつけているような顔をして、鷹揚に梅川の門をくぐり、玄関へかかって、

「たのうむ」

と、気取った声を出した。

「はあい」

走り出してきた年増と若いのと二人の女中が、一目見るなりちょっと顔を見あわせて、

「あの、まことに申しかねますが、あいにく今日はお座敷がどこもふさがっていまして、せっかくのおいでをお気の毒さまでございますけれど、はあ」

と、年増の方が本当に気の毒そうな顔をした。
「けしからん女だ。さては、みどものみなりを見て、金がないとばかにするんだな」
「いいえ、とんでもございません」
「いや、それに相違ない。もっとも、拙者は今のところ金には縁のない方だが、連れのこの男は紀州浪人で紫忠兵衛といい、浪人はしていても千両箱をまくらにしている男だ。あんまり見損なうととんだ恥をかくぞ」
人のふんどしで大見得をきっている。
「まことに申し訳ございませんでございますが」
なんといっても海千山千の年増女は馬耳東風だ。
「しからば、なんと申しても我々をあげる座敷はないというのか」
「あいにく、どこもふさがっておりますんで」
「では聞くが、今夜当家に、上州伊勢崎藩の重役、染井森右衛門どのがまいっているはずだが、どうじゃ」
「はあ、染さまでしたらまいっております」
「その染さまに、陣場亀十郎が紫忠兵衛どのをつれてきたと取り次いでくれ」
「おやまあ、お人の悪い。しばらくお待ちくださいまし」
女中たちがびっくりしていそいで引っこんでいったところを見ると、染井という男は日ごろこの家でよほど羽振りをきかせている客なのだろう。
まもなく年増女中が引きかえしてきて、ただいまは失礼いたしました、どうぞお通りくださいましと、先に立って奥まった座敷へ案内してくれた。なるほど通る廊下のどこの座敷にも客があるらしく、芸者が入ってなかなか繁盛する家のようである。
「おお、これはこれはよくおいでくだされた。初めて御意を得ます。手前は松平出雲守家来、染井森右衛門です」

染井は四十年配の表面はいかにも柔和そうに見える人柄だが、切れ長の目が時々針のように光るあたり、どうも油断はできないらしい。
座に昼間の勤番侍のうちの一人だけが同席していて、これが陣場亀十郎の旧友だという男なのだろう。
「さきほどは失礼いたした。栗田武太夫です」
と、言葉すくなにあいさつをしていた。
「さあ、とにかくお近づきのしるしに一盞献じましょう」
染井は如才なくすぐに酒肴の膳を出させてから女をさがらせ、
「実は、陣場さんをわずらわせてここへあなたに御足労を願ったのは、今日横山町でのこの栗田ら三人の者が、同藩国もとの相原千也、妹美保の兄妹を取り押さえて帰ろうとするところへあなたが通りあわせ、いかにもこっちが乱暴に見えたのでしょう、仲へ入って、事情を聞こう、いや藩内のことだからその必要はないというようなうな言葉のあやから、それでは事情がわかるまで相原兄妹をあずかるといってけんか別れになった、かように聞きましてな、それはけしからんではないか、当藩が相原兄妹を取り押さえるのは取り押さえるだけの理由があってのことで、他人の口出しをうけることではない。それがこんなことになるのは、お手前らの致し方が悪いからだとしかってやりましたが、しかっただけですむことではありません。藩としては、ぜひ相原兄妹をおわたし願わなければならん、その辺の事情をなんとか御了解願いたいと存じましてな、失礼ながらお迎えを差し上げたようなわけです」
と切り出してきた。
「ただいまのお話はよくわかりました。むろん、事情さえ正しければ拙者は手をひきます。しかし、一言御訂正いたしておきたいのは、今日相原兄妹は横山町で取り押さえられようとしていたのではなく、三人の方に討ち取られようとして

いたのです。路傍で人殺しはおだやかでないので、見かねて仲裁に入りましたところ、御意討ちだから手をひけといわれる。当節御意討ちなどということは、領地うちならともかく、他領へ出ては通用しません。それゆえ事情をうかがったので、拙者はなにも好んで貴藩の内情にまで無用の口出しをしようとする者ではないのです」

忠兵衛は誤解のないように事実を説明しておいた。

「なるほど、なるほど――。それで、相原兄妹はあなたになにか事情を打ち明けていましたか」

なに食わぬ顔をして染井が聞く。

この質問は少しおかしい。自分の方に正しい理由があるなら、そんなことを聞く前に御意討ちの事情を明らかにするのが本当だ。こっちの話を先に聞き出そうというのは、それを聞いた上でうまくいいくるめようという下心があるからだと見たので、

「いや、子細あってまだ兄妹からはくわしいことは耳にしていません」

と、忠兵衛はあっさりかわした。

「なるほど、なるほど――。千也の方は病気だということですな」

「いくぶん旅の疲れが出ているのでしょうな」

「あの兄妹は、考えてみれば気の毒な身の上です」

「御意討ちの事情というのはどんなことなのです」

「それが、どうも困ったことでしてな、正直にいいますと御主君から御意討ちの内意はたしかにあったようです。というのは、殿には千也の妹美保にお目をつけられ、ぜひにと所望あそばされました。あいにく兄妹の実父が亡くなってからまだ半年にしかなりません。相原家は漢学の家柄で、千也がまたひどく堅い方の男です。父の忌中だからそういうお話はおうけいたしかねますと、きっぱりはねつけました。使者に立

った者が少し言葉をやわらげておけばよかったのでしょうが、ありのままお伝えしたので、殿もお若いものですから意地になられましてな、主命である、たって美保を差し出せ、その方は主命よりも父の忌の方が大切なのかと、重ねて詰問の使者を立てられた。千也も一徹だから、それならと妹をつれて脱藩してしまったのです。そこで栗田ら三人に御意討ちの御意が下ったという次第です」

「なるほど」

こんどは忠兵衛が一応なるほどという都合のいい言葉でうけておく。染井の方からなにか結論が出るはずだから。

「御意討ちを真っ正直におうけしている三人の者もあまり律儀すぎるが、脱藩の挙に出たのは千也の方も少し短気すぎました。当藩にも人がないわけではないのだから、一応相談してくれればよかったのです」

脱藩は重罪だ。事情によっては閉門ぐらいですむこともあるが、重ければ切腹、次第によっては討っ手を向けられても仕方がない。藩としてそのいずれを取るか、染井はまだ結論を出そうとしない。

あるいは忠兵衛の命請いを待っているようにも思えるが、忠兵衛はその必要をみとめないから意地悪く黙っている。

「どうだろうな、紫うじ」

遠慮なく独酌で杯を重ねていた陣場亀が、ほんのり目のふちを染めながらしたり顔に口を入れた。

「御用人さまは、事情が事情なので、決して相原兄妹の悪いようには計らわぬという御意見なのだ。また、御愛妾という仰せ出しも、人をもっておいさめ申し上げ、御沙汰やみということにできる。ただ、脱藩ということだけは、こう表沙汰になっては、藩の面目上、不問に付すことはできない。ここは相原兄妹の方から一度江戸屋敷の方へ出て、不心得をわびるという形を

とってもらいたい。その上で兄妹の身の立つように取り計らってやろうと、こういうお気持ちのようだ。——さっきのお話はさようでございましたな」

陣場が染井の方へ念を押すと、用人ははっきりとうなずいてみせた。

「御用人さまはまた、この藩の不面目を丸くおさめてくれさえすればその人に相当の恩がえしも考えられていられるそうだ。——そうでしたな、御用人さま」

御用人さまはまたしてもうなずいてみせる。

「どうだろうな、紫うじ、責任のある方というものは軽々しく口がきけない。まあ、そんなこともあるだろうと思って、橋渡し役のわしがこんなことをいい出したんだが、貴公の方にもむろんいろいろとまた御意見なり注文なりがあるだろう。わしがそれを聞くということにして、今夜ひとつざっくばらんに貴公の方の意見も出してみてくれぬか。つまり、どういう条件なら相原兄妹を藩の方へ渡してもいいか、御用人さまはそれが聞きたいとおっしゃるのだ。——さようでございましたな」

いちいち染井の同意をうながしながら、陣場亀は掛け合いごとも時々引きうけている経験があるのだろう、なかなか弁舌さわやかである。

「なるほど」

忠兵衛はまだなるほどの一方で、自分の意見を吐こうとしない。

「たのむ、紫うじ。わしはなにも今日の事件には関係のない男だが、貴公の返事次第で、ここにいる旧友栗田武太夫をはじめ、今日の三人は江戸のまんなかで藩の恥辱を世間にさらした責任者という件で切腹はまぬがれない、そう聞いたので、友達がいに橋渡し役を買って出たんだ。今日のところはひとつまげて陣場亀十郎の顔を立ててやってくれ。たのむ」

亀十郎は泣き落としの手もちゃんと心得ているようだ。

驚いたことには、その尾について同席の栗田武太夫まで、

「紫うじ、拙者は決して命を惜しむものではござらん。御意討ちなどと深い思慮もなく口走って、御主君の不面目を世間にさらしたのはまったく申し訳なきこと、なにとぞお忘れくださるよう、かくのとおり、かくのとおりお願いいたします」

と、そこへ両手をついた。これは本当に律儀者らしく、いまにも泣かんばかりの顔をしているのである。

恋路のじゃま

「事情はよくわかりました。まあ、手をあげてくれたまえ」

忠兵衛は静かに栗田にいった。

「そうか、そうか。では、武太夫の命を助けてくれるというんだな、ありがたい。貴公はやっぱり花も実もある武士だ。陣場亀十郎、旧友のために大いに感謝する。それで、貴公の方の条件はなんだ。遠慮なくいってみてくれ」

陣場亀がひとひざのり出してくる。

「しばらく中座させてもらいます」

忠兵衛は染井にことわってから、

「陣場うじ、ちょっと顔を貸してもらいたいな」

と、亀十郎をうながして立ち上がった。

「そうか、わかった。条件は御用人さまの前ではいいにくいというんだな。よかろう。——御用人さま、しばらく失礼します」

のこのことついてくる陣場亀だ。

忠兵衛はついに杯には口もふれなかった。苦い気持ちで元の廊下を玄関の方へ出てくる。

「おい、貴公、どこへ行くんだ」

途中で陣場亀はけげんな顔をして聞いたが、黙ってまっすぐ玄関までくると、いま一組みの客を送り出したらしい芸者や女中たちが笑いさざめきながら奥へ引きかえすところで、その中から、

「あら、忠さん、どうしたの」
と、水際立ったお座敷姿の小妻がすそをひいて、びっくりしたように忠兵衛の前へ立ちふさがった。
「やあ、小妻ねえさんか」
「あんたさっきから梅川さんへきていたんですか」
じっと疑わしそうな目をすえて、小妻は多少酔っているらしく、ほんのりと目のふちを桜いろに染めている。
「いや、いまきたばかりなんだが、このねえさんが今夜はどこも座敷がふさがっているというもんだから」
そこにさっきの年増の女中の顔が見えたので、つい冗談口が出た。
「さきほどは本当に申し訳ございませんでした」
年増女中はわらいながらあらためて頭をさげていた。
「どうしたのよう、忠さん。——あら、陣場の御前もいっしょなんですね」
「まあいい。お女中、わしの履物を出してくれぬか」
「おや、本当にお帰りになるんですか」
「おい、貴公、冗談いっちゃいかん」
陣場亀が顔色を変えて、ずいと前へ出てきた。
「話はまだ途中ではないか。なにが貴公そんなに気に入らないんだ。ここで貴公に帰られちゃ、わしの顔はまるつぶれだ。なあ、貴公、なにが気に入らんのだ。いってみてくれ。たのむ」
「陣場さん、気に入る気に入らぬではない、事はいやしくも人命にかかわる問題なのだ。一方口ばかりを信じて、わしが勝手に軽々しい返事はできないじゃないか。これから先方へ行って、先方の話もよく聞いた上で返事をするからと、貴公から御用人さまによろしくいっておいてくれたまえ」
忠兵衛はおだやかにいった。

「なるほど、それもそうだな。では、わしもいっしょに行こう。ちょっと御用人にことわってくるから、しばらく待っていてくれ。——おい、女中ども、この男を一人で帰しちゃいかんぞ」
陣場亀は走るように奥へ引きかえしていった。
「小妻ねえさんはまだ梅川さんにお座敷があるのか」
忠兵衛は、もうそばへぴったりとくっついて人前もなくたもとをつかんでいる小妻に聞いた。
「いいのよ、これからどこへ行くの、忠さん」
不安そうに、じっと顔色をうかがうような目だ。いまの陣場亀の様子と、忠兵衛の返事で、敏感な女だから、なにかぴんと頭へきたものがあるのだろう。
「用がないんなら、まあ外へ出よう。——お女中、じゃまをしたな」
忠兵衛は女中がそろえてくれた草履をはいた。
「すぐ出るから、待ってくださいね」
芸者は玄関からは出られない。小妻はいそいで内玄関の方へまわっていった。
先に外へ出て、門のところで待っていると、褄をとった小妻が下駄を鳴らして駆け出してきた。
「忠さん——」
なんとなく息をはずませている。

色香問答

「そんなにあわてなくてもいいのに」
忠兵衛は小妻の顔を見ながらわらった。
「だって、逃げられると大変だもの」
色街だからなんとなく人通りは絶えないが、小妻はもう遠慮なく遊んでいる右手でしっかりと忠兵衛のたもとをつかんでいる。
「いや、わしはそんな人の悪い男じゃない」
「そうかしら。だって、本当は逃げてきたんで

しょ。これからどこへ行く気なの」
「君の家がいちばん近いな。実は、わしはまだ夕飯前なんだ。寄ってもいいかね」
「なにいってるんですよう」
ぜひつれていきたい、なんといって引っぱっていこうかと思っていたところなので、小妻は自分の体で男を押しつけるようにさっさと路地口の方へ歩き出した。
「やあ、お待たせした。——なんだ、小妻ねえさんもいっしょか」
御用人さまにことわってきたのだろう、あたふたと梅川の門を飛び出してきた陣場亀十郎が、まるで好いた同士がでれついているとしか見えない二人のかっこうを見ていやな顔をした。
「この人がねえ、どうしてもうちへ寄っていってくれといって放さないんだ」
「もっともだ、おひざもとへきているんだからな、婦人の情としてもっともではあるが、それは明日の晩ということにしようじゃないか。今夜は男同士の大切な用がひかえているんだ。いやしくも人一人の、いや、二人の生死にかかわる重大問題なんだ。なあ、紫うじ、そうだろう。小妻ねえさんも、今夜のところはひとつぜひこの陣場亀十郎の男を立ててくれんか」
「陣場さん、お願いですから、婦人の恋路のじゃまだけはしないでくださいな」
「なにっ」
陣場亀はちょいと顔色をかえたが、小妻は男を引きつけてぴったり肩を並べ、振りかえろうともせず路地へ入っていくので、背中へ目をむいてみせたところではじまらない。
「おい、貴公、紫うじ、まさか貴公はわしに煮え湯をのませる気じゃあるまいな。わしはちゃんとあの仁と約束してきているんだ。今夜中には必ず返事をするとな。武士たる者の二枚舌は使えんから、貴公が約束を実行してくれんとなると、わしは腹を切らにゃならん。いや、わし

ばかりではすまんのだ。おい、紫うじ、本当だぞ。わしが腹切れば、旧友栗田武太夫も生きてはいられない、これも必ず腹を切る。そうなった暁は、やむをえん、陣場亀十郎も男だ、黙ってはいられないから、刀にかけても貴公にあいさつをせにゃならん。そうだろう、紫うじ」
陣場亀はのこのこと二人の後を追いながらその背中へしきりと説き立て、あるいは嘆き、あるいは訴え、多少は脅迫がましいことも口にし出す。
「ねえ、あんた、陣場さんが刀を抜いたらどうする。あたしなんだか怖くなったわ」
「いや、陣場うじはそんなもののわからない男ではない。すいも甘いもちゃんと心得ている仁だ」
忠兵衛は一向本気にしないようだ。
「おい、貴公、紫うじ、どうしても貴公はわしをこけにする気か。陣場亀十郎が本当に怒ってもいいというのか。聞こうじゃないか。人間には我慢の緒が切れるということがあるぞ」
亀十郎がたまりかねてどすんと一つじだんだを踏んだ時、
「貴公、なにをそう一人で憤慨しているんだね」
と、ふいに忠兵衛が立ち止まって振りかえった。
ぎょっとなった陣場は、あわてて飛びのくなり刀の柄に手をかける。自分がさんざん勇ましい悪態たたいた後だから、抜き打ちでもかけられるかと思ったのだろう。
「あは、は、勇ましいな、陣場さん。わしはここへ寄っていくから、御用人さんによろしく」
そこがもう小妻の家の前で、忠兵衛はわらいながら丁寧におじぎをした。
「なんだ、ここが小妻の、いや、小妻ねえさんのうちか」
ぽかんとした亀十郎は、照れくさそうにいそいで刀の手を放ち、
「ええ、ここがあたしのうちなんです。どうぞ

お出花でもひとつと申し上げたいんですけれど、陣場さんはおいそがしいんでしょう。わざとお引きとめはいたしません。お休みなさいまし」

小妻が澄まして別れのあいさつをする。

「大きなお世話だ」

陣場亀はぷっとふくれて、

「おい、紫うじ、貴公それでは約束が違いはせんか。貴公は相原兄妹のところへ行くといって中座したはずだぞ」

と、目の色をかえて食ってかかってきた。

「それは、むろん行く。先方へも今夜の話を伝えておかなくてはならないからね」

「しからば、その方を先にしてはどうか。武士たるものがいったん人と約束をかわしておきながら、中途で婦女子の色香に迷い寄り道をするなどということは見苦しい。はなはだ恥ずべきことだぞ」

「まあよろしい。わしは一度貴公の顔を立てて染井さんの話を聞きに出向いている。それで貴公の顔は立ったはずだ。わしがその話に返事をするしないは、染井さんに誠意があるかないかできまることで、帰ってそういえば、よくものわかる染井さんのことだから、すぐに話は通じると思う。たいへん失礼した。染井さんによろしくといってくれたまえ」

忠兵衛は頭から相手になろうとしない。

「それは貴公の誤解だ。だから、あの仁はどんな条件でも聞こうと、はじめから貴公に申し出ているではないか。少しも誠意がないものなら、条件をいれようなどといいだすはずがない。貴公はあの仁に難癖をつける気か」

「いや、そんな条件などというものを持ち出すのからしてすでにおかしい。そんなものは持ち出さなくても、先方はこっちの条件をちゃんと知っているはずなんだ。まあ帰ってあの仁に聞いてみたまえ」

「そうかなあ。本当か、おい」

陣場亀はまだ納得がいかないらしく、疑わしそうに忠兵衛の顔を見ていたが、

「それなら聞くが、貴公は一体相原兄妹を返す気なのか、返さない腹なのか」

と、またしても頭の悪いことをいい出す。

「むろん、先方にそれだけの誠意があればわしはいつでも手を引く」

「その誠意とはどうすればいいんだ」

「そんなことは君が心配しなくても、先方がちゃんと心得ている」

「よし、それではわしはちょいと帰ってあの仁に聞いてくる。それまで貴公ここで待っていてくれ。いいか、逃げると承知せんぞ」

忠兵衛はわらっていて取りあおうとしない。

「もし、陣場の兄さん」

小妻がそばから呼びとめて、

「一言おことわりしておきますがね、この人が婦女子の色香に迷ってここへ寄り道をしたんではなくて、婦女子の方のあたしが前からこの人の男前にほれこんでいて、今夜は無理にここへ引っぱってきたんですから。そこんとこを変に間違えて、あんまりこの人のことを悪くいわないでくださいまし。たのみましたよ」

と、一本きめつけておく。

「大きなお世話だ。勝手にしろ」

中っ腹の陣場亀は吐き出すようにいって、どぶ板を踏みならしながら帰っていく。

敵の腹

「ねえ、一体どうしたっていうんです」

ありあわせでいいというから、大いそぎで下地っ子に膳の支度をさせながら、小妻はあらためて心配そうな顔をした。

「いま、伊勢崎藩の用人という男が陣場を使いによこしてね、相原兄妹のことで会いたいというから梅川へ出向いてみたんだが、要するに兄妹を藩の方へ引きわたしてくれというだけで、少しも誠意がない。だから、黙って中座してき

忠兵衛は実に苦々しい気持ちだった。

「なんだってまた、あんな陣場亀なんかをあんたのところへ使いによこしたんでしょう」

小妻は陣場をけいべつしているから不平そうにそういう。

「今日、横山町で兄妹を切ろうとした勤番者の中に陣場の旧友がいて、陣場はああいう事件屋だから、いいもうけ口を見つけたつもりで、自分の方から橋渡しを買って出たんだろう」

「ばかにしてるね、だれがあんなやつの口車になんか乗るもんですか。だめよ、あんただまされちゃ」

「わしはこれで案外利口だから、めったにだましにはのらないさ」

「でも、きんちゃく切りがすった金まで立て替えさせられたりすることがあるんだもの、あんまり人がよすぎて心配だわ」

その心配で小妻はふっと思い出した。

「ねえ、あんたその御用人さんに盾をついて、たというわけなんだ」

「じゃ、相原さんたちを引き取って切ってしまう気なんですか」

「どうもそうなりそうだね。妹さんの方が殿さまのいうことを聞いて御愛妾を納得すれば無事におさまるだろうが、そうはいくまい」

「殿さまがお美保さんを御愛妾に出せっていうの」

「事の起こりはそうらしい。なぜ御愛妾をきらったかは、兄妹に会って聞いてみないと真相はわからないが、とにかく兄妹はそれをことわって脱藩したんだ。そこで御意討ちということになったんだな」

「ずいぶん勝手な殿さまなんですね」

「殿さまなどというものはたいていわがままなものだが、家来の中に人物がいないのか、あるいは特に殿さまのごきげんを取りたい腹黒いやつでもいるのか、ねらわれた兄妹こそいい災難だ」

こんどはあんたがねらわれるようなことはないかしら」

「それは、むろんねらわれるだろうな。藩としても意地があるから、どうしても相原兄妹を取りもどしたいだろうしね」

「どうする、あんた」

「あくまでも相原兄妹の身の立つようにしてやるつもりだ」

「それはそうだけれど、あんたを切りにくるようなことはないかしら」

「切られないから大丈夫だよ」

忠兵衛はそうあっさりと答えておいたが、しかし、自分が切る切られるより、相原兄妹をかつぎこまれている常五郎頭に迷惑がかかっては気の毒だと、その方が心配になった。いちばんいいのは、だれにも間違いのないうちに早く相原兄妹を小田原へ送っていってやることだと思う。

それはそれ、これはこれと、小妻が世話女房気取りでいそいそと給仕をしてくれる夜食がすんでも、あれほど意気ごんでいた陣場亀はまだ顔を見せなかった。もっとも、染井の方に誠意がないかぎり陣場亀が顔を出せないのは当然なことで、おそらく来ないだろうとはじめからわかっていた忠兵衛だ。

そして、陣場亀が橋渡しをあきらめたということは、敵がいよいよ挑戦してきたということになるのである。

「今晩は、——ねえさん、お座敷でござんす」

玄関の格子があいて、箱屋が威勢よく知らせてきた。

「あら、どこなの」

「梅川さんでござんす」

「困っちまったなあ、あたし」

行きたくないから、小妻はちらっと忠兵衛の顔を見る。

「稼業をおろそかにしてはいけないねえ」

忠兵衛がたしなめるようにいう。

「おろそかにするわけじゃないんだけど、梅川さんならさっき断ってきたんだもの」

せっかくいいところでつかまえた忠兵衛だから、今夜は放すまいと、小妻は後の座敷をみんなことわってきているのだ。

「まあ行ってごらん。ことによると染さまの座敷かもしれない」

忠兵衛は玄関へきこえないように小声でいってにっと目でわらった。

「だれさ、染さまって」

「伊勢崎藩の江戸用人、染井森右衛門どのだ。たぶん陣場亀の入れ知恵じゃないかと思う」

「いやだなあ。あたしを呼んでどうしようっていうのかしら」

小妻の目がいやでもなさそうにきいきいと輝いてきた。忠さんのためになることなら、どんな役にも立ちたいという女の心中立てがあるのだろう。

「さあ、小妻ねえさんの力を借りて、もう一度わしをだまそうとする魂胆か、それとも例の兄妹のことを聞き出そうという気か、とにかく行ってごらん。おもしろい芝居が見られるかもしれぬ」

「あんた、あたしが帰ってくるまで待っていてくれる？」

「いや、わしは橋町へ寄ってみる。そこまでいっしょに出よう。——君、お世話になったな。ごちそうさま」

忠兵衛は台所へ遠慮している下地っ子に声をかけて気軽に立ち上がった。

「あんたはなんかっていうとすぐ逃げ出す気になるんだから、いやんなっちまうな」

お座敷着のままでいた小妻だから、あらためて支度をする世話はなく、そんならみごとをいいながらいそいで立って背中へまつわりついてくる。

「ああ、そうだ」

忠兵衛は急にそっちへふりかえって、その小妻の肩をおさえ、

「今夜は君は橋町へこない方がいいよ。跡をつけられると面倒なことになるからね」

と、素早く耳もとへ注意しておいた。

「憎らしい」

いきなり小妻がその腕をつねったのは、せめて抱いてくれるのかと思って胸がどきりとしたのに、どきりとしただけ損をして、がっかりしたからだった。

送りおおかみ

梅川の門の前で小妻に別れた忠兵衛は、同朋町の横町を出て、もうひっそりと暗い両国広小路を横切った。秋の夜風が肌にひえびえとする。

横山町の通りへ入ってから、うしろへ耳を澄ましていると、別にはっきりと足音がきこえるわけではないが、妙に人の気配を感じるのだ。

——気のせいかな。

そうは思ったが、あり得ることなのだから、今夜は橋町へは寄らない方がいいと考えなおした。

そう腹がきまれば、たとえだれに跡をつけられても、つけさせておくだけのことだ。

——陣場はどういうことになったかな。

金でだれにも犬馬の労を取りたがる男だから、橋渡しの役がむだに終わっても、まだなんとかかんとか染井のごきげんをとっているのではなかろうか。一度見こんだ金づるだから、見切るのは惜しい。そうなれば、いきおいこっちを敵にまわすほかはないのだ。

たとえば陣場亀がどっちへまわろうと、忠兵衛としては別に怖くもなんともないが、陣場亀のために気の毒だと思う。染井という男は利用するだけ人を利用しておいて、決してそれだけの代償を払ってくれるような甘い男ではなさそうだからだ。さんざん小判を鼻の先へ見せびらかせておいて、いざとなると知らん顔をして、それをふところへしまいこめるこずるさを持っ

ている男だ。

——さすがの陣場も、いまにきっとあきれかえって逃げ出すことになるんだがな。

その時の顔を考えると、いまから忠兵衛はおかしくなる。

いや、陣場の方はただおかしいですませもするが、すませないのは相原兄妹の方だ。ああいう冷酷な悪用人にねらわれると、自分の都合しだいで人の命など虫けらほどにも考えていないから怖い。しかも、直接自分が手を下すのではなく、いつも人を利用して罪をおかさせ、自分は高見の見物をしているというずるいやり方なのだ。

——一日も早く兄妹を小田原へ送ってやることだ。

左へ曲がれば橘町、右へ折れれば馬喰町へ出る四つ角へかかってきた。さほど夜更けというわけではないが、どこも大戸をおろして人通りはほとんどない。忠兵衛は四つ角を右へ曲がった。二足、三足、

「あぶないっ」

どこかでそんな金切り声がしたとたん、

「えいっ」

うしろから突然、袈裟がけに切りつけてきたやつがある。とっさに体を左へひらくと、もう大した腕の立つやつではないらしく、その前へ空を切って白刃がのめるように体ごと流れてきた。

素早くその利き腕を取って押さえつけ、

「不意打ちは乱暴だぞ。君一人か」

と、忠兵衛は静かにいいながらあたりを見まわした。ほかに仲間はいないらしく、頭巾で顔をかくしている刺客は、かなわないと見たか、たちまち闘志を失って全身から力を抜いてしまった。

「帰りたまえ。君の意志から出たことじゃなさそうだ。男は悪人の道具などになるものではない」

忠兵衛は刺客を突っ放してさっさと歩き出した。頭巾をはがなくても、相手は陣場の旧友栗田武夫と読めている。

刺客はぼうぜんと立ってこっちを見送っているようだ。

馬喰町の角へ出て左へ折れると、

「兄さん、——忠兄さん」

ばたばたとお梅が追いかけてきた。

「やあ、ただいまはあやういところを御助勢ありがとう」

今の金切り声はたぶんお梅だろうと忠兵衛は見ていたのだ。

朝の道行き

翌朝、忠兵衛は起きぬけに橘町をたずねることにした。

伊勢崎藩でどうしても相原兄妹の命をねらうとすれば、いつまでも江戸においては危険だ。すでに金で動く陣場亀十郎がむこうへ買収されている。いつ橘町をかぎつけないとはかぎらないし、お梅にしてもああいう気まぐれな小娘だから、どんなことでひょいと寝返りをうつようになるか、まったく油断はできないのである。昨夜も小妻と別れての帰りをちゃんとつけていて、染井の刺客が切りつけたとたん、あぶないといって加勢していた。お梅だなと思いながら、かまわず歩いてくると、追いかけてきて、

「兄さん、さっき声をかけたの、あたしだとわかっていたんですか」

と、妙にからんでくるような目をする。

「うむ、お梅ちゃんでなければ、あんなとき女ではなかなか声など出ないもんだ。さすがだねえ」

あたらずさわらずにほめておくと、

「ふうんだ。うまいこといってるわ。あたしだとわかっていたんなら、なぜ兄さん待っていてくれなかったんです」

かまわずに来てしまったことにへそを曲げているのだ。

「ああ、そうか。それは気のつかんことをして悪かった」
「薄情ってありゃしない。あの甘ったれ芸者にはいつもとても御親切なくせに」
どすんと肩をぶつけてきながら、この十六娘は小妻を恋がたきにして一歩もひけは取りたくないらしい。
「でも、兄さんは本当にお強いのね。あたし感心しちまったわ」
「いや、相手の方が弱いんだ」
「あたしもたぶん兄さんの方が強いだろうと思ったから、あの野郎のつけているのははじめから知っていたんだけど、わざと黙っていたのよ。ずいぶん薄情でしょ」
「一体、お梅ちゃんはどこからつけてきたんだえ」
「広小路からよ。本当はね、兄さんが知らずに橘町の方へ曲がるようなら教えてやろうと思っていたんです。まさか、あの野郎が切りつけるとは思わなかった」
「どうもありがとう。おかげで助かった」
さすがに相原兄妹のことは心配していて、自分の帰りを待っていたのだろう。
「この分じゃ、兄さん、御用人さんとうまく話がつかなかったようね」
「うむ、だめだった」
「先方には誠意ってやつがちっともなかったんでしょ」
「そのとおりなんだ」
「だめよ、あんただまされちゃ」
「うむ、だまされないようにするよ」
「どうだかなあ。あんたはきんちゃく切り娘がすった金まで立て替えさせられるお人よしなんだもの、あたし心配だわ」
おやと忠兵衛は思った。いま別れてきた小妻とおなじせりふのようである。
「なぜ黙ってるのよう、忠さん。その時、あんた、いや、相原兄妹のことだけはきっとひきうけるって、あの甘ったれ芸者には御親切に返事をしてやっていたじゃありませんか。どうしてあたしにはそう御不親切なのよう」
「おどろいたなあ。見ていたのかね」
それにしても、どこからお梅は小妻の家の茶の間をのぞいていたのだろうと、忠兵衛はなんともふしぎである。
「ふ、ふ、どんなところを見せつけられたって、あたしはもうやきもちなんかやかないから大丈夫よ。兄さんは敵を討たれる方だから、決して一生おかみさんは持たないってあたしに約束したんですものね。そうでしょ、兄さん、あれはまさかうそじゃありませんね」
際どいところでとどめをさしてくるお梅だ。
「うむ、わしはうそはいわないよ、男だからね」
「だから、あたし、あの小妻ねえさんがとてもお気の毒でたまらないのよ。そんなことはちっとも知らないで、もうすっかり兄さんのおかみさんになったつもりで、人前もなにもおかまいなしでべたべたと甘ったれているんだもの、見ちゃいられやしない。さっきも、あんたはなにかっていうと逃げ出したがるんだからいやんなっちまうなだってさ。こっちの方がよっぽどいやんなっちまうわ。ああ、兄さん」
急にお梅が立ち止まった。ちょうど長屋へ入ろうとする堺屋の手前の路地口である。
もう夜更けだから、どこも大戸がおりて、むろん人っ子一人通ってはいない。
「どうしたんだね」
「この手をちょいとここへかけるのよ」
忠兵衛の右手を取って向かいあった自分の肩へかけさせ、
「あんた、こうやって、さっきはあの女にこちょこちょとなにか耳こすりしたでしょ。なんていっていたの」
小妻と別れ際の時のことをいうらしい。
「しっかりかせぎなさいといっただけだ」
「まあ、憎らしい」

その腕を小妻がやったとおりのしなを作って思いきりつねっておいて、

「ああ、これでさっぱりした。——じゃ、兄さん、おやすみなさい」

にっとわらったお梅は、風のように元きた道へ駆けだしていく。忠兵衛はまったくあっけにとられてしまった。

そういう負けずぎらいだから、一つ間違うと小妻に対する反感からどんなまねをするか、決して安心はできないのだ。

それに、常五郎頭にしてもいつまで病人を家へおかれては迷惑だろうし、世話になっている相原兄妹の方でも気兼ねに違いない。けっきょく、いちばんいいのは一日も早く小田原へ送ってやるのが本当の親切だと、忠兵衛はいよいよ思案をきめたのである。

秋は一日ごとに深まって、朝はもう水霜がおりる季節になっていた。長屋中はようやく朝の支度にかかったところで、

「おや、先生、もうお出かけですか」

と、井戸端へ水くみに出ていた女房たちはびっくりして顔を見合わせていたが、

「ちょっと出かけてまいる」

忠兵衛はにっこりとわらっただけで、さっさと路地を出た。

まさかこんな早朝から陣場が押しかけてくるとは考えられないが、ひょっとすると昨日のことがあるから、負けん気のお梅が飯ごしらえにやってくるかもしれない。つかまらないうちにと忠兵衛は用心したのだ。

「あら、——」

表通りへ出ようとすると、小走りに路地口へ駆けこんできた小妻とぱったり顔が合ってしまった。

「やあ、お早う」

「こんなに早くどこへ行くんですよう、あんたは」

小妻は目をみはりながらたちまち血相を変え

そうにする。胸倉を取られてからでは間にあわないから、

「頭のところへ行くんだ。まあ、歩きながら話そう」

と、忠兵衛はあっさりかわして歩き出す。

「それならいいけれど——」

「君もまた今朝はばかに早いんだな」

「あのお梅って子に負けるの、あたしいやなんだもの」

これもまたいい年をしてそんな子供みたいな意地を張っている。

「あんまりつまらん意地は張るもんじゃないよ」

「そうはいきません。お長屋中がちゃんと知っているのに、あの娘が御飯ごしらえしているところへでもあたしが行ってすごすごと追いかえされたら、それこそいい物笑いじゃありませんか」

むしろ、こんなに早くからわざわざ御飯ごしらえに押しかけてくる物好きの方を長屋中がわらうだろうなどとは、少しも考えていないようである。

「でも、よかったわ。いよいよあたしがうるさくなって、こんな朝っぱらから逃げ出すのかと、あたしひやりとしちまった。やっぱり、ほれた弱みなんですね」

表通りはこれから店の大戸をあけようとするところもあり、いまあけかけているところもあって、ちらほらとすれ違っていく朝の早い職人などがみんなこっちの二人づれを目でひやかして通る。

それほど人目につきやすい水ぎわ立った女が、平気でほれた弱みを体中にたぎらせて並んで歩くのだから、なんともしようがない。

「ゆうべの梅川は伊勢崎さんじゃなかったのかね」

忠兵衛は思い出して聞いてみた。

「ああ、会ったらすぐその話をしようと思って

いたのに、あんたがあんなところでおどかすから悪いんだわ」
「なんでもわしのせいにするんだな」
「だって、そうじゃありませんか。あんたがうちへいっしょになってくれさえすれば、あたしだってこんなに気をもまずにすむのに、どうしてあんたはそう強情なのかしら」
「まあ、伊勢崎さんの話の方から先にうかがいたいな」
「意地わる」
とうとうひじでわき腹をいやというほど小突かれてしまった。こんなところをお梅に見られたらそれこそただではすむまいと、忠兵衛は内心気が気ではない。

正しい道

「染井とかいう御用人さまはいやなやつですねえ」
「うん、あんまり人好きのする方ではないようだな」
「あたしが行った時は陣場亀と二人きりでしたけど、御用人さまはお高くとまっていて、ろくに口もきかないんです。陣場亀が一人で、あたしをおだてたり、おどかしたり、おかしかったわ。つまり、あたしに兄妹の居どころを聞き出してくれっていうんです。むしろ、兄妹も悪いようにはしないし、骨を折ってくれたらあたしには所帯を持つ金を出してやろう。忠兵衛うじがここであまり強情を張るとしまいにはいいことにならないなんて口をすべらすんです」
「まあ、そんなところだろうな」
「あたし意地悪く聞いてやったわ。陣場さん、いいことにならないってどんなことなんでございます。あの人に会って話しようもありますから、念のために聞かせておいてくださいましって。——いや、いいことにならないとは損をすることだ。場合によっては、命まで損をするようにならないともかぎらない、それではおたがいにつまらんでなんて、いやに気取った風にいうから、お怖い、平ったくいえば、いうことをきかなければあの人を殺すってことなんですね、ようくわかりました、いずれ相談して、御返事は明晩にもいたしますって、あたしぷいと帰ってきてしまったんです」
小妻のことだからさぞずけずけとやってきたのだろうと思うと、忠兵衛はなんだかおかしくなる。
「もう一人栗田という男が、わしの時は同席していたが、なにかその男の話は出なかったかね」
「ええ、別に出なかったわ」
実はその男に昨夜あやうく命を損させられそこなっているが、むだに心配させることもないと思ったので、小妻にはいわずにおいた。
橘町の家へ着くと、ちょうど常五郎頭は女房のお勢と朝茶をのんでいるところであった。
「おや、おそろいで今朝はまたおむつまじく、たいそうお早いんですね」
と、お勢はびっくりしたように顔色を見ていた。それはまた、さては昨夜とうとうれしい仲になったのかしらといいたげないたずらっぽい目つきでもある。
「違うのよ、ねえさん。この人がなかなかそんなことになんかなってくれるもんですか」
気の早い小妻は、ついうらめしそうに自分からいってしまって、
「あたしは、小妻ちゃん、まだなんにもいっちゃいませんけどね」
と、お勢に軽くわらわれて、
「いやだなあ、どうしてあたしってこう一人でのぼせているんだろう」
と、さすがに照れて真っ赤になっていた。
「いいえ、一人でのぼせてやきもきしているうちが花なんですよ。所帯の苦労をするようになっちゃ色恋ももうおしまい。ねえ、紫さん」
すかさずなぐさめるようにいって、そこはお勢も如才がない。

「とんだ御心配をかけて、はなはだ申し訳がない。いずれ後ほどごあいさついたすから」
忠兵衛はなんともつかず常五郎夫婦にそんなあいさつをしておいて、すぐに相原兄妹の病間を見舞った。
「具合いはどうですな」
「いろいろお世話になります」
声を聞いてすでに床の上へ起きなおっていた千也は、ていねいに会釈をして、
「おかげで今朝はだいぶ痛みもうすらぎ、この分ではもう歩けそうだと妹にも話していたところです」
と、まんざらやせ我慢でもなさそうな明るい顔つきである。
千也のは持病の足痛で、それが起こると手当のしようがないかわりに、時がくるとうそのようにけろりと痛みがなおるのだという。
「それはなによりだ。さっそくだが、実はゆうべ伊勢崎藩の用人染井森右衛門という者に会いましてな。御存じだろうな、染井という男は」
「よく存じています」
千也の顔にちらっと不快な色がうかんだのは、やっぱり相いれぬ敵同士の仲なのだろう。
「染井がいうには、けっして悪いようにはせぬから、ぜひ一度あなたがた御兄妹を藩の方へわたしてくれという。拙者の目から見ると、先方に少しも誠意がないようだ。ということは、正直にいうと、あくまでもあなたがたの命をねらう気だということです。原因は妹御にあるようですな」
「はい。森右衛門がお耳に入れたのなら申し上げますが、これには新村半之丞という親同士がきめた許婚がおりました。主君におもねる一派は、ぜひこれを殿にゆずれと強要して、半之丞に詰め腹を切らせているのです」
千也の顔に悲憤の色がうかぶ。妹美保はじっとうなだれてしまった。
「拙者は人間として、そういう人道に外れた藩

の祿を食んでいることはいさぎよしとしません。拙者に力があれば、むしろそういう佞臣を討ち果たすのが本当でしょうが、その力がないので身をひきました。拙者は自分の力を悲しみます」
「いや、あなたの取った道は正しい。人にはそれぞれ持って生まれた分というものがあるのだから、あなたがどうしても自分の手で佞臣を切らなければならんということはないのだ。敢然と正しい道を踏むということは、佞臣を切ることよりもっと勇気のいることだ。よろしい、及ばずながらお力になりましょう」
先方にそういう非道がある以上、もう一歩もひけないと、忠兵衛はあらたな義憤を感じ、この兄妹の命をねらう者は断じて許すまいとわが心にかたく誓うのであった。

ごろんぼ剣客

千也の足痛は幸いだいぶいいようだし、一度ねらわれたとなると江戸にいるのは危ない。ともかくも、もう一日だけ様子を見て、病人は通し駕籠で明日の朝にでも兄妹を小田原まで送っていこうと話がきまり、朝飯をちそうになって忠兵衛が常五郎頭の家を出たのはかれこれ五ツ半（九時）ごろであった。
「兄妹とも泣いていたわ、忠さん。よっぽどうれしかったんですね」
いっしょに出て肩を並べながら、小妻は自分も涙にしめったような声を出す。
「不幸な時は、少しの人の親切でも身にしみるもんなんだな」
「それもありますけど、小田原まであんたがいっしょに行ってくれるってのがとても心丈夫なんだと思うわ。忠さんなら、道中でなにが起こっても安心していられますからね」
「いや、それほどでもないんだ。わしはあいにく少しお人よしすぎるんでね」
昨夜の小妻の言葉を借りてちょいと謙遜した

つもりだったが、
「本当は、あたし、それを心配しているんです」
と、小妻はいやに言葉に力を入れてきた。
「そりゃ、あんたって人は一度刀を抜けば岩見重太郎のように強い人なんだけれど、情にもろいってのか、人に涙なんぞ見せられると、ちょろりとだまされてしまうんです。道中にはごまのはえだのまくらさがしだのってのがうようよしているんですからね。とてもあたし、あんた一人じゃ安心して出せません。明日はあたしもいっしょについていくことにしますから、そのつもりでいてもらいます」
ああ、それが目的だったのかと、忠兵衛は思わず苦笑しながら、
「いや、その用心棒には頭が三公うじをつけてくれるそうだから心配ないだろう」
と、あっさり身をかわす。
「あんなやつ、なんの役に立つもんですか。兄さんも兄さんだわ、ちゃんとあたしって者がついているのに、なにも三公なんかにお供をいいつけることはないじゃありませんか」
「しかし、君には稼業というものがあるし、頭もその辺のところを考えたんだろう」
「だから、稼業なんてやめちまうって、あたしいつもいってるじゃありませんか」
「病人のお供なんだから、なにもそれまでにして行きたがるほどおもしろい旅じゃないと思うがなあ」
「忠さん、あんた、そんなにあたしがじゃまになるんですか」
小妻が目の色をかえて、往来中もかまわずたもとをつかんできた。
「おい、こらっ」
ちょうど横山町通りへ出ようとする四つ角で、ごろんぼ剣客とも見える五人づれがこっちへ曲がってきたと見る間に、いきなり二人の前へ立ちふさがって、中の一人が大声で頭からどなりつけてきた。

「あら、いやだ、おい、こらって、だれのことでござんす」
気の立っているところだから、小妻は平気で忠兵衛のたもとをつかんだままぬけぬけとやりかえす。
「おい、こらとは、お前たちのことだ。けしからん、そのたもとを放せ、たもとを」
いずれも握り太の竹刀にけいこ着を結びつけ、朴歯の下駄をはいている血気の五人づれで、これからどこかへ道場破りにでも押しかける途中なのだろう。
困ったことには、にぎやかな横山町通りだから、もう野次馬がいっぱいまわりを取り巻いてきた。
「大きなお世話じゃありませんか。あんたのたもとをつかんでいるわけじゃあるまいし、男のくせにそんなやきもちなんかやくもんじゃありません」
「こいつ、けしからんことをいう女だ。白昼天下の往来をわがもの顔に男とふざけ散らして歩く、それをまたいい気になって、売女などにたもとをつかませて歩くやつも歩くやつだ。見れば、貴公、両刀を帯しているようだが、どこの何者だ。名を名乗ってみろ」
「――そういうあなたがたは――」
忠兵衛はおだやかに聞きかえした。
「わしか――。我々は向柳原に後藤派一刀流の道場を開く天下の名人、後藤権八郎鉄心斎の門下の者で、わしはその師範役をつとめる辻堂権五郎という者だ」
「わしは紀州浪人紫忠兵衛という者です」
「ああ、紫忠兵衛というのはお前か」
「御存じかな」
「知っている、大知りだ。けしからん。貴公は同朋町の小妻という芸者を情婦にして座敷をかせがせ、一方ではきんちゃく切りのお梅という小娘を手なずけてその上前をはねている。あまつさえ、このごろでは某藩を逃亡した不義者を

かくまって、なにかひともうけしようとたくらんでいるとうわさに聞いたが、察するにその女は情婦の小妻の方だな。けしからん悪党だぞ、貴公は」

はてなと忠兵衛が相手の顔を見ていると、

「忠さん、しっかり。だまされちゃだめよ」

と、野次馬の中から黄色い声がかかって、さっとお梅が飛び出してきた。

「やい、辻権、お前たちはさっき陣場亀にいくらかもらって、紫忠兵衛にけんかを吹っかけ、半殺しの目にあわせてくれ、うまくいったら後金をやるとたのまれていたろう。ちゃんと知っているぞ。お前たちこそけしからんごろんぼ悪党のくせに、あんまり大きな口をきくない」

「なんだ、貴様は――」

それが本当だとみえて、辻権はさすがにちょっと面白んだ顔だ。

「忠さん、こいつらは向柳原の後藤鉄心斎という地獄道場にごろごろしているやつらで、師匠も弟子野郎も悪いことならなんでもやるっていう江戸中の毒虫なのよ。癖になるから、ちょいとひねってやるといいわ。男をあげるんなら今よ」

小妻がそばについているので、お梅はつんと澄ましながら遠くからそんなことをいう。

「小妻、すぐ家へ行ってみてくれ。なにかありそうだ」

忠兵衛の心配はそれだった。素早く耳もとへささやくと、

「はい」

小妻も察しよく、いきなりばたばたと兄常五郎の家の方へ駆け出した。

「やあ、女が逃げるぞ」

照れかくしにごろんぼ剣客どもがわめき立てるのを、忠兵衛はじろりと見すえながら、

「貴公たち、わしは少し急ぐ。半殺しの方はどうするね」

と、柄に手をかける。

「うぬ、小生意気を」

事ここにいたって引っこみのつかなくなった辻権は、それっと一同に目くばせしながら、

「えいっ」

まっ先に竹刀を力いっぱいたたきつけてきた。こういう連中の竹刀には、よく中へ鉄棒を仕込んであるのがある。道具外れを打っても、それでやられると相手はけがをして二度と立てなくなるからだ。

だから、用心深い忠兵衛は、竹刀だからといって決して油断はない。ひらりと身をかわして、辻権の竹刀が空へ流れるすき、

「えいっ」

抜き打ちにしたたか胴を払った。無益な殺生はしたくないから、むろん峰うちだ。

「わあっ」

絶叫してそいつが前へつんのめっていく前に、残る四本の竹刀が同時に忠兵衛の頭上へ殺到してきた。

「忠さあん――」

お梅が思わず金切り声をあげる。

「えいっ、――とう」

とっさに身を沈めた忠兵衛は、一刀を左にたたきつけ、右へ返して、さっと前へ飛びぬけた。敏捷そのもののような水ぎわ立った体さばきだ。

「ううむ」

一瞬にして急所を打ちのめされた三人が三人ともたわいなくそこへばたばたと伸びてしまったので、あっと目をみはった残る二人は、急におじけづいたらしく、いっさんに野次馬の中へ逃げ出した。

「ひきょうだ、ひきょうだ、逃げるなんてひきょうだ」

「逃がすな。そいつらを押さえろ」

野次馬がわいわいいっている間に、それどころではない忠兵衛は刀を鞘におさめて、もうさっさと常五郎の家の方へ急いでいた。

悪党は切る

「忠さん――」

お梅が後を追ってきて、ひょいと忠兵衛の腕へぶらさがるようにしながら、

「あんた、やっぱり強いのねえ」

と、ほれぼれと顔を見上げた。

「いや、向こうが弱いのさ」

「そんな遠慮しなくたっていいわ。大したもんよ。本当に。あんた、すっかり男をあげちまったわ。すばらしいもんよ」

お梅は一人で興奮している。

「しかし、陣場があの連中をたのんだっていうのは本当かね」

忠兵衛は苦笑しながら聞いた。

「本当よ。あたし、今朝、あんたんとこへ御飯炊きに行ってあげたんです。あんたったら、もう逃げ出しているんだもの、ずるいってありゃしない」

「いや、逃げ出したわけじゃないんだ。どうしても病人に話しておかなくちゃならんと思ったもんだから」

「たぶんそうだろうと思った。だから、あたし勘弁しておくんだわ。ああ、そうそう、そんなことより、あたしがあんたの家へ行ったばかりのところへ、もう陣場亀がやってきたのよ。隣のおかみさんがお留守ですっていうと、どこへ行ったんだ、いつもどんなところへ出かけるようだってしつこく聞いて、なかなか帰ろうとしないの。あの野郎、なにかかぎ出そうと思って一生懸命だったのね。おかみさんつい、ことによると頭のところかもしれないっていっちまうんだもの、あたしひやりとしたけど、もう間にあいやしない」

「そうか、おかみさんにはなにも話してないのだから仕方がないな」

「そうよ。あんたってお人よしで、どこかそういうとこは間が抜けてんのね。せっかく顔を売り出したのに、心配だわ、あたし」

「ありがとう、これからは気をつけることにしよう」

「その方がいいわ。陣場亀のやつはずるいから、ああそうかってすぐ悪知恵がまわったのね。さっさと広小路の方へ出ていくんで、おや、どこへ行くんだろうと思って跡をつけると、向柳原の地獄道場へ入っていくんです。おや、あの野郎、後藤鉄心斎をたのむつもりかなと思ってかくれて見ていると、まもなく辻権のやつが先立ちで、忠兵衛ってやつは相当な腕らしいから甘く見ちゃいかんぞってあの連中が話しながらぞろぞろ前を通っていったんです。あたし、どうしようかと思ったけれど、あんたの方が心配になったもんだから、こっちにきちまったのよ」

「じゃ、まだ陣場はその地獄道場から出てこなかったんだね」

忠兵衛は念のために聞いてみた。

「ええ、出てこなかったわ」

伊勢崎の上屋敷は外神田だ。むろん陣場は悪用人のもとへ報告にまわったと見るべきだ。相原兄妹の居どころがわかった以上、もう油断はできない。

はたして、そのころ陣場亀十郎は旧友だという栗田武太夫ら三人の勤番者たちをつれ、毒虫剣客、後藤鉄心斎を用心棒にしたがえて、常五郎頭の玄関先へ乗りこみ、大声をあげてすごんでいた。

応対に出ているのは常五郎頭で、こっちにはあいにく若い者はみんな出払って、あまりたよりになりそうもない三公一人しか残っていない。

「しからば、なんといっても、その方は相原兄妹はあずかっておらん、ここにはいないと強情を張るんだな」

「強情を張るんじゃない、いないからいないと返事をしているんです。間違っちゃいけやせん」

さすがに常五郎はびくともしていない。

「よし、もう一度だけいう。我々は伊勢崎藩の家中の者で、藩命によって出向いてきておる。甘く見るととんだことになるぞ。いいな。紫忠兵衛なる男が昨日、伊勢崎藩国もとにおいてふらちを働き脱藩して江戸へ出てきた相原兄妹に味方いたし、たしかに当家へあずけたという証人の密告があったにより、かように掛け合っているのだ。いいか、今おとなしく兄妹の者を我我の手にわたしてくれさえすれば、その方にはなんの罪もないのだ。それをあくまでも、あずからん、いないと強情を張って家さがしされてからでは、実は忠兵衛というやつにたのまれましてと両手を突いてもただではすまんぞ。それでいいんだな」

「いいにも悪いにも、いないものはいないんで、どうしようがありません。ただし、お前さんがたに家さがしだけはさせやせんぜ」

「なにっ」

「もしたって家さがしがしたかったら、町内の番屋へ行って名主さんをつれておいでなさい。ここは町方の支配で、伊勢崎さんは何万石のお大名かは知らないが、あっしどもはなんの世話になったおぼえもなければ、家さがしまでされる義理はない。はばかりながら、あっしもに組の頭取で、そこにちゃんとお奉行さまからおあずかりした纏を立てているんだ。いわれもなく家さがしをされたといわれちゃ、組中の恥ばかりじゃなく、江戸火消し全体の面目へどろを塗ることになる。家さがしがしたかったら、名主さんをつれてきていただきやしょう」

「無礼なことをいうな。たしかに藩の罪人をかくまっているとわかっているのに、名主などの立ち会いがいるか。我々は藩の面目にかけて押しこむからさよう心得ろ」

「へえんだ。陣亀さん、たいそう今日はお上品な言葉をつかっておいでなさるが、いつ伊勢崎さまの御家来にしてもらったんです」

ちょうど駆けこんできた小妻が、兄の大事と

見て、いきなり威勢のいい啖呵をあびせかけた。

「なんだ、貴様は」

「おや、お見忘れですか。あたしはゆうべどこやらの森さまのお座敷であんたにお目にかかった小妻って同朋町の芸者なんですがねえ」

「それは存じておる。なんで貴様こんなところへ飛び出したんだ」

「あら、知らなかったんですか。ここはあたしの兄さんのうちなんです。妹が兄のうちへくるのに、なんの不思議があるんです」

「ふうむ、貴様はここの妹か」

陣場亀ははじめて知って意外そうだったが、

「そうか、それでわかった。忠兵衛は貴様の縁があるんで相原兄妹をここへかくす気になったんだな。方々、相原兄妹はたしかにここにいるとわかった。かまわぬ、踏んごみなさい」

と、確信を得て急に強くなってきた。

「おっと、お前さんがた、変なまねをすると半鐘を鳴らしますぜ。家さがししてえんなら、なんで名主を呼んできなさらねえ」

半鐘を鳴らして組の者に駆けつけられては、いくらこっちが侍で刀をふりまわしても、到底三人や五人ではかなわない。栗田らは思わず顔を見あわせながらたじたじとなる。

「どうしたんだ、貴公らは。相原兄妹を手に入れて帰らなければ切腹ものだぞ。どっちみち死ぬ命じゃないか。脱藩者さえつかまえてしまえば、理はこっちにあるんだ。陣場亀十郎が先陣をつとめてやる。勇気を出せ」

亀十郎は憤然とわめきながら、その実たよりは格子の外にいる後藤鉄心斎らしく、

「後藤うじ、後見をたのむ」

と、外へ声をかけた。

「よろしい。鉄心斎しかと引きうけた」

四十年配、総髪の鉄心斎は、さすがに毒虫といわれるだけあって、腕前もたしかだが、押し出しも鬼瓦のように立派だ。それが鉄扇を右手に、ゆうぜんと玄関の敷居をまたごうとしたの

で、

「三公、半鐘だよ」

と、小妻が金切り声をあげる。

今はこれまでと、常五郎も鳶口をつかんで片ひざ立ちにたった時、もう家の前をいっぱい取りまいている人垣をかき分け、

「どいたどいた。紫忠兵衛さまのお乗りこみだよ。どなたさまも道をあけていただきます」

と、お梅が颯爽と躍り出してきた。忠兵衛という声に、陣場亀も三人の勤番者もぎょっと振りかえり、鉄心斎は一度玄関へ入りかけた足を思わずひいて外に立った。

浮き世の風

「陣場うじ、貴公に聞きたいことがある。これへ出てもらいたい」

人垣の中からつかつかと常五郎の格子の前へ進んだ忠兵衛は、まだ玄関の土間に突っ立っている陣場亀十郎を呼んだ。今日はいつもの茫洋とした忠兵衛ではなく、断固たる面魂を見せている。

「やあ、忠兵衛か。なにか用かね」

人前があるからいまさら陣場亀もしりごみはできない。ぬっと玄関を出て、そこは如才なく、いそいで用心棒の後藤鉄心斎と並んで立った。

「貴公はなんの遺恨があって無頼の者をけしかけ、わしにけんかを売らせたのか」

「さあ、わしはそんなことは知らんな」

亀十郎はぬけぬけとそらっとぼける。

「そうか。知らんというなら、無理には聞くまい。では、なんの用があってここへ押しかけてきたのか」

「それは貴公の知ったことじゃなかろう。わしは伊勢崎藩からたのまれて、藩の重罪人相原兄妹を取り押さえに出むいたのだ」

「よろしい。わしの目の黒いうちは、どんなことがあっても伊勢崎藩へ相原兄妹はわたさぬ。支度をしたまえ」

忠兵衛は下げ緒をとって素早くたすきにした。

「やる気か、忠兵衛」

「やる。貴公は友人をさえ裏切る不信の徒だ。金で信義を売る破廉恥漢だ。わしは貴公のような人間をけいべつする。いや、憎む。だから切る」

野次馬どもはその気魄にうたれてしいんと息をのんでしまった。

「大きな口をたたいて、あべこべに切られるなよ。この後藤先生は強いぞ」

陣場亀はすかさず鉄心斎をおだてながら、自分は正面に立つことをさけようとする。

「よし、心得た。小僧、まずわしが相手になろう。向柳原の住人後藤権八郎鉄心斎、ちと手ごわいから、そのつもりでこいよ」

「その方も毒虫を自慢にして歩く無頼剣客だそうだな。遠慮はいらん、二人いっしょにこい。支度をしたまえ」

忠兵衛はにやりと冷笑しながら、

「頭――」

と、常五郎を呼んだ。

「わしに万一のことがあったら、ありのまま町奉行所へ訴え出てくれ。それで伊勢崎藩は完全にお取りつぶしになる。相原兄妹にも、そのおもむきを話して覚悟してもらってくれ。たのんだぞ」

「わかりました。に組の常五郎、きっとあなたの骨は拾わしてもらいます。なあに、奉行所へ行くより、紫さんの死骸を江戸中の火消しがみんなで担いで、伊勢崎の上屋敷へ木遣で乗りこんだ方が手っ取り早い。心おきなく存分におやんなすって」

常五郎は格子の外へ出てにっこりわらった。

「紫のだんなあ、おれたちもついているよう。しっかりたのむぜえ」

野次馬の中からどなったやつがいて、そうだ、そうだ、わあっと群集がどよめき立つ。

その人々のざわめきが一瞬ぴたりとやんだ。
「来い」
鬼瓦の鉄心斎がぎらりと抜刀したからである。
「行くぞ、忠兵衛」
それに力を得て、陣場亀もいきおいよく刀を抜いた。
忠兵衛は無言で抜きあわせ、ぴたりと青眼につける。陣場亀のは形ばかりおおげさで、そう大したことはなさそうだが、さすがに鉄心斎は一軒の道場のあるじ、それだけの腕は十分ありそうだ。
が、忠兵衛は、これなら切れるととっさに相手の力量が心眼にうつったから、陣場には目もくれず、鉄心斎一人へ切っ先をつけてじっと呼吸を計っている。
その、のしかかってくるような盤石の気魄に圧倒されて、こいつ自分より強そうだとわかると、そこは金で雇われてきている鉄心斎だ、命にかけてもという気構えなどあるはずはなく、あきらかにぎょっとした顔色になった。
その敵の気合いのひるんだ虚を忠兵衛が見のがすはずはなく、
「えいっ」
さっと青眼の剣を上段に振りかぶった。そのまま一挙に殺到して敵の頭上へ百雷となって砕けんとする烈剣、——と見た陣場が、
「待ったっ」
青くなって逃げ腰になりながら、すっとんきょうな叫び声をあげた。
「なんだ、陣場」
好んで人は切りたくない忠兵衛だから、すっと一足さがって刀をおろした。
「ここは町中だ。そうだろう、おい、こんなところで刀を振りまわしては近所迷惑だ。武士たる者はみだりに町人に迷惑をかけるもんじゃない。大川端へ行こう。大川端へ行って堂々と勝負を決する。なあ、後藤、そうだろう。ここではいかん。こんな町のまんなかで剣戟沙汰におよんでは、あまりにも非常識すぎる。そうだろう、忠兵衛。大川端へ行って、あらためて勝負をやりなおそう」
陣場亀は人に口をきかせないようにがんがん一人でわめき立て、大川端へ行くことを主張する。大川端へ勝負場所を移すのが目的でなく、二人がかりでも到底忠兵衛にはかないそうもない、現にほっておけば鉄心斎はすでに命のないところだった。場所をかえるどさくさまぎれになんとかうまく逃げ出そうというのが、ずるい陣場の魂胆らしい。
「よし、陣場のいうとおりだ。大川端へ出よう。——おい、逃げると承知せんぞ」
早くもそれと察した鉄心斎は、ぐいと一つ忠兵衛の方へ大見得を切っておいて、ぴゅっぴゅっと抜き身に素振りをくれながら、もうさっさと大川端の方へ歩き出す。
「おい、行こう、忠兵衛」
声をかけておいて、陣場亀がすかさず後藤の後を追う。そっちの方の人だかりは刀をふりまわされてわあっと左右に飛び散った。
逃げるとわかっているから、忠兵衛は黙って見のがすことにする。そういえば、伊勢崎藩からついてきた三人の勤番者たちはもうとっくに逃げている。勝っても負けても、ぐずぐずしていては藩の名に傷のつくけんかだから、これは逃げ出すのが当然だ。
陣場亀の逃げっぷりがあまり堂々としていたので、ちょっとぽかんとしていた野次馬どもも、忠兵衛が動かないのを見て、ああ、やつらは逃げるのかとはじめて気がつき、
「ひきょうだぞう。ここでやれよう」
「逃げるなんてずるいぞう。町内を貸してやるから、遠慮なく切られちまえよう」
と口々にからかい出したが、むろん鉄心斎も陣場亀も振り向いてみようとさえしなかった。
「頭——」

もうよかろうと見た忠兵衛は、刀を鞘におさめ、そこに立ってあきれている常五郎に目くばせしながら、玄関の方へ歩き出した。

はだしで土間へ飛び出して、どうなることかと格子にしがみついていた小妻は、ああよかったと胸をなでおろしながら、いまだに足ががくがくして格子が放せない。

忠兵衛がにっとわらいながら入ってくる後から、

「なんだ、小妻、もうすんだぜ」

と、常五郎がいたわるように声をかけて奥へあがっていく。

——みっともないなあ、みんなが見ているのに。

思わず往来を見ると、人だかりはもうさっさと散りかけていたが、その中にまじって、お梅だけが立ち去りかねるように行ったり来たりしているのがふっと目についた。

——あの娘もやっぱり心配しているんだね。

いつになく小妻はじいんと胸が熱くなって、我にもなくつとそっちへ出ていった。

「お梅さん、さっきはどうもありがとう」

お梅は黙って立ち止まってわらっている。その顔は、悪態をついてやろうか、それともすなおに返事をしようかと、こっちの顔色を読んでいる風に見える。

「寄ってお茶をのんでいかない、相原さんたちもよろこんだと思うわ」

「あの兄さんの方、具合いどうなのかしら」

「だいぶよくなったんですって。それに、ことによると急に江戸を立つようになるかもしれないし、あんたはいちばん縁が深いんだもの、お寄りなさいよ」

心からそういってやると、お梅もその気になったらしい。

「じゃ、ちょっとおじゃましようかしら」

「そうなさいよ」

いそいそと小妻は先に立ちながら、きっと忠さんがよろこんでくれるだろうと涙が出るほど胸が豊かになっていた。

心の花

忠兵衛が常五郎といっしょに相原兄妹の病間へ入っていくと、ちゃんと身支度をした兄妹のそばに、頭の女房のお勢が、これもきりっとした身支度でつきそっていた。いざとなったら、兄妹を裏口から案内して落ちる覚悟だったのだろう。

「あねご、心配かけたねえ」

忠兵衛がねぎらうようにあいさつをすると、

「無事にすんだようで、本当にようござんした。おめでとうございます」

と、ほっとしたようによろこびをのべる。

「紫さんのおかげで、どうやら半鐘だけは鳴らさなくてすんだようだ」

「ようござんしたね、頭」

「我々のためにとんだ御迷惑をおかけして、なんと申し上げてよいか、お礼の言葉もありません」

相原兄妹は両手をつかえたまま、しばらく顔をあげかねている。

「まあ、お手をあげなすって。世の中はおたがいってことがあります。——ところで、紫さん、どうしたもんでしょうね、やつらにここがわかってしまったとすると、どうせまたなにか小細工をやらずにはおくまいと思うんだが」

「実は、そのことだが、わしは駕籠をたのんで、これからすぐ相原さん御兄妹を小田原へ送ってあげたいと思う。どうだろうな、頭」

それよりほかに道はないと、忠兵衛の腹はさっきからきまっているのだ。

「そうですねえ。今からここを立てば、今夜は川崎泊まりだが、しかし、やつらが追いかけるような心配はありやせんか」

「その時はまたその時のこととして、まずそんなことはないと見て断行したいと思う。相原君

の意見はどうかな」
「御迷惑ながら、そうしていただければ、これに越したことはございません。な、美保」
「はい」
相原兄妹としても、これ以上、他人の家へ迷惑をかけるのは、忍びないものがあるのだろう。
「それで話がきまった。お勢、三公にいいつけて、駕籠を二丁すぐ呼んでくれ」
「頭あ、三公はここでうけたまわっていやす。駕籠を二丁、小田原までございすね」
「いや、品川までいいんだ」
「へえ、じゃ後は歩くんで」
「ばか、後は品川から乗りつぎゃいいんだ」
「なあるほど、その手があったか。しからば行ってさんじます」
「気取っていて、ころばないようにおしよ」
お勢がわらいながら茶の間へ立っていって、
「おや、いらっしゃいまし。お梅さんでしたね」
と、ふすまの向こうで明るいあいさつをする。
「兄さん、そっちへ行ってもようございすか、お梅さんがきているんですけど」
小妻がふすま越しに聞く。
「いいとも。そいつはちょうどよかった。お梅さんは相原さんがたには深い縁があるんだ」
常五郎の返事に、小妻がお梅をさそって立ちかけた時、がらりと玄関の格子があいた。
「たのうむ」
「あっ、陣場亀――」
女たち二人は思わず顔を見あわせて、ふすまをあけることができない。
「これはこれは、小妻うじでござるな。ぶしつけながら、紫忠兵衛どのはまだ御当家においでござろうか」
土間に立った陣場亀は、さっきの憎々しさとは打って変わり、にこにこ顔でていねいに小腰をかがめながら聞く。そんなことをいって、こっちの様子をさぐりにきたのかもしれないから、油断は禁物だ。

なんと思ったか、お梅がつかつかと上がり端まで行って、陣場亀の鼻っ先へぺたりと座った。
「おいでなさいまし。あなたさまはどなたさまでございましょう」
いけしゃあしゃあとして、まともに陣場亀の顔を見すえる。小妻にはとてもできない芸当だ。
「拙者か。拙者は陣場亀十郎と申す浪人者だが、紫忠兵衛どのとはごく親しくいたしている者、御在宅なればお取り次ぎねがいたい」
「あの、大川端へおさそいになるんでございますか」
「とんでもないことでござる。実は、その儀についで、ぜひ一言申し上げたいことがござってな」
「どんなことなんです」
「いや、それはお目にかかってじかに申し上げることにいたす。ぜひ、お取り次ぎをねがいたい」
「おやめになった方がいいと思うんですけれど――。忠兵衛兄さん、とても怒っているんです」
「ごもっとも――」
「親友を裏切るような安ぶしんの戸板は、こんど見かけしだいたたっ切ってしまうって」
「お言葉ではござるが、親友を裏切る不信の徒の間違いではござらんかな」
「ええ、その安ぶしんの戸板なんです。たたきわられないうちにお引き取りになった方が無事なんじゃないでしょうか。戸板が戸板へ乗って帰るなんて、どうかと思いますからね」
びくともしないお梅の面魂だ。
「困ったなあ。――あいや、小妻うじ、拙者はその戸板の件について、ぜひ紫うじに御意を得たいのだ。あなたからひとつ取り次いでくださらんか」
どんなたくらみがあるのか、陣場亀は少しも怒ろうとせず、こんどは小妻の方へすがってきた。

「それはなんのおまじないだね」
忠兵衛はわざと意地悪く出る。
「さきほどの儀はまったく手前の心得違い、手前はただただ旧友栗田の身を案じるのあまり、つい正邪の道を誤り、まったくもって安ぶしんの戸板も同然でござった。大兄の御立腹はごもっとも千万、つらつらおもんみればおもんみるほど赤面の至り、ひらにひらに御寛容くだされたい」
「本心かね、陣場」
おそらく伊勢崎藩から縁を切られて一文にもならなかったから急にこんなことになったのだろうとは思うが、ついさっきのことがあったばかりの今だから、いくら人のいい忠兵衛でも、うっかりは乗れない気がする。
「本心、まったくもって本心でござる。染井というやつはとんだ悪用人でござった。手前はつい人がいいものだから彼の口車に乗せられましてな、いや、まったくもって赤面の至り、今後

「せっかくですけれど、あたし、お梅さんを差しおいて、そんな出すぎたまねはいたしかねます」
小妻はお梅を立てて、わざとそっぽを向いてしまった。
静かにふすまがあいて、忠兵衛が出てきた。
「お梅ちゃん、もういい。わしがかわろう」
「はい」
お梅がさがった後へ忠兵衛が座って、
「陣場、わしになんの用か」
と正面を切る。
「これはこれは、紫うじ――」
陣場は、いそいで両刀を鞘ぐるみぬいて、うやうやしく忠兵衛の前へ横たえ、一足さがって、
「陣場亀十郎、かくのとおり、かくのとおりでござる」
と、両手をひざの下までさげておじぎをした。
もう絶対に手向かいはしないという誓いである。
は必ず大兄を裏切るような愚はいたさん。大兄は、人格高潔、友情に厚く、赤心誠意の人、大兄と仲たがいをしては手前の一生の損、いや、やみ夜に灯をうしなったごとく、拙者は人生になんのたのしみもないことを、つらつら痛感させられました。願わくは、もとどおりおつきあいが願いたく、過って改むるにはばかるなかれと、かくのとおりおわびにまかり出た次第、紫うじ、たのむ、昨日からのことは水に流してくれぬか」
泣かんばかりの陣場亀だ。まんざらうそでもなさそうなので、小妻とお梅はびっくりしたように顔を見合わせている。
「いや、貴公が悪いと気がつけば、わしは別に遺恨があるわけではないのだから、さっきのことは水に流してもよい」
「ありがたい。そうしてくれれば、陣場亀十郎、こんどこそ犬馬の労をつくしてお目にかける」
「その言葉に間違いはないだろうな」
「金打いたそう。誓文を書いてもよろしい」
「いや、それには及ばぬ。そのかわり、貴公、ここからすぐわしといっしょに旅に出てくれ。どうだな」
どうせ、この男の犬馬の労というのは、まだこっちが持っている百両足らずの金のある間だろうとは思うが、ここで陣場を放すと、ひょっと伊勢崎藩へ内通しないともかぎらない。忠兵衛はいっそ小田原までつれていこうという気になったのだ。
「旅にな。結構だとも。犬馬の労をつくすと誓った以上、拙者は決して大兄のいいつけには背かん。どこへでもいっしょに行こう」
そこは風来坊の気楽さで、家へ帰って支度をするなどという面倒はない陣場だ。
思わぬ味方がまた一人加わって、相原兄妹の駕籠が常五郎の家を立ったのはそれからまもなくのことで、常五郎をはじめ、小妻、お梅、それに三公の四人が品川まで見送ることになった

から、まことににぎやかな旅立ちになった。
秋もやや深い晴れた日の昼すぎのことで、駕籠の中の相原兄妹は、人の世の情けにしみじみと涙にくれていたことだろう。

江戸おもしろ事典

任侠の世界

任侠とはいかなる男の意か

大小神祇組の小左衛門という旗本奴が暴れていると、後ろから抱きつかれた。放せというが、放さない。怒った小左衛門は、自分の脇差を引き抜くと、自分の腹に突き立て、背中の抱きかかえている男もろともくし差しにして、ともに絶命した、という。

この話くらい、任侠というものがどんなものかを教えてくれる話はない。このむちゃなほど激しい根性が任侠の精神である。

「弱きをたすけ強きをくじく気性に富むこと。また、その人。おとこだて。任侠」（広辞苑）

「互に信ずるを任とし、是非を同じゅうするを侠という……」（大字典）

右は、辞典による任侠の解説であるが、辞典をひけば、そのあと引用したくなるのは今より二千年以上昔の『史記』という支那の本に載っている「游侠列伝」にある遊侠についての、「其行、正義に不軌なりと雖も……」であろう。そのあたりをざっと意訳すると、

「遊侠（游も遊も同じ）は、やることなすことが必ずしも正義ではないけれども、一度約束したことは命をかけてでも守り通すし、事を行えばどんな困難をものりこえて必ずやりとげる。そして、そのことを自慢しない……」

という大変に信義に厚い人物像が浮かび上がってくる。

男心に男がほれて……という古い歌謡曲があるが、男にさえほれられるような男心、また男心を持っている者を任侠といい、任侠の徒という。また侠客という。

ところが、今日では任侠・任侠の徒といえば、なんとなくうさんくさくって煙ったい存在となっている。とくに知識人からは、浪花節的人物としてはなはだしく軽蔑される。それは、今日では任侠とは、博奕打ち・やくざ・暴力団をさすようになったからである。もっとも、博奕打ちは、ろくでなしの総称であるやくざといわれることを好まない。ましてや暴力団と同一視されることをきらう。が、とにかく斬った張ったの世界に住む者たちということで、一般の者にとってはおっかない存在である。

遊侠というなかなか立派な言葉も、二千年の間には内容も変わってくる。たぶん、「正義に不軌といえども……」というただし書きがよくなかったらしい。遊侠の定義を知った者が、正義にのっとればもっといいとは解釈せず、正義でなくてもいいのだ、のほうに拡大解釈したからであろう。任侠は、こわいオニイさんたちがもっぱら口にし、それを誇るようになってしまった。

事ここに至っては、信義を尊び、約束を重んじ、義のために死すという優れた道徳観も、自分たちの仲間の間だけで通用するものになって、一般社会の通念からずれてくる。たとえば、はじめての店においしいって無銭飲食し、きょうは金がないから、いく日に持ってまいるという。店の者が承知したといえばいいが、不承知だとおれを信用しないのか、おれは約束を守る男だと怒って店をたたこわす。店の者が承知すると、礼を言って立ち去り、約束の日に金をもってきて、先日は過分であったなどといって支払う。それも、何倍も何十倍もだ。店の者が多過ぎるからとつり銭を出そうとすれば、かえって怒り出すといった塩梅である。これでは、ちょっと一般人にはつきあいきれない。

このように、とかく人と変わったことをして喜んでいたのが、旗本奴だとか町奴だとかいわれた者たちであった。

任侠の徒の第一の条件である命も惜しまぬというところを見せるには、平和なときには喧嘩がてっとりばやい。そういう考えだから、男の見せ場を探すといってヨタッて歩く。彼らを避けて通る者にはかまわないが、すこしでも盾つきそうな気配をみせる者をみると、因縁つけて喧嘩をふっかける。まったくはた迷惑もいいところだ。もはや、日本遊侠列伝中の人物は、史記の遊侠のように、自分の遊侠ぶりを自慢しないどころか、自慢たらたら見せびらかすのである。

言葉の意味が変われば、任侠をもって自認する男たちのありよう、生きざまも時代とともに変わる。その変わりようは、

江戸時代初期――かぶき者、男だて、奴。
〃　中期――きおい（競い）、俠。
〃　後期――いさみ（勇）、イナセ。

である。後期でもさらに末になると、任侠は博奕打ちの専売みたいになってしまった。任侠のありようが変わったのは、任侠ぶる者たちの階級・階層が違ってきたということである。文化とか生活様式というものは、普通、上層から下層へと移るものであるが、任侠も武士のかぶき者から町奴の男だてとなり、ついには「ご判形の裏を行く」という無職渡世のアウトローがその旗を振るようになった。

江戸初期――かぶき者の世界とは

前田利家は晩年、律儀者といわれ、豊臣秀吉から秀頼の後見役を依頼されるほどだったが、若いころは人目をひくような派手で異風体を好み、乱暴者だったので「かぶき者」といわれた。百万石の大大名の祖も、いまの言葉でいえば、かなりツッぱっていたらしい。人間、昔も今も変わらないもので、若いときはとかくツッパリたがるものだ。

かぶき者のかぶきは、傾くということで、正常でないことである。常規を逸して異風に傾い

ている者というのがかぶき者である。人と異なった風体をして、自分と他を際立たせようとした。

男伊達・男達も、かぶき者から派生した。腕立て、心中立てなどといい、「たてだてしい」というのは意地を張るという古語で、それから転じたものだろうといわれる。伊達政宗の行列が華やかで美しかったので、伊達者という言葉が生まれ、それが男伊達となったという説もある。これは俗説だが、伊達者はかぶき者よりさらに華美になり、豪華となり、流行の風俗をさす言葉になった。

かぶき者も男達も、自分を他から際立たせようとする自己顕示欲の現れである。

奴というのも、同じ意味に使われる。奴は奴隷の奴であまりよい言葉ではないが、それをかぶき者、男達が好んで用いたのは、異を唱える露悪的な心理の現れである。

徳川家康が将軍職を秀忠にゆずったころだが、幕府はかぶき者の横行に手を焼いている。荊組という徒党をくんで、荊がからむように人にからんで喧嘩をしかける者がいれば、皮袴組という組ができて、荊にからまれても平気平気と、これまた相手かまわず喧嘩をふっかけて、治安を乱した。

津田長門守、稲葉甲斐守といった旗本のお歴歴が、異装（かぶき者の風体）して町人に乱暴を働き酒色にふけって、ついに改易されたのもこのころのことだ。

このころ、いや江戸時代を通じてといってもいい、任侠の第一人者としてその名を逸してはならないのは大鳥居逸兵衛であろう。

慶長十七年（一六一二）の六月、柴山孫作が、失態のあった小姓を殺した。それを知った小姓の傍輩が、孫作をたたっ殺した。主殺しということなので、将軍直々の厳命で捕らえて尋問すると、その男は、

「われわれは日ごろ、主人であっても、理不尽

のことがあったら敵を討つと約束している。殺された男は、われわれの仲間なので、約束を果たしたまでだ」

と答えた。そこで、その男を拷問にかけて仲間の名をききだした。

それで捕らえられたのが、大鳥居逸兵衛以下七十余人。だんだん調査がすすむにつれて分かったことは、奉公人に殺された主人が五、六人にのぼっていて、その下手人はいずれも大鳥居組の者であったという。

逸兵衛が組を結成したのは、こういうわけだ。家康が天下をとったので、その家臣たちもにわかに大身となり、家格にみあうだけの家来を召し抱えることになった。このにわか主人は、戦国の殺伐な気風を残していて、とかく気があらい。家来のちょっとした粗相も許さず、たちどころに手討ちにしたりした。これでは奉公人のほうがたまらないというので、逸兵衛が音頭をとって、武家奉公人組合を結成し、横暴な支配者に対抗しようとしたのである。そのときの逸兵衛の理論は堂々たるものだ。

「士に上下なし、ただ盛衰あるのみ」

つまり、自分たちは、仕えた旦那に武運がなく戦いに負けたから、よんどころなく奉公に出たまでで、くだらん主人の慰みものにされてたまるか、というのである。主殺しは、八逆の大罪というので、とかく殺され損になる弱い奉公人をたすけよう、というのが逸兵衛の趣旨である。

これこそ、任侠の鑑であろう。逸兵衛に比べると、旗本奴の水野十郎左衛門など下種な小人でしかない。

水野十郎左衛門は、歴とした旗本で三千石の大身。加賀爪甲斐守、坂部三十郎らと組んでヨタッて歩いた。刀の柄を白緒で巻いて奴印にしたので、人呼んで白柄組。

彼らは、ことさらに人と異を唱えて、夏の暑いさかりに厚着して、寒い寒いといいながら、

蛇や蛙などを煮込んだ熱汁をすすったり、冬は冬で単衣をきて、暑い暑いといって冷やそうめんをかっこんだりした。

町なかに繰り出して、道路一杯にひろがって歩き、ちょっとでも体に触れようものなら、喧嘩をふっかける。そして、金品をたかる。この旗本奴の乱暴な行為をみかねてでてきたのが町奴である。

町奴といえば、幡随院長兵衛。長兵衛は、花川戸で、人足の口入れ業を営んでいた。武家方の小普請人足の斡旋業で武家に対しても人足に対しても、押しとにらみがきかなくてはやっていけない。長兵衛は、腕と度胸が常人にすぐれた男伊達であったという。

長兵衛と水野十郎左衛門は、反目しあっていたが、明暦三年（一六五七）の七月、十郎左衛門の方から和睦を申しいれ、水野の屋敷に招待した。長兵衛の子分たちは危険だといって引き止めたが、長兵衛は企みがあるかもしれないといって行かなければ臆したといわれるだろう、そうなれば男がすたると言って出かけた。

十郎左衛門は、長兵衛に酒肴をすすめ、風呂をすすめ、風呂に入った長兵衛を殺してしまった。これは「湯殿の長兵衛」として歌舞伎で有名になった話である。嘘か本当か分からないが、長兵衛が十郎左衛門に殺されたことは事実で、町奉行所に十郎左衛門が長兵衛殺しを届け出ている。このとき、十郎左衛門は何のとがめも受けていない。くだって寛文四年（一六六四）三月、十郎左衛門は、出仕もせず不行跡のことが多いというので、評定所に呼び出しをうけたが、そのとき彼は、半髪で袴もつけず、まるで異国人の風体であったという。その不作法をとがめられて切腹を命ぜられた。

男達を六法（六方）ともいう。男達が六つの組、鵜鶘組、吉屋組、鉄棒組、唐犬組、笊籬組、大小神祇組があったので、六法といったという。また、長い大小をさし（二本）、大道せまし両手をふり（二本）、両足をふんばって（二本）歩くから、六方ふりわけるようだとゆうので六方といったともいう。

また、御（五）法を無（六）にするから六法というが、これは後世の解釈ください。

とにかく、初期の遊俠は、由比正雪や別木庄左衛門ほどの才覚も度胸もない者が、ただ腕力と暇をもてあまして、世をすねてみたばかりであった。町奴も、はじめのうちこそ乱暴な旗本奴に対抗して町民の味方をよそおっていたが、旗本奴の悪い所をまねて堕落していく。十郎左衛門が切腹を命ぜられたころと前後して、幕府は旗本奴の一掃に乗り出し、五、六十人の旗本奴を処分したので、彼らの勢いも自然衰えた。

そこで、次に現れてくるのが、奴よりすこし小振りとなった競い、俠の徒たちである。

江戸中期——競いの世界とは

きおい・競いは、きそいあうことである。喧嘩するのも、口喧嘩の悪態をつくのも、せりあいきおいあって勝つことである。

俠とは、唐音である。町の俠客も、いささか小粒になって、キョウと読むのがおこがましく、冷やかし気味に言いだしたのかもしれない。今日、おきゃん（戦後はあまりきかなくなったが）といえば、おてんば娘、はねっかえり、はすっ葉、鼻っ柱の強い女と、女を意味する言葉になった。それだけキャンはキョウより軽く、男達もこのころでは、犬のようにキャンキャン吠えるだけだからキャンという、と俗説をたてたくなる。

「蔵前もの神田ものとかけて、犬狩りと解く。意はここもきゃん、かしこもきゃん」

と笑われたものだ。

旗本奴は、武家としての生活様式から一応教養もあり、それに対抗した町奴も浪人などが多く、いくらか学問もあった。それが当節では、船頭あがり、役者くずれ、折助くずれが俠客が

って肩ひじ張るが一般に無教養で、「其風悪しくて、よき事をしらず」（絵本このころぐさ）と、世人の顰蹙を買うようになった。

任侠の世界の担い手の変遷は、経済の変遷でもある。元禄（一六八八―一七〇四年）のインフレ好景気で、町人たちは大もうけした。自然、人足や職人ら小前の者たちも稼ぎがよくなる。とくに五代将軍綱吉は、将軍奴みたいな人物で、派手で土木工事が好きだったので、常時、江戸市民に仕事を供給した。人足や職人たちは、

「おれたちの腕には、金がはいっている」

と誇るようになった。夜があけて烏がカアと鳴けば仕事にありついて銭がはいる。宵越しの金は持たねえとタンカの一つもきってみたくなろうというものだ。――とはいっても、家を建てるの蓄財するのというほどの銭がとれるわけではない。いくらか遊びの金をひねりだせる程度である。その銭が博奕に回った。

武士たちは貧之になった。昔みたいに伊達をきそって街へくり出す余裕はない。町奉行も勝手に踏み込めないという旗本の特権を利用して、屋敷をこっそり博奕場に貸して、貸し料をもらうという始末である。武士たちも小粒になったものだ。

丁か半かの鉄火場は、人をアックする。もめごとや争いごとがつきもので、そこに男達の世界があった。中期の任侠の世界は、鉄火場に大きな比重を置くようになった。

博奕は大昔からあった。くだって旗本奴も町奴も博奕をうった。幡随院長兵衛も、人足たちの労働力のピンハネしたうえで、博奕をすすめて、そのカスリをとった。それでも、初期の任侠たちは他に職業をもち、博奕打ち専業ではない。

ところが、中期になると、ぼつぼつ博奕専業の者が出てくる。それから、中期の任侠の大きな特徴は、いまでいえばムショ帰りがいい顔になったということであろう。牢送りになるため喧嘩したりした。しかし、

「おらァ、たったいま、シャバへ帰ってきたばかりよ」

といってすごまねばならないとしたらゴロツキで、大鳥居逸兵衛が嘆くだろう。書き忘れていたが、牢内での囚人の掟、牢定法をつくったのは、大鳥居逸兵衛といわれている。

もう一つの特徴は、通ぶるということだろう。大口屋暁雨などがそうである。暁雨は蔵前の札差である。彼は金にあかせて大尽遊びをして、今助六といわれた。彼が吉原に通うときの姿は、「黒小袖小口の紋付の着流しで、鮫鞘の脇差を腰に、一ツ印籠に下駄ばき」（今川徳三『日本侠客100選』）であった。しかし、任侠らしい腕力はあったかどうか。

あるとき、若い者が暴れていて、だれの手にも負えなかった。そこで、暁雨が出ていって、若い者の腕をねじあげて押さえたという。見ていた者は、暁雨の強さに感嘆の声をあげた。だが、それには種も仕掛けもあった。暁雨はあばれ者の手をねじるとき、小判一枚をすばやく渡し与えたのである。通人のしそうなことである。

侠客は江戸ばかりでない。京・大坂にもいる。亀屋義兵衛、濡髪長五郎、奴の小万、雷庄九郎らがいる。この期の者も初期と同じく、都市に巣くう者がほとんどである。

江戸後期――いさみの世界とは

この期の気風は、いさみであり、いなせである。また伝法肌である。伝法とは、浅草の伝法院の下男たちが寺の威光をかさにきて、乱暴な振る舞いが多かったことから、その名が起こったという。

「江戸で伝法、上方でもうろく」

という。もうろくとは折助のことで、ともに乱暴者である。

この期で特筆すべきことは、任侠の徒といえば博徒をさす、といってもいいということだろう。そして、これらの徒が、江戸よりも地方に発生して、名の知られた侠客が群遊したということであろう。

いさみもいなせも江戸の気風である。いさみ肌といえば、鳶の者や臥烟すなわち火消しを思い出す。いなせといえば、魚河岸あたりの威勢のいいニイサンが頭に浮かぶ。鳶や火消しは荒っぽい仕事で、まだ男っぽさが感じられるが、町奴のもっていた骨太さは感じられない。それもそのはず、肩においた手拭いとか紺の股引をぴちっと着込んで身軽く歩く姿など、姿かたちの格好よさがいなせやいさみの大きな要素になっているからである。いい悪いは別として、町奴は女子供を恐れさせるのをよしとしたが、当世のいさみ肌やいなせなニイサン方は、女子供にもてるのをもってよしとした。

もちろん、火消しや鳶の者の中にも、野狐三次や新門辰五郎などの侠客があった者もいる。だが、どうにも我慢がならないのは、これら頭分の者が大町人の取り巻きとなったことだ。商家の旦那が、自分の町内の火消しや、自分の家に出入りしている鳶の者が他の町内の者に負けないように金をくれるが、それをもらってやにさがっているのはいただけない。まして、大旦那のお供になって吉原へ遊びに行って喜んでいるようでは、任侠の名がすたろう。大変乱暴で反社会的な言い方だが、また任侠という世界にかぎってのことだが、金主の援助で男を売るくらいなら、むしろゆすりたかりで人にきらわれて男を売る方が男らしい。

関八州、東海道の博奕打ちたちは、都会人にしがない田舎博奕打ちとさげすまれながらも、任侠の一方の気風である斬った張ったの世界で呼吸していた。かぶき（傾）の気性はその極に達して、日向の世界に自ら背をむけるほどかたぶいて、「ご判形の裏を行く」無法者のきびしい

世界に生きている。といって、ほめているのではないが……。

清水の次郎長は、黒駒の勝蔵と対立し、天竜川で双方数百人で対陣したが、物別れとなった。その後、勝蔵が三河の雲風亀吉方にいることを知った次郎長は、子分三十余人を引き連れて襲撃に向かった。元治元年（一八六四）六月のことである。

雲風一家はそれとは知らず、勝蔵を囲んで亀吉および五人の子分と小宴をひらいていた。そこを、清水勢は鉄砲をうちかけ奇襲したのである。

雲風一家の五人の子分は、客人（勝蔵）と親分を逃がしたのち、奮戦し、壮烈な斬り死にをとげた。

十二月、亀吉の弟善六は、同じ三河の者で清水に加わって一家を襲った形ノ原の斧八に仕返しするため、雲風一家の者二十八人でおしかけた。亀吉が行かなかったのは、敵の総大将の次郎長との対決ではなかったからだ。

多勢に無勢、斧八の子分七人は、斧八を逃がしたのち、これまた玉砕した。

以後、明治十年（一八七七）代まで、この復讐戦はつづいたという。その執拗さもさりながら、親分や客人を逃がして斬り死にする子分たちの覚悟である。江戸っ子たちが、ちょっと軽薄な感じのする、いなせぶって悦にいっているとき、田舎では博奕打ちたちが凄烈な闘争の世界に身を置いていたのだ。任侠も二千年前とはかなり違ってきているが、それでもその一片の精神をだれが受けついでいるか、言うまでもないことだろう。

この気概は、武士さえかなわない。武士たちは三百年の泰平にならされて、すっかり腰が抜けた。

幕末、維新戦争のとき、多くの博徒が勇敢に戦っている。岐阜の弥太郎は、子分をひきいて新選組と行動を共にしたし、尾張の近藤実左衛

門、さきにあげた雲風亀吉らは、尾張藩の倒幕軍の一隊に加えられている。黒駒の勝蔵もまた赤報隊に加わっている。

これは、博徒たちがその団結力・統制力にすぐれ、戦闘力も腰の抜けた武士たちにまさっていたからである。つまり、訓練することなくただちに実戦に使えるからであった。

遊俠は、「その行い、正義に不軌なりといえども」どころか、鼻つまみな行為が多かったけれども、その一方ではたった一つの惜しみてあまりある命さえすてて、自分の信ずる道を歩もうとした男たちである。

幕末の任俠道は、明治三十三年の新刑法施行までつづいたとみてよい。この博徒弾圧法で、すたれた。

博徒任俠の世界は、「利口じゃできず、ばかじゃできず、中途半端じゃなおできず」(井出英雅『やくざ学入門』北明書房)の世界である。また、「生みの親のあるのに、あらためて今日から誰某さんの子分となるからには、親のいうことは白いものを黒いといわれても、はいといわなければならないが、それを覚悟してこの盃を受けなさい」(右同書)という徹底服従の世界である。

無職渡世、商売往来にもない「ご判形の裏を行く」者が、オマンマを食べていけるのはだれのためかを思い、親分のためと「一日ごろ、ボンのアカをなめさせてくださる」客人のためには、体を張って戦わねばならない。

それでいて、裏街道を歩む者として後ろ指をさされながら生きていく男の世界である。

(松永義弘)

山手樹一郎長編時代小説全集 66

放れ鷹日記 他一編

発行——一九七九年 六月二五日初版第一刷
一九七九年一二月二五日初版第三刷

著者——山手樹一郎©

装画——国貞(静嘉堂文庫提供)

装丁——玉井ヒロテル

発行者——和田欣之介

発行所——株式会社春陽堂書店
東京都中央区日本橋三ー四ー一六
〒一〇三 ☎東京二七一ー〇〇五一 振替東京〇ー一六一七

印刷製本——城北印刷製本センター

◆——定価はカバーに表示してあります
乱丁本・落丁本はおとりかえします